

真・恋姫 † 無双 曹魏伝 ～ツンデレ霸王と毒舌な漂流者～

ソプラノ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

18歳の誕生日を盛大に祝って貰い、気持ちよくフカフカのベッドで寝た。 ここまでは良い。

しかし目を覚ますとそこは荒野だった。 ……は？

このお話は私の作品の、IS近未来って素晴らしい、の主人公が続投です。

ぶっちゃけ初見殺しです。アンチ・ヘイトがかなり含まれます。

詳しくは注意書きに乗っています。

※初見の方は、必ず注意書きに目を通して下さいませ。※

誤字脱字が多いので、報告していただけると幸いです（平身低頭）

凍結解除しました。

目次

注意書き	※必ず御覧になって下さい※	1
第1話	未来の霸王との邂逅	4
第2話	現状確認 袖の振り方	16
第3話	実力確認 戦力の把握	34
第4話	猫耳軍師と小さな勇士	42
第5話	盗賊討伐 底意地の悪さ	67
第6話	占い師と黄巾党	82
第7話	切り札 一枚目	98
第8話	呆気ない幕切れ	121
第9話	飛將軍	137
I M 1	霸王の休日	150
I M 2	時代考察	161
I M 3	模擬戦	166
I M 4	新兵への教訓	177
I M 5	手紙とマネージャー	187
第10話	同盟と天の遣い	199
第11話	真のロメオ	214
第12話	前哨戦	228
第13話	情報収集と都の攻略	244
第14話	決戦	258
第15	大切なモノ	278
第16話	集いし英雄	287
第17話	将としての覚悟	306
第18話	袁家の終焉	318

第19話	戦利品	330
I M 6	二人の小さな妹分と大きな妹分	337
I M 7	張三姉妹	345
I M 8	熱狂	352
I M 9	甲斐性無し	362
I M 10	華琳と言う一人の少女	368
第20話	霸王の意地	376
第21話	鬼神	386

注意書き

※必ず御覧になつて下さい※

このお話しは、私の前作である、

IS ―近未来って素晴らしい― の朝風葵が続投で主人公となります。

前作を見なくても問題無い様に書くつもりではありませんが、いかせん私の作品はキャラが勝手に動くので断言は出来ません。

朝風葵は毒舌です。基本的に自己中です。嫌いな相手（葵がですが）に対しては容赦しないです。

私は嫌いなキャラはいません。と言うか嫌いなキャラが居たら二次創作なんてしないでしよう。

それとこの時点で決まっている事が幾つか。

- ・ 葵の立ち位置が魏の一刀と同じ。
- ・ 華琳ルートで尚且つ華琳エンド。
- ・ ISの使用は3度まで。
- ・ 恋と正面から戦い降り、魏軍加入。
- ・ 一刀は呉陣営
- ・ 桃香を口撃。

位です。上記で一つでも嫌な方、不快に感じられた方は直ぐ様閲覧を止めて下さい。不快になられて感想や評価にその旨を書かれても返答のしようがありません。

自己責任でお願いします（平身低頭）

桃香、と言うか蜀陣営に対してぼろくそに書く、と”思う”のでそちらも同上です。

オリキャラ、恋や音々音以外は魏に加入しない、と思います。

少なくとも今は考えていません。

話しがグダグダになる可能性がある為です。

このお話しは朝風葵”だけが”漂流するものです。

当然蛇は出てきませんし、IS勢も出てきません。

師匠出して！ とか、ヴィオレッタお願い！ とか言わ

れても困ります。無理です。

このお話では、やたら自分の居場所に帰ろうとしますが、仕様です。

誤字脱字が著しく多いです。書き終わった後、投稿する前などに見直していますが、どうしても抜けてしまいます。

報告などして頂けると幸いです。(平身低頭)

以上の事を念頭に入れて作品を読んでいただければ幸いです。

以下葵の設定

18歳の誕生日を盛大に祝ってもらい、有頂天になっていた。(フランスで国を上げてのお祭り騒ぎ)

しかし気が付くと……本編に続く。

ニューロリンカー(擬き)は充電不足の為使用不可。ソプラノ、アルトは出てきません。途中参戦も難しいかもしれません。

真桜、頑張れ。

葵は三國志の知識はそんなに無い。映画のレッドクリフは見た。

多少鈍っているので、お話しの最初の方は弱い。

鍛練の描写はカットしますが、ちゃんとやってます。グダクダになる可能性があるのでカットします。

女嫌いが大分緩和された。

リーシャ、ナターシャ、ヴィオレッタの猛アタックの影響。
ただし勘違い女には変わらず毒を吐く。

恋姫で言うところの桂花がそれに当たる。

別に桂花が勘違いしている訳では無いが、見下している、と言
う点が当てはまる為。自分からは近づこうとは思わない。

第1話 未来の霸王との邂逅

爽やかな風が吹き、さーっと体を撫でていく。

麗らかな日差しが目を閉じていても眩しくて、ポカポカと体を暖める。

絶好の昼寝日和。まさしくそんな言葉が似合う日だ。

……。……。え？

目を開けて、体を起こし周囲を見渡す。

そこはただっ広い荒野だった。遠くの方には木々が生い茂り林を作っている。

なんか地面が黄色いんだが……。

「……は？」

壮絶なまでに、意味が解らない……！

取り合えず、取り合えず一旦落ち着こう。

まずは記憶を掘り起こすんだ。

昨日は何が有った？

俺のお誕生日会がフランス政府主導で行われて、それがテレビで中継された。

昨日は酒を飲んだか？

いいや、飲んでいない。正月に嵐に飲まされたつきりだ。俺は学習する男である。

これは盛大なドツキリか？

それは無いだろう。そんな仕事はシャロがまず受けないし、何処からも視線は感じ無い。見張られている気配も無い。

ならばこの状況はなんだ？

本当になんなんだろうな？

自問自答しながら服を見たり、ポケットを探ったりした。
IS学園の制服だ。ポケットには見事なまでに何も入っていない。

ニユーロリンカーも着けていない。

まあこれは寝る前に外すからな。……？

「そうだよ。俺は国賓館で寝泊まりしてた。しかも
寝間着にも着替えて寝た。フカフカベッドだぞクソが。な
のなんだ？ 持って来てない筈の制服を着てるわ、外に放り出さ
れてるわ……意味不明にも程が有る」

幸いにも、何故か星閃は身に付けている。

取り合えず誘拐では無いだろう。星閃を付けっぱなしだし、
レンちゃん達を欺けるとはとも思えない。

何より俺は、その手の敵意、害意、悪意、殺意には敏感だと
自負している。じゃなかったら俺はとつくに死んでる。

「ふー。取り合えず歩くか。人に会わんとどうしよ

うも無いぞ、これは」

「おい兄ちゃん」

憎たらしいまでの快晴の空を睨み付けながら一人呟くと、声
を掛けられた。

さつきも思ったが、俺は敵意には敏感なんだようん。

「何か、用か？」

「綺麗な服着てるなあ、ああ？ おい、金出せ」

ストレートだった。ストレートに脅された。

ちよび髭、チビ、太つちよ、三人全員おっさんだ。……なん

で三人共服が黄色なんだ？　何、お揃いなの？

「悪いな。　今は持ち合わせが無い」

「ああ？　そんな訳ねえだろうが」

「手間取らせんなよクソガキ。　ぶっ殺されたく無かったら、さっさと出すモンだしな」

……。うし、落ち着いた。危うく見ず知らずのおっさんに力チキレる所だった。

「なあ、おっさん？　この顔、どつかで見た事無いか？
今ならまだ洒落で許してやるぞ？」

「ああ？　知らねえよテメエなんて」

……。マジか？　何、この人の家はテレビもラジオも新聞も無いの？　外から情報を仕入れ無いのか？

「俺は朝風葵。　フランス代表で、前回のモンドグロツソでブリュンヒルデになった男だ」

ここまで言えば解るだろう、と思って自己紹介してやったのだが、しかしおっさん達は解らない様だ。

マジか。俺って実はそんなに知名度無いんだろうか？

「何を訳の解んねえ事を……。　アニキ、コイツイカれてやる」

「だな。　もう面倒だ。　服だけ剥ぎ取ってバラすか」

敵意が、殺意へと変わった。
おっさんは剣を抜いて俺に向ける。
星閃を起動するのも面倒だ。

俺は剣の柄を蹴り上げて、手から武器を離させる。

「なっ!？」

蹴った足で一步踏み込み、左の肘鉄を鳩尾にぶち込んでやる。

「うえっ!？」

「うおっ、汚ね!？」

俺の先制攻撃を受けて思わず嘔吐くおっさん。唾を吐きそうだったの、そのまま体当たりして吹っ飛ばす。

おっさんの手から離れ、高く飛んでいた剣を右手で取って半身に構える。

「ぐほおっ!？」

「アニキッ!？」

「さっきから好き放題言ってたなあ、ああん？　俺は今気が立ってた。　八つ当たりするよマジで」

俺は凍りつく様な冷たい笑みをおっさん達に向けると、

『すっ、すいませんでしたっ!!』

と悲鳴を上げて逃げて行った。

……。思った以上に効果が出たが、もしかして俺そんなに怖い顔しているんだろうか？　だとしたらちよつとシヨックなんだが……。

「そこの御仁、怪我は無いか？」

「あん？」

ぺっ、と唾を吐き捨てて、剣どうしようか？　と悩んでい
ると後ろから声を掛けられた。

取り合えず振り替えると、そこには青髪美人が凜とした表
情をして立っていた。

確かに美女だ。美女なんだが……どこか残念な臭いがする。

「ちよつと脅かしただけで逃げてったよ。　別になんもさ
れてねえ」

「そうか。　遠くから一部始終見ていたが、中々の腕前の
様だ」

そう言う女性は、ニヤリと笑っている。中々に好戦的な瞳
だ。

「いやそうでも無いよ。　特に最近はめつきり鍛練の時間
が減ってな……。　ところで話しは変わるんだが」

「うん？」

「星ちゃん」

大事な話を切り出そうとした所で邪魔が入った。

何故か頭に人形を乗せて、しかも走りながら飴を食べる、と
言う中々に危険な事をしている不思議な不思議な女の子。

多分電波形だなコイツ。間違いない。

「風。　凜」

「星、追いかけないのですか？」

「その御仁が追い散らしてしまった故にな」

「おいおい。　まるで俺が悪いみたいな言い種だな」

そう言う、星と呼ばれた女性は豪快に笑い飛ばした。
誤魔化すのはヘタな様だ。

「丁度良い。 三人に聞くが、朝風葵、と言う人物の名前に聞き覚えは無いか？」

「朝風葵さん、ですか？」

「ああ。 もしくは俺の顔に見覚えは無いか？」

『……はあ？』

……まあ、そういう反応するよな、そりゃあ。 うん。 俺だつて立場が逆なら、何言つてんのコイツ、みたいな顔するだろう。 いや、むしろ言うだろう。

「そうか……知らないか。 ……俺わりと頑張つてる方だと思つてたんだが……まだまだなのかなあ？」

それとも主要国だけなんだからうか？ 俺の事知つてる人間つて。 だとしたら恥ずかしいなあおい。

どや顔でこの顔見た事ない？ つて聞いてるんだもんな。

「うわー……」

「落ち込んだと思つたら、顔を真つ赤にして俯いてしまひましたね」

「このお兄さんは旅芸人の方なんでしょうか？」

「にしてはきらびやかな服装だがな（顔を真つ赤にして……可愛い御仁だ）」

「まあ良いや。 もっと頑張ろ、つてそうじゃねえよ！

アホか俺は!!」

『っ!?!』

違う違う。 俺は芸能人じゃない。 有名だろうが無名だろうが関係無い。 俺は武人だ。 木っ端だが、武人なのだ。

モンドグロッソに出て、テレビ番組に呼ばれ、色々な取材を

受けて来たが、俺は武人なのだ。

タレントでもなければコメンテーターでも無い。俳優でもなければ芸人でも無い。

俺は、武人。そう、武人なのだ！

あつぶねえ……危うく勘違いして落ち込む所だったわあ……。

「ふう。これはヤバイわ。鍛練して気を引き締めな

いとマジでヤバイわあ」

「いきなり大声を出す奴が有るか、全く」

「驚いてしまいますう」

「おお。すまんすまん」

残念（そうな）女性と電波系（見た目で判断）の少女が文句を言って来たので、取り合えず謝つといた。

この電波系、なんか氷青に似てるな。大和、好き、つて言わせてみたい。後、潰すぞ、ね。これ大事。

「まあ俺の事はもうどうだって良いわうん。　　んでさ、ここどこ？」

「は？　　ここですか？　　ここは、」

「星、あれを」

凜、と呼ばれた眼鏡をかけた少女が示した先に、曹とデカデカと書かれた旗が有った。……旗、で良いよな？

つて言うかそれを掲げているのが、無数の騎兵と兵士なんだが。

……もう訳解らん……。

「不味いな……」

「ですねえ」

「は？　なにが？」

「我々の様な流れ者が貴族のご子息を連れていると、邪推される事があるのです」

「貴族？　……もしかして俺の事か？」

「服装からそう判断しました」

眼鏡っ娘はそう言つてクイツと眼鏡を上げる。

いや、お前等さつき芸人か？　とか言つてたじゃん。聞こえてるのよ？

「取り合えず貴族では無いんだが」

「その辺りはご自分で説明なされよ。　面倒ごとは楽しい

が、官が絡むと面倒なだけなのでな」

「官？」

警察か何かか？　にしても馬？　ここはどこのだ田舎

なんだ？　いやだとしたらあの人数はおかしいんだが。

「それでは、ごめん！」

「ではでは」

「え？　ああ、うん。　じゃあな」

三人はあつという間に撤退して行つた。俺が言えた事でも無いが、忙しい奴等だな全く。

そして俺を取り囲む軍団。取り合えず抵抗しない事をアピールする為に、両手を上げる。

「畢琳様！　こやつは……？」

「……。　どうやら、違うみたいね。　連中はもつと

年かさの、中年の男だと聞いているわ」

「……」

「どうされますか？ 一味の可能性も有りますが……？」
「そうね。 けれど逃げる様子も無いと言う事は、連中とは関係無いのかしら？」

俺を置いてけぼりにし、上官と思われる三人が会話する。

一人は黒髪でストレートロング。何故か長めの触覚が出てる、どこか残念そうな美人。

一人は水色の髪で比較的ショート、前髪の片方は右目を隠す位長く、片方を後ろに流すと言う中々謎な髪型をしている美人。

そして最後。様付けされて、かつ一番偉そうな小柄な美少女。

ツインテールをカールさせて、紫の髪止めをしている。意志の強そうな瑠璃色の瞳がやけに印象的だ。

「我々に怯えているのでしょうか。 そうに決まっています！」

「怯えていると言うよりは、観察している様に見えるけれど」

その通りだ。よく見ているな。そこの黒髪残念美人とは違う様だ。

「発言、良いか？」

「何かしら？」

答えるのはやはり金髪の少女。

この娘がこの集団のトップと見てまちがい無いだろう。

「俺は朝風葵。 日本人だが、フランス代表だ」

「……はあ？」

……。先程と同じ反応をされた。これで三回目だ。

と言う事は、俺の肩書きはこのど田舎では何の役にも立たない。ゴミクス一緒だ。……自分で思っというアレだが、ちよつとショックだなやっぱ。

「ここは、どこなんだ？　服装を見る限り、中国とかそれっぽいんだが……」

「？　中国？　ここは陳留よ。そして私はそこで刺史をしている者」

「しし？　なんだ、それは？」

「刺史も知らないの？」

「無知でスマンな。悪いが教えてくれるか？」

何時もならここでブレーンに指示を飛ばすのだが、居ない者は仕方無い。

しかし、しし、ねえ？　この娘の口振りからすれば常識っぽい……。

とは言え、俺の名前を聞いた事が無い様な人間だ。文化圏が大きく違うのだろう。

服装、顔立ち、かりん、と言う名前。しし、と言うニュアンス。多角的に考えても東洋だと思ふんだがな。

日本、フランスと言う二大国を知らない、と言うのは……ねえ？

「あら、随分と礼儀正しいわね。秋蘭」

「はい。刺史とは、街の政を行い、治安維持や不審者、狼藉者を捕らえ処罰する務めの事だ。これなら意味は伝わるか？」

「ほう……？　このご時世に集権か？　あまり賢いやり方では無いが……」

「貴様!!　畢琳様を愚弄するか!!」

「落ち着きなさい春蘭。　どういう意味かしら？」

落ち着けと言つてはいるが、今にも斬りかかつて来そうな雰囲気だ。

どうやら機嫌を損ねたらしい。

面倒だが、何をされるか解らないので手を降ろし、何時でも武器を抜ける様にしておく。

「集権は一度腐敗すれば、それが加速していき一気に腐り落ちる。誰も止められない。

考えてみれば解るだろう。そいつが気にいらないと思えば、有りもしない罪状を並べ立てて引つ捕らえて気にいらない者を処刑。闇に葬りさる。するとあら不思議。皆してその人物の言う事に逆らわなくなる」

「むう」

ど田舎なら充分ありえる事だ。御三家、とか呼ばれる奴等が町を牛耳るなんてな。

ひぐらしのくなあくう……なのだ。

「それは、耳の痛い言葉ね……」

そう言つてかりん、と呼ばれた少女は俯いてしまった。

しまった。コイツの事もそうだと決め付け、非難してしまつた。

「すまん。皆が皆そうだと言つてる訳じゃない」

「良いのよ。そう言われても仕方無いわ」

やべえ………すげえ気まずい雰囲気………！ やらかして

しまった！ こんな幼気な少女に言う言葉では無かった。

わ、話題を変えよう。

「で、その陳留、だっけか？　の刺史様はなんでまた俺の事を取り囲んでんだ？　少なくとも争乱の類いを引き起こした覚えは無いがな」

「……。少なくとも、十分に上に怪しいわ。　春蘭、

引っ立てなさい」

「はっ！」

落ち込んでいたが、俺の言葉に立ち直り、強制的に同行させようとして来た。

随分と乱暴な事だ。

一瞬抵抗する事も考えたが、陳留なんて、国も地名も聞いた事が無い。もっと詳しい場所が解るまでは従っておくべきだろう。

少なくとも物騒な事をされそうな雰囲気では無い。

「まだ連中の手掛かりが有るかもしれないわ。　半数は周

囲を探索、残りは一時帰還するわ」

怒涛の展開だが、何とか情報は掴めそうだ。

まさか容疑者扱いされるとは思わなかったが。

取り合えず大人しく従っておくでしょう。まあ情報が手に入ったらさよならなんだが。

第2話

現状確認

袖の振り方

「もう一度聞くぞ。」

名前は？」

「朝風葵だ」

「では朝風葵。」

おぬしの生国は？」

しようこく？

……生国、なのか？

つまり生まれた

国って事か。

これは……説明が難しいな。

「生まれは日本だが……」

「この国に来た目的は？」

あつ、詳しい事はどうでも良いのね。
まあ長くならなくて良いんだが。

目的、目的ねえ……。

「知らん」

「……ここまで、どうやって来た」

「知らん」

「……。華琳様……」

「貴方、もう少し協力的になれないの？」

「そう言われてもな……」

前後の記憶が曖昧で、気が付いたらあそこで寝ていた、と説明する。

目的なんて物は……有る、な。

「目的なら、有るぞ」

「あら？ 何かしら？」

「日本に帰る、だな」

「……。 埒があかないわね……。 春蘭」

「はっ！ 拷問にでも掛けましょうか？」

コイツ等……。本当に物騒だな……。

まあ拷問に駆けられた所で、吐くモノも無ければ、屈するとも思えんが。

ぶっちゃけ師匠の鍛練より怖いモノなんて見当が付かない。

「そうなたら抵抗するが？」

「ふん。 貴様みたいな優男に何が出来る」

春蘭と呼ばれた黒髪の残念な女は鼻を鳴らしてそう言う。

どうやらコイツは余程自分の腕に自信が有ると見える。

しかし雑魚呼ばわりか。まあそう思っというて貰った方が楽なのは確かなんだが。

「後は、こやつを持ち物ですが……」

そう言つて青髪の女が取り出したのは、俺のハンドバッグだった。

「あ！」

「朝風葵。 これはお前を発見した付近で見付かったものだ」

「それ俺のだ」

確かに俺のだが、中身が何か全く解らなかったもので机に広げてくれ、
と言うとそれに従い広げてくれた。

「ニユーロリンカー……。 有ったか」

「それは……何かしら？」

俺は金髪の言葉が無視して確認する。

黒髪が隣で、華琳様を無視するとは何ごとだ!? とか、き

ちんと答える! と吠えているが、同じく無視する。

「ダメ、か。 充電が切れてるな……」

「??」

金髪は俺の言葉に大量の疑問符を浮かべている。

厳しい顔しか見ていないが、こういう顔は年相応の可愛いらしさがある。

「使えないモノは、仕方無い……か」

俺はさぞ苦い顔をしている事だろう。

当然だ。ソプラノとアルトは、最早俺の半身とも言うべき存在だ。無ければならないのだ。

「貴方、大丈夫? 酷い顔してるわ」

「おいおい。 俺はそんなに不細工か？」

「華琳様は顔色が悪い、と言っているんだ」

「解ってるよ。 冗談だ」

思わず心配している様な声を掛けてくる程だ。

全く。鏡を見たいぜ。……頼りきり、だったからな。本当

俺は意味が無いと知りながらもニューロリンカーを装着す

付けていないと、調子が出ないからな。

「それは防具なのかしら？」

「説明しても無意味なんだが……まあ、アクセミtainなもんだな」

「あくせ？」

さつきからどこか噛み合っていない会話。

生国、拷問、防具。そしてアクセの、アクセントの違い。

言葉は通じている。俺はさつきから、”日本語で話しをして”……？

なんだ？　何か、おかしいぞ？

一度疑問を置いておき、荷物を改める。

非常食、は常備しているから入っていても問題無い。

学生証。……学生証？　あれ？　こんな有ったつけ

か？　……うーん？　まあ、良いか。

水。……ペットボトルの水。

「……なんだ、こりゃあ？」

「どうしたの？　貴方の荷物では無いの？」

「いや、そうなん、だが……」

俺はペットボトルの水なんてどれだけ安かろうと、絶対に買わない。

買うならお茶だ。って言うかお茶しか買わない。

なんだ？　この荷物の中身は？　まるで遭難するのを見越しているかの様な……？

ハンドバッグに入る量なんて大した事はなく、その殆どをニューロリンカーが占めていた為荷物はこれだけだ。

「むー……？　入れ換えた、か？」

「なんだか訳の解らないモノばかりね。これは、水かしら？」

少女はペットボトルを見詰めながら言う。
このご時世で、ペットボトルを知らない。
建物や人々を見るに、貧しい訳では無い。なのに使っている
資材が、コンクリでは無く木、なのだ。

「そうだ。 ペットボトルに入っているただの水だ」

「ぺっと、ぼとる？」

「……」

ペットボトルを、知らない。

これは……俺は何か、致命的な勘違いをしているのか……？

「それで、日本、と言うのはどこにあるの？」

「それは俺の台詞だな。ここはどの国なんだ？ 日

本語が通じているのに、アンタは日本を知らない。

中国やモンゴルでは、ペットボトル位は普及している。

アジアなのは確かだろうが……」

話しをしながら考察を重ねる。

そう。そうなのだ。言葉が通じているのに、何故その国を知らない？

建物は中華風だし。中国でも無いとしたら……韓国？

あるいは朝鮮？ それとも台湾か？ かしいずれの国も日本
とは交流が有るが……？

「貴様あ……！ こちらが下手に出ていれば、のらりくら
りと訳の解らん事を……!!」

「おい。 コイツは言葉が不自由なのか？ それとも意

味を知らないのか?」

「どういう意味だ!？」

「下手とは、手を太股の下に入れて話す事だぞ」

「っ!? なに!? 本当か秋蘭!？」

「……姉者……」

「春蘭……貴女……」

二人して黒髪の女の事を憐れみの目で見る。

青髪の方は、根底に親しみが見えるが……。どうやら姉は素直な人間らしい。

「やっぱり意味を理解してないじゃないか。 さつき言っ

たのは嘘だ」

「……きつ、貴様あ!!」

「素直なんだな。 それは良いことだと思うが?」

「貴様に誉められても嬉しくないわ!!」

「いや、皮肉のつもりだったんだが……」

「姉者にはその手の捌め手は通用しない」

妹の方に困った視線を向けると、溜め息を吐きながら答えてくれた。

一方姉の方というと、少女に窘められていた。

「で、俺は自己紹介したが、そちらは無いのか?」

無礼な奴等だな、とニュアンスを込めて言う。

先程から互いの名前を呼んではいる名乗られても無いのに、名前を呼ぶのはあまりしたく無い。

ただの礼節の話だ。名前の交換はするべきだろう。

「そう言えばそうね。 私の名前は、曹孟徳。 彼女達

は、夏侯惇と夏侯淵よ」

「ふんっ」

「……」

「……？ うん？」

「聞こえなかった？」

瞬時に幾つかの疑問を感じる。

まず俺が最初に感じた疑問から、質問してみるとしよう。一つずつ確認していこう。

「さつきから互いを呼んでいるのはなんだ？ あだ名か何かか？」

「あら？ 貴方の国には、真名は無いの？」

「真名？」

真名と聞いて、真つ先に思い浮かんだのが真名開放だった俺は最早病気だと思う。

「真名は、とても神聖なモノよ。許可なく呼びつけたら、頸を刎ねられても文句は言えないわ」

「……そんな大切なモノなら、人前で呼ぶなよ。初見の

人は訳解んないだろ」

「そんな事無いわ。そう感じるのは貴方が別の国から来ているからよ」

そんなモンだろうか。まあ、そんなもんかもしれない。

名前は曹、孟徳か。変わった名前だな。孟徳か。カナミたいに女の子らしく無い名前、だ。

……。うん？ ……曹、孟徳？

「ひょっとしてあの魏の文帝の、曹丕の子孫とかか？」

と、曹操の息子・曹丕。たしか、曹操の息子だったか、と続ける

「……」

「は？ 何を言っているのだ、貴様」

なんだ違うのか。 曹 操 孟徳。まあ操では無い

かもしれないが、親が先祖の再来を願って付けた、とかか。

いや、ハリー・ポッターじゃないんだから、違うか。

「……どういう事？」

「は？ 何が？ やっぱり見当外れな事言ってる？」

「……信じられないわ……」

俺を睨みつけながら、絶句している……なんて呼ぼうか？

曹？

「魏と言うのは、私が考えていた国の名前の候補の一つなのよ」

「……は？」

「どういう意味、ですか？」

……。 うん？ 何か雲行きが怪しくなってきた、ぞ……？

「まだ二人には言っていないわ。 近い内に言うつもりだったのだけれど」

俺の事を更に凄い形相で睨みつけながら、言葉を続ける曹。
……言いにくいな。曹操、にしとくか。

向こうにしたら、事有る事にフルネームで呼ばれる事になるが。

「それをどうして、会ったばかりの貴方が知っているの!？」
そして、私が名乗った曹孟徳ではなく、操と言う私の名前を知っていた理由。説明しなさい!」

もの凄い形相と勢いで、俺に捲し立てる曹操。

……。コイツは、子孫では無い……。? だとすれば……。?
いや、そんな馬鹿な話しが、有る訳が……。

しかし、その時、俺の中で何かがカチリと、何かが嵌まる音が聞こえた様な気がした。

ここを、古代の中国だと仮定するなら、全く話しが通じないのが、筋が、通つてしまう。

「……は、はは。そつ、そんなアホな話しが……」

「まさかこやつ、五胡の妖術使いでは……!」

「華琳様、お下がり下さい! 妖術使いなどと言う怪しげな輩に近付いてはなりません!」

「おいおい。人を勝手にそんな訳の解らんモノに仕立て上げるのは止めろ!」

突き付けられた剣の刀身を反射的に握って、捻り上げて武装を解除する。

『なっ!?!』

「力に訴えると言うなら、俺にも考えが有るが?」

抑えていた闘気を、三人に向けて解放する。

誰かに本気の闘気を向けるのは久し振りだが、三人が思わず後退りする位は保っている様だ。

前に元栓から燃やしてやった時に、何とかコツを掴んでい

た。

る。

まだまだ練氣が出来る程では無いが、気迫は遥かに増してい

「俺をただの雑魚だと思って、腕力に訴えるか？」

「いいえ。 ごめんなさいね、部下が乱暴で」

「華琳様!？」

「……」

真意を推し量ろうと、曹操の瞳を覗きこむ。

どうやら本心からそう思っている様だ。

一先ず、信用しておこう。

クルクルと剣を回し、刀身を掴み柄を夏侯惇に向ける。

「返そう。 だが、俺を侮らない方が良い」

「……。 どうやら、その様だ」

「それで、説明してくれる？」

「それは構わないが……解る範囲になるが、良いか？」

「ええ。 お願い」

……

……

…

どうやら過去に来たらしい事。

しかしどうやって来たのか？

何故それを俺が覚えていないのか？

取り合えず過去に飛んだのは良いが、どうやったのかは解らない、とだけ伝えた。

「秋蘭、理解できた？」

「多少は。 ですが、にわかには信じ難い話ですな」

「だろうな。 俺もだ。 だが、これが一番辻褄が合うんだ」

アホらしいが、馬鹿みたいだが、タイムスリップ、したのだ。
こんな意味不明なのは、物語の中だけで良い。

「本当にもう……なんなんだ、コレはあ……。 ……おう
ちかえりたい……」

一人で静かにダウンモードに入る。
本当にもう……トラブルばかり持ち込むんだから……。
早くフランスに帰りたい。学園に帰りたい。

『(可愛い……)』

って言うか、なんで女の子なんだ？　まずそこだろ。

だいたい三國志で、女性の英雄なんか居たか。

俺は無双シリーズとかそう言うのやった事無いから解らん
が、孫尚香位しか解らん。

「三國志か。　詳しい事は解らんが、アホ程昔なのは解る。

俺は歴史詳しく無いからな」

「……つまり、どういう事なのだ？」

「んー。　そうさなあ……。夏侯惇に解る様に言うなら、訳
解らん場所に突然放られて、始皇帝に会ってる感じ？」

「なんだそれは。　何を馬鹿な例えを……」

「そう思うよな？　俺だってそうだ」

「な、なんと……」

そう。この無茶苦茶な展開に、俺は理解が追い付かない。
だけど解っている事は幾つか有るのだ。

まずここが過去なら、今帰っても何の意味も無い。俺を知っ
てる奴なんて居ない。

そして、未来へと帰る方法なんて、見当も付かない。
まあここに関しては諦めるつもりは毛頭無い。俺は必ず帰る。

そしてそれが解るまで、生活するのが大変難しい、と言う事だ。

三國志なんて、大昔だ。と言う事は、あの黄色いお揃いの服を着ていたおっさん達は、黄巾党と言う事になる。

世界史はまあ、強くは無いが、それ位の事は解る。
そして盗賊が蔓延っているなら、働き口もまた無いのだ。

「……。あれ？　これ詰んでね？」

と言う事は、だ。その日暮らしで精一杯になる。とてもでは無いが、未来に帰る術など見付け出すのは不可能だ。

「あ、あー……」

「？　どうしたの？」

「いや、まあうん」

曹操が疑問を投げ掛けてくるが、それに答える事は出来ない。出来ないのだ。

だって使ってくれ、つ言うのと同じだしな。

「確かにそれならば、朝風が華琳様の考えていた魏、と言う名を知っていても、説明が付く、か」

「南華老仙の言葉に、こんな話があるわ」

なんだ突然。南華老仙？　……誰、それ。

俺の訝しむ視線を受けて、曹操は言葉が続ける。
所謂、胡蝶の夢の内容を話してくれた。

むー。まあ、それも有り得ない訳では無いんだが……。

胡蝶の夢は、確か中学の図書館で見た気記憶が有る。言われて思い出す位には昔の話した。

「むむむ……？」

「春蘭。色々言ったけれど、この朝風葵は、天の国から来た、遣いなのだよ」

コイツはまた、訳解らん事を……。

「なんと!? こんな優男が天の遣いなのですか!？」

まだ優男言うか夏侯惇の奴。そりゃ俺は筋肉は少ない方だし？ 背だつてそんなに高い訳では無い。

目付きも多少悪い位だが。

「なあ曹操さんやい？ 何を言ってるのアンタ」

「五胡の妖術使いや、未来から来た、なんて話しよりも、そう説明した方が早いし分りやすいわ」

「それはそうだが……」

「貴方も、これから自分の事を説明する時は、天の国から来たと言いなさいな」

どれもこれも胡散臭いなあ。胡散臭さ大爆発だ。

だがさっきの妖術使いだと決め付けられた反応から見ると、そんな妖しい者よりかはまだましだな。少なくとも、武器を向けられる事は無いだろう。

争いなんて無いに越した事は無いのだから。

朝風

「古書を盗んだ阿呆の話し、か」

「さて、大きな疑問が解決したばかりで悪いが、本題に入るぞ

あのおっさん達を追って曹操達はあの荒野を彷徨っていたんだと。

「そうよ。貴方、そいつらの顔を見たのね？」

「人違いでなければ、な。　　と言いかぶん殴ったぞあのおっさん達」

「貴方、なかなか好戦的なのね」

「向こうが殺意を向けて来たから、ついいらつときて。まあとっ捕まえて、顔を見れば解るだろう」

「そう。　　なら私達の捜査に協力しなさい」

当然、そう言うだろうな。何たって解りやすいし。

しかしここでホイホイ頷くのは、俺らしく無いだろ。

でもまあ……ここで恩を売つとくのも手、かな？

ここが本当に三國志の時代で目の前のちっこいのが曹操だとするなら……。

協力するのが最も現実的で賢い手段だろう。

「解った。　　良いだろう」

「え、えらく素直だな」

夏侯惇は驚いた顔で俺を見る。

そうか？　　そうでも無いと思うんだが。ただの打算だし。

「行くあても無いしな。　　今の俺に出来る事なんざ高が知れてる」

なんて、嘘だけど。この時代なら、俺は最強なんてレベルでは無いだろう。

恐らく一国を滅ぼすのに十分も掛からない。

それに長い時の中で研鑽されつくした、合理的な武。槍なら、まず勝てない相手はいない。

って、SO4のエッジが言ってた。強ち間違いでは無い。

「そうでも無いわ。貴方の言う、未来の知識。上手

く使えば、私の覇業の大きな助けになるでしょう」

「……。ふふ。さて、どうだろうな？」

俺がISの事を素直に話せば、食い付かない奴はいないだろう。その価値を正しく理解し、俺の事を信じれば、な。

「まあ、やれる事はやろう。穀潰しとは呼ばれたく無いからな」

「良い心掛けね。なら早速部屋を準備させましょう」

「よろしく頼む」

俺は素直にブルブラン仕込みの一礼を披露する。下手に出ておくべきだろう。

「あら。見事なモノね。……そう言えば、葵の真名を聞いて無かったわね」

「いや、さっき言っただろ。真名の文化が無いのだ。

だからそんなモノは無い」

そう。俺には交換すべき真名は無い。と言うかさつき交換した。

「無理矢理だが、葵が真名になるかな」
『っ!?!』

そう言うのと三人は酷く驚いた顔をする。

「えっ、なにどうしたの!？」

「すると、何か?　初対面の我々に真名で呼ばせるのを許していたと」

「……。まあそうなるが、そう深く考えるな」

俺は手をヒラヒラと振りながら、何でも無い様にそう言う

が、

ね

「ならばこちらにも、貴方に真名を預けないと不公平でしょう

「は?　いや、だから……」

「葵。私の事は、華琳と呼んで良いわ」

「……」

「貴方達も、良いわね?」

俺はまだうんともはいとも言っていないのに、曹操は話しを進める。

「むむむ……!　秋蘭!」

「私は華琳様の決めた事なら従うまでだ。　姉者は違うの

か?」

「うぐっ!　私だって、だな……!」

「盛り上がっている所悪いが」

『なにかしら?』

俺の声に、三人は異口同音で答える。

俺は自分の考えをハッキリ伝える事にした。

「俺はお前等の事を真名で呼ぶつもりなんて無いぞ」

『な』

そう。俺はそんなつもりは更々無い。
というか、そんなつまらない理由で許可されてもな。

「何故かしら？ 理由を教えて貰っても？」

曹操が米神をピクピクさせている。 他の二人も凄まじい
気迫を発している。

「あのなあ。 真名つてのは、とても大切なモノなんだろう？」

「ええそうよ。 それを貴方は今のところ無下にしようとしてるのよね？」

「違う。 曹操。 お前が俺に真名を預けたのは、俺の知識は利用価値がありかつ、俺が既に名乗って、それでは不公平だと判断したからだ」

「そうね。 何かおかしいかしら？」

「いいや。 正しいよ。 俺の知識は、この世界にとつてまず間違いなく劇薬で、猛毒だろう。 しかしな、俺はそんな下らない理由で、大切なモノを預けられるのなんて、真っ平ごめんだ」

そうなのだ。 曹操の思惑が俺の読み通りなら、この立場に居る人間は、別に俺でなくても構わない。 同じ未来から来たのなら、誰だって、と言うと語弊が有るが、構わないのだ。

「だから、俺自身を認めろ。 その上で、真名を呼ばせて欲しい」

『……』

「これは俺の我が儘だ。 そっちは葵と呼んでくれて良い。 慣れっこだしな」

そうだ。俺は一回も自分の名前を呼んで良い、なんて言っていないのに皆俺を名前で呼ぶ。

まあ良いんだけどね別に。名前で呼ばれる位と言う事は無い。

「貴方自身を認めろって……」

「その内で良いさ。今はそうだな……孟徳。そう呼

ばせて貰おう。そっちの二人もな」

『……』

「なんだ、不満か？俺としては、訳の解らない理由で認められるのが嫌なんだ」

「どうやって認めさせるつもりなの？」

「そこは追々教えるでしょう。今日は休んで良いか？」

酷く疲れているんだ」

「まあそうでしょうね。……なら、明日教えて貰うわよ」

「ああ。解った」

俺は案内に任せて部屋で休む事にした。

色々有りすぎて、流石に疲れた。

しばらくは、孟徳の元に居る事にする。

絶対に俺の居場所に戻る。改めて決意を固めた。

第3話 実力確認 戦力の把握

俺はゆっくりと体を休め、心を落ち着かせて、孟徳が待つ謁見の間に足を踏み入れた。

「速かったわね」

「そうか？ まあそんな事はどうでも良い。 元讓と妙

才は？」

「もうそろそろ来るわ。 だから速いつて言ったの」

「そうか」

俺は末席に座り、二人を待つ。

特に話題も無く、時間は過ぎる。

孟徳は筆を走らせる静かな音。俺は考え事をしている。

昨夜考えてみた。この時代で、魏は一番の大国と言っても過言では無い。

このままここで、孟徳に世話になりながら、帰る手段を探すのが最も現実的だ。

だとするならば、孟徳に俺の有用性を説くべきだ。

「お待たせしました」

「華琳様あ！」

「はいはい。 待つて無いから、大丈夫よ」

孟徳は苦笑しながら、元讓に言う。

元讓は孟徳の所に駆け寄る。犬みたいだな。

「あら。 葵は何故そんな端に座っているの？ もっと

こちらに座りなさい」

「ん……。俺は末席かと思ってここに座ったんだが」

「良いから。 秋蘭」

「はっ。 朝風、私の隣に來い」

妙才は隣の席をポンポンと叩く。

まあ、良いなら良いか。

「では失礼して」

妙才に一礼して席に着く。

「それじゃあ、始めましょうか」

猛徳から促す様な視線が飛ばされる。

俺はコクリと頷いて、説明を始める。

「昨日は俺自身を認めろ、と言ったが当然無策では無い。

武芸には多少覚えがある」

「春蘭から容易く剣を取っていたものね」

「うぐっ!?! しっ、しかし! 実戦であんな事は……!」

「そんな事は解っている。 あんなのただの一発芸だ」

元讓は俺を侮っていたからな、と付け加え、ニヤリと笑いか

ける。

それを受けて、元讓は怒りでほんのり頬を染めた。

「ただ、俺は最近忙しくてな。 腕が落ちてる」

「貴方、よくそんな状態で大見得切ったわね」

孟徳が呆れた視線を向けてくる。

しかし、見得を切る、は歌舞伎役者辺りが語源だった筈だが

……何故孟徳が知っているんだ？

まあまだ色々この時代には考察の余地が有るんだが、今考えるべきで無いのは確かだ。

「二月も集中的に鍛え直せば、元に戻る。　　だいたい、今でも元讓を倒すのは無理かもしれないが、善戦は出来るだろう」

極めて冷静に戦力を分析した結果を孟徳に話す。
元讓が戸惑っているのが手に取る様に解る。

「春蘭は私が知る限り、最高の使い手よ？　　それを善戦すると言うの？」

「かつ、華琳様あ……！」

強烈な覇気を纏いながら、猛徳は俺を睨み付ける。

コイツはもう……人の話しは最後まで聞きましょう、って学校の先生に言われなかったの？

「それはな孟徳。　　お前が知る世界が、まだ狭いからだ。
俺を鍛えてくれた人達は、ただの一撃で砦を守る城門を砕き、

得物の一振りで人々を巻き上げる。そんな化け物だぞ」
『……』

やはりこの時代でも、執行者の実力は既知外にあるらしい。
流石に俺はそんな事は出来ない。当然だ。俺は人間だし。

「それに、元讓はちよつと挑発しただけで冷静でなくなり、攻撃が荒くなるだろう」

「……それは、否定出来ないわね」

「うむ。　　朝風の言う通りだな」

「華琳様あ……秋蘭もお……！」

「そして、俺はお前等にとっても大切な事を言わなければなら
ない」

「まだ何かあるの？」

俺は重々しく頷いて、懐から1つのペンダントを取り出し
た。

知らない者が見れば、綺麗な装飾品だと言うだろう。

そして知っている者が見れば、喉から手が出る程に、欲しく
て欲しくて堪らない物。

「これは、兵器だ」

「え？ それが？」

「冗談は止せ朝風。 どう見てもそれは、装飾品だ」

「秋蘭の言う通りだ！ 我々を謀ろうとしているのか!？」

俺はISがどういう物か。その説明を始めた。

.....

.....

...

「まさか、そんな物が……」

「それで葵。 貴方はそれを使って戦ってくれるのかしら

？」

「ああ。 構わない」

そう。俺はISを、星閃を殺人兵器として使う事を決めたの

だ。

「ただし」

「え？」

「ただし、条件が有る」

「何かしら？ 給金を上げるとか？」

首を横に振る。

この時代の給金なんて、幾ら貰おうと、どれだけ貯めようと、意味は、無い。

俺は、必ず自分の居場所に帰るのだから。

「三度だ。 孟徳、お前に三度だけ、I Sを使って戦わせる、命令権を預ける」

「……」

「たったの三回だ?! 貴様あ……出し惜しむのか!」

「当たり前だろ。 既に説明したが、I Sはシールドエネルギーが無いと動かない」

今の俺なら、ただの鎧としてなら使う事は出来るだろう。
しかしI Sの最大の強みである飛行、そして武器の収納が使えなくなる。

「このS Eを補給する術が無い。

そして、俺が自分の居場所に帰る為に、そのI Sが必要になる」可能性が有る」。 だから、使い切る訳にはいかんだ」

「だから三回」

そうだ、と孟徳に相槌を打つ。

帰るのに、どれだけ飛ぶのか解らない。

それに一回の戦闘でどれだけS Eを使うか解らない。 だから、三回。その手の計算はブレーンに任せきりだったからな。

S EはI Sを動かすだけで消費するのだ。

「そして三回目の戦闘が終わった時、俺はここを去る」
『っ!?!』

俺の言葉に三人が驚きの表情を浮かべる。
そうだ。俺には行く所なんて、無い。だから驚愕しているのだ。

「星閃は、切り札で鬼札。文字通り反則技だ。そして星閃は俺にとつての生命線。そんな反則技を三度も使う様な主君なんぞ、見限られて当然だと思わないか？」
「そうね。葵の言う通りだわ」

ISが兵器だと説明し、そして一国を滅ぼすのに俺一人で充分でしかも直ぐ終わる、と言った。
今の兵器なんて投石機が関の山だろう。そんなモン当たらんし、そもそも正しく敵襲だと認識する前に撃滅できる。

「だから実質的には、二度だけ孟徳は星閃を使う事が出来る。
俺は、命令を拒まない」
「そう……ありがとう葵。でも、安心なさい」
「うん？」

孟徳はやはり自信タップリの表情で、俺に告げる。

「私を信じなさい。私は霸王。貴方の兵器なんて使わないわ」

だから、安心なさい。そう繰り返す。だが俺は、
「それは無いな。本当に使うべき時が、必ず来る」
「……何故、そう言えるのかしら？」
「お前は誰かを見捨てる様な人間じゃない。援軍を送ろうにも、馬では間に合わない時が、必ず来る」

その時お前は、俺に命令するだろう。
俺はそう続けた。

負け戦を引っくり返す。それが俺の、星閃の正しい運用だからだ。

負け戦を経験しない武将なんて存在しない。

「さて。しばらく俺は鍛練する。おっさん達を追う時は迷わず前線に投入してくれ」

「しかし朝風。お前は争いが無い時代から来ただろう？
そんなお前を前線に送る訳には……」

「俺は師匠との約束で、人は殺さない。だが、人の死は見慣れている。大丈夫だ、動揺したりはしない」

「そうか。ならば良いが」

戦地でその空気を直に吸うなんてのは、当たり前だったからな。最近はその事は無かったが、死体程度で動揺する様な弱く、脆い精神はしていない。

「そういえば貴様の得物はなんだ？」

「なあ元讓よ。別に名前と呼べとは言わんが、貴様は止めろよ」

「むう……」

「姉者。これから朝風は我らの仲間になるのだ」

妙才に説得されて、渋い顔はしてしたが、頷いて朝風と呼んでくれた。

「それで得物はなんだ？」

「そうだな。剣と槍だな」

「ほほう？ 剣とな？」

やけに好戦的な光りを瞳に宿しながら、元讓は俺に問い掛け
てくる。

コイツ……もしかして戦闘狂？

恐る恐る妙才を見ると、諦めろ、と言わんばかりの視線を向
けてくる。

うわぁ……。

「悪いがな元讓」

「うん？　なんだ？」

「俺はお前と戦わないよ？」

「なんと!？」

「まずは落ちた筋力から戻さないといけないから、今日はそ
れに集中するつもりだから」

「むむむ……!」

「そんな訳で諦めろ。　孟徳も、俺が速く使える方が良い

だろ」

「まあ、それはそうね」

だから諦めろ、と言って謁見の間を後にする。

さて、取り合えず筋トレやランニングから始めるか。

武器を振るのは、まだ後だ。

第4話 猫耳軍師と小さな勇士

城壁から見下ろす景色はとても新鮮で、そしてとても物騒だった。

完全武装の兵士。槍が束ねられていて、矢は二回り程小さくして束ねられて小山になっている。

武器、糧食、補充の弓矢、薬に防具に調理の鍋。

ここまで大きい進軍は、見たことが無い。当然と言えば当然だが。

俺がここに来てそこそこ立った。ようやく出陣の時は来たのだ。

「どうした？ 何か問題でも有ったか？」

「いやな。ここまでの人数が武装しているのを見たこと無ったからな」

元讓が話し掛けて来た。取り合えず貴様と言わなくなったのは良い事だな。

一体何人居るのか……数えきれない人数だ。 まあブ

レーンが居るなら話しは別なんだが。

「……この程度でか？」

「ああ。 まあな」

戦争は有る。国内紛争は、無くならないのだ。しかしあくまで紛争。ここまで多くは無い。

「何が無駄話しをしているのかしら」

「ちよつとした雑談さ。 仕事は終わっている」

糧食の最終点検の帳簿を孟徳に手渡す。

その間に元讓が問題は無いと報告をする。武器と兵の数だ。孟徳は報告を聞きながら帳簿に目を通していく。そして、段々と目を険しくしていき、

「秋蘭。この監督官と言うのは、一体何者なのかしら」

「はい。先日志願してきた新人です。手際が良かったので食料調達を任せてみましたが、何か問題が？」

「ここに呼びなさい。大至急よ」

孟徳がやたら厳しい声と顔で妙才に命じた。

俺は字が読めないため、内容に目を通していない。

しかし孟徳のあの険しい顔を見るに、なんらかの不備が有ったのだろう。

恐らく予定している量を準備出来なかったのか、或いは……

？

しばらくして、

「遅いわね」

「遅いですね」

二人はそうポツリと漏らした。

時計が無いから詳しく解らないが、そんなでも無い。

恐らくイライラしてるからそう感じるのだろう。

というか空気が重い。面倒だな……。

「華琳様。連れて参りました」

妙才が連れて来たは、茶髪の小柄な女の子だった。

顔が赤いのは走って来たからだろうか。

「お前が食料の調達を？」

「はい。 必要な量は十分に用意したつもりですが、何か問題でもありましたでしょうか？」

そこから孟徳と少女の問答が始まる。

どうやら食料は、孟徳が指定した半分しか無いらしい。

なのに少女は、それで十分だと言った。

黙っているつもりだったが、

「なんだそりゃ？」

孟徳の判断が間違っているとは思わない。

多少は少なくする位は解るが、それを半分だと？

孟徳は続けて、食料不足で兵が行き倒れになると言う。

それはそうだろうな。半分しか無いんだから。

そしてどうやって責任を取るのか、と言う孟徳の問いに、

「そうはならない筈です」

少女はきっぱりとそう告げた。

何やら考えと策が有る様だが……。このままだと、あの少女

は危ないかもしれん。

そして少女は理由が三つも有ると言った。

孟徳は説明を要求する。当然だな。

しかしこれで孟徳が納得いかなかったら、大変な事になるであろうと言う事は想像に難くない。

まあ俺に火の粉が振りかかる訳では無いから、放っておくでしょう。

この少女だって、考え無しじゃないだろうし。

まず一つ。猛徳孟は慎重だから必ず確認し、問題が有れば責任者を呼ぶ。だから行き倒れにはならない。

そう言った。……まあ現にそうなっている。読みが当たったのは確かだ。

「ぼっ……! 馬鹿にしているの!? 春蘭!!」

「はっ!」

「落ち着け孟徳。まだ理由は二つ有る。最後まで聞

こうでは無いか。慌てる者は貰いが少ないと言うぞ」

「朝風の言う通りかと」

「……そうね。で、次は何?」

俺と妙才の説得に、何とか冷静になる孟徳。
しかし厳しい目は変わらない。

次に二つ目。糧食が少ない分身軽になり、輸送部隊の行動が速くなり討伐にかかる時間が短くなる。そう言った。

「ん……? なあ秋蘭」

「どうした姉者。そんなに難しい顔をして」

「輸送部隊が身軽になって、行軍速度が上がっても、討伐にかかる時間は短くはならない、よな?」

「ならないぞ」

「良かった。私の頭が悪くなったと思ったぞ」

「……」

俺と妙才は顔を見合わせ……何も言わない、と言う選択肢を選んだ。

しかし元讓の言う通りだ。半分にしても、重たいモノは重たいのだ。糧食を半分にしても、全体から見れば高が知れている。

孟徳の事を読んだ少女なら、これ位は理解しているだろう。

そして三つ目。少女が提案する作戦を採れば、戦闘時間が短くなる。だから食料の量はこれで良い。

そう言った。どうやら少女は、自分を使って欲しいみたいだ。

「曹操様！　どうかこの荀彧めを、曹操様を勝利に導く軍師として、麾下にお加え下さいませ!!」

やはりそうか。軍師、ね。

少女、いや荀彧は、必死の覚悟を瞳に宿し猛徳を見詰める。

「なっ!?!」

「何と……」

「なんで夏侯姉妹はそんなに驚いてるんだ。　ちよつと考

えれば解るだろうに」

「……」

孟徳は不気味な迄に沈黙を守っている。

恐らく頭が高速回転しているのだろう。使えるか、使えない

か。

「……荀彧、貴女の真名は？」

「桂花（けいふあ）にございます」

けいふあ？　どんな字を書くんだ？　日本語と使い方

が違うから、こう言う時は困る。

「桂花。　貴女、この曹操を試したわね？」

あー。まあ、そうなるか。まだ付き合いは浅いけど、孟徳つて我が儘そうだからな。

そう言うのは嫌がりそうだな。

「はい」

「なっ……い！　貴様あ、いけしやあしやあと……い！　華

琳様！　この様な無礼な輩、即刻頸を刎ねてしましましょう!!」

「止めろ馬鹿。　今孟徳は荀彧と話しているんだ。　処

遇を決めて良いのは孟徳だけだ」

横から口を出して、そっちに思考が流れるのは好ましく無い。

「ぬう……!!」

「そう熱くなるな。　当事者は冷静だぞ」

ポンポンと肩を叩いてやる。

コイツ等は孟徳の事を好き過ぎる。悪い事では無いが、時と場合による。

「桂花。　軍師として経験は？」

孟徳の問いに、荀彧は答える。

なんぴとやらで、軍師をしていたらしい。なんぴ？　　ぴっ

てなんだよ。平？　　品？

取り合えず妙才に耳打ちしてみた。

南の皮と書くらしい。鍛練も良いが、勉強もしないといけな

い様だ。

ついでに誰の本拠地か聞いてみた。

「袁紹の本拠地だ。

袁紹と言うのは、華琳様と昔からの

袁紹か。誰だっけ？ 聞いた事は有る、様な気がする。

「どうせあれの事だから、軍師の言葉など聞きはしなかったでしょう」

「おいおい。 なんの為の軍師だよ……」

思わず想像して、げっそりしてしまう。

良かったあ……拾ってくれたのが孟徳で。 うんマジで。

「それに嫌気が差して、この辺りまで流れて来たのかしら」

「いいえ。 聞かぬ相手に説くのは軍師の腕の見せ所。」

まして仕える主が天を取る器であるならば、ますます奮起する所でございます」

おー。 なんかそれっぽい。

そして荀彧は、その瞳を更に輝かせていく。 強く。 強く。 まるで恋い焦がれるかの様に。

「もし不要とあらば、遠慮無くこの場でお斬り下さいませ!!」

壮絶な覚悟である。 それはつまり、孟徳の人となりを理解し、その上で試すと言う手段を取ったのだ。

それほどまでに、ただただ孟徳に仕えたい、と言う一心で。 俺は、かなりの強運だった様だ。 まあ不幸中の、と頭には付くが。

「春蘭」

「はっ!」

孟徳は元讓から……大鎌を受け取った。 大鎌……か。

そして孟徳は、ゆつくりと荀彧に突き付ける。
怒り、では無いな。今一心境は読めないが、それは違う気がする。

「私がこの世で最も腹立たしく思う事は、他人に試される事
分かっていいのかしら？」

「はっ。そこをあえて試めさせていただきました」

やっぱりそうか。そうか。そこまで孟徳に……。俺が解る答えだ。孟徳が解らない訳が無い。

「そう……ならばこうする事もまた、貴女の手の上と言う事ね」

まあそうなるわな。

そして言うが早いか、孟徳は振り上げた刃を一気に降り下ろした。

鋭い一撃は頸に狙いを定めていた。
速い。しかし、目で追えないレベルでは無い。

荀彧はその場に立ったままだった。

当然の事ながら、血はおろか、傷一つ付いてはいない。

しかし、荀彧が一步でも動いたり、身が竦んで縮こまってい
たら、その限りでは無い。

「ねえ桂花。もしも私が本当に降り下ろしたら、どうす

るつもりだった？」

「それが天命と、受け入れておりました」

「嘘は嫌いよ」

孟徳の目がスツ、と細まり荀彧を見る。

やたら様になっっているなおい。

「曹操様のご気性からして、試されたら必ず試し返すに違いない。そう思っております」

それに、と言葉を続けた。

あくまで軍師であつて、武官では無いからそもそも孟徳の一撃を防ぐ術など無い。

そう言った。当然だな。まあ孟徳は文武両道を地で行っているみたいだが。

先程の一撃は、確かに見事だった。

そして孟徳は破顔一笑する。

彼女の笑顔を、俺は初めて見た気がした。

それは、とても可愛いらしく、年相応の無邪気さが有った。なんだ。ちゃんと、笑えるじゃないか。普段からああしてれば良いのに。

なんて、言える訳が無いが。

「最高よ桂花。

私を二度も試す知謀、胆力。

気に

入ったわ」

そうだ。その読みは見事なモノだ。だがそれを躊躇なく実行出来るかはまた別だ。自分の命を賭けるのだから。

「貴女の才、私が天下を取るのに存分に使わせて貰う事にする。良いわね?」

「はっ!!」

「ならまずは、この討伐を成功させなさい。

糧食を半

分で良いと言ったのだから、不足したら身をもって償って貰うわ」

「御意!!」

荀彧は目を潤ませて返事をした。
生御意が聞けるとは。だがこれからはきつと沢山聞くんだ
ろう。

「ところで葵」

「んあ？」

考え事をしていた為、返事がへんな風になってしまった。
そして荀彧に睨まれる。超睨まれる。

「貴方、帳簿に目を通さなかったのかしら？」

「見てない。まだ字が読めない」

「そう言えばそうだったわね。ならこれに関しては不問
にするわ」

呆れた様に視線を向けてくる孟徳。
だが、これに関しては、って言った？

「貴方は私が鎌を降り下ろすのを止めなかった。何故か

しら？」

「……は？　なんだそりや」

「良いから答えなさい」

「別に。俺は困らないから」

「え？」

「困るのは俺じゃなくて、孟徳だ。貴重な人材をむぎむ

ぎ失うんだからな」

そうなのだ。荀彧が死のうが生きようがどっちでも構わな
い。
それに、最初にキレた時はちよつとやばかったけど、その後

はちゃんと冷静さを取り戻していた。

だから、そんな事しないと思っていた。
ただそれを言うのは恥ずかしいから、建前を口にした。

「そう。そうね。危うく大変な損失をする所だったわ」

「全くだ。なんでもかんでも頸を刎ねれば良い訳じゃないぞ」

もう少し穏便になれ。言外にそう言う。

この時代の連中は頸を刎ねるのが好き過ぎる。

そりや使えない人材を何時まで使う訳にいかないのは解る。
兵の損失はそのまま国力の低下に繋がる。だから取捨選択が厳しくなるのだ。

「葵は桂花が有能だと思っていたの？」

「流石にそこまでは解らないが、何か考えが有るだろうとは思っていた」

「……。貴方は、正式に私の部下では無いわ」

「え？　そうなの？」

「ええ。でないと、もしもの時に面倒でしょう」

そうか。俺はこの前、ISを説明した時、何時か必ず居なくなると宣言した。それが何時来るから解らない。だから、常に自由にしておく。

「だから、貴方には私の抑え役をして欲しいの」
「……。なるほど」

「これは春蘭でも、秋蘭でも、そして桂花でもダメ。私と

貴方では価値観が違うけれど、この娘達はそうじゃないもの」

「つまり、全く違う視点から意見を寄越せと？」

「そうよ。　頭は良いのね、貴方」

「コイツ等が使えたら、比ベモノにならないぞ」

「葵……」

ニヤリと笑いかけたつもりだったが、孟徳の声は小さかった。

どうやらいらん心配を掛けている様だ。鏡が無いからどんな顔してるか解らんから困る。

そんなに沈んだ表情をしているんだろうか？

「ほら、俺の事は良いからさ、出発するんだろ」

「ええ。　そうね。　行きましょう」

そう言う孟徳の声は何時もの自信タップリなモノに戻っていた。

………

……

…

馬は俺の予想以上にゆつくりと進んでいた。

短くするとは言っていたが、これで間に合うのだろうか？

「朝風は馬に乗り慣れているのか？」

「慣れてるまではいかないが、多少は覚えが有る。　ここ

近年はそんな機会は無かったがな」

日本に定住する事になってからは乗っていなかったが、割りと何とかなるモノだ。体が覚えているのだ。

「しかし苟彘は無茶をする」

「そうだな。　華琳様の指示の半分しか持って来ていないのだからな」

「何が無茶ですって？」

俺と妙才の会話に割り込んで来たのは、件の荀彧だ。
まさかこつちに話し掛けてくるとは思わなかった。

「食糧さ。 チェス盤をひっくり返して考えても、そんな

事はしない」

「ちえす盤？」

荀彧はおうむ返しする。そうだ。カタカナはダメなんだつた。つい出てしまうのだ。

「あー、俺が荀彧の立場で考えるなら、食糧を減らす所までは良い。
お前にも相応の考えがある。 しかし俺なら、多少は保険を掛けておく」

「今の曹操様の軍ならこれ位出来て当たり前よ」

「そうじゃない。 それ自体は解るからな」

鍛練を進める内に、どうしても相手は必要になってくる。
だからこつそり兵の様子を見た事がある。
屈強で、統率が取れていた。

「ここしばらくの訓練や討伐の報告書と、兵数を把握した上で
の計算よ。 これでも余裕を持たせているわ」

「ほう？ それなのに半分か。 俺とお前の余裕は多少
齟齬が有る様だ」

「そうみたいね。 それと、お前って言うの止めて」

ギロリと、もの凄い形相で睨みつられた。

「はいはい。 じゃあ荀とだけ呼ばせて貰うか」

「ふんっ」

初対面なのにずいぶん嫌われた様だ。俺から近付く事は、多分無いな。

「その辺りの手腕は追々見せて貰うとしよう。しかし、あのやり取りには胆が冷えた」

「最初の一言で孟徳激怒してたからな」

何時も余裕を見せているも孟徳が一瞬絶句してたからな。

「なんであんな強引な手段を取ったんだ？」

「ああ……それは、だな」

「軍師として志願出来たなら、してたわよ」

「は？ 募集かけて無かったのか？」

妙才を見ると、頷く。どうやらそう言う訳らしい。

「経歴を偽る者が多いのだ。文官はよほど名が通ってい

ない限りは、使ってみないと判断がつかん」

「道理だな」

だから一刻も早く孟徳に注目させるだけの働きをしたかった、と荀は言った。

そう。役に立たない人材は国を疲弊させるだけだ。

「それで、華琳様はどうだったのだ」

「思った通りの、素晴らしいお方だったわ……！ あのお

方こそ、私が命を賭けておつかえするに相応しいお方だと確信したものの」

「なるほど。心酔か」

「ふつ。 貴方みたいな木偶の坊に解らないでしょうけど
可哀想に」

「ああそうだ。 俺は可哀想だな」

この手の輩は適当に受け流しておくに限る。
……ちよつとだけイラツと来たから、今度仕返ししてやろ
う。

「おお！ 貴様等、こんな所に居たのか」

「可哀想な朝風はここに居るが、急ぎか？」

「うむ。 前方に大人数の集団を確認したらしい。 華

琳様がお呼びだ」

「解ったわ！」

「うむ」

苟ははりきって返事をする。

さてと、戦いか。どれだけ腕が戻ったか、確認するには良い
機会だ。

………

……

…

「遅くなりました」

「曹孟徳の魅力が理解出来ない可哀想な朝風も来たぞ」

「……何かしら、それは」

「苟にそう言われたから、これからそれを浸透させようと
思ってな」

「止めなさいよ!？」

苟が叫ぶが、全員が無視する。

「申し上げます!」

どうやら偵察が帰ってきたらしい。

前方の集団は数十人ほどで、旗は無いので所属は不明だが、格好がまちまちな所から、山賊の類いでは無いか、との事だった。

「様子を見るべきかしら？」

「もう一度偵察隊を出しましょう。」

夏侯惇、朝風、貴方

達が指揮を取って」

「指揮だと？　俺が？」

しかし考えれば解る事だ。俺は元讓の抑え役だろう。

本陣の守護に妙才が必要だ。俺では指示は出せない。

しかし、今元讓の事をフルネームで呼んだ。やっぱりそう言うのが普通なんだろうか？　俺も荀彧と呼ぶべき？　うーん……。

「指揮は取れんが、抑え役は任された」

「おい、朝風！　それではまるで、私が敵を見れば真っ直ぐ突撃する様では無いか！」

『違うのか？』

「華琳様までえ……」

三人して異口同音に言うと、否定出来ずに落ち込んでいる。

「では春蘭、葵。　すぐに出撃しなさい」

「はっ！」

「あいよ」

元讓の部隊を全て偵察に割り振り、俺達は孟徳の本隊から離れ、先行し始めた。

隣では元讓がブツブツと文句を言っている。

私一人で充分だとかなんとか。

前方の部隊が、無関係な傭兵、またはそれに準ずる何かであるなら代表者と話しをつけなくてはいけない。

それを録に確めもせずに突撃する”可能性が有る”。そしてそれを抑えるのが俺だ。

「夏侯惇様っ！　　見えました！」

「ご苦労」

やっぱりフルネームだ。毎度毎度フルネームだ。俺もフルネームで呼ぼう。呼ばれるのは嫌だけど。

「あれか？　　行軍って感じでは無さそうだが……」

集団は一箇所に止まり、大声で何やら騒いでる。

しかし宴会等では無さそうだ。

あれは……交戦してるのか？

こっちに何か飛んで来た。……おー。飛んでるじゃないか。

「なんだあれは!？」

「人だな。　　凄いいじゃないか。　　ヴァルターが悪ふざけ

でやってた人手裏剣みたいだ」

人手裏剣！　　って笑いながら言って、手足を持ってぶん投

げるだけなんだが。

ビジュアルも効果も絶大である。

人だから撃ち落とせないし。

「誰かが戦っている様です！　　その数、一人！　　それも

子供の様です!!」

「なんだと!？」

それを聞いた元讓は馬に鞭を入れて加速していく。

「あっおい！　　ったく」

「どうされますか」

「あーそうだな……」

一瞬考えて、部隊を見渡す。

俺の指示待ちの様だ。どうやら俺の事を上官だと認識している様だ。

違うんだけど……まあ良いか。

「元讓が敵を蹴散らすだろうから、後を付けて居場所を突き止める。　　恐らく近くに集合場所がある筈だ。　　敵はバラバラ

に逃げるだろうが、着かず離れずの距離を保つんだ」

『はっ！』

「それと、おおまかで良いから、周辺の地形を調査してくれ。

俺は元讓を追う」

「ぐ」武運を！」

「おっ、おう」

まあそんな大層なモンじゃないだろ。

勘を完全に戻すにはもう少しかかるが、雑兵にやられる程度では無い。

腰に下げている二本の剣を確め、元讓の後を追う。

少し行った所で、やたら気合いの籠められた雄叫びが聞こえてきた。

小柄な少女が鉄球を振り回し、山賊共を纏めて吹っ飛ばしている。

確かに大したモノだが、あれでは直ぐに息切れしてしまう。

数がアホ程居るから仕方ないと言えば仕方ない。
しかしそこに颯爽と駆け付けるのが、

「だらあああ!!」

裂帛の気合いを込めて、身の丈程ある大剣を振るう元讓だ。

「大丈夫か！　勇敢な少女よ！」

「え……あつ、はい！」

「おのれえ……子供一人によつてたかつて……卑怯と言うのも生温いわ!!」

更に大剣を振つて野党を散らす元讓。

少女一人に手子摺っていたのに、ここでまさかの横槍だ。しかもかなりの強者。

そうなると山賊は撤退の選択肢しか無い訳で。

「逃がすか!!　全員叩き斬ってくれるわ!!」

よほど今の光景が腹に据えかねたのだろう。
声がデカイ。気合いが入り過ぎなのだ。

「落ち着け元讓。　　ここで斬ったら意味無い」

「敵の戦力を削つて何が悪い！」

「斥候を出して後を着けさせている。　害虫は根絶させないと、またうじゃうじゃと湧くだけだ」

「貴様……なかなかえげつないな」

「そうでもないだろ」

苟彘が抑えを付けて正解だったな。よく読んでいる。
まあ孟徳の事を読みきった奴だから、難易度はかなり下がる

けどな。

「あつ、あのお」

「怪我は無いかな？ 痛い所は？」

「大丈夫です！ ありがとうございます！ おかげで

助かりました！」

「俺は何もしてないよ。 お礼なら元讓に、こっちのお姉さんにな」

「はい！ ありがとうございます」

満面の笑みを浮かべながら、ペコリと一礼する。
それを受けて、元讓はにこやかに笑っている。

「それは何よりだ。 しかし、何故こんな所で一人で戦っているのだ？」

「はい、それは……」

少女が訳を話そうとした所で、本隊が見えて来た。
どうやら孟徳が来た様だ。

「っ!？」

「葵。 集団はどうしたの？ 戦闘があつたと言う報告は聞いたけれど」

「元讓が脅かしたら逃げてったよ。 後を着けさせて地形を把握させるから、もうちょい掛かるかもしれん」

「地形を？」

「逃げ道があるなら、伏兵仕掛けるから」

皆して苦い顔をする。 どうやらエグいと思われている様だ。
……まあ否定はしないが。

「あつ、貴女……！」

「ん……この子は……？」

「お姉さん、もしかして国の軍隊……!?」

孟徳に問い掛ける少女の顔は、強張っていく。

そして手に持つ鉄球を振り回した！

受け止めたのが元讓でなければぶっ飛ばされていただろう。
俺なら受け流して多分元讓辺りにパスしていただろうな。

「きつ、貴様何を!?」

「国の軍隊なんか信用出来るモンか！　ボク達を守つても
くれないクセに！　税金ばかり持っていつて!!」

そう言いながら、更に鉄球を振り回す。その顔は、山賊を相手
にしていた時とそんなに変わらない、怒りの表情をしている。

「そうか。だから一人で戦ってたんだな」

「そうだよつ！　ボクが村で一番強いから！　たがらボ
クが皆を守るんだ!!　盗人からも、お前達役人からもつ!!」

そうか。この少女には、山賊も役人も変わらないんだ。

どちらも等しく奪って行くのだから。

そして反撃が出来ない元讓が、少しずつだが押されている。
やはり強いな。あの年でここまでやれば大したモノだ。
才能が羨ましいよ本当に。

「あの女の子は誤解してるな……この辺りを治めているのは
余程の阿呆か」

「……」

「華琳様……」

孟徳は黙りこくつている。渋面を作っていた。

「でえええええいっ！」

「ぐっ……仕方ない、か……」

元讓がとり押さえようとした所で、

「二人ともそこまでよ!!」

孟徳が強烈な覇気を伴い一喝する。

眉間に皺を寄せて、睨み付ける。

「剣を引きなさい！　　その娘も、春蘭も！」

「はっ、はい!!」

歩いてくる孟徳の気迫に押され、鉄球を落としてしまった。
地面が陥没してる。どうやって作ったんだろう……鉄の塊
なんだからかなり高価だと思うんだが。

「葵、この娘の名前は？」

「まだ聞いてないな」

「え、あつ、許緒と言います」

許緒は完全に孟徳の出す気迫に飲まれていた。

「そう……。　　許緒、ごめんなさい」

許緒に、ぺこりと頭を下げた。

周りは呆然としている。

自分の主であり、そして”あの”孟徳が頭を下げた。

「ほう……。やはり器がデカイな」

誰とも知れん奴に、しかも自分には非が無いのに頭を下げる
と言うのは、そう簡単に出来るモノじゃない。

孟徳は続けて自己紹介をする。山の向こうから遠征に来た、
と言うと、

「ぐ、ぐめんなさい！」

許緒はようやく誤解していた事に気付いた。

地方だと言うのに、孟徳の噂がここまで届いているらしい。
悪い事はしない。税金も安くなった。盗賊も少なくなった。

俺からすれば、税金以外は当たり前の事だ。

悪事を働けば捕まるし、犯罪者はまず逃げられない。

「構わないわ。今の国が腐敗しているのは、私が一番よ

く知っているもの。官と聞いて許緒が憤るのも当たり前の話し
だわ」

やはりそうか。時代的にも、その権利的にも。どこにでも
腐っていく奴は居るが、このご時世なら特に顕著だろう。

「だから許緒。貴女の勇氣と力を、この曹操に貸しては
くれないかしら」

「え？　ボクの、力を……？」

孟徳は自身の目標を許緒に話す。
いずれ大陸の王となる。

けれど今のままでは、力が足りない。

「だから、村の皆の為に振るった貴女の力と勇氣。　　この私に貸して欲しい」

「曹操様が……王に……」

「ええ。　必ず」

「曹操様が王様になったら、ボク達の村も守ってくれますか？」

許緒にとって何よりも大切なのは、村を守る事。
だから孟徳は約束する。

陳留だけでなく、許緒達の村だけでも無く、大陸の皆がそうして暮らしていける様に。だからそこ孟徳は、

「その為に私は王になるの」

「この大陸の、皆が……」

許緒が傾きかけた所で、偵察が戻り報告を入れる。
本拠地が確認され、周辺の地形もおおまかに把握出来た様だ。上出来だな。

「判ったわ。　ねえ、許緒」

「はっ、はい！」

「まず、貴女の村を脅かす盗賊団を根絶やしにするわ。
そこだけで良い。　貴女の力を貸してくれるかしら？」

「はい！　それならいくらでも！」

なんだ。アイツ等山賊じゃなくて盗賊なのか。まあどっちでも良いんだが。

許緒は満面の笑みを猛徳に向ける。

「春蘭、秋蘭。　許緒はひとまず貴女達下に付けるから、解らない事は教えてあげなさい」

「はっ！」

「あつ、あの……夏侯惇、様」

「さっきの事なら気にせんでも良い。

それよりその

力、しっかりと役立たせてくれよ？」

「は、はい！」

行軍を再開し、俺たちは盗賊団のアジトに向かった。

害虫共を根絶する為に。

さてと、荀彧と許緒の腕前の程を見せて貰うとしよう。少しだけでは有るが楽しみだ。

第5話

盜賊討伐

底意地の悪さ

盜賊の砦は山の影に隠れる様に建っていた。

許緒と出会った場所から然程離れてはいないが、かなり分かってにくい。

しかし盜賊団の奴等はどうかやって砦を建てたんだろうか？

正直そっちの方が気になると言えば気になる。

乗っ取ったのだろうか？

「許緒、この辺りに居るのはあの盜賊団だけなの？」

「はい。この辺りにはアイツ等しかいませんから」

そして敵の数はおよそ三千。こっちの数は約千。三倍近いが、まあ問題は無い。

統率も無く、訓練もしていないただの烏合の衆。

少し混乱を与えてやれば、あつと言う間に部隊は崩壊する事だろう。

「そう。それで桂花。貴女の策は？ 糧食の件、

忘れていないわよ」

「無論です。兵を損なわず、より戦闘時間を短縮させる

策。既に私の胸の内に」

「説明なさい」

荀彧が説明を始める。

簡単に纏めると、孟徳と少数の兵を囿にし元讓と妙才は残り率いて後ろから襲撃。

荀彧の読みでは、盛大に銅鑼を鳴らして攻撃を匂わせれば必ず迎撃する為に砦から出るんだと。

その後転進し、誘き寄せて背後から夏侯姉妹が叩く。

「……ちよつと待て。 それは何か？ 華琳様に囲をし
ろと？」

「そうなるわね」
「何か問題が？」

孟徳は何でもなさそうにし、荀彧は冷静に、割り切った顔を
して元讓に問い掛けた。

まあ主に危険な役目を任せたくは無いわな。

「大有りだ！ 華琳様にそんな危険な事をさせられるか
！」

「なら、貴女には他に良い作戦があるとでも言うの？」

「烏合の衆なら、正面から叩き潰せば良からう」

『……』

思わず全員が黙ってしまう。しかもそれを真顔で言ってい
るのだから質が悪い。

「あのなあ元讓……頭を使えば容易く倒せる相手なんだ。

兵はそうポンポン用意出来るモンじゃないって事は、お前が一番良
く解ってるだろうが」

「むう……」

そう言うのと剥れながらも、納得してくれる。

人材育成が最も大変で、そして最も大切にしなければならな
い宝なのだ。

「曹操様。 盗賊は間違いなく夏侯惇殿よりも容易く挑発
に乗ってきます」

「なっ、ななな、なんだとお!？」

「そう怒るな。 荀彧の思う壺だ」

「春蘭。　貴女の負けよ」

「かつ、華琳様あ……」

本当に元讓は孟徳に弱い。

しかし、あそこまで自信を持っていた割りには、そんな凄い策でも無かった。

しかし荀彧は次善の策も用意していた。

この付近の拠点になりそうな城の見取り図は既に用意してあるそうで、城の内から攻めるそう。

どうやら食料の補給を任せられた時点で計画を練っていたらしい。

こんな事なら測量いらなかったな。まあ無駄にはならんが。

「そう……ねえ葵。　貴方はどう思う?」

「えっ……!?!」

孟徳は当然の様に俺に問い掛けてくる。その事に荀彧は驚いた顔をする。

そりやそうか。絶対の自信を持って提示した策なのに、他の奴に相談してるんだから。

「そうだな……正直大した事ないな、とは思った」

「なっ!?!　　なんですってえ!?!」

目を剥いて怒鳴り散らす荀彧。更に言葉が続けようとして、

「黙りなさい桂花。　私は今、葵と話しているの」

「あうっ……。　　っ!!」

ギリツともの凄い表情で俺を睨み付ける荀彧。これで更に目の敵にされた俺。

別にどうでも良いけど。

「匣で釣るなんて使い古された手だ。正直あそこまで自信満々だったから、もっと凄いのを披露してくれると思ってたんだよ」

別に俺は荀彧を嘲って、使えない奴だ、なんて言いたいのでは無い。

まあアレなのだ。期待し過ぎたのである。

「使い古されたって、それは貴方が天から来たからでしょう。それに、使い古されていると言う事は、それだけ有用だと言う事でも有るわ」

「そつ、曹操様あ……！！」

荀彧を庇うかの様な発言で、荀彧は感激している。
孟徳の言う通りだ。昔から有り尚且つ、現代まで残っていると言う事はそれだけ有用だからだ。夜討ち朝駆けと同じ事だ。

「荀彧はもつと鬼畜な手を打つと思ってたつて事。別に馬鹿にしてる訳じゃない。孟徳がそれで良いと言うなら俺は構わない」

そうなのだ。あくまで意見を求められているに過ぎない。
孟徳がそれで行くと言うなら、是非も無い。

「なら貴方ならどうするのかしら」

「俺か？ 別に何か考えが有る訳じゃないぞ」

「ふんっ。 やっぱり男なんてそんなモノよね」

といい気になっている荀彧。

否定したなら、代案を持っているのが普通だ。それが提示出来ない以上は、そんな事を言われても仕方ない。

頭ごなしに否定するなら誰でも、それこそ子供だって出来る事だ。

「なら今考えなさい」

「……ふむ」

なら荀彧に、後だしじゃんけんと言うのを教えてやるとしよう。

「じゃあ説明するぞ」

俺の立案する作戦はこうだ。

基本的な骨子は荀彧と同じだが、囹をするのが俺一人。

俺一人で誘いに誘って、横から少数の兵を率いた許緒隊が攻撃を仕掛け、程なくしてから敵の背後から弓矢で奇襲しつつ、元讓隊が強襲する。

混乱の真っ只中にいて、統率もクソも無くなった所で孟徳率いる本隊が正面から攻撃する。

「こんな感じ?」

「囹がアンタ一人ですって?」

「いくらなんでもそれは無謀だろ朝風」

怪訝な顔を向ける荀彧と、呆れた顔をする妙才。

いやいけるよ? 全然やれるよ?

「無理ね」

「やっぱか」

「ほら見なさい。 アンタ馬鹿？」

「華琳様の囧よりかはマシだが、貴様では無理だ」

「いいえ春蘭、桂花。 私はそこに無理だと言ってるんじゃないの」

首を振って二人を否定した後、俺を思いつき睨み付ける。

……えっと、え？ なんで睨まれてるの、ボクちゃんは。

「葵ならいざとなれば、あいえすを使えば良いモノね？」

私達にその真価を見せ付ける良い機会だもの」

「あいえす？」

「待て姉者。 姉者は朝風からあいえすの事は聞いているだろう」

妙才の言葉に元讓は疑問符を浮かべている。まあどれだけ言葉を重ね様が、印章は薄いだろう。

百聞は一見に如かず。

「えっと……取り合えずIS、星閃を使うつもりは無いぞ？」

「どちらにしても無理よ。 なんの訓練もしていない許緒では、隊を率いる事は出来ないわ」

そう。そこなんだよな……。 許緒がそれを出来たら、全ての条件はクリアされる。(byゼロ)

俺もそこを懸念していたのだが、やっぱり無理らしい。

「じゃあ苟彘の案で行くか」

「そうね。 そうしましょう」

「かつ、華琳様！」

「囧の一つも出来ない様では、この先の霸道などとても歩め

ないでしょう」

「ならばせめて、許緒を本隊につけさせて貰います！」

「許緒はせめて貴重な戦力よ。伏兵の戦力が下がるのは好ましく無いのだけれど」

「なら伏兵に混じるのは俺がやろう」

最初からこう提案するべきだったか。

しかし孟徳は考えろと言うし。採用されるかどうかはまた別の話しだから良いか。そんな深く考えなくても。

「許緒、孟徳の守りは任せるぞ」

「兄ちゃん、平気？」

「アツサリ死んじやったりしてね」

許緒は心配する様に見上げ、荀彧は意地悪に笑う。
あれは本当に死ねば良い、と思ってるに違い無い。
死なないさ。と言うか色んな人に何も言わないで別れるとか、マジで俺は地獄に落ちる。

そう簡単に負けられるか。

「大丈夫さ。鈍った勘は大分戻ってるし、出来ない事は口にしない」

「その言葉、覚えておくわよ」

孟徳がにやりと笑いかけてくる。

大体だな、一人で突っ込むって最初に言ってるんだから、勿論勝機が有るのだ。

化け学はレンちゃんや教授に教えて貰ってたし、歴史なんかも調べた。

本当に少量では有るが、黒色火薬が出来た。

多少知識が曖昧だったから、色々試行錯誤しなくてはならな

かったからスタングレネードも二発しか出来なかった。

とは言っても本物のスタングレネードみたいに閃光が走る訳では無いが。

「無論勝算はある。 それじゃあ兵を貸してくれ」

「任せたわよ」

「ああ」

さてと。取り合えず兵を借りる事は出来た。出番の前に説明だけしとかないと。

「お前等を率いる朝風だ。 俺の隊に振り分けられてラッ

キー、幸運だな」

「幸運、ですか？」

振り返りにやりと笑いかけてやる。

俺の伏兵隊は約300。全体の三割弱だ。もうアレだな。俺達だけで敵を全滅させる位の勢いで行こう。

「突撃する少し前に、敵を怯ませる。その隙に攻撃する。

爆音が響き渡るから、耳に注意しろよ」

「はあ……？」

隠れて合図を待つ。こちらの軍が銅鑼を鳴らす。

しかし咆哮が上がっているのは、砦から出て来た盗賊のモノだ。

「……は？ なんだあれ」

「どうやら……こちらの銅鑼を出撃の合図だと思った様ですね」

「思ってた以上に馬鹿だな。 まあ手間取るよりは良い

んだが」

おっと、アレは孟徳か？　えらく早いな。まあそれはそうか。

ゴキブリはしよせんゴキブリ。隊列もクソも無い。後はタイミングだな……。ベストは元讓が突撃するほんの少し前だ。

こういうのはブレインに任せるのが一番なんだが……。まっ適当にやるか。

「準備しとけよお……」

俺はピンを引き抜いて、勢いよく投げつける。

「耳塞げ！」

『っ！』

轟音が鳴り響く。先頭と真ん中辺りの進軍が止まり、殿に弓矢が降り注ぐ。うっしベストタイミングだ。

「行くぞお!!」

『応ッ!』

腰の二刀を抜きながら自身が出せる最速で突っ込んで行く。首目掛けて一閃させる。賊の悲鳴が響き渡る。

そのまま敵の中央を食い破る様に進んで行く。

首、腹、手首、太股。動脈を切り裂く。しかし手当てすれば充分に助かるレベルだ。

その辺りの匙加減は完璧である。……何故か？　この身に叩き込まれたからだよ!!!（号泣）

完璧では無いが、大分勘も戻って来た。出来れば誰かに練気

を教えて欲しい所だ。

「つつ、つええ……!!」

「的確に急所を狙っているのか……!」

たまには二刀流も良いかもしれないな。

帰ったら誰かに鍛練を頼むのも良いな。……二刀使いは、居なかったか。まあ良いや。

「(よえー。まあ何が起きてるのか解らない内に斬られてるみたいだが)」

もともとから隊列なんてモノは無かったが、今はぐちゃくちやになっていた。

と言うか敵陣深くに切り込んでるのに、囲まれて無い。

「朝風様!」

「いや様はいらないんだが……どうかしたのか?」

「曹操様がお呼びです!」

「は? もうか?」

伝令が飛んで来て、そんな報告を入れてくれた。

斬った数は一々覚えてはいないが、まだそんなでも無い。

切れ味も鈍ってない。まあ帰って来いと言うなら帰るけどさ。

「曹孟徳の魅力がこれっぽちも理解出来ない可哀想な朝風葵、来たぞ」

「私が悪かったからそれ止めなさいって!!」

荀彧のその言葉を聞きたくて孟徳の前で繰り返したかいが

有った。

アホめ。俺はしつこいのだ。

「ふふん」

「ぐっ!？」

「で、どうした？」

「追撃を出したから、撤退するわ」

「……」

「……」

「……え？　それだけ」

「そうよ」

だったら俺も追撃に参加したかったが……まあ良いか。
と言うかそれだけなら別に呼びつける必要は無いだろ。

「貴方、本当に強いよね。　それに何だか道具を使ってた

みたいけど……？」

「スタングレネード……あーっと、まあなんだ」

音爆弾って言えたら良いんだけど、爆弾の説明をしなくちゃ
いけない気がする。

それに量産する訳にもいかないし。　お茶を濁しておくか。

「孟徳はアレを量産したいのか？」

「有れば強力だとは思うけど、そんなつもりは無いから安心
なさい」

「そうか。　なら良いが」

作ったのは良いんだが、まあ……面倒だし手え汚くなるし。
星閃に放り込んでおけば保存出来るから、作っておいて損は無いんだ
が止めておいた方が良さだろう。

「砦は落とさないのか？」

「落とすわ。
けれど貴方は前線に出る必要は無い」

「え？
なんで」

「言ったでしょう。貴方は私の側で意見が欲しいと」

今回は伏兵を頼んだけど、基本的には私の側に居なさい。孟徳はそう続けたのだった。

……一体なんだろう、この感じ。つてか何で俺をそんなに
側に起きたがるんだろうか？

流れ弾に当たらない様に、
 だろうか？

それとも別の何か、か？

どちらにしても、これでは孟徳に本当に認めさせるのはまだまだ時間がかかりそうである。

孟徳の真意を考えている内に、時間は過ぎていった。

•
•
•
•
•
•
•
•
•

$$\vdots$$

⋮

帰り道の行軍で皆は何かを誤魔化す様に喋っている。

結局今回の目的である、おっさん達は見付けられず、当然の事ながら本も無い。

「そーい、何て名前の本なんだ？」

差し支えなければ聞き

たいが」

「うむ。大變要心の書だな」

⋮

猛徳が口を開こうとしているので、それよりも早く、

「そんな名前だったかの。」

「と言う事はなんだ？」

「そ

の書には、夜討ち朝駆けの防ぎ方なんかが書いてあると?」

「そうだろうな。大變要心の書だからな」

「そうかそうか。で、孟徳は何を探してたんだ?」

「だから大變要心の、

「大平要術の書よ」

「ほほー。大平要術の書とな? 大變要心の書とは違

うのか?」

俺は元讓にニヤニヤ笑いながら、孟徳に問い掛ける。

元讓はカーッと赤くなり、

「春蘭をからかうのは止めなさい。まあ、代わりに桂花

と季衣と言う得難い宝が手に入ったのだから、良いとしましょう」

季衣とは許緒の真名だ。一緒に来る事になったのだ。

許緒の村の辺りを治めていた州牧(所謂領主だ)が盗賊に怖れをなして逃げ出したので、孟徳がその辺りを引き継ぐ事になったのだ。

許緒は孟徳の事を守りたいらしい。

本当は一人で戦っていた事に物申したいのだが、その辺りは俺の役目では無いだろう。

とは言え、言いたいのは言いたいのだが。我慢しておくとする。

「ねえ兄ちゃん」

「んー? どうした許緒」

「なんで季衣、って呼んでくれないの?」

「孟徳との約束だからだ。なあ許緒。字を教えてく

れるか?」

「字? えっとね、仲康って言うの」

「そうか。なら仲康と、しばらくは呼ばせて貰うよ」

体型がレンちゃんに似ている為、どうしてもそれっぽく接してしまうのだが、仲康も嫌がっていないのでまあ良いとする。

「桂春。最初にした約束、覚えているわよね？」

「……はい」

「城を目の前にして言うのもなんだけれど、私……とてもお腹が空いているの。解る？」

「……はい」

そうなのである。結局荀彧は読みきれなかったのだ。兵の損害が予想以上に少なく、かなり残った事。そしてそれ以上に仲康が、まあよく食べる事。俺より遥かに多く食べる。

一食辺りの小さな誤差も、毎回だとまあ大きいモンで

……。

「だから言っただろうが荀彧。少ないって」

「くううううう!？」

そこで俺は、皆に見せ付ける様に懷から食料を取り出して口にする。

ニマニマと笑いながら。

「あー! 兄ちゃんずるいい!」

「なっ、貴様どうして!？」

「貴方……」

あー美味しい、とわざとらしく言いながら大して美味くも無い保存食をゆつくりと咀嚼する。あー不味……。

「なあに、荀彧の読みは外れる”可能性が有る”と読んで、ちよこつとだけ貰って来たんだよ」

「ムカつく！　本当にムカつくわねアンタ!!」

「ふはははー！　読みきれない貴様が愚かなのだ！　この猫耳軍師！」

キィー！　と悔しそうな表情が見ただけで満足である。ちなみに孟徳は絶対零度の視線を向けてくる。

「ふー。　ほらよ」

「え……」

「そんな怖い顔すんな。　可愛い顔が台無しだぞ」

「……がと……」

孟徳が美少女がしてはいけない顔になっていたから、保存食を投げて渡した。

まーさつきからくぎゆう、とお腹を鳴らしていたから、しやーなしだから渡してやった。

後怖い顔してたし。

「兄ちゃーくん！　ボクには無いのー!?!」

「有ったが、孟徳にやっちまった」

「ガーン!?!」

取り合えず孟徳は荀彧と仲康に真名を許し、後で荀彧をお仕置きするんだと。

そーいうせかいはよー解らんわー。

第6話 占い師と黄巾党

孟徳の地位が刺史から、州牧へと昇進したのがつい先日。手続きや引き継ぎを一通り済ませたのだが、やたら慌ただしかった。

俺？ 俺は読み書きを勉強してますた（笑）。
ようやく落ち着いて来たので、街を見て回る事にしたのだ。

昇進したのは孟徳の手腕が認められ、荀彧が中央に手を回したらしい。

多少汚なかろうが何だろうが、使えるモノは使うべきだ。
俺の未来知識（笑）も使つて貰つても構わないと言えば構わないんだが、孟徳に授けるのは俺の裁量による。

例えば火薬とかな。こっちだけが使つてる内は問題はー有るには有るがー無い。しかしそれを敵が解析してしまったら？
基本的に攻勢なモノは授けない、とは言つてあるが。

街の右手側を妙才が、左手側を元讓が。
俺は何故か孟徳と一緒に回る事になった。やっぱり意見が欲しいんだと。

ついでに仲康に土産を買う事になった。
とにかく盗賊をぶつ殺したい仲康は、街の巡回よりも盗賊を駆逐しに行った。

進撃の仲康である。

大通りはスルーして、小さい店や住宅がひしめき合っている裏通り。

ここにひょいっと孟徳は入って行ってしまった。
なんでも、大通りの意見は何にもしなくても入ってくるとか。だからこうして裏通りに潜っているんだと。

そこで俺に、これを見てどうかと聞いてきた。
どうかもクソも無い。

「貧相だな。 衛生面も怪しい。 ライフライン、あーっと、電気・ガス・水道・通信・輸送なんかを言うんだが、兎に角不便だ」

「でんき？ ガス？」

「未来ではそう言う便利なモノが溢れてるんだよ。

夜は蠟燭で灯りは取らなくても明るい。それが電気。

火を付けるのに薪はいらず、長く、強く燃えている。それがガス。

水道は井戸が一棟一棟に有ると思え。

通信とは、遠くにいる人間と喋れる。例えば、孟徳が玉座に居ながら、今日盗賊を駆逐しまくっている進撃の仲康に指示を送れる。これは、戦場でとてつもなく有利になるな。

輸送は解るな？ 物資の補給だ」

「……」

未来の一端を少し話してやると、孟徳は信じられ無い、と言う顔をしている。

そりやそうだろうな。

何年先の話しをしてるんだ、って事になるから。

「浮浪者が多いな。 まあこれはお前が善政を敷いているからだとは思うんだが、もう少し何とかならんのか」

「桂花から色々と案は出てるわ。 後で貴方も目を通してちょうだい」

「後はそうさなあ……」

先も言ったが、衛生面を気を付けないといけないな、と言う。

理由は幾つか有るんだが、と前置きして、

「人体の排泄物を放置すると、それは疫病の原因になる」

「貴方達はどうしていたの？」

「さつき水道がどうこう行つたな？ 基本的にはその水で

流す」

「それから？」

「その後は知らん。 恐らく水を濾過して再利用してるん

だろう」

「ろか？」

この様に、孟徳と話していると次から次へと質問が続けられる。

だから結構疲れるんだコレが。

孟徳は頭が良いクセに、回転も早いから1から10まで言う必要は無いのは助かる。

しかし俺だってなんでもかんでも知ってる訳じゃない。排泄物のその後なんて考えた事もねえよ。

こう言う時ブレーンが居ると楽なんだがな。

孟徳とあーでもない、こーでもないと言いながら裏通りを抜ける。

議論をしながら、街を見ようと提案したのだ。

「そうだ。 大衆浴場はどうだ？」

「それはまた……莫大な費用がかかりそうね」

「しかし人手を集めて、客からそれなりに金を取れば儲かる

ぞ。

い。 国営にすればお前が値段を決められるし、他に商売敵も居な浮浪者を使えば賃金も安くすむ」

「成る程ね」

「勿論今言つたのは得ばかりだ。

当然損する事も有るだ

ろう。 そこら辺は自分で考えろ」

と言つて孟徳にぶん投げる。流石に銭湯の事なんて詳しくない。

入りに行く事も無いしな。ただ儲かるのは儲かると思う。燃料費がどれ位かかるか知らんが。

建造費も馬鹿にならんだろうな。完全に他人事である。テルマエ・ロマエ、面白かったわーうん。

孟徳は露天商をやっている所に目を向ける。

俺も釣られてそちらを見ると、せつまいスペースに……なんだアレ？ 竹カゴ、だろうか？

そして店主の隣に置いてある……木のカラクリみたいなの。歯車が付けられているからカラクリで良いだろう。

「……歯車、だな。 ……はっ？ 歯車？」

「あら。 葵には珍しいモノなの？」

「絶滅寸前だな」

いや歯車自体は珍しくもなんとも無い。俺だって作れるだろう。

しかし歯車がこの中国で使われる様になったのは、もっと後だった筈だ。

孟徳の様子から見て、当たり前な物らしいんだが……。

……。考え込むのは止めておこう。今は孟徳とデートしてるんだし。

「おお！ そのお二方、お目が高い！ こいつはウチが開発した、全自動カゴ編装置や」

なんでコイツ言葉のイントネーションが関西弁なの？

そして全自動？ どこがだよ。

「冗談は止せ。 そのハンドル、取手はなんだ？」
「うぐっ!？」

そう。ハンドルを回さなければ動きはしない。しかもこれだと、底と枠の部分はまた別だろうし、最悪手編みだ。

「まあ……便利と言えば便利ね」
「どこがだ、こんな危ないモノ」
「危ない？」

「これ、強度が足りなくて一度使ったら弾けるだろ」

竹のしなる力はなかなか侮れない。
木では流石に無理が有る。

「兄さん凄いなあ。 なんで解ったん？」
「なんでも何も、俺もこう言うのよくやる、やってたからな」

最近は全然やれて無い。今も、向こうに居た時も。

「まあなんでも良いが、危険物の持ち込みは遠慮してくれ」
「うう……えろうすんません。 置いといたら目立つかなあ思ってたな」

「ならここに並んでいるカゴは、この装置で作った訳ではないのね」

「ああ。 まず無理だ」

断言するとガックシ、と項垂れてしまう少女。まあ仕方無い。孟徳に嘘を教える訳にもいかんし。

「ならせめて兄さん、一個位こうていつてえな」

「ふむ。まあ収納は欲しいと思っていた所だ。 孟

徳」

「ええ。 おいくら?」

「へへ。 毎度!」

.....

.....

...

集合場所は突き当たりの門。

なかなかゆっくり回った。視察ではなく、議論になっていたが、まあそれは孟徳の責任だやうん。

しかし俺達が一番が早かったのだった。とは言え、待ったのはほんの少しだったのだが。

そして何故か三人共同じ竹カゴを持っていた。

まさか妙才まで寄り道しているとは思わなかったが。

「今朝、部屋の竹カゴの底が抜けている事に気付いてな」

妙才は聞いてもいない事を喋って来た。どうやら俺の視線に耐えられなかったと見える。

「まあ、なら仕方無いわね。 どうせ貴女の事だから気に

なって仕方なかったのでしょう」

「は。 直そうとは思っていたのですが……」

俺に話し掛けていたのだが、孟徳が隣から解説してくれた。

「で、春蘭は? 何か山程入れている様だけれど……」

「こつ、これは……季衣の土産にございます!」

「土産買うの早いなおい」

？

俺が思わずツツコム。こういうのって合流してから見ない

「何故朝風もその竹カゴを？」

「うん？ 部屋に収納が欲しいと思っていたからな。」

孟徳におねだり（笑）したのだ」

「なに!? 華琳様を買って貰っただ!?」

「なんでそんな怒ってんのお前？」

何故か顔を真っ赤にして元讓に睨まれる。

……ひよつとして羨ましいんだろうか？

「それで、視察はちゃんと済ませて来たのでしょうかね？」

「はい！」

「無論です」

「俺達はどつちかと言うと議論してた気がするな」

「なら良いわ。 今回の視察の件、報告書に纏めて提出す

る様に。 葵もよ」

「おけ」

短く返事をした。それに孟徳は怪訝な顔をしたが、肯定的だと理解したのか何も言わなかった。

その時、後ろから声を掛けられた。

「その若いの……」

「誰？」

婆さんだと思う。フードっぽい布を目深に被っているから解らないが多分婆さん。

「なんだ、貴様」
「おい元讓。　　ご年配の方に向かって、なんて口の聞き方だ」

ギロリと睨みつけると、ちよつとただけだじろぐ元讓。
全く。いかんよ。ご年配の方は敬わんと。

「占い師か」

「華琳様は占いなどお信じにならん。　　慎め」

「春蘭、秋蘭。　　控えなさい」

孟徳の言葉に、二人が一步下がる。

占いは信じるかどうかとは別として、将来起こりうる可能性の一つとして心に留める、位にしておいて損は無い。
どうせタダなんだ。

占い師はとても強い相が見えると言った。

孟徳が続きを促すと、こう続けた。

力のある相。兵を従え、知を尊ぶ。

国の器を満たし、繁らせ栄えさせる事が出来る相。

稀代の名臣となる相。

まあそうだろうな。とは言え問題は、

そこまで考えた所で、占い師は言葉が続けた。

国にそれだけの器が有れば。と。

そう。その通りだ。孟徳の求心力は強い。強すぎる。

力の弱った国の器には収まらず、野心は留まる事を知らな

い。

溢れた野心は、国を犯し、野を侵し、いずれ国の歴史に残る奸雄となる。

「貴様！　華琳様を愚弄するか……！」

「秋蘭！」

「プツ」

思わず吹き出してしまった。

奸雄とは、悪知恵を働いて英雄となった人物の事を指すからだ。

「朝風。　何を笑っている」

妙才に思いつきり睨まれているが、無視して孟徳に笑いかける。

「良いじゃねえか奸雄。　なれるモンはなつとけよ」

「そうね……面白い。　気に入ったわ。　秋蘭、この占

い師に謝礼を」

「……は？」

「聞こえなかった？」

妙才はまだ睨み付けているが、孟徳の言葉に従い、渋々では有るが幾らか渡した。

妙才がこう言う顔をするのは解るが、元讓が不気味な程に静かだ。

……多分意味が解っていないだけだ。でなければ占い師はとつくに真つ二つになつてゐるし、俺にも絡んで来てるだろう。

「しかし、その御仁」

「うん？　　なんででしょうか」

今度は俺か。何を言われるんだろう？ ひよつとして、俺の今一番欲しいモノがどこに有るか、教えてくれるんだろうか!? なーんてな。そんな訳が無い。

「貴方が側に居られるなら、道を違える事は無かろう」
「ほう……? ん?」

猛徳と二人して声が重なった。
顔を見合わせて、思わずクスクスと笑う。

「世界の頂点に立った貴方なら、或いは」
「なに!？」
「え?」

この占い師は、俺がモンドグロッソで優勝しブリュンヒルデになった事を知っているのか!?

「何故だ? 何故それを知っている?」
「見えました」
「見えた?」
「お告げでございます」

そう言われてしまったら何にも言えなくなるんだがな……。まっ、いっか。

「貴方、本当にそんな凄い事をしたのね」
「まあな」。最後は気合いってか、命賭けたんだけどな」

はっははは、と笑いながら孟徳に言っただけだ。そうだよ。俺は世界一（笑）だぜ?

「ですが」

「まだ続きがあんのか？」

「大局の示すまま流れに従い、逆らわぬ様にしなされ。
さもなくば、待ち受けるのは身の破滅、ですぞ」

「忠告、感謝する」

俺は頭を下げて礼を言う。

しかし……どういう意味だろうか？ ……言葉通り、か？

元讓は孟徳によく従い、逆らうなと言う意味だ、なんて言っていたが……。

それは違う、気がする。

恐らくだが、この婆さんは歴史を変えてはいけけない、そう言っているのだと思う。

しかし、それは難しい。とても、難しい。何故なら、俺は詳しい歴史を知らない。

何が正しく、何を変えてしまったのか……。

取り合えず言える事は、火薬はやバイって事だ。あれは作らないでおこうん。

占い師の婆さんに別れを告げた後、孟徳は元讓によく我慢したと言ったが、やっぱり意味を解っていなかっただけだった。

そんなんで大丈夫なんだろうか。

……

……

……

湧く。

とは言っても、元讓を筆頭とした武官三人にあつという間に

制圧されるんだが。

苟彘は情報を集めてくれた。連中はどこにでも現れているらしい。

地図はこの時代ではとても貴重らしく、何かを書き込んだりしないらしい。

そして何よりも重要な情報。一団の首領の名前は張角と言うんだと。

しかしそれ以外は不明。名前が解っただけでも収穫だが……。

捕らえた賊は誰一人として話さなかったんだと。

「それ黄巾党じゃね？」

「知っているのか、朝風」

「名前だけなー。 つつても、俺の知ってるのと、ここに今出没してるのと違う可能性も有るし」

「そうね。 葵の言う通りよ」

取り合えずここに居る全員、本来は男だ、と言うのは確かだ。

「明確な根拠の無い情報は判断を鈍らせる」

「そだなー。 余計な先入観は無い方が良い」

「でも敵を呼ぶにも名前は必要だわ。 黄巾党と言う名前、貰っておきましょう」

他に新しい情報は無い。

まずは張角の正体を確め様と言う話になった所で会議室に伝令が駆け込んで来た。

ここから南西の村にまたしても賊が現れた。しかも、またしても黄色い布。

早速派遣する事になったのだが、それに誰よりも早く立候補

したのは仲康だった。

「……季衣。 お前は最近働き過ぎだぞ。 ここしばらく、ろくに休んでおらんだろう」

「だって、春蘭様！　せつかくボク、たくさん助けられる様になったんですよ……！」

こんな調子で仲康は進撃しまくっているのである。
そりや仲康はとにかく盗賊をぶつ殺したいかもしれんが。

「落ち着け仲康。 お前はもっと周りを頼る事を覚えろ」

「兄ちゃん……」

「別に助けないとは言ってない。　だいたいだな、俺は前々から言おうと思ってたんだ」

コイツは始めて会った時から、ただ一人で戦っていた。

「お前、無茶しすぎ。　もっと周りを頼れ。　なあ仲康

よ。　お前は、一人じゃないんだぜ？」

「……」

「葵の言う通りよ。　季衣の無茶で目の前の百の民を救えるかもしれない。　けれどそれは、その先救えるはずの何万と言う名前民を見殺しに繋がる事もある」

それはちよつと言い過ぎかもしれんが、まあそういう事だ。
体が資本なんだ。　それが壊れてしまったら、誰かを助ける事なんてできやしない。

「季衣、お前は休め。　私が代わりにその百の民を救ってやる」

なんて、元讓は男前にそう言った。
しかし、行くのは妙才になった。

「何故だ!? この流れなら私であろう!」
「情報収集も兼ねてるのよ? 貴女に出来るの?」
「ぐっ」

なんて元讓と荀彧のやり取りが合って妙才になったのだ。
そりやそうだ。情報収集、大事。

その場は解散となり、妙才は出陣して行った。

俺は妙才を見送る、なんて事はせず勉強に励む事にした。妙才に限って失敗なんてしないだろうし、そんな事してる暇が有るならさっさと孟徳の役に立てる様にした方が妙才も喜ぶだろう。

そう思って勉強していたんだが、妙才が帰ってきた。
まさかその日の晩に帰って来るとは思わなかったが。

情報収集の結果、張角はあちこちに出没しては歌を歌っていただけ、らしい。

おいおいなんだそりや?

それはあれか? ライブが終わった勢いで、大陸をプレゼントしてー! とか言っちゃったんだろうか?

しかも賊の大軍が集まっているらしい。

都から”今更”賊を潰せとの軍札が届いたとかで、これで大手を振ってぶっ潰せると孟徳が獰猛な笑みを浮かべながら言っていた。

どうやら俺も駆り出されそうだ。それは別に良いんだが、どうせ孟徳の側なんだろう。退屈なのは嫌だわー。

積極的に人を斬りたい訳では無いが、鍛練には丁度良いのだ。悪いけど。

しかしこちらが一步遅かった様だ。

黄巾党が大規模で現れたらしい。しかも物質の搬入の関係で既に兵士は休んでいるとか。

問題はそこだけではない。賊の集団がしかも誰かの思惑で集められたとしたら、今までの様に簡単にはいかない。

指揮官が居ると言う事になるからだ。

仲康が先発隊として進撃。まさかの妙才が補佐役に付けられた。

なんでも連日無茶をさせているから、指揮官を任せたく無いとか。

……素直に心配だから、とは言えんのかコイツ。

「なにか？」

「なんも言ってねえじゃねえか」

それはともかく、荀彧が後発部隊の再編成を。

元讓は明日の朝に届く筈の荷物を取りに行った。なんと非常時でなければ孟徳に、おい馬鹿止めろと言う所だ。

う我儘。

それは良いんだが、俺は何にも言われなかった。

「なあ猛徳。俺なんもしんくて良いの？」

「ええ。良いわ。私も少し寝ておくわ」

「だな。俺も寝よう」

「ふふっ……。なんなら、私の寢所にくる？」

「あん？ お前ってレズ、えっと、同性愛の人じゃないの？」

俺はさぞ怪訝な顔をしている事だろう。

「私は美少女を愛でたいだけよ」
「あっそう」

クスクスと笑っている猛徳に冷たく言い放って、自室に戻る
事にした。

適当に受け流さないと、時たま孟徳は面倒だから……。
まあ良いやさつさと寝よ。

第7話 切り札 一枚目

元讓が大声を上げながら馬を走らせる。

徹夜なのに元気なのか、徹夜したから元気なのか……。

まあどっちでも良いんだが。

しかも自分だけでも先に行きたいとか言う始末。

「ダメよ。 目と鼻の先ならともかく、今の距離で隊を分けても効果は薄いわ」

と孟徳に言われている。そりやそうだ。まだ遠いぞ流石に。むー、と元讓が唸っていると、妙才から報告が来た。

どうやら敵と接触したみたいだが、張角らしき存在は見えないとか何とか。

しかし組織化されており、そこらの賊よりか手強い、との事。そして姉に向けて、余力を残しておいて欲しい、とも。すっかり見抜かれている。流石は妹である。

「数は？」

「夜間の為詳細は不明。 先遣隊よりは明らかに多い為、うかつに攻撃はせず防衛に徹するとの事です」

「そう。 流石秋蘭。 賢明な判断ね」

「孟徳もこう言ってるんだ。 諦めろ元讓」

「むう……。 仕方ない」

「張角本人が指揮を執っているかとも期待したけど……。やはり別の指揮者がいるのね」

だとしたら張角は中々のカリスマを持っている事になるな。F a t e っぽく言うと、カリスマB位。Bでもかなり高いんだけど。

「曹操様！　曹操様はいらっしゃいますか!？」
「どうした!」

先遣隊の一人が報告しにくる。

どうやら仲康の先遣隊が敵軍と接触した様だ。

しかし数と勢いに押されて不利になっているらしい。

街に籠って防御に徹しているが、戦況は芳しくなく至急援軍を、との事。

「妙才が先読みしたか……!」

「仰る通りです!　ですが、自分が出された段階で、彼我の

戦力差は甚大で……!」

おいおい。大丈夫なのかそれ……。

なんとか持つてくれよ。

「総員、全速前進!　追いつけない者は措いていく

「申し上げます!!」

孟徳が指示を出し終える前に、もう一人先遣隊の報告が来た。

……なんだ、あの悲壮なまでの表情は。

「なんだ!?!」

「敵軍に押され、街の防柵は残りも僅かで……」

『っ!?!』

「……。それも妙才が先読みしたのか?」

「……。はい。自分が出された時には……」

どういう事だ?　最初の報告から、今の報告はそれほど時

間差は無い。

まさか、それほど迄に戦力差が有るのか？

幾ら統率が取られて、指揮者が優秀でも、たかが賊に押し込まれるか？

確かに指揮者は優秀かも知れない。だが、それはあくまで其処らに居る者にしては”と言う前提が有る。

妙才は歴戦の勇士で、仲康も武将として参戦している。

確かに数の不利は有るだろう。しかし防柵なんてモノも有るのに、押し込まれる……か？

「どう考える、孟徳」

「不味いわね……ただ急ぐだけでは……」

……ここ、か？ ここなんだろうか？

早くも、選択の時、なんだろうか？

それにしては……やけに早いな。

「選べ、孟徳」

「え……？」

「どうやら選択の時は来たようだぞ？」

「朝風……？」

俺と孟徳の会話の意味が解っていない荀彧。

何故元讓が疑問符を浮かべているのかはこの際置いておく。

「選べ、孟徳。 街を、仲康を、そして……妙才を見捨てる

か」

「朝風、貴様何を言っている!？」

「黙りなさい春蘭」

「華琳様っ!？」

孟徳が気迫を込めて元讓を止める。

そして、目線で俺に先を促した。

「或いは……この段階で、切り札を場に出すか」

「切り札……？　なんの話しをしているのよ」

「……」

「さあ、どうする？　言った筈だ。俺は命令を拒まな

い」

孟徳は一瞬だけ逡巡したが、直ぐに俺の目を見詰めて、

「間に合うの？」

「お前何言ってるの？」

思わずキョトンとして孟徳に問い掛ける。

本当に素でそう思ってしまった。

「そんなおっせえ訳ないじゃん。直ぐ着くよ」

「そう……。じゃあ命令するわよ」

「ああ」

「村に先行して、秋蘭達を援護しなさい。私達が着くま

で持ちこたえる事。出来るわね？」

「華琳様っ!？」

無謀。そう言える孟徳の命令に、元讓と荀彧は思わず振り返り声を荒げる。

「敵を足止めするのは良いんだがな孟徳」

「何かしら？」

「別に、全て倒してしまっても……構わんのだろう？」

ニヤリと笑いかけ、紅茶流の死亡フラグをぶっ立ててやる。これ位やつても全然大丈夫なのである。

「……。ふふつ。ええ、やってしまいなさい!」

「華琳様、朝風も!! 一体、何がどうなって……!!?」

孟徳は一瞬キョトンとして、直ぐ様寧猛な笑みを浮かべた。
アタフタしている苟彘を無視して、馬を降りる。
適当にそこら辺に居る兵士に馬を任せた。

本隊から外れ、隊列から少しだけ距離を取る。

本当に久し振りだ。……いやまあ向こうではちよいちよい移動に使ってはいたが。

イメージする。常に最強の自分、では無く星を。

半秒も経たずに星閃を纏う。ボケてる暇無かった。

「何、アレ……」

「鎧、なのかしら?」

「朝風……なのか?」

「ちよつくら、行ってくるわ」

一瞬で空に舞い上がり、強化された視力で本隊の先頭のその先を見る。

一つの街に人が群がり、煙をあちこちから上げていた。

アレか……!!

気が付いたら加速していた。

「いでえ?」

気が付いたら減速していた。

「そーだよな。何時も痛くねえのはブレインが上手い具

合に掛かる力を流してくれてたからだ」

再び加速する。痛く無いギリギリの速度を覚える。
でも更に加速する。痛い。でも加速する。超痛い。
我慢出来るギリギリの範囲を覚える。

「超いてえ。でもまあ、到着つと」

「何者だ!?!」

「なんや空から降りて来たで!?!」

瞳と頬に傷が入った女の子は敵意を剥き出しにし、隣にはこの前の関西弁の女の子が居た。

「来たぞ妙才、仲康」

「まさか、朝風か!?!」

「兄ちゃん!?!」

「おうよ。ちよつと、敵蹴散らしてくるわ」

『……は……?』

挨拶だけして再び空高く飛ぶ。

街の防柵を突破して部隊と交戦してる所が一つ。

そして防柵を突破しようとしている所が一つ。

……。交戦している所は一先ず任せよう。

ならば、防柵を突破しそうな所を守るべきだ……!

二挺のサブマシンガンを呼び出し、空から鉛弾をばらまいて

やる。

あつという間に地獄絵図の完成だ。

「なんだありやあ!?!」

「うぎゃー!?!」

隊列はバラバラになり逃げ惑う黄布党。

追撃をしようと取り出す武器は、レイジングハート。

「デイバイイイイン……バスタアアアアア!!」

桃色の光線が黄巾党を飲み込む。

お仕置き完了だ。今度は交戦してる部隊を助けないとな。
加速する。助きたいから。だから、

「行くぞおおらー!」

ベルゼルガーを呼び出し鉛弾を吐き出しながら、横槍を入れる。

先頭から半分位後ろを襲撃し部隊を寸断する。

前は任せるが、多少は負担を軽減させてやるとするか。

着地して再びサブマシンガンを両手に持ち、回転しながら射撃する。

口径はさほど大きくは無いが、それでも一発当たれば先頭不能になる。

「なんなんだ!?!」

「いでえ、いでえ!?!」

サブマシンガンを格納し、槍を取り出す。

周囲は敵だらけだし、丁度良い。自分では中々勘を取り戻せたとは思ってみよう。

「なんだか良く解らないが、敵は一人だ!! 囲んで殺せ!!」

やはり指揮官が居る。張角のカリスマはやはり大したモノ

だ。

取り合えず指揮官から潰すのが基本だよな。

黄巾党が一斉に突撃してくる。しかしそれよりも早く俺は集団の懷に潜り込み、突きをお見舞してやった。

第一陣が吹き飛ぶ。一息で突けた回数はおよそ30。あの時の半分程だが、まあそもそも俺の地力はこんな物だ。

「なっ!？」

「真っ正面から砕いてやる!!」

突撃し指揮官に狙いを定める。頭を潰すのは定石だ。

「ひっ、ひiiiiii!？」

情けない悲鳴を上げている指揮官の頸を飛ばして、部隊が崩壊したのはそれから五分後の事だった。

……

……

…

黄巾党を文字通り蹴散らして、星閃を解除した所で妙才が駆け付けてくれた。

「遠目から見ていたが、凄まじかったな」

「え？ 見てたの？」

なんて言うと、弓使いは目が命だと言って何時も通り微笑んでくれた。やはり妙才はクールビューティーだ。

馬をもう一頭連れている訳では無かったのですが、どうするつもりなんだろうと思っていると後ろに乗れと言ってくれた。

「二人乗りなんて大丈夫なんか？」

「心配はいらん」

「ん。　なら遠慮なく」

妙才の後ろに乗って街に戻ると、既に本隊が到着していた。道すがら妙才に話を聞くと、大梁義勇軍と自称する娘達を手助けしてくれたおかげで防ぎきれたそうだ。

「そうだったのか」

「うむ。　彼女等が居なければ危なかったな」

なんて話をしてしていると、妙才が馬を降りた。孟徳が見えたからだ。

俺も倅い、一足先に声をかけた。

「ミッションコンプリートだ」

「みつしよ、なに？」

「……。　任務成功。　これより帰還する」

「もう帰還しているでしょう……」

リトバスつぽく言ってみたが、当然孟徳は理解出来ず、スネークを真似したら呆れられた。

やはりボケはもうちよつと考えなければならぬ様だ。

「葵、自己紹介して」

「は？　誰に？」

「彼女等よ」

孟徳が示す先には、先程妙才の近くに居た娘達だった。

全部で三人。さっきは見当たらなかった、明るい茶髪のポ

ニーテールの少女。

「なんだ、部下にしたのか」

「ええ。だから自己紹介しなさい」

「朝風葵だ。　　適当によろしく」

「適当ではダメよ」

「あん？」

思わず孟徳の方を見る。コイツ何言ってるの？

「一先ずは貴方がこの娘達を指揮して」

「……え？」

また無茶苦茶言うなこの金髪クルクルは。一体何を言ってるんでせうか。

「嫌だけど」

『何故です!?!』

三人に異口同音にそう言われた。孟徳はそれを解っていたのか、

「別にずっと面倒を見ると言っている訳では無いわ」

「えー……」

「なあボクちん。　　なんであの人、曹操様にあんな口きい

てんの。　　命令も拒否しとるし」

「兄ちゃんは特別だから」

指揮って面倒なんだよなー。しかもこんな人数だし。そもそも義勇軍だし、俺の言う事素直に聞くな……？

「やだなー。　　面倒だなー。　　だから勘弁しろ下さい」

「アンタ華琳様になんて口を利いてのよ!?!」

「なんだ。居たのか荀彧」
「ふんっ」

鼻を鳴らして、孟徳に報告をしていく。
「どうやら周囲の警戒、追撃部隊の出撃、住民への配給を終らせた様だ。」

「御苦労様、桂花。で、何の話だったかしら」

「朝風の話です！ こんな偏屈に華琳様の貴重な部下を預けるなどと……！」

「誰が偏屈だ。へそ曲がりのつむじ曲がりが。お前」

の方がよっぽど気難しいでは無いか」

「うっさい!!」

キーツ、と荀彧は目を剥いて俺に怒鳴り散らす。

猫みたいだ。フード被ってるんだけど。コイツその内フカーとか言うんじゃないだろうか。

「とにかく嫌です孟徳さん」

「何故そんなに拒むのかしら」

「面倒だから」

『……』

皆して呆れた様な視線を向けてくる。
「だいたい指揮とか言われても困る……。」

「解った、解ったよ。今回は引き受けて上げるんだから

ね！」

「なによそれ……」

「孟徳の真似」

なんて言ったら無言で腹パンされた。痛い。

……
……
……

軍義が開かれた。それは良いんだが、結局俺は三人から自己紹介されて無い。誰なの？

とか思っ普通にな名前を聞いた。

褐色で銀髪のパニテ、頬と目に傷が有るのが楽進。

紫髪を適当に括って、関西弁なのが李典。

明るい茶髪のパニテ、眼鏡をかけているのが于禁。

服もそうなんだが、なんで眼鏡あんだよおかしいだろ。しかもレンズ薄型だし。

……時代考察はまた今度にするとして、今は軍義だ。

三人は新参だから、一度状況を纏める。

于禁は食料配給に回っているんで、俺が後から簡潔に説明してやるとする。

俺は既に理解しているので、適当に聞き流す。

ここからは進展していく。

孟徳が言うには悪い段階に入っているんだと。

ただ馬鹿騒ぎしているものが、盗賊団やそれなりの指導者と結び組織として機能しつつ有るだ。

これはもう面倒臭い。策とか使って来たら更に面倒臭い。

この手の馬鹿共を黙らせるのには、頭を潰せば良いのだが、如何せん場所が掴めない。

元が旅芸人だからか余計に解らないと来た。

まあ旅芸人だからこそあちこちを転々としているのだろうが。

ここまで軍義を進めた所で、于禁が割り込んで来た。どうやら配給していた食料が足りなくなってきたらしい。行軍用の食料を配って良いかと言っているのだ。

「桂花、食料の余裕は？」

「数日分は有りますが、義勇軍が入った影響も有りますしここで使い切ってしまうと……」

あの一件から、荀彧は食料に対して慎重になっていた。良い事である。

「とは言え、ここを出し渋れば騒ぎになりかねないわね」

「三日分程分けてやったらどうだ？」

「……。そうね。それで行きましょう」

「三日分ですね。わかりましたなのー」

于禁は変な言葉使いをしながらパタパタと走り去って行った。

まあ町娘っぽいし、仕方無いのかな？ 教育的な意味で。

孟徳は荀彧に食料の補充を手配させる様に指示する。
……。

「あつ」

「なによ」

荀彧がジロリと俺を睨みつける。まだあつ、しか言って無いんだけど？

まあ良い。折角思い付いたんだから、言うだけ言ってみよう。

「補給線を辿ればいけるんじゃない？」

「……その手が有ったわね」

「隊長、凄いです」

「……」

何時の間にか隊長になつとる。

そして楽進の声にやたら聞き覚えが有る。どこだったろうか……？

「なあ楽進。 お前もうちいだけ、高い声出せる？」

「？ えつと……？」

「なんや隊長。 もうはい風到手え出しとんかいな？」

李典がニヤニヤしながらそんな事を言つて来た。

コイツ、何言つてんの？

「俺は楽進の声が（好きな声優に似てて）好きだから、もつと聞きたいと思っただけだ」

「ぶっ!？」

「おー！ 隊長も言うねえ！」

「はつきり言っておくがな、李典」

「んー？ なんや？」

「隊長は止めろ。 このままなし崩し的にお前等の面倒を見る、なんて事になりかねん」

意識してむすつとした表情を作りながら李典にそう言つてやった。

本当に嫌な訳では無いが、疲れる事を自分から増やす必要も無い。

「えー。 なんでえな。 こーんな可愛い女の子が近く

におるんやで!？」

「悪いがお前等レベルなら見慣れている」
「ガーン!？」

美少女レベルで言えば、IS学園もそう変わらない。
俺が関わって来た奴が飛び抜けていただけとも言えるか。
どちらにせよ、可愛い女の子に囲まれて、は特別嬉しいとは思わん。

「貴方達を 一体何を遊んでいるのかしら？」

「おいおい。 別に遊んでる訳じゃねえぞ。 コミュニ

ケーションを取っておかないとだな」

「こみゆ、なに？」

「隊長はたまーに訳解らん事言うな」

やはり片仮名は伝わらない。しかしこれが解っただけでも
収穫は有った。

今度から都合が悪くなったら片仮名を使いにくって誤魔
化してやろう。

例えばアソシエーションとかシナジーとかイメージングと
か(笑)。

「それで、どうした？」

「貴方達にも偵察に行つて貰おうと思つてね」

「そうか。 李典、楽進。 適当に行つてこい」

「隊長……」

「だから隊長言うな。 適当とはネガティブな意味では無
い。 適切に行つてこい」

「貴方はどうするの？」

「ふむ。 実はなISを動かすと、ビタミンB、E、Fが一

気に消費されて疲れるのだ(大嘘)」

「そう……」

胡散臭そうな顔をしているが、確かめる術が無いので一応納得していた。

って言うかビタミンFってなんだよ。本当にあんのそんなの？（笑）

「俺は于禁と交代しておこう。お前等は解んなかったら妙才に指示を仰げ」

結局妙才に丸投げして、街に向かう。
妙才なら何とかしてくれるようん。

街の復興は既に始まっていた。義勇軍が率先して動いているのがやけに印象的だ。

怪しい行動をしている者が居ないが見渡すがそんな者は一人も居なかった。

火事場泥棒では無いが、居ないと言い切る事も出来ない。日本人ならともかくな。

復興しているのを尻目に、瓦礫やら何かよく解らない残骸とかを越えると良い匂いがしてきた。

炊き出しをしているらしい。

于禁が中心となり、以外にも上手い事回していた。

ほー、と思わず感心して見ていると俺に気が付き手を振って来た。

「どうしたの隊長ー」

「ちよいと用が有ってな」

近くに居た兵士さんに後をお願いして、こっちに駆け寄る。
……なんかどんくさそうだな……コイツ。

とは思ったが顔には一切出さず、

「どうしたのー？ ……はっ、まさか!？」

「ん？ なんだ？」

話を切り出そうとしたら、何やら驚いた顔をしている。
え？ なんなの？ 俺まだ何にも言っていないんだけど。

「そのお……口説きに來た、とか？」

「悪いが好みじゃない」

「それはそれで酷いの!？」

「お前が余計な事言うからだ阿呆が。 交代だ」

何を言っているんだコイツ。お気楽なこったなあ。

それとも女子とは例え戦時中であろうとも色恋の話しを肴にするのだろうか？ ……于禁が特別なだけだと信じたい。

余計な事を考えず、先の軍義の内容を説明して偵察に行くように言う。

「……偵察かあ……解つたの」

声や表情から察するに、どうやら納得はしていない様だ。

俺に近い楽進や、適当に生きてそうな李典とは違って于禁は現代人でも通用するくらい”普通の女の子”っぽい。

普通ってなんだよ？ って言われても答えられないが。

「お前はまだ正式に軍に入った訳では無い。 拒否する事も出来るが？」

なんて適当に言ってみる。

そうになったらまああれだ。俺が行けば良い。面倒だけど。

「偵察だったら戦わなくても良いから、別にそれでも良いの」

それは違うと思うが……逃げるにもやむを得ず戦う場合も有るだろうに。

「于禁は穏やかなほうだが、何故軍に入っているんだ？」

「んー……。 風ちゃんと真桜ちゃんが行くって言ったか

ら、私も来たの」

「は？」

「だって風ちゃんは全然オシヤレしようとしないし、真桜ちゃんは発明以外全然だらしないから、私が面倒みてあげないとだめですなの」

「……」

なんだ、そりや。本当にお気楽なんだな。

別に于禁の人生だ。文句は言わないし、言う権利も無いし、筋違いだ。

俺はコイツの友達でも無いし、ましてや恋人でも無い。人生を変えさせる様な言葉は言えない。

友達と居たい。ただそれだけの為に人生を決めるのは……まあ俺が考える事では無いか。

後悔するのは俺じゃない。まあ有り体に言えばどうでも良い。

「そんな理由なら、後方で補給や救護でもしてた方良いんじゃないのか？ まだそっちの方が適正が有ると思うが」

「え？ あー……」

「どうした？」

「それは思いつかなかったの」

「……」

コイツ、やっぱり馬鹿だな。

よくこんなんで武将やれていたな。大丈夫か？　ウチは

かなりー師匠ほどではないがー厳しいんだが……。

「でも風ちゃんも真桜ちゃんもずっと一緒だったから、これ
からもずっと一緒なの！」

「そうか……」

「隊長……？」

「いや何でも無い」

于禁は馬鹿なんじゃない。いや確かに浅慮では有るんだが。
ただ、優しいのだ。

そして優しいからこそ、誰かを守る為に戦うのだ。
とは言え、戦う事だけが守る事になる訳では無いんだがな。
一番大きくて、解りやすいのは解りやすいが。

「それじゃあ偵察に行ってくるの！　隊長はあとの補給の

お仕事、よろしくなのー」

「だから隊長と呼ぶな！」

于禁は手を振りながら慌ただしく去って行った。

本当に隊長は止めてくれないかな……。あの三人に指示
をだす位なら、まあやつてもーやりたくないけどー良い。

しかしなー。部下が居るからなー。あんまり変な事も言え
ん。

「朝風様！　すみません、配給用の糧食が足りなくなつて
しまったのですが」

「ん？　そうか。　適当に持ってくるから、配ってやつ
てくれ。　それと、俺の事は様付けしなくて良い」

「でっ、ですが……それでは何とお呼びすれば……」
「あさつちとか呼んだらぶっ飛ばすが、普通にさんとかで良
い。堅苦しいのは嫌いなんだ」

そう言つて俺は糧食を運び始めたのだつた。

……

……

…

孟徳に進言した通り、三日分だけ運び終えた後、適当にぼ
けーつとしてると、元讓が帰つて来た。

「お帰り。 どうだつたー？」

「だらけているな……」

「良いんだよ。 俺はもう仕事した」

星閃使うとダルくなるんだよなあ、と孟徳に言つた様に言う
と、そうなのか、とあつさり納得してくれた。

流石ば、単純だ。扱いやすく、もとい話しが早くて助かるよ
うん。

元讓の報告によると、ここから半日ほどの行つた所に砦が
あつたそうだ。

しかし物資の移動の準備を始めているらしい。

「ならさつさと潰すか。 うぜえし」

「貴方、身も蓋も無いわね」

「良いんだよ俺軍人じゃねえし。 しかしそうすると予備

の糧食が勿体ないな」

「捨て置くと争いの種になりかねないわ」

「あーそうか。 それが有るか……」

こうなるならさつきのぼけーつとしてた時に配れば良かつ

た。

まあそうするとどつかのへそ曲がりが怒りだすんだが。

「じゃあ俺が残るわ」

「貴方、そんなに仕事をしたくないの？」

「ばっかお前、俺ちよー働いてるって」

「……。まあ良いわ。ならそうしてちようだい」

「ういよー」

おぎなりに返事をする、三人から睨まれたが、何も言われなかった。

どうやら星閃の活躍に圧倒された様だ（ゲス顔）。

直ぐ様陣を撤収し、街から出て行つた。

妙才と于禁は現地合流させるんだと。そっちの方が早いのか。

さてと……どうやって楽して運ぶかな……？

いや自分で運ぶって考えるのがまず間違いなのか？

まあ配るだけだし。公平にやれば問題無いだろう。

「おい。これ全部配るから、持っていくぞ」

「全部、ですか？」

「おう。本隊は賊を潰したら帰るだけだから、邪魔なんだから。だつたら配ってやれって事」

「成る程……」

「人集めてこい。面倒だから一気に持っていくぞ」

「はっ!!」

……
……
……

糧食を配り終えて、適当に慰安していたら迎えに来た。

どうやら半日程の行軍を早足で済ませ、瞬く間に制圧した様だ。大したモンだよ。

取り立てて急いで片付ける案件も無い筈だが、帰って直ぐ休める様にするためだと思うが軍義をしていた。

本拠が無いからしばらくは補給線を潰しながら小規模な討伐と情報収集を行うんだと。

今までと特に何か変わるわけじゃないけど、尻尾が掴めたのがデカイか。

「ああ、そうだ。旗を一番高いところに飾ると言う話しだけど、結局誰だったの？」

「あー……。なんや忘れと思うたらそれか！」

「は？ なんの話した？」

妙才が耳打ちしてくれた。

何で砦が再び使われ無い様にするため、旗をそこら中に立ててここは曹操さんのモノですよー、とアピールしたんだと。

「んで、誰が一番高く飾れるか競争したと？」

「うむ。そう言う事だ」

「お前等……」

「あら。たまには良いでは無いの」

「まあ孟徳が良いって言うんだったら良いんだが……」

俺から視線を外し皆を見渡すが、誰一人として挙手する者は居なかった。

え？ 何審判役誰も居なかったの？ それ泥沼になるからヤバイって。

「なに？ まさか誰も見ていないの？」

「恐らく季衣かと」

「えー？　ボクですか？」

「どこに挿したの？」

「えっと……城の真ん中にある一番おっきい建物の屋根です
けど……」

「なんだ、飛んだのか？」

「兄ちゃんじゃないんだから、無理だよー」

ハハハッと笑いながら、登ったんだよーと言っていた。

そうか。ジャンプで余裕でした（どや顔）ではなかったか。
良かった。

「ならその勝負は季衣の勝ちね。　何か欲しいものは有る
？」

「うーん……特には無い、ですけど……」

「欲の無い娘ね。　何でも良いのよ？」

うーんと頭を悩ませる仲康。

別に服も食い物いららないんだと。本当に無欲だねえ……。

「あつ！」

「なんで思い付いたか？」

うん！　と向日葵が咲いた様な笑顔を浮かべ、元気よく返
事をしてくれたのだった。

第8話 呆気ない幕切れ

今朝早くに元讓、仲康、文謙（樂進の字だ）が討伐に出掛け、今さつき帰って来たので報告を皆で聞いているのだが、孫策つてのと協力して黄巾党を潰して来たんだと。

「……呆れた。それで、孫策に借りを作ったまま帰って

来たと言うの？」

「ふふっ」

思わず吹き出してしまったら、孟徳に凄い睨まれてしまった。

仕方ないじゃないか。元讓にそんな器用な事を期待する方が間違っているのだ。

「れっ、連中の領に逃げ込んだ盗賊の退治は手伝ったのですから、差し引きで帳尻は……」

「合わないよ」

そりゃーまあ、人様の領土に入り込んだ賊を潰したんだから、確かにそれっぽい気はするかもしれん。

しかしそれは違うだろう。そもそも元讓が逃がさなければ良かっただけの話だし、更に言えば土足で踏み込んでる。

なんか要求されなかっただけでも御の字と見るべきだ。……いやもしかしてこれ結構借りデカインじゃないの？

「それが……私達が仕掛けた瞬間にももの凄い勢いで逃げられてしまつて……。今思えば、あれも連中の策だったのではと」

「おい元讓。苦し紛れに言ってるんじゃないだろうな？」

「そんな事するか！　そうだろ、季衣!？」

俺の言弾を受けて否定し、慌てて仲康に話しを振った。……
ちよつと、余計に怪しいんだけど……。

「ええつと……。それまでは都の軍を攻撃してたんです
けど、ボクと春蘭様が攻撃を仕掛けたら、ばーって撤退していつて
……」

「ふむふむ……。そこそこ頭が回るのが居たのか。

でも壊滅させたんだろ？」

「それは間違いないよ！」

「そうか。 えらいな仲康」

ポンポンと頭を撫でてやる。ふにやってなる。可愛い。

こんな幼い子まで戦わないといけないなんて……。嫌な世
の中だよ。本当に。

「そこは幸いだったわね。 それから、春蘭。 その孫

策という人物、どんな人物だった？ 確か江東の虎、孫堅の娘よね」

江東の虎？ 何それかつこいい。あつ、孫策が虎じゃなく
てその……おかん、だろうか？ たぶんおかんだよな。どうせ。

「はい。 風格といい、雰囲気といい、気配といい……袁術
の食客と名乗っておりましたが、とてもその様には見えませんでした
た」

「おいおい……えらくフワッフワツしてんな……。 しか
も全部同じだし」

「うっ、うるさい！」

自分でもそれを解っているのか、顔を赤くして反論はする
が、何時もみたいに大声じゃなかった。

照れてる。なにこの娘。可愛いんだけど。

「難しい言葉を無理に使う必要は無いわ。 武人の貴女としては、どう見たの？」

「檻に閉じ込められた獣の様な瞳でしたね。 あれはただの食客で収まる様な人間では無いでしょう」

最初からそう言えば良いのにな。なんであんな変な言い回しにしようとしたんだか……。

獣の様な、ね？ 母が虎なら娘も同じってか……。恐ろしいな孫家。

「それと、もう一人」

「あら。 何かしら？」

「朝風の様な真っ白い服を着ていた者が居りました」
「なに……？」

思わず反応してしまった。

俺と同じ様な、真っ白い服？ この服は化学合成繊維だ。元讓が同じ様なモノと言っているんだ。やはり観察眼は素晴らしいモノが有る。まあ本人にその気は無いだろうけど。一種の野性だな。

「これとデザイン、あーっと全く同じモノだったか？」

「いや色だけだ」

「男？ 女？」

「うん？ 男だったか……」

性別を聞いた理由？ 特に無いようん。ただ知り合いで無いのは、確定したと言っても良いと思う。

教授の可能性も無いことも無いが、流石に違うだろう。そう

信じたい。敵になるとか嫌過ぎる。

「見た感じどんなだった？ どうせ喋って無いんだろ」

「うむ。 孫策の部下が引き連れて来たからな。 朝風

よりも更にひよろつとしてたぞ」

「ねえ俺そんなひよろい？」

「別に私はそうは思わないわよ」

思わず孟徳に聞いちゃったよ。 そんなにひよろいかな……

？

孟徳が否定してくれなかったら皆に聞いて回る所だったよ

うん。

「ひよろそう、 だけなの？」

「むー……。 後はそうだな……。これは勘だが、 何となく

人が良さそうな気がしたな」

「ふーん……」

知り合いの可能性は消えた。 男のツレに人が良い白好きなんていない。

アレを思い出しそうになるが、デザインが多少でも違う以上アレでは無いし。

その男が知ってれば良いんだがな……。 帰る方法を。 望み薄だと思うけど。 多分1mm無い。

「どうでも良さそうなやつ奴だな。 なあ荀彧？」

「なんでアタシに振るのよ！」

単純な嫌がらせだ。

一応言っておくけど俺もかなり荀彧から嫌がらせされてる。 くっだらな事だから無視してつけど。

しかし数が重なるとまー……鬱陶しいですよ？

「コミュニケーションをしっかりと取らないと（ここから大嘘）、アメリカに行けないしインドに勝てないぞ。身内でシナジーしてハンドアドをばんばん取っていかないとだな」

「解った、解ったわよ!!」

俺の嘘にどこが理解出来る所が有ったのか聞きたい位だ。アメリカなんて行けないし、インドとはそもそも戦わない。

シナジーはともかく、ハンドアドなんて遊戯王いやカードゲームの話しなだけで。

やっぱり片仮名連発の誤魔化し作戦は有効だ。

名軍師の苟彘が話し会いを中断するんだから。

これからもこの作戦は使っていこう。いざと言う時の秘策（笑）として。

「ちよつと葵。私の桂花をイジメないでちょうだい」

「イジメてねーし。弄ってるんだよ。孟徳だつてよ

くやるだろ?」

「それなら良いけど」

「華琳様っ!」

今日の軍義は笑って絞める事が出来た。

毎回毎回こんな軍義なら、良いんだけどな……。

……

……

…

ひよろいひよろいと言われて、イラッと来ない程俺は人間が出来ていない。

今や勘を完全に取り戻すのにそう掛からないだろう、と言う所まで来ている。

普段ならとつくに戻ってる筈なんだが、どこかしつくり来ない。最近は勉強する為に籠ってたからなー。文字の読み書きはようやく修得出来た。

古文なんぞ知ったことかー!! と中学の時にぶん投げたのが完全にあだとなり、そのツケを今払っている。

IS学園? そんなもん有る訳ねえじゃん。語学は日本語だけだつて。

勘を取り戻す為にそろそろ元讓に模擬戦を挑んでも良いんだが、今はそうゆう訳にもいかない。

あのクソ黄色共のせいで、そんな余裕は無い。温存しておくと怒られてしまう。

なので今日も一人で素振りである。……いや素突き?

師匠は特に何も言わなかったし素振りで良いか。

体を徹底的にイジメ抜いて(とは言ってもあんまりやり過ぎるとトラウマがよぎるんだが)、一息吐いていると軍義を開いているから出席せよとの伝令を受けた。

今日は俺が出る様な案件は無かった筈んだけどなー、とか思いながらも玉座へ向かう。

だからこそ全力で槍使ってたんだし。

ISを動かすにはSEが必要不可欠だが、武器だけを取り出し振るうのは問題無い。

じゃなかったら孟徳に槍を作ってもらわにやらん。

だがしかし玉座に着いた頃には殆んど終わってしまったていた。

「千載一遇の好機だわ! 皆、決戦よ!」

「はっ!!」

孟徳の号令に文謙が勢いよく答えた。

どうやら今回は文謙がお手柄らしい。何やったんだろう？

「ちよつと遅かったか」

「隊長？　今終わったばかりですが……」

「ちよつとアンタ！　そんな格好で華琳様の前に出るんじゃないわよ!!」

さつきまで全力で体を動かしていた為、当然汗だくだし泥まみれだ。

まあ普通に汗臭い。レンちゃんなんかは、くさーい！　なんて良いながらも抱き付いてくるんだが。

しかし慌てて駆け付けたのにこの言い種はあんまりである。

「あーはいはい。　んでどしたん」

「……。　まあ良いわ。　張角の居場所が解ったから、

出るわよ」

「おーおー。　ようやく決戦か……準備が整いしだい出陣

か？」

「ええ。　貴方も準備なさい」

泥塗れになっている俺を一瞥して解散を命じた。

なんと言う冷たさ。まあ暖かくされても不気味なんだが。

取り合えず風呂に入って、準備を始めるか……。

………

……

…

敵の総数は約二十万。これが黄巾党の本隊だが、ともに戦えるのなんざ1／10程だろう。

神出鬼没だったが、増えすぎてただの的になっている。

孟徳の狙いはこれだったのだ。

そして本陣に火を放ったのだった。火の手があつという間

に回る。

混乱しているのが、ここからでも解る。まあ目は良い方だからな。

そつと隣を見ると孟徳が元讓を弄って遊んでいた。楽しそうに言葉責めしていた。何をしてるんだか。

「華琳様。そろそろこちらもう動こうと思うのですが、号令をいただけますか？」

「あら、もう？　もう少し春蘭で遊んでいたかったのだけれど……秋蘭達、張り切り過ぎではない？」

「それでも無い。誰に指示を仰げば良いのか、誰に指示すれば良いのか、ぐちゃぐちゃだからな」

「急がなければ、張三姉妹がこちらではなく身内に殺されかねません」

それは無いと思う。話を聞くに三姉妹の歌を聞いて集まっている様なのだ。

追いつめられた所で、最後まで守り抜くだろう。例えなんの見返りも無くても、だ。

まあ言わないけど。さつさと終わらせたいし。

孟徳が号令を掛ける。

こう言うなんか厨二っぽいのが苦手。あの手の口上を皆の前で声を張り上げるのって恥ずかしくないの？

進軍を開始する。さあ……踏み潰そうでは無いか。

なんの罪も無い民を食い荒らす、あの黄色い虫を。

「で、なんで俺ここに居るの」

「あら。何か不満？」

「戦いたいなーと。そろそろ勘も戻ってきたし、な」

「……」

「逆に聞きたいんだが、何故そうも近くに置きたがる？」

「ばっ！　べっ、別にそんなじゃないわよ!!」

「……ふむ……そうか。俺の気のせい、か」

「そっ、そうよ。　貴方の気のせい」

顔が真っ赤だな、気のせいと言う事にしておくか。鎌を向けられたら嫌だし。孟徳を弄るのはまた今度にしておこう。

……

……

…

あつという間に撃滅させ、黄巾党は散々になって逃げていった。

既に追撃隊も出していた。

なんと言うか、全然大した事なかった。そりやまあ兵士じゃなくて盗賊だから雑魚なんだが。

んで、文謙が捕まえて来た

誰を？　張三姉妹を、だ。

見た所多少奇抜な服装だがーこの時代の話しでだがーそこに居そうな姉ちゃん達だ。

普通の旅芸人っぽい。仲康の歌っている所を見た事あるんだと。マジか。

取り合えず動機を聞いてみた。

「……色々有ったのよ……」

紫髪で眼鏡をかけている少女、張梁ー真名を人和（れんほー）と言うーがやけに疲れた顔と声でそう言った。

どうやら相当苦労して来たらしい。

「色々ねえ……？　では、その色々とやらを話してみなさい」

「話したら斬るんでしょう!?　私達に討伐の命令が下ってるの知ってるんだから!」

「いや斬るんだつたらとつくにやってるだろ。　首だけ持って帰らせれば良いんだから」

『あつ……』

「ちよつと葵。　余計な事言わないで。　それと誤解しているみたいだけれど、貴女達の正体を知っているのは恐らく私達だけだわ」

「……へ……?」

ここ最近孟徳の領から出てい行かなかったーいや行けなかったが正確かーから張角の名前こそ知れ渡っているが、その正体は依然として不明のままなのだ。

探索や国境の警備が厳しくなっていて、出るに出れなかったと思うが。

そしてこれが一番大きいのだが、

「誰を尋問しても、張三姉妹の正体を口にはしなかったわ。
大した人気じゃない」

そうなのだ。結局誰一人として口を割らなかった。
しかも騒ぎに便乗した盗賊なんかは、そもそも張角の正体を知らない。捕まった時に逃れる為にデタラメな証言をしていた。
そしてそれらを掛け合わせた張角の想像図が……。

「えー!?　お姉ちゃんこんな怪物じゃないよー!!」

桃色のブロンドで黄色い大きなリボンをしている少女。彼女こそが張角だ。

そしてその絵なんだが、3 mくらいの身長に髭もじゃで、何故か腕がカイリキーの倍有るし、足も奇数の5本。そして鬼の様な角まで生えててなんだかよく解らない尻尾まで有る。

完全にモンスターだ。ポケットに入れていたくないレベルの。

「いや、いくら名前に角があるからって角は無いでしょ、角は……」

「クツクツクツ……いつ、良いじゃ……ないか……！
かつこよ、くて……」

やばいはらいたい。

「むーっ！　笑わないでよー！」

この張角の間の抜けた声。どつかで聞いた事あるような……無いような……？
まあいいか。

「……葵」

「ぶつ、ククク。　解った解った。　悪かったって」

孟徳に睨まれたから、大人しくしておく。あーおもろ……。どうするのかなーって思ってた黙ってた見てたら勧誘し始めた。まあそんな事は前から匂わせてはいたが……。

別に配下に加えるんじゃないくて、歌で兵士を集めたり慰安したりが目的みたいだが。

「えーっと、結局私達は助かる、って事で良いのかなあ……？」

「ああ。　その解釈で良い」

「そっか。良かったあ……お姉ちゃん、安心」

「今度こそ、あの太平何とかなんて本が無くても大陸一番を獲ってみせるわよ!」

……ん? 今重要な事言わなかった?

俺張角の声を聞くのに必死だった。聞き覚え有るんだけどな……どこで聞いたっけ?

統京都知事のお孫さんだったかな……。いや桃太郎の子孫って可能性も……。一年中桜が咲いてる島で記憶力抜群の演劇部の部長だったかな……。

いや、空中都市の聖女様だ!

「ははー! ありがたやー」

「え? え?」

「貴方何やってるの」

孟徳が冷たい声を出しているので、顔を上げる。
どうやら冗談が通じてないらしい。

「冗談だ。それより張宝、今なんて言った?」

張宝は水色の髪で、一番元気が良い娘だ。まあ空気が読めない、とも言うんだが。

捕まってるのに孟徳に食ってかかるのは賢いとは言えないな。何か考えが有るならともかく。

「え? えつと……」

「太平何とかって」

「太平要術?」

「あなた達、それをどうしたの!」

俺達の会話に孟徳が割り込んできた。
やはりそうか。危うく聞き逃す所だった。

「んー。 応援してくれてる、って人から貰ったんだけどお、逃げてくる時に置いて来たの」
「そう……」

って事は既に灰になってる筈だ。
まあ俺の探し物じゃないから、良いと言えば良い。

「もう一度あの陣に火を。 誰かに悪用されては、また今日のような事態になりかねないわ」
「承知いたしました」

妙才が指示を受けてすっ飛んで行った。ちよつと位休ませて上げてもらってねえの？

「それよりも聞きたい事がある。 さつきお前等、大変用心の書を使ってた、みたいに言ってたけど」
「あつ、朝風っ!!」
「クツクツクツ……」

元讓が顔を真っ赤に怒鳴り散らす。
俺はちゃーんと覚えてるよ? (笑)
話を聞く限り、ライブみたいなのを開いていたらしい。
しかしこの時代に遠くまで、綺麗に音を届ける技術は当然無い。
い。ならばどうしていたのか?

「えつと……太平要術の書に、書いてあったのお」

何でも太平要術の書を一番最初に開いた時に、声を遠くまで

飛ばす道具の作り方のページを偶々開いたらしい。

そしてそれを実践したら、人気が出てきた、と言う事だ。

「なるほどな……」

……そんな事が、有り得るだろうか？

太平要術の書。要は妖に置き換えられているとしたら？

世界が世界だ。フィクションの様な魔導書が無いとは言えない。

ならば、太平要術の書の真の特徴は……、

本を捲った者の、望んだモノが手に入るのでは無からうか？
つまり……つまり……

この世界から抜け出せるのでは、無いだろうか？

「葵」

「ん……。 もう火い放ったんだろ？ 別に探しになん

て行かねえからさ」

「そう……なら良いけれど」

どうやら余計な心配をさせてしまったらしい。

俺の知ってる魔導書なら、燃やす位じゃ意味無いけどこれ以上孟徳に心労かけるのは筋違いだろう。

魔導書と言えばイン何とかさんとか、デモオンベインだ。アレと同じレベルなら流石にヤバイけど、それならこの三人が未だに正気で居られる訳が無い。

俺の思い違いだろう。……多分。

「じゃあ帰るか」

「そうね。 撤収するわ」

帰る手段の一つが無くなった、かもしれないのは残念だが所詮は可能性の話し。

もしかしたら帰れたかもしれない。

もしかしたらそんな事無理なのかもしれない。

たれば考えていても仕方が無い。

「あーあー……帰れたのかもしれないのになー……」

「……」

しかしそう考えていたとしても、やはりそう簡単に割り切れるモノでは無い。

俺だって心細いのだ。

確かに頼れる人は居る。

しかしここには師匠は居ないし、ブレインも空腹で寝たきり。

何とか誤魔化してはいるが……。

「やっぱり、帰りたい?」

「ん? んー……そりや、まあ……なあ?」

「はつきり言ってちょうだい」

隣を歩く孟徳の顔を思わず凝視する。

不安そうな、怒っている様な、照れている様な……何だかよく解らない表情をしていた。

ここで、そんな事無い! と断言する事も出来る。

でもそれは、なんの意味も無い事で……。

「当然だな。 俺はこの地に骨を埋めるつもりは無い」

「そう……やっぱり、そうよね」

俺はいつか、必ず帰還する。

それがいつになるかは解らない。しかし諦める事だけはしたくない。

「とは言え、しばらくはお世話になる事だろう。 ようや

く書物が読める様になったんだ。

これからは片っ端からそれっぽい読んでいくから、そのつもりでな」

「……」

「なんだよ?」

「クスッ……なんでも無いわ」

孟徳は俺を見て、しばらくクスクスと笑っていた。
なんだかなー……。まあ良いんだけどね。

第9話 飛將軍

兵士と將の慰安を込めて、宴会をやろうと言う話しになっていた。

義勇軍の三人と仲康、それに何故か俺。いやまあ別に良いんだけどね……書物読みたいんだけどねうん……。

で、宴会の用意をしようしたら、お客さんが居た。

荷物も解いてないのに集合である。取り合えず俺はお客さんを睨んでおいた。

「すまん。皆疲れとるのに集めたりして。すぐ済

ますから、堪忍してな。……せやから、そっちの兄さんもそう睨

まんといてえな」

「……」

紫っぽい髪で、後ろで結んでいる。

そして何故か上着を羽織って、胸にサラシを巻いていた。

……意味が解らんのだが。

そしてまた関西弁である。ひよつとして世界にも関西弁が有るんだろうか？　なんて馬鹿な事を思わず考えてしまった。

「貴女が何進（かしん）將軍の名代？」

表情が、私不機嫌です、と言っている孟徳が話しかける。

威圧するんじゃないやねえです。……他人の事言えんが。

「や、ウチやない。ウチは名代の副官や」

「なんだ。將軍が直々にというのではないのか」

「あいつが外に出る訳ないやろ。クソ十常侍の牽制で忙しいんやから」

吐き捨てるように言う副官。

コイツ……無茶苦茶言うな。上司じゃないのん？ まあ
どうでも良いんだけど。

「呂布様のおなりですぞー！」

なんかちっこいのが出てきて、急に声を張り上げた。

しかし、呂布？ あの呂布？ 宝具防御しても上から削
られ殺される、あの呂布？

「ひいいい!？」

「どっ、どうしたの?」

「ちよっ、ちよっとな!」

一周目の初見だったから貫かれてしまった。赤セイバーの
復活を掛けてなかったら負けてた。アレは流石にびびったようん。

現れたのは、あのゴツイのではなく赤い髪で浅黒い肌をした
可愛い女の子だった。

しかし油断する事なかれ。あの呂布である。ゴッド・フォー
スブちこんで来るかもしれん。

俺一人だけ戦々恐々としていると、

「曹操殿、こちらへ」

「はっ」

「……………」

呂布は無言。なに、無言系なの？

いや、もしかしたら狂
化してるから喋れないんじゃないか……!! ……ねえよ。

ちつこいのが黙りこくっている呂布の代わりに、孟徳に言葉を告げている。

と言う事は、アレが陳宮だろうか？　ただのロリにしか見えなんだが……。

しかしそれよりも俺は、呂布を観察していた。

……強いな……。

俺が槍とライフルを使つての狙撃の次に自信が有るものがある。

それは観察眼だ。何故か？

そうでもない人と人外共に付いていけないからだ。これは当然師匠も含む。

”あの呂布”は武人であつて、武人では無い。

獲物は恐らく長物。力任せに振るい、野性的な勘で攻撃を防ぐタイプだ。

そして気を纏う事で、一撃一撃が必殺になっている。

”壁”を越えている、人外の一角だ。

観察し続けていると、不意に呂布と目が合った。

互に見つめ合う。それは長かったのか？　或いは一秒にも満たなかったのかは解らない。

気が付いたら呂布は目を反らし、広間から出て行った。

そして何故か周囲から、ただ一人を覗いて視線が集まっている。

孟徳がすげー不機嫌になっていた。

えっと……なんで？　って言うかその視線は何？　も

しかしてあの孟徳に話しかけろっていうの？　本気？

『……………』

「……………」

マジか。何で俺なんだ……。いやまあ、対策も練らないといけないんだが……。

「孟徳」

「話しかけないでっ!!」

ヒステリックに叫んでくれた。耳キーンなるわ。
表情が怖いの一言では足りないレベル。

「悪いけれど、今何か話し掛けられたら、このまま斬り殺してしまいたいよ……少し黙っていて」

一体何言われたんだよコイツ……。

まあ大方、張角の顔なんで獲って来なかったんだ馬鹿タレが、とでも言われたんだろう。

んで、今日の功績で昇進させて上げるよー？　嬉しい？
ねえ嬉しい？　って言われたに違いない。

しかし泥舟で昇進してもなー。何の価値もねーよって言う
ね。

「そうか。　とても重要な案件なんだが……ふむ。　な

らば後日にするか」

「……」

孟徳の額に解りやすい#が浮かんでいる。

「貴方、私を怒らせたいのかしら？」

「それだけ重要だと言う事だ」

「……。　どういう事？」

「耳を貸せ」

孟徳に近付いてゴニョゴニョする。

唐突だが、俺はアクション系の物が好きだ。

それはアニメでも映画でも同じ事だ。

なのはの次にFateが好きだ。EXTRAもプレイした。CCCもやった。AUOにクソ笑った、では無く。

その時に呂布の事を、適当では有るが少し調べた。マトリクスの意味では無い。ブレーンに資料を用意させたのだ。

「俺の未来知識だ。夏侯姉妹はもとかく、他に聞かれるのはマズイ」

「……」

「呂布に関する事だ。どうする？ 明日にするか？」

別に急ぎでは無いが……」

「いいえ、聞かせてちょうだい」

俺は頷き、妙才だけを手招きする。姉はいらないよねうん。話しがややこしくなる。

「ちよつとアンタ！ 華琳様から離れなさいよ!？」

「控えなさい桂花」

「華琳様……?」

さっきまでのヒステリックに叫んでいた孟徳は既に居ない。居るのは未来を聡明に見ようとする、稀代の英雄だ。

「どうする葵。桂花に巻き込んでおく?」

「それは……。好きにしろ。そこまでは口を出さん

よ」

それは孟徳が、どこまで奴さんの事を信用し、信頼しているかによる。

とは言え荀彧も聡明だ。そして孟徳に心酔している。ならば孟徳の不利になる様な事は口が裂けても言うまい。

「なら秋蘭、桂花。二人は着いてらっしゃい。話し

があるわ」

「宴会には参加出来そうにない。俺抜きで楽しんでこ

い」

宴会組みに言付けて、俺と孟徳は広間を後にした。

四人がゾロゾロと歩いているが、誰一人として口を開く者は居ない。

俺は考えを纏めるに忙しく、孟徳はプレッシャーを撒き散らし、妙才は俺を観察して、荀彧は何やら恨み言を孟徳に聞こえない様に言っている。

俺にはちやーんと聞こえていますの事よ？

しばし無言で歩き、目的地に到着した。

「入りなさい」

「お邪魔します」

そう言っただけに入内……。領主の私室とは思えない程に簡素で質素だった。

節約を心掛ける孟徳らしい、と言えらばいい。しかしよく見ると、その調度品の一つ一つは、高価な者である事が伺える。

無駄が無い、とはこの事か。

「さてと……まず荀彧に説明するのと、妙才はおさらいをし

ておくとするか」

「はあ？」

「荀彧も見た筈だ。俺のあーつと……未知の鎧を」

「……」

取り合えず俺がどういう経緯でここに居るのか。

そしてI Sとは何なのか？ 俺の正体とは？

説明出来る範囲だが、説明しておいた。

「それ本気？ アンタが未来人？」

「未来人、とは言ったがそれも怪しくなってきたよ」

「あら？ どういう事かしら？」

「ん……。それについては考えが纏まったら話すとしてよ
今は呂布についてだ」

そこについてはまだ考えが纏まっていないうし、考察と情報
収集が必要不可欠。

今までは文字が解らなかったり、黄巾党が暴れてたりしてい
た為に、儘ならなかったが今は違う。

「その前に、呂布の評判はどうなんだ？」

「うむ。それは私から話すでしょう」

天下無敵の飛將軍。何故その様に呼ばれる様になったのか
？

そのエピソードが妙才の口から話された。

何でも黄巾党の軍勢約三万を討伐して見せたとか。
そこから飛將軍、なんて呼ばれているらしい。

「それって一隊でつて事？」

「いやそうでは無い。文字通り、一人で、だ」

「……ちよつと秋蘭。 アンタ、私を馬鹿にしてるの？」

荀彧がそんな事有る訳無いじゃない、と嘆息しながら言う。
いや、別にそんなでも無いんだが……。まあ軍師からしたら
認める訳にはいかないわな。

戦術が戦略に勝てるなんて、馬鹿げてる。そんな事有って良
い筈が無い。

「認めたく無いのは解らんでも無いが、事実だぞ桂花」

「……」

「頭の堅い荀彧は置いといてだな」

「なんですって？ ならアンタは納得出来るって言うの
!？」

「こんな話を聞いた事が有る。 六人を同時に相手に出
来る者は、体力の続く限り、例え相手が万であろうと撃破する事は可
能なのだ」と

「……………」

荀彧は目を見開いて俺を見詰めている。

うんこれ位で驚かれてもな……。似た様な事出来るの周り
に一杯いたし。驚愕も新鮮さもクソも無い。

「その呂布だがな、断言は出来んが、近い内に戦うぞ」

「何故そう思うの？」

「あの赤いのがそうだとは言わんが、俺の知っている呂布の
本質が裏切りだからだ。 主君を悉く裏切り、放浪する」

だからこそ呂布はバーサーカーとして召喚された、と言って
過言では無い。

女の為に主を裏切り、自己の利益の為に世話になった者を裏

切る。

呂布は無闇にかき回したのだ。少なくとも俺はそう解釈した。

「でも、欲しいわね。　その才」

「裏切られるかもしれないのか？」

「貴方も言ったじゃない。　彼女は違いかもしれないわ」

「そりやそうだが……」

「秋蘭。　もし生け捕りにしようとも思ったらどれ位の損害になるかしら？」

「……。　私と姉者。　それと季衣と朝風の四人は居なくなると思っていたきたい」

恐らく星閃抜き of 戦力として数えているのだろう。

正しい判断だ。しかし妙才は俺の戦いをしっかりと見てない筈だが……。

「と思うだろ？　所がそうじゃないんだ」

「……。何？」

「確かに強い。　だが、手が届かない程じゃない」

そう言ってニヤリと笑いかける。

確かに強いが、丸きつり取っ掛かりが無い、と言う訳では無い。

「俺は壁を越えた武人を何人か知ってるが、それぞれが武の極地に居た。　そんな人間を観察していたから解る」

「呂布は確かに壁を越えてはいるが、勝てない相手じゃない」

「策を用いれば捕獲も可能かもしれない」

「なっ!？」

「どういう事かしら?」

俺は赤い呂布の強さを説明してやった。

あの呂布の強みは、多種多様の武を変幻自在に操る所謂武芸の極み、では無いのだ。

アレは野性的な勘を持ってして矛を振るうタイプ。強いのは強いが、そこから矯正しない限りそれ以上の強さは望めないのだ。少なくとも、戦いの中で強くなるタイプでは無い。

「そしてこれが一番重要なんだが、恐らく呂布は自分以上の使い手に、出会った事が無い筈だ」

「それは……そうだろうな。 呂布以上の使い手など聞いた事が無い」

「と言う事はだ。 戦闘経験が絶対的に不足している、と言う事になる」

「なんでそうなるのよ? だって三万を倒してるんでしょ?」

荀彧が不思議そうな顔をして俺に問い掛けてくる。そうしてる分は可愛い娘なんだがな……。

声もなんだかゆずソフトでよく聞く感じだし。

「緊張感の無い戦闘なんぞ、何の価値も無い。 遊びみたいなもんさね」

「……。 そういうモノなの?」

「うむ。 朝風の言う通りだ」

「そしてそこが弱点になる。 強者と殺し合いの経験があるか無いか。 そこで差が埋まる」

当然の事ながら、一対一で戦ったらまず勝てない。

そう。勝てなくて良いのだ。策を弄して捕獲するのが目的なのだから。

「だからな、捕獲するのであれば、一任してくれるんだったら出来ない事も無いぞ？」

『……』

三人ともそれぞれが別の意味で沈黙している。

一人は本当に出来るのか吟味していて、

一人はそんな経験が有る事に驚愕していて、

一人は胡散臭そうな瞳で見ている。

あえて誰が誰と言わないが……まあ、解るよな？

「仲間にするか斬るかは、直接話してみて判断するのも良いかもしれんな」

「そうね……そうさせて貰いましょうか」

「アンタ、本当に大丈夫なの？ 三万と戦える相手なのよ

？ 見栄張ってるんじゃないでしょうね」

「俺は格上との戦いに慣れてる。 しかも呂布より強い相

手だぞ。 勝てる気はしないが、負ける気もしない」

いや、明確に敗北する時は有る。

それは俺の体力切れだ。体力には自信が有る。

呂布が三万を相手に出来たのは氣が使えたからに他なら無い。体力を補っていると考えるのが自然だろう。

「短期決戦で考えれば、決して分が悪い賭けじゃない」

「……。 解ったわ。 呂布の事は葵に任せる。 負

けたら承知しないから」

「大丈夫だ。 負けたらそれまで。 お前と顔を会わせ

る事も無い」

「それはダメ!!」

『え』

冗談っぽく、負けⅡ死と言ったら、もの凄い勢いで拒否された。

えつと……え？

「あつ……。 とつ、とにかく！ 生きて帰ってくるこ

と！ 勝手に死んだら、許さないんだから……!!」

「おつ、おう……。 任せろ……」

顔を真つ赤にしてそっぽを向いた孟徳。

なんだろう……。 本物のツンデレを見た気がする。

「何時までここに居るの！ 葵は早く出なさい!!」

「えつ ちよつ、押すなよ!」

部屋から閉め出され、勢い良くドアを閉められた。

なつ、なんだかなー……。

嘆息しながら部屋に戻った。

今日は草案を作って、明日は曼成（李典の字）と会議する事にしよう。

どんな策にするか……それが問題だ。

……

……

：

「秋蘭、春蘭を呼んでちょうだい。 四人でゆっくりお酒

でも飲みましょう」

「はつ。 直ぐに呼んで参ります」

嬉しそうに顔を緩ませて秋蘭が部屋から出て行った。
最近の私はどうかしている。

何故か葵の前で、冷静でいられない時が有る。

さつきもそうだ。あれはあの子なりの冗談。それを何故か
本気で受け取ってしまつて……。

「ふう……」

「お疲れ様です華琳様」

「ありがとう桂花」

本当に、らしくないと思う。

今だって桂花の前で溜め息なんて吐いて……何時もなら有
り得ない事だ。

「お待たせしました華琳様」

本当に直ぐに秋蘭が春蘭を伴つて戻つて来た。

少し息が上がっているところを見るに、どうやら走つて来た
様だ。思わず苦笑してしまつた。

取り合えず杯を持つて、一杯を飲み干す。

そして改めて三人に聞いてみた。

葵の事を、その……どう思っているかを。

今夜は長くなりそうだった。

平日の昼間にブラブラと散歩をする。

おー。素晴らしきかなニート生活。もうずっとこのままがいーな……。でもそうすると帰れなくなるそれは嫌だ。

この世界から脱するには、もうテーマで何とかするしかねえんだ。

やはり、と言うかなんと言うか。

この世界は、過去では無い。

何故そう思う様になったのか？ それは、

「どきやがれ!!」

「待てえ!! 止まれ!!」

「うん？ んだあありや」

身形の悪い男がこっちに、つてか俺に向かってくる。

「死にたく無かったら、どきやが

「それはこっちの台詞だ」

ちよつとだけ体をずらし、擦れ違い様にボテイに一発入れて

やる。

この時ちよつとだけ、拳を捻るのがポイントだ。

「うごあ!？」

「ほいこれ」

「ありがとうございます、朝風様」

「だから俺に様はいらないとだな……」

思わず苦笑いしながらそう言った。

もう言うだけ無駄の様な気もするが、ちゃんとやつかない
と。

なーんか俺が警備隊のなんか上の人になってるっぽいし。何
で？ 俺なんもしてないの事よ？ いやまあ、孟徳と妙才と猫耳
の四人で知恵を出した事はあるけども。

それもこれも、実際警備を任せられてるあの三人娘のせいだ
ろう。

今も隊長呼ばわりだしな。

「あら葵。 貴方、こんな所で何をしているの？」

「あん？」

声を掛けられたので振り返ったら孟徳が居た。
珍しく一人だ。どうしたんだろうか。

「なんだ一人か。 付き人はどうしたんだ」

「皆仕事よ。 それで、貴方は何をしているの？」

「え？ いやただの散歩だけど」

それを聞いて、目が凍っていく。

どうやら俺は選択肢を間違えたらしい。らしいが、今日は別
に仕事なんて無かった。ふつつうに休みである。

……まあ魏に居る人間の誰よりも休んでいるのは確かだが。
ちゃんと情報収集の名目は有るのよ？

「じゃあ、暇なのね？」

「そんな訳ねーだろ何言ってんだお前」

そう。俺は散歩で忙しいのだ。

最近散歩が趣味になりつつあるんだよねー。なんかこう、街

を見るのが楽しくなってきたって言うか。

考えを纏めるには、ブラブラ歩くのは結構良いもんだ。

……。あれ？ さっき何を考えてたんだっけ？

「暇なのよね」

「だからあ」

そこまで言って孟徳の顔を見ると、青筋を立てて俺を睨んでいた。

クイクイツと顔を動かしている。こっち来いのジエスチャーだ。

殆どの奴は孟徳に従うだろう。だが、俺は違う。

「今忙しいから後にしろ。 んじやな」

「散歩、しているのよね？」

「そーだよ？ だから何？」

「暇なんじゃない」

「そんな事あ無いでありんすよ。 ってか仮に暇だとし

て、一体何の用よ？」

話しがちつとも進まない事に気付いたので、取り敢えず話題を振ってみる事にした。何の用なのか聞いてみないと始まらないし。

「ちよつと買い物に行くのだけれど、付いてきてくれるかしら」

「さいなら」

「待ちなさい」

クルリと背を向けて歩き続けろ出すが、手を握られた。割り
と強い力で。

別に痛くない。コイツ手なんでこんなにスベスベなの？

とも思ったりもしない。嘘ちよつとだけ思った。

「やだよ。 女の買い物は長いって昔から決まってるんだから！」

「良いじゃないの、たまには付き合ってくれても」

買い物自体が嫌いな訳じゃない。

ただグチグチ悩んで、結局買わない、つてのが気に食わないのだ。

俺は凰との買い物でそれを学習したのだ。

「良いから離せ馬鹿！ そんな事に付き合う位なら鍛練でもしてた方がまだマシだ！」

「なっ！ そんな言い方しなくたって良いでしょう!？」

「あーうん。 確かに言い過ぎだな。 でも撤回しない

！
だつて面倒だから!!」

「この……!!」

あーだこーだとやっている、段々視線が集まってくる。

俺はともかく、孟徳はこの国のトップだから仕方無い。

そして何故か俺に非難がましい視線が向けられる。あの曹操を袖にしているからだろうな。

短く嘆息し、孟徳に向き直る。

「解ったよ。 付き合えば良いんだな」

「そうよ。 最初から素直にそう言いなさいな」

「はいはい。 エスコートさせていただきますよ姫様」

「えすこ、何？」

「儀礼的な護衛なんかの事を言うんだ」

ホレと腕を出す、孟徳はキョトンとしてる。何この娘可愛

い。

俺の腕を掴んで先導するのがエスコートだと説明すると、ちよつとだけ顔が赤い。

「そつ、それは良いけれど、姫と呼ぶのは止めなさい」

「あー、それはエスコートする側は皆に言うリップサービス、お世辞だよ」

「……それはそれで、腹が立つわね」

腕をぎゅつと握って、ムスツとしている。

拗ねる顔も可愛い。なにこの娘。

普段が普段だからか、こう言う表情がやたらと可愛いく見える。これがギャップ萌えなんだろうか？

「んで、どこに行くんだ？」

「そうね……どこに何が有るのかは、解っているの？」

「んー……そうな、大体はな」

「そう。それじゃ……」

孟徳に口から告げられた場所は、それはもう……男の俺からすれば魔窟も良い所だ。

しかしニコニコ笑顔の孟徳を放って逃げ出す訳にもいかず、渋々案内してやったのだった。

「結構品揃え良いわね」

「いやそんな事言われても知らんが」

案内させられたのは、服屋だ。

メインは下着だ。そして品揃え良い、とか言われても知らん。

何故俺がこんな所を知っているのか？

知らない店だからって何でもかんでも店に突撃するモンじゃないな本当に。

取り敢えず一旦別行動。孟徳は無数に有る中から選ぶらしい。

俺は普段着を見るとする。俺が着る訳じゃないが。と言うか俺に女装は似合わないと思う。

クロメートルじゃあるまいし、女装してクソ強くなる兄貴も居ないしな。

だいたい、レースはともかくフリルは比較的新しいモノだ。どう見たってそれっぽいのが有る。いや憶測だけどねうん。ジロジロみたって仕方無い。贈り物を買う訳でも無し。ってか買う金は無。給金が無い代わりに休みが多いのだ俺は。金貰っても仕方無いしな。

「一応言っておくけれど、ここに有るのは全部女物よ?」
「見れば解る。俺の目が節穴に見えるのか」

振り替えると、孟徳が訝しげな目を向けている。
そんな事言われ無くても解ってますの事よ?

「もう決まったのか? 意外なまでに速かったな」
「ここから絞りこんでいくのよ」
「は? じゃあ何で俺んどこに来たの」
「何を言っているの。 貴方を選んで貰おうと思って
いるに決まっているじゃない」

何を当たり前の事を言っているの? と言わんばかりに見てくる。

俺が選ぶのかよ。手に持ってるのは、ちゃんとメインの下

着。

って言うかブラジャーあんのね。って言うか、ブラジャーいるのね、何て言おうモノなら直ぐ様鎌が飛んで来るだろう。いや、今持って無いけどね？

孟徳が手に持っているのは、ブラジャーだ。

いやそれは良い。もう諦めた。

水色の生地モノと、桃色のモノ。後黒の大人っぽい奴。

それらの全てが、現代の日本に有ったモノに酷似してる。

と言うか男から見れば、違いなんてあるのん？　　と言ってしまふレベル。

レースがあしらわれたフリフリの可愛い奴。

「どれが良いかしら？」

「その三つで悩んでるって事で良いんだな？」

「ええ。　　そうよ」

取り敢えず三つとも当てて貰った。

もう諦めて付き合う他あるまい。嫌だけど。嫌嫌だけど。

別にヒスの意味じゃないけど（笑）。

似合う、似合わないで言えば、恐らくそんなモノは無い。どれも等しく着こなすだろう。

それが美少女と言うモノだ。あくまでレースやら何やらは、美少女を光輝かせる素材に過ぎないのだ。

まあ個人的な感想で言うなら、ピンクも良いとは思いますが白とか無かったん？

黒も良いとは思いますが、紫とかだと更に色気が増す様な気がする。

水色な。うん、良いと思うよ？　　ただ……うん。　　まあ

好きにすれば良いんじゃないかな。

なんて事は一切口にはせずに、鏡に写っている孟徳の表情を観察する。

悩んでいる、なんて言う時は大抵決まってるモンなんだ。後押しして欲しい時とかな。

「どうかしら?」

「んー……」

ちよつと位変化が有るかと思っただけど……コイツ、ぜつ、全ッ然変わらねえ……!」

マジかコイツ。すげえな。滅多に無いぞこんなの。

全部平等に欲しいけど、節制を心掛けているから一着だけ買うんだろう。

内心を想像すると、多分こんな感じ。

「一着だけ買うんだよな」

「ええそうよ」

「とすると、黒だな」

「あら、意外な」

「なんで? どれも欲しいんだったら、俺の好きな色を選ばせて貰っただけの事よ?」

「好きな、黒?」

適当に相槌を打つといた。

何でか知らんが、俺のイメージカラーが青なんだよ。

いやまあ青閃、なんて機体乗ってたし、名前も葵だし。別に良いんだけどね? ただ押し付けるのは如何なモンかと言いたいだけだね。

なんで黒が好きなのか? そんなの簡単な理由だ。

服が汚れても目立たないだら黒って。それがメイン。
まあ後付けするなら、フェイトさんのカラーだから、とかな。
だから黄色も好きですハイ。

下着だけ買って、荷物を然り気無く渡して来る。

まあ俺も何も考えず受け取るんだけど。レンちゃんと買い物行くと荷物持ちは俺の仕事。

……まあ女性陣全員なだけだな。

筋トレ、とか言って。ハイって従うんだけど。

最近？　最近はそう言うの無い。お部屋までお運びさせていただきます！　がデフォだ。

まあその後で、個人的にサインを求められるんだが。

「お茶でもしましょうか？」

「ん？　あー……悪いが、飲食店は詳しくない」

「あら、そうなの？」

「そりやあな。金無いし、飯屋には入らんだろ」

「……それもそうね」

とか言って一人で悩みだした。どうした？　そんな変な

事言って無いだろ？

「それじゃ普段のご飯はどうしているの？」

「厨房に有る食材を適当に使って自炊」

毎日中華は流石に飽きる。

まあ和食が作れる訳では無いが、それっぽい何かは出来る訳で。
かと言ってイタリアンやフレンチが出来る訳では無いんだ

が。
最近チーズ食いたくてヤバイ。作れない事はないんだが、止

めておく。現代は殺菌の設備が有るからいけるが、牛、山羊、羊の乳は飲まない方が良い思ってるから。

何が当たるか解ったモンじゃない。

「料理出来るのね。知らなかったわ」

なんて言っただけ目を向けてくる。

いやそんな目で見られても困るんだが……。

「だって聞かれ無かったし？　お前、俺がそんなお喋りに見えるんか？」

「それはそうだけれど……特技位言っておいてくれないと困るわ。他にも何が有るのは隠して無いでしょうね？」

「いや別に特技じゃねえし、隠してもいいからね？」

別段特技と言えるレベルでは無い。だから言っただけだ。

そんな事言い出したら特技なんと沢山有るよマジで。

「男性が自炊している、と言う点でもう特技でしょうに」

なんて嘆息しながら言う。いやー……そんなでも無いって。

「それじゃあ折角だから、お昼をご馳走してくれるかしら」

「いや、は？　折角って、別に繋がってませんよねそれ」

「そんな事はどうでも良いのよ。作るの？　作らない

の？」

またしても威圧してくる。

んー。まあこの程度なら、まだ余裕かなー。師匠が俺をどんな風に鍛えるか考えている時レベル。

Q, つまり? A, 日常茶飯時

まーアレだなん。孟徳が出せる威圧感は何々がレーヴェエの殺る気モード位なモンだよ。出せてもな。

師匠レベルじゃないから、全然余裕ですハイ。

「まあ良いけど。 作るけど文句言うなよ。 黙って食え。それが条件だ」

「貴方は料理人では無いのだから、そこまでは求めていないわよ」

「そう? なら良いけど」

この時曹孟徳は知るよしも無かった。
この後彼女の舌が唸りを上げる事を。

「なんてな」

「え? 何か言った?」

「いや、何でもねえよ。 オラ、行くぞ」

「ちよつ、待ちなさい!」

たまには、こんな日も良いかもしれない。

I M 2 時代考察

前はなんかよく解らんゴロツキに邪魔されたので、自室にて考察を行う事にする。

まあそんな大したモノでも無いんだが。

取り合えず、この時代に有るのがおかしいモノから考えていこうと思う。

今まで俺が見てきた、不自然なモノ。

- ・人形を頭に乗せる少女
- ・丸い薄型の眼鏡
- ・髪の色が不自然なレベルでカラフル。青髪なんて本当に居るのねん

- ・猫耳型のフード
- ・製造方法が不明な鉄球
- ・木製の歯車。何で木製にしたし

そしてここからが重要なんだ。

・武将だけでなく、ここに生きている全員に真名、と言うモノが有り、文化として根付いている

・法則性はランダムだが、武将が女性になっている

おかしい。って言うか武将女体化って。マジで言ってるの？
頭おかしいんじゃないの？ 大丈夫？

とは言うものの、不自然では有るがそこまでおかしくは無い。

そもそも正確性に欠ける情報なのだから、武将Ⅱ男って言う考えが間違っている”可能性”も有る。

文献が間違っているのかもしれない。

絵が後世の誰かが手直したのかもしれない。

そんなかもを考えていったら、別に変では無いのだ。

真名はごく一部を除いて、秘匿するのが当たり前なんだから、その文化がどつかで途切れた、とか。

少なくとも、眼鏡よりかはよっぽどマシである。

この”世界”に来てから、二番目に会った少女の三人組。

最初は丸眼鏡なんてとくに疑問を抱かなかったが、明らかにおかしいんだから。

そんな技術力が有る訳が無い。

しかしこう考えたらどうか？

この時代は、過去に有った”かも”しれない、別の世界なのだと。

つまり。つまりだ。

どういう訳か俺は、一つ隣の世界に来てしまい、この戦乱の世で曹操と出会ったのだ。

ここが平行世界ならば、幾つか説明の付く事が有る。

例えばレース。

例えばフード。

例えば歯車。

日常生活でフツと関く事は無いだろうか？

それは、並行世界の自分が思い付いた事が、この世界の自分

に流れ込んで来るのだ、なんて言う説を聞いた事が有る。

初めてこれを聞いた時鼻で笑ったが、これならばこの時代に不釣り合いなモノが有るのも解る。

時代を先取りし過ぎて、周囲が付いていけて無いのだ。

そして薄型の眼鏡や、鉄球。

これはゼロ魔にも有ったのだが、別の世界から物資が流失している。

これならば、技術的な意味で言ったら可能だ。

アイディアだけ有っても、技術がなければ生成できないのだから、当然である。

とは言つてもゼロ魔はフィクション。

これが現代の日本で起きているかと云われれば否、だろう。

実は政府が隠蔽しているゝとか言い出したらキリが無いから、その可能性は無視する。

しかし、それ等有った可能性が有るモノが確かに現存するのだ。

それは何か？

オーパーツ、と呼ばれるモノだ。

原則的にそれは現代の技術では解析出来ない。

つまり、それがこの世界で言う所の眼鏡や鉄球になる、訳なのだが……。

「それがなーんで身近の誰かが都合良く持っていて、しかも何の疑問も感じていないのか、と言う説明にはならない」

うん。詰まった。まあ良いんだけどね。

要約するとだな。

- ・よく解らん事が解った
- ・何でも良いが、別の世界っぽい

と言う事が伝わればそれで良い。うん。

だから、つまり、結局。

何が言いたいのかと言うと？

ここは過去では無く、異世界。

と言う事は歴史を知っていようがいまいが関係無く、同じ様に刻が流れるとは、限らない。

「まあ俺歴史あんまり覚えて無いから、関係無いっちゃあ関係無いんだけどな」

つてか必ずしも同じ様にする必要も無い。

過去も未来も変えられない。

でも現在（いま）は変えられる。

つて最弱にして不屈のマスターが言ってた。

はくのんマジイケメン。流石はイケタマの持ち主である。

「んー……これは俺の中だけで止めといった方がよい？

それとも報告するべき？」

どちらにしても、魔法レベルの難易度には変わらないのだ

が。

片や未来跳躍。

片や平行世界移動。

宝石爺はともかく、時間跳躍の魔法なんて有ったっけ？

まあ、どうでも良いんだが。

とにかく、どちらも尋常では無いのは確かだ。

でも。それでも。

「俺には、諦める、なんて選択肢は無い訳で……」

足掻き続けなくてはならない。

月の勝者でも無いのに、超不屈でなければならぬし、不屈の心はこの胸になればならない。

しんどい。夜空では無いが、心がポツキーである。

「取り合えず、方向性が解ったんだし、良しとするか」

今やるべき事。それは何か？

多分それは、

「宝石、買ってこねえと」

宝石魔術を極める事だと、俺は思う。

修練場で一人で雲をボーツと観察している。

待ち人は未だ訪れず、ただ時間を持て余していた。

「すみません隊長！　遅れてしまつて……！」

「おー。　　ようやく来たか……まあ遅れるのは良いんだけどさ、隊長って呼ぶのだけは、そろそろ止めてくんない？　　いや、

マジで」

雲から視線を戻すと、走って来たのか肩で息をしている文謙（楽進の字）が居た。

今日は警備の巡回が終わったら手合わせをしよう、とお願いしていたのだ。

「でつ、ですが……では何とお呼びすれば良いのですか？」

「んー？　　名前で呼んでくれて良いよ別に？」

「そつ、それは無理です!？」

俺が手をヒラヒラ、と振つてどうでも良さそうに言つと、と言うか事実どうでも良いんだが。

顔を真っ赤にして、首と手をブンブン振る。

どうやら照れているらしい。なんで？

「じゃあ朝風さん、とか」

「それなら、何とか……」

文謙達とは、そんなに歳は変わらない。それなのにここまで遠慮したり、やたらと下手に出るのは多分孟徳が関係しているからだと思う。

盟友的なノリだし。一応。

う。
そこでどうしても、そんな感じの反応になってしまいうのだろ

「さてと。　じゃあ早速模擬戦と行くか」

「はい！　　お願いします！」

ガシャンと籠手を装備して構えを取る。

お願いしたのは俺なんだが……まあ良いか。

右手を左の頬に寄せて、そのまま何かを掴み引き抜く。

AUOがエアを抜く感じね。解りやすく言うと。

アミコのギル強かったあ……。バビロン連発で完封したのは良い思い出。

外道神父はお帰り下さい。

文謙は緊張しているのか、俺が槍を抜くと拳をぎゅつと堅く握った。

「それがたいちよ、じゃなくて……あつ、朝風、さんの得物ですか」

「言いにくいなら良いよ隊長で……」

思わずげんなりしながら許可した。

もう少し慣れて来たら矯正していくとしよう。

と言うか文謙だけに言っっちゃダメな気がする。後の二人にも言わないと。

「すつ、すいません隊長……」

「あーはいはい。　　良いから良いら」

今度はショボンとして俯いてしまった。

ああもう面倒クセエな!!　　と思っただが口にはしなかった。

じゃないと文謙のライフがゼロになる。

さて仕切り直して始めるか、と言おうとした所で。

「凧ちゃん、走るの速すぎなのー……」

「そないに走らんでも、ええやろ」

後の二人も来た。多分文謙が俺の所に言ってくる、とか言ってたから二人も付いて行く、とでも言っただんじゃ無かろうか。

「真桜、沙和……どうしたんだ二人共」

「どうしたやあらへんって。 凧が隊長に会いに行くって

言うからやなあ……」

「デートじゃないのお?」

馬鹿だった。予想以上に。何故そうも色っぽい話しに持つて行くのか。理解出来ない。ってかデートって言葉は知ってるのねん。

それとも俺は、そんなに恋多き男に見えるんだろか?

ただそうやって騒ぎたいだけ?

或いは逆で、そう見えないから結び付けたいのか。何にしろ当事者である俺からすれば邪魔臭い事この上無い。

「これから模擬戦だ。 お前等二人は邪魔だからあっち行つてろ」

シッシツ、と虫か何かを追い払うイメージで手を振る。とにかく邪魔なのだ。

いやまあ、乱入とかはしてこないと思ってるけどさ。

二人はいけずー、とかブーブー言っているが、俺がギロリと睨み付けるとそそくさと退った。最初からそうしろ馬鹿者め。

「あの、隊長……あんまりあの二人をいじめるのは……」

「だったらお前から言っておけ。何でもかんでも色恋に結び付けるなって」

「それは無理です」

即答された。速かった。スゲー速かった。

え？　なんで？　と言う前に答えを言われた。

「何度も私が止める様に言ってるのですが、一時だけでまた直ぐ始めますから」

「……」

どうやら生粋の馬鹿らしい。

ならもう言うのは止めよう。時間の無駄だ。

それはどつかの誰かに、敵を見たら突っ込む癖を直せ！
と言うのと同じ位の徒労なのだから。

「ハア……。

まあ良い。

始めるか」

「はいっ！」

槍を持ち悠然とした様子を見せながら、文謙を観察している。
く。

少しずつ踏み込み、間合いを把握している。プレッシャーを感じているのか、額に汗が浮かんできている。

攻め倦ねているのだろう。全く踏み込んでこない。

少しだけ待ってみる。……やはり踏み込んでこない。

「どうした？　来ないのか？」

「……っ」

「ふむ……ではこちらから行くぞ」

「っ!？」

大きく踏み込み槍がギリギリ届く範囲から打ち込んでいく。
ただし、手加減しながら。

「ぐっ、ずっ!？」

「槍の最大の強みは、相手の間合いに入らずに殴れる所だぞ。
こっちから適正距離に踏み込めば、それはそっちの不利になるに
決まってるだろう」

手加減、とは言ったが一撃一撃の重さは一緒だ。
ただ一息に突く回数を1／4程にしただけ。

「ふっ!!」

俺の攻撃に堪らず大きくバックステップする文謙。
この程度の攻撃を捌け無いのに、咄嗟のバックステップにし
ては大きく距離を稼いだ。
どういう事だ？

「あの風ちゃんを押されっぱなしなの」
「凄いなあ隊長……。」 華琳様にデカイ口叩くだけの事は
有るわあ」

聞こえてるってえの。

別に孟徳は上司じゃないから良いってだけの話だからね
？

「それじゃあ、これならどうです!!」

「うん？」

「ハアアアアアアア!!」

む。
ゴンのじやじゃん拳みたいに、右拳を引き左の掌で包み込

む。
なんだ？ この距離で構えて気合い入れて……なんのつもりだ？

「ハアア!!」

拳を突き出すと、何か出た。

……気弾か？ ……おせえけど。

その場で半身になって躲す。遠距離攻撃のクセにおっそい。多分80km位。俺から見れば、何トロトロしてるの？ つて思わず言っちゃうレベル。

「なっ!？」

「嘘やろ!？」

「隊長凄いのお!!」

「……。 お前等……」

取り合えず文句でも言おうと思ったが、今は模擬戦中。反省会は後で良い。

今はさっさと終わらせる事を考えるべきだなうん。

なのでさっきよりも速く大きく、懐に潜り込んでやる。

「はい終わり」

「……へ……?」

そして喉元に槍を突き付けてやる。

少しでも動けば、槍が刺さる所で止める。

『……』

「つたく……」

ガシガシガシガシ、と思わず頭をかきむしってしまう。
文謙は強い。ただし”そこらの武将より”と頭に付くが。
だが伸び代が無い訳じゃない。寧ろ有る。羨ましい位に。

「反省会するぞ。取り合えず座れ」

「え？ え？」

俺が座り込むと文謙も座る。訳も解らず混乱しながら。
さて……何から話すべきか……。

……

……

…

ざつと説明してやった。

取り合えずあんなへなちよこ気弾を使う位なら練気で身体強化に回した方が効率が良いと言う事。

基礎能力がそこそこ高い、程度で止まってるから強化の伸びが悪い事。

身体強化の有りで戦闘をしているから、いざと言う時に困る可能性が有ると言う事。

そして身体強化頼みのごり押しで、武術の型が疎かになりがちなる事。

キツチリ型通りにやれば、あんなに押されないぞとも。

「まあこんな所か」

「……」

「あんな短い時間で、そないに解るモンなん？」

「お前等には言つて無かったかもしれないが、俺を鍛えてくれた人は文字通りの人外でな。観察して少しでも技術を盗まな

いと次の日には生きていなかっただろうな（遠い目をしながら）」

『……』

思わず在りし日を思い出そうとして……止めた。何も自ら古傷を抉る必要は有るまい。

「取り合えずだ文謙。お前、普段の模擬戦でも練気してるんだろう?」

「それは……ハイ」

「それ、禁止な」

「え!? どっ、どうしてですか!」

「だから言っただろ? 練気なんてしてるから基礎能力がそこで止まってるんだって。お前まだまだ伸びるんだから、緊急時以外しない方が良くぞ。絶対に」

緊急時、と言うのは例えば戦場。例えば巡回警備。

戦場でも極力しない方が良い。武将と一騎打ちする事になったら、奥の手を隠していた方が基本的には有利になるからだ。

最初から素早いやつよりも、途中から素早くなった方が、相手からしたら絶対にやりにくいのだから。

むしろ練気してる時の速度に慣れられて、何かの拍子に突然途切れた方がヤバイ。そうなったらまず負ける。

「隊長はそこまで考えて……」

「当然だ」

ふふん、と言っではいるが、こんなのただのゲーム理論である。

RPGとかでも、たまりに有る。まあ隠すのはしないけども。

例えばHPイエローゾーンになってる時に、バフとデバフが切れた所に全体攻撃で壊滅状態、とかな。

そして立て直せなくて全滅。セーブしてない。とか、ま
ま有る。

アクションのボスもたまーに居る。突然加速して速くなる
奴。

何？ タイムアラートダブルアクセルなの？ と言
い
たくなる。

ってモンハン全般がそうだったわ（笑）。

「あの、隊長！」

「いや、この距離なんだからそんな大きな声出さなくても聞
こえてるよ」

「すつ、すみません……」

ショボーンとする文謙。可愛い。と言うか五行なずな可愛
い。ではなく。

「んで、何？」

「もしよろしければ、隊長が普段やってる鍛練に参加させて
欲しいのですが、宜しいでしょうか？」

「それはあれか？ 俺と同じメニューを、あーつと……品
目？ 目録？ いや、項目か。 取り合えず同じ様にやりたい
と？」

「（メニュー？） はい！」

「ふーん……。 まあ良いんじゃない？ 好きにすると良
い。 ただし条件が有る」

「条件？」

きよんとする文謙。可愛い。北見六花可愛い。ではなく。
コホンと軽く咳払いをして、

「文謙に練気を教えて欲しいんだ」

「へ？」

「俺、練気使えないから」

「……………」

『えっ、えー!?』

三人から同じに音波攻撃される。諸に食らってしまった……!!

クッソしまった……!! 耳栓はブレーンが居る時のみ使用可能だった……!!

「それじゃあ隊長つてば、気が使えないのに風ちゃんを簡単に捻っちゃったの!?」

「うぐ!?」

文則（于禁の字）の一言でグサリと何かが突き刺さる文謙。取り合えず無視して話を進めていく。

「そうよ。 文謙は気に頼り過ぎて、普段の鍛練を疎かにしてる」

「そんな事は有りませんが……」

「なんやの風ィ。 ウチ等にはもつとしっかりせえつて言うのに」

曼成が唇を尖らせながらそんな事を言う。
いや別に弱いつて言ってる訳じゃないんだが……。
正確に言えば、俺と比べて、が抜けていたのは確かなんだが。

「んで、どうなん? 指導してくれるのか?」

「それは……はい。 自分で良ければ」

「そうかそうか。 なら交渉成立だ」

にいつと笑って手を伸ばす。ただの握手なんだが……またしても文謙はきよんとしてる。

なんだろう？　握手の文化は無いのだろうか？

「風、握手や握手！」

「え？　あつ、ああ!!」

「大丈夫かい……」

思わず苦笑してしまう俺は悪く無いと思う。

「明日起こしに行くから。　あんまり慌て無い様にしとけ

よ」

「はい！」

「あのお隊長？」

「ん？　なんだ文則」

控えめに手を上げ、恐る恐る俺を見ている。

いや、別に俺は誰かを取って食ったりはしないが……。そんなオドオドされると……余計にその姿を見たくなるじゃないか（愉悦）。

「少し相談に乗って欲しい事が有るのお」

「は？　なんだよ？」

「実は……」

その相談事を聞いて、聞くんじゃなかったと後悔した。

文則（于禁の字）の相談とは何か？

実はついこの前、新兵の訓練を命令されたいのだ。

それで一人は口調も厳しく、言葉に重みを出して、

一人は関西弁でリアリティーの有る言葉突き付けて持ち上げるやり方をしたい。

……まあ誰がどんな訓練方法にしたのかは何となく想像付くとは思うが。

それで最後に文則のやり方なのだが、

「さあつ、みんなー!! 沙和お姉さんの新兵訓練の始まりだよーっ!!」

と開口一番そう言い放ったらしい。

取り合えず俺は昨日デコピンしておいた。

なんか音がデコピンの域を少し超えていた様な気がするが、無視しておいた。

んで今日、これが終わったら新兵訓練に向かうつもりでいる。

これ、とは何か？

無論朝の鍛練だ。

「そろそろ終わるかあ……？」

「……っ……っ……っ……っ！」

俺と一緒にひたすら走りまくった文謙が、返事をせず頷きまくった。

まあ本当はここから筋トレなんだが、コイツは俺と違って仕事の有る。

そうそう体をいじめ抜く訳にもいかない。

取り合えず体力がどれだけ有るか計る為に、延々と走り続けたのだが……。

途中でリタイアするかと思いきや驚き。最後まで付いて来たのだ。

何時まで走るか言って無かったし、俺も終始無言だったから、相当キツイ筈なんだが……気が付けば何時もこなしているノルマを達成していた。

なので、少しだけ余分に走り今日の朝は終了する事にした。

明日から走る量を半分位にして、筋トレをする事にしよう。まあ等分の間一緒にやるんだろうし。ペース配分は俺が考えてやるでしょう。

「キツイか？」

「隊長は何時もこんな事をしているんですか？」

本来は息切れし過ぎて、何言ってるか解らないレベルの言葉だったが、俺が脳内で補足したらこうなった。

「本当はこの後筋トレするんだが……まあ、今日は良い」「そうですか」

まだぜいぜい言ってるので、やっぱり補足した。

「んで、実際どうなんだ？ 文則の訓練は」

「……。ダメダメ、ですね」

「ダメダメなのか……」

今ここでグダグダ考えるのは時間の無駄だ。

取り合えず文謙と解れて自室に戻る事にした。

毎朝この時間にやるから遅れず来いよ、とだけ言っ

……

……

：

新兵の訓練、と言っ

て真っ先出てくるのがハートマン軍曹な
俺は末期だと思う。
ニコニコRPG最高だった……。そこで俺は色々な事を学
んだんだ……。いやそれはどうでも良くて。

文則にあの海兵式の罵詈雑言訓練は無理だろう。

徹底的に人格を否定するやり方は、流石に嫌がるだろうし。
と言うか俺が嫌だ。

日常生活にあの言葉が出て、俺に教えて貰った、なんて言お
うモノなら非難されまくりなのは火を見るよりも明らかだ。

とすると、だ。新兵の訓練と言え

ば。
そして今俺が思い付くのは……。

なのはさんの、キツチリ撃墜方式。

これはフォアードが四人だけ、と言う少人数だからいけた訓
練だろうと思う。

毎回毎回模擬戦なんて流石に時間無いし、非効率だ。

それか風鳴弦十郎のおっさんがやってたやつか。

あれが鍛練なのか、凄い疑問なんだが実際に響は強くなつて
いた。

まあ型を身に付ける、と言う意味でなら有りかもしれんが。

しかしなあ……。後の訓練なんて……思い付かん。

ゲームやらなんやらだと、そう言う時間のかかるモノは省かれるのが常道だ。

手間が掛かり過ぎるモノは、皆やりたがらない。

それにどちらかと言うと、直すのは文則の方が。
あの穏やかな性格を直すのは現実的では無いし、今からでは流石に無理だ。それこそハートマン軍曹みたいなのと出会わない限りは。

いや待てよ……。

例えあんなアホ丸出しの出だしだとしても、だ。新兵のやる気がアレば、キチンと訓練をする筈だ。

どちらかだけでは駄目だな。

両方を改革すべきか……？

取り合えず新兵の方は何とか出来そうでは有るが……文則の方はじっくりやり方を覚えて貰うしかない、かな……？

取り合えず行ってみるか。

……

……

…

訓練場に行くと、最早雰囲気からしてとある一隊は違っていた。

他の二隊はピリピリとしているのに対して、一隊はダルそうにしている。

ふむ……。何故他の隊は注意をしないのか……。そこも疑問だな。

まあ今は置いておきましょう。

さてと、一先ず始めにやる事は……。
うん震脚だよね。

ドツツツオオオオンン!!

演習場に響き渡る大きな音。

新兵達はそれを聞いて、ビクリとなっている。そして音源を探し当ててコチラを見た。

「全員集合〜! 駆け足〜」

俺は手を上げて、そこそこ声を張るとゾロゾロと集まってくる。

おいおい……もちつと機敏に動けんかねえ……。まあそこら辺は今後の課題かな。

「悪いなきなり大きな音出してよ。でもまあ、勘弁してな。声張るの苦手なんだよ」

俺を見てきよとんとしている者。

俺を見て戦々恐々としている者。

まあ見慣れない奴が居るんだ。それはそうなるよな。

「えーつと、取り合えず自己紹介しとくわ。俺は朝風葵。

立場的に言えば……そうさなあ……諸君等の主君である曹孟徳の言わば盟友、みたいなモンだ」

そう言う、ますます混乱していく新兵達。

んー……? あつ、そうか。学が無いんだったな。

「盟友が解りにくいのか? 孟徳と対等の立場だ、たとえば

……解るな?」

『っ!?!』

ピシツ、と擬音が聞こえてきそうな程一気に固まってしまった。

ようやく俺が誰だか解ってくれた様だ。だが、勘違いさせてはならない。

「あー、だが勘違いしないでくれ。俺には諸君等をどうにかする権限は無いし、罰する気も無い」

ここまで言うのと、肩の力を抜く者。さらに怪訝に思う者。実に様々だ。

「さて、何故今回俺が諸君等の前に立つて演説するかと言うとだ。

諸君等の中に、どうも真面目に訓練をしていない者が居るらしいな」

「なら帰ってくれて良い。処罰はしないし、きちんと給金も出す。だから帰れ」

そう言うのと、新兵達はザワザワとして、どうしよう？　といった迷いが生じてくる。そりやそうだわな。意図が不明過ぎる。

「ただし、一つだけ条件が有る。だがその前に、諸君等には言っておかなければならない」

「諸君等も覚えが有るだろう黄巾党。アレは全滅させた。この国は平和だ。そうだろう？」

『……』

「なのに曹孟徳は諸君等を新たに抱えている。何故か？　近い内に、争いが有るからだ。それを見越して、こうした新兵の募集をかけている」

「それを踏まえた上で、もう一度言うぞ？」

真面目に訓練に参加しない者は帰れ。 邪魔だ。 そ

んな者に一々構っていられる程暇では無い。

そして、自らの兄弟、親、愛しい者に敗戦の恐怖を味あわせたい者も帰れ」

ピクシス司令マジイケメン。

変人だけど、俺もあんなカッコイイおっさんになりたい。

「侵略された土地の女子供がどうなるか位、諸君等も容易く想像が付くだろう」

『っ!?!』

「どうした？ 帰って良いぞ？」

ようやく。ようやく新兵全員の顔が引き締まった。

俺の言いたい事が理解出来た様だ。

ピクシス司令の言葉は解りやすくて助かる。

「やれるなら最初からやれよ。 なあ？」

「おいおい、寝てんのかお前等」

もう一度震脚して大きな音出した。

殺気を滲ませつつ、

「理解出来たなら返事をしろ、馬鹿者が」

『はっ、はい!!』

「そう。 それで良い」

「それじゃあ諸君等の仕事を伝える。 まずは敬礼だ。」

敬礼の指示が出たら直ぐ様実行しろ」

俺がやってみせたのは、進撃の巨人での敬礼だった。

「諸君等の仕事は、国に心臓を捧げる事だ!!」

兵士の仕事は、戦って死ぬ事。

いかに武装が優れていようが。

いかに優秀な軍師が居ようが。

英雄は、一人も居なくならない。

それは変えようが無い、厳然たる事実で、真実だ。

「国を守る為に！」

民を守る為に！

どうか！ 戦って、死んでくれ!!」

俺の言葉に、場が静まりかえる。

戦場とは。戦いとは。こう言う事なのだ。

ここに居るのは等しくひよっこ。

命のやり取りなんてしたことは無いだろうし、想像も付いていない筈だ。

そして、兵士がどうゆうモノなのかもまた、正しく理解出来て居なかったのだろう。

今、この瞬間までは。

「諸君等の仕事は、国に心臓を捧げる事だ。

そして、戦場で最も重要な事が有る。

生き残る為に、必要な事だ。

そこのお前、そうお前だ。 言ってみろ」

「え？ えっと……敵を倒す事、ですか？」

「違うな。 その認識は間違っているぞ」

敵を蹴散らすのなんて二の次三の次だ。
生き残る為に、なのだから。目の前の敵を倒したって、次々と現れるんだ。

「戦場では、諸君等は決して。決して、一人では無い!!

前後左右、必ずどこかに仲間が居る!!

仲間を信じ、仲間を助けよ。

そうすれば仲間が諸君等を助けてくれる!!」

互いを助け合う事。これこそが最も効率良く生き残る事に繋がる。

そして、結果的にそれは攻撃力に繋がり、効率的に敵を殲滅する事が出来る。

「情けは人の為ならず。誰かを助ければ、必ず誰かが助けてくれる。それを忘れるな。いいな!!」

『はい!!』

「宜しい。ではこれで俺の話しを終わる。長話に

付き合わせて済まなかったな。では、各隊に解れて訓練を始めてくれ。
解散!!」

新兵の全員が、キビキビとした動きで別れていく。
どうやら俺の言う事を、全員がキチンと理解し納得してくれた様だ。

慣れない事はするモンじゃない。喉痛いし。足もジンジンする。

「隊長、凄かったのお!!」

「せやせや! かつこよかったで隊長」

「流石です隊長。やっぱり隊長は凄い……!!」

「あーはいはい。おべっかはいらんから、さっさと訓練に行けっての」

ヒラヒラ、と手を振って追い払う。どうにもこうにも……照れ臭い。

すると文謙と曼成は一礼して、小走りで向かって行った。

しかし文則はまだ側に居て、俺を見ている。

どうやらまだ相談は終わって居ないらしい。

しかし……まだ何か有るのだろうか？　ちよつと想像が

付かないが……。

「んで、まだ何か有るの？」

「実は……」

訓練の内容が解らないんだと。

今までは少数でやって来たから、それで正しいのかが解らないんだと。

「つたく……。今日から三日だけ来るから、キチンと覚える様に。」

それでも解らなくなったらあの二人に聞け。どーしてもあかんくなったら、俺の所に来い。良いな」

「はーい!!」

さてどうするか……。取り合えず、走らせるとしよう。

中庭で誰かが鼻歌を歌っている。……完成度は酷いけど。多分これはアレだな。張三姉妹が歌ってたヤツだ。誰が歌っているのかとひよっこり覗いて見ると仲康だった。よく見ると手紙を書いている様だ。そして何か唸っている。どうしたのだろうか？

「どうした仲康」

頭を軽く撫でながら、後ろから覗き込む。
さっと目を通す。どうやら故郷の友人へと手紙を送る様だ。
流石に細かい内容までは見ないけど。

「あつ、兄ちゃん。手紙書いてるんだけど……楽しみにしてる、つてどう書くんだっけ？」

「ん？　こうじゃなかったか？」

紙の上に指で書いてやる。

あーそつかそつか、何て言いながら手紙を書いていく。
黄巾党が暴れていた時は、手紙を出すのも儘ならなかったが、今は違う。

この世界には当然の様に、元々の世界に有るような便利ツールは無い。

しかも手紙と言っても、出す方向に向かう商人、旅人に預けるしかない。

信頼性に欠けるし、気の長い話しになる。
まあ便りを出せるだけ良いのかもしれないが。

「出来たー」

「誰宛てか聞いても？」

「えへへー。内緒！でもすぐ解るよ」

「ふむ……。そうか。なら楽しみに待つとしよう」

「えー！兄ちゃん聞いてくれないのー？」

ぷくーつと頬を膨らませながら、そんな事を言ってくる。
どうやら内緒と言ったが、それを承知した上で聞いて欲しかった様だ。

しかし、俺はそう言う訳にもいかないのだ。

「構ってやりたいのは山々だが、孟徳に呼ばれていてな」

「え？　そうなの？　じゃあ速く行かないと！」

「だから素直に待つてるとしよう。その内教えてくれよ」

またねー、と言って走り去る仲康。

手紙を出しに行ったのだろう。俺も向かうとしよう。あえてゆつくりと。

.....

.....

...

「遅いぞ朝風！　華琳様に召集されたのなら、例え就寝中で有っても駿馬の如く駆け付けろ！」

「そりゃ遅いだろう。あえてゆつくり来てやったからな」

真顔で頷きながら言っただけ。

日常会なんだからゆつくりさせろよ。なあ？　そう思わない？

「姉者。華琳様の御前だぞ。もう少し静かにしてお

け。朝風も、なるべく速めに来てくれると助かる」

「う、うむ。そうだな」

「む。 妙才に苦勞を掛ける訳にはいかんな。 解つた」

「いや華琳様にだな……」

「まあそんな事はどうでも良い事よ」

なんて事も無げに孟徳は言つた。 もの凄い良い笑顔を浮かべながら。

しまった。 これならゆつくり来るんじゃないかった。

仲康と一緒に街へ繰り出すんだつたぜ……!!

「何故そうなる……」

妙才がげんなりしながらそう言つた。

どうやら心の声、では無く普通に言っていたみたいだ。

「んで、何？」

「葵。 貴方は張角、張宝、張梁の張三姉妹の事は知ってるわね？」

なんで態々個人で分けたし。

張三姉妹だけで通じるからね別に。

とは言わずに、

「ああ。 それが？」

「今日から貴方には彼女達の仲介役をしてもらうわ」

仲介役。 この俺が。 仲介役……!。

取り持ったり、仲立ったり、媒介して、橋を渡す。

孟徳、俺、張三姉妹で。

「……なんで？」

なんで俺なのか。

なんでそんな事しなきゃいけないのか。

なんで俺にあの三人を扱えると思ってるのか。

「貴方なら私に気兼ねなく会いに来れるし、貴方、どうせ暇でしょう？
それに、貴方程舌が回るのなら、見事丸め込んでみなさいな」

まあな。確かにな。俺はフリーパスですよ？
基本的には。

暇だ。いや文献読み漁ったり、宝石魔術師目指したりしてるんだよ俺だって。……遊んでるだけだけどな（笑）。

丸め込むって……詐欺師では無いんですがねえ。

しかし断つたとしても、多分後回しにされるだけだ。

なんだかんだ理由を付けられて、お使いクエストを押し付けられるだろう。

今日は特にやる事も無いし、魔術師ごっこも飽きてき、じゃなくて行き詰まって来たから気分転換で行こう。

「しよ、しょうがないから行つてあげるわよ！
勘違いし

ないでよね！
アンタの為じゃ無いんだからね!!」

「……」

捨て台詞を吐いて玉座を後にした。

孟徳の米神がやけにピクピクしていたのは、一体なんでなんだろうなー（棒）。

孟徳をからかうのはこれに限る。ツンデレ返しと横文字攻め。俺の切り札だぜ（笑）！

……
……
……

早速街へ繰り出し、三姉妹がよく居ると言う店を訪ねた。
久し振りに会う。俺の事は覚えてくれているだろうか？

張梁は多分大丈夫だ。

俺としては張角だけで良い。遠野そよぎさんは大好きです。
声がそっくりなのだろう。

一番好きなのは言葉様だ。可愛いよねヤンデレ。いや殺されるのは勘弁してくれ、と言う他無いが、あそこまで一途に思われると可愛い。

張宝は……多分初対面、とか言うんじゃないだろうか。
さてと……居るかね？

「ちよつとお姉ちゃん、それちいの」

可愛いらしい声が聞こえて来たので、そちらを見ると居た。
張三姉妹だ。改めて見ると、不思議だよなあ……。カラフルな髪の色そのものはもうどうでも良いが、三人共違うんだよね……。

張角が明るいピンク。

張宝が鮮やかなブルー。

張梁が綺麗なパープル。

……複雑な家庭事情なんだろうか？ 番長では無いが、そつとしておこう。……しかしこれ、なんて便利な言葉なんだろうか。

「良いでしょー、別に。 ちーちゃんが新しいのを頼めば
良いの。 はい解決ー」

「……いいいけどさ。 すみません！ 杏仁豆腐追加ー
！」

凄い力押しだった。しかもそれで良いんだ。

妹が二人も居るのに、なんつー我が儘な姉なんだ……！

妙才に続き好みだったんだが、どうやら気のせいだった様だ。俺は妙才だけで良いわ。

妙才連れ帰ろうかなー。アイツ良いマネージャーになりそうなんだよ。

兎に角、声を掛けない事には始まらない。

まだ食事を続けるみたいだし。

「おい」

「あ、ごめんね。今は私的な時間だか、揮毫はしない

のー。ごめんなさーい」

「は？ キゴウ？ いやそうじゃない」

張角に言葉を返そうとして、

「お昼ご飯を食べていますから、邪魔しないで貰えると助
かっちゃうなー」

「邪魔しに来たわけじゃなくてだな」

猫撫で声の張宝が間に入って来て、

「揮毫は近々然るべき場所を設けますから、その時お願いします」

そして最後に張梁が理路整然とした答えを突き付けてきた。

三人は言いたい事だけ言うと、また食事を再開した。

つてかキゴウって何？ 記号？ ……。あー。

揮毫ね。サインの事だ。

いるかサインなんぞ。ったく。俺はファンじゃないんだが

な別に。

だが三人は俺をそれと勘違いしている様で……。まあマトモにこつち見て無かったから、俺を認識して無いみたいだ。

……帰りたい。帰って孟徳に、せめて事前に話しぐらい通してしとけボケ!!　って言いたい。

そして喧嘩になるんですねハイ。

さて、どうするか……。このまま孟徳の使いだ、と言えばナメられる。確実に。

しょうがない。この手段は堅気の人間にはあまりしたく無いんだが……。コイツ等が悪いのだ。

最初からぞんざいな扱いをしなければ良かった。だから、俺は悪くない。

隣のテーブルから椅子拝借して、三人と同じテーブルにドカツ、と音を立てて座る。

そして三人を殺気混じりで睨み付ける。　ビクツとしているが、構わずに話し始める。

「俺は朝風葵。　曹操の代理としてここに来ている。

お前等の揮毫なんぞいるか阿呆」

「あっ……!」

「ようやく気付いたか?

俺もあの場に居たな?　水貫

える?」

杏仁豆腐を持って来たウェイトレスに、注文する。相変わらず金は無い。だから水を頼む。良いんだよ水好きなんだから。

「ありがとう。

世話役、なんて面倒な仕事を押し付けら

れて来た。俺だって暇じゃないんだ（大嘘）。　　そう言う態度を取るなら、俺はこんな仕事ぶん投げるぞ（真顔）」

そう。今回はあくまで暇潰しで来ているに過ぎない。

コイツ等の報告　なんて適当にでっち上げてやれば良い。それっぽいのを考えるのは面倒だが、コイツ等の側に居るよりかはよっぽど有意義だろう。

「ごっつ、ごめんなさい……」

張宝が殊勝な表情をして謝ってくるが、

「別に謝って貰わなくても良い。　　そもそも俺を追っかけだと思っただけだっただろう？　　と言うか幾ら私的な時間だろうが、応援してくれてる人に対してあの態度はダメだろう」

俺が日本に居たからだろうか？　　幾らなんでも無礼過ぎる、と感じた。

アイドルは応援してくれてる人が居て、始めて成り立つモン、と言う良い解釈だったんだが、違うの？

アイドルに興味無いけど、何となくそんな感じだと思っただけ……？

「それは……」

「確かに、朝風さんの言う通りよ」

「まあそれはお前等が今後考えていけば良い事だ。　　後に

しろ」

バツサリ切り捨ててやる。

俺の時間の無駄だし。

と二人とやり合っていると、張角からねめつける様な視線が

飛んでくる。

じっくり見られている。……この視線には覚えが有る。鑑定を受けている目だ。

セレブのパーティなんかでよく向けられる。

「どうだ？　鑑定は終わったか？」

「っ！　ううん、もうちよつと」

悪びれもせずに開き直ってきた。

そして、更に瞳を覗き込んでくる。……ここまでされたのは流石に始めてだ。

「……ふーん？　うん、合格」

「えー？　お姉ちゃん、こんなのが好きなのー？」

こんなので。まあ好きに言わせておけば良い。

「まあ、こっちはお断りだが」

「……」

「お姉ちゃんフラれてるー（笑）」

「ええ!?　なっ、なんでなんで!？」

「なんでと言われてもな……。俺にだって選ぶ権利は有る」

る

と言うか容姿の美醜で決めるなら、それこそナタル、ヴィオレッタ、リーシャの三人から選ぶよ俺は。

内面重視、と言えば聞こえが良いかな。

さっきの妹との取るなんて、ダメ過ぎるだろう。逆ならまだしも。

「そんな事より、世話役って言ってたけど、仕事はどんな事を

するの?」

「そんな事って、酷いよお……」

張角がシクシクしですが、解っている。解っているから無視する。

「知らん。マネージャーなんてやった事無いし、その手の事は全部任せて来たからな」

「シクシク」

シャロとブレインのgori押しだし基本。

やるとしたら……舞台の設置とか集客とか他には……スケジュールか? 時計無いし、子供じゃないんだから必要無いだろう。

俺はあくまで孟徳側の人間。そこまでやってやる義理は無い。

どちらかと言うと指導や監視が主だろう。

「マネージャー?」

「シクシク」

「悪いが、俺はお前等の監視だ。何かをしてやる、と言うのは基本的にしない。めんど、じゃなくて。自分でやれ」

「そんな……」

「経費に関しては孟徳と議論してやる。だが舞台の設置、事務所の設立、集客、そして歌。

これ等俺は一切関知しない。ただし、先導やそれに準ずると俺が判断すれば孟徳にその様に報告し議論する。俺がやるのは初期の費用位だが、あまり常識から外れるとそもそも持って行かないからな」

最初が肝心なのだ。甘い顔をするとうけ上がる。

俺が睨み付けるまで、気付かなかったのがその証拠だ。

「ねえねえ葵」

「ん？　なんだ？」

思った通り、嘘泣きだった。レンちゃんの方が上手だったからすぐ見抜けた。

そして相手にされないと思えると、止めて話し掛けてくる。

「葵は、彼女居る？」

「いない。　欲しいとも思わない」

即答してやった。この手の答えはスパツとしないと相手に都合の良い様に解釈されてしまう。

なんであんな記事書いたんだろう……。

「それと、解っているとは思うが、張と言う名前は捨てろよ。どこからどうなつて噂になるか、解ったモンじゃない」

この店に来てから、俺は一度も張、と言う名前を出していない。

他国にどんな風に捻曲がつて伝わるか解らない。つまりはそういう事だ。

「それは……解ってる」

「そうか。　なら良いが……。　また来る。　それま

でに経費を出しておけよ」

「うん。　解った」

話しは終わった。

さつさと店を出る事にする。張角に絡まれると面倒だ。

さてと……玉座に引き返すか。余り気が進まないが。
……やっぱり明日にしようかなー。

第10話

同盟と天の遣い

最近の朝議は連日都の董卓についてだ。

なんでも何進が殺されたらしい。この前来てた呂布の上司。あれが宮廷で殺されただと。

肉屋のせがれがやりたい放題してたもんだから、ブスツといかれたんじゃないかー？　って話した。

それについては、俺もあんまり笑って聞き流せない。

向こうじゃ基本的には大人しくしてたけど、たまーに我が儘言ってたからな。反省しておこう。イライラされるちよい手前位の我が儘に止めておこう。

んで、その肉屋の後釜に座ったのが董卓なのだ。とすると、俺の予想は当たっていた事になる。

すなわち、呂布との対決だ。

策も考えておいたし、まあ負ける事は無いだろう。

問題も多少有るが、それについては解決した、とは言い難い。戦場だし。何がどうなるかは解らないモノだ。

なーんて考えながら散歩していた。

別になんか買う訳じゃないし、飯を食う訳でも無い。

「あのお………すみません」

「……」

しかし腹が減ったな。これは急いで城に帰るしかないか？　いやダツシュしたら余計に腹が減る。

「え？　あれ？　無視された？」

「……ふむ。今日は何にしようかなー……?」

「あつ、あの!」

「やべーなー。唐突に洋食が食べたくなって来た……」

どうしよう。チーズが食べたい。ピザが食べたい。カルボナーラが食べたい。

「あの!!」

「んだよさつきからうつせえな……」

振り替えると黒髪でおかっぱの女の子が、涙目で俺を睨んでいた。

どうやらさつきから声を掛けていた相手は俺であるらしい。

「ひよつとして、ずーつと俺に声掛けてた?」

「……はい」

俺は散歩してる。けれどただブラブラ歩いてるだけだから、当然誰かに声を掛けられる様な事は無い。

警備で巡回してる奴等に、おつかれ様です、とか言われる位だ。それだって頭に名前がくつついている。

つまり何が言いたいかと言うと、街では声を掛けられ慣れていないから、結果的に無視してしまった、という事になる訳だ。

「ソイツは悪い事したな。　　んで、何か用?」

「ちよつと道を訪ねたくて」

「行き先にもよるな」

「えっと、お城」の前に美味しい料理食べさせてくれる所、教えてくれよ!」

横から割り込んできた、水色の髪にバンダナをした少女。この息の合ってる感じは、多分ツレなんだろう。

だってきつきの黒髪の娘が、文ちゃあん！　と言って窘めている。

「いいじゃんか。　あんなバカでかいモン、別に逃げやしないんだし」

まあそりやそうだ。城は逃げない。

だが尋ね人が城から居なくならないかどうかはまた別の話しだ。

文ちゃん、と呼ばれた少女がお腹すいた、とただをこね始めたので、ツレの方もしょうがない、と納得してしまった。

いや……それで良いのか？　まあ俺の知った事では無いんだが。

「それじゃあ飯屋の道で良いんだな？」

「うん！　料理屋がたくさん並んでる所！」

「屋台通りで良いか？」

「おお！　兄ちゃん気が利くね！」

道を説明してやる。が、文ちゃんにはよく解らなかつた様

で、

「案内してくれ！」

なんて言ってきた。いや俺帰りたいんだけど。

「だが断る。　俺も昼飯だ」

「ならあたいが奢るからさ。　な？」

「ちよつと文ちゃん！　悪いよ」
「いやそれなら案内させて貰おう」

奢りなら話しは別だ。

洋食は食いたいけど、作るのが面倒くさい。

「あつ、兄ちゃん！」

「おお。仲康か。どうした？」

「これからお昼食べるんだけど、兄ちゃんは？」

「そうか俺もだ。……ちようど良い。この近くで美

味い店知ってるか？」

「この辺り？　まかせてよー！」

えっへんと胸を張っている。

給金の殆どを食事に使っている仲康の舌は信用して良い。
だが当然ながら、この二人はそんな事知らない訳で。

「ん？　このちびっこ詳しいのか？」

「ちよつと文ちゃん！　失礼だよう」

ちびっこと言われてピクリと眉を動かし、

「兄ちゃん。　誰？　このぼさぼさ」

文ちゃんの方を見て、ぼさぼさ呼ばわりである。
どうやら思った所が有るらしい。

「……………」

「……………ぼさ、ぼさ……………」

思わず吹き出しそうになったが、気合いで飲み込んだ。

危ない。ゲラゲラ笑う所だった。

「ツク……。ふう……。良いか仲康。初対面の

人に、そんな事言っちゃあ、めーだぞ」

視線を遇わせる様にしゃかんで、デコを人差し指でつついた。

「うー」

「文ちゃんも落ち着いてってば」

「むうう」

と言うか別にぼさぼさはしてない。

前髪は少し跳ねてるが、それだけ。まあ女の子としては、あまり言われたくは無いは思うが。

「ほれ、案内してくれ仲康」

ポンポンと頭を撫でてやると、ふにやつとしてこつちだよー、と先導してくれた。良かった。機嫌直った。

……

……

…

「美味い!!」

口に入れた瞬間だった。せめて数回咀嚼してからコメントして欲しい。いや、美味いけどね。

「こんな美味いモノ食べた事無いぜ……。!! 斗詩も食って

みろよ! すっげえ美味いから!!」

「もう食べてるよう」

黒髪でおかつぱの娘は斗詩、と言うらしい。
何となく苦勞人っぽい。赤目で、少しだけ垂れている。料理を食べてほにやつとしてるのが可愛い。

文ちゃんはモリモリ食べると、仲康が誉めていた。まあ確かに凄い。俺からすればどっちも変わらないんだが。

「あつ、俺の肉」

「へへーん！　油断してる方が悪いんだもんねー」

「良い事言うなあ。　全くその通りだ」

「……」

二人から回鍋肉の肉を奪われた俺は、ゴンツと拳骨してやった。

「行儀の悪い事をするんじゃない。　良いな？」

「はい。　ごめんなさい……」

「すいません文ちゃんが……」

「躰はしたから、もう大丈夫だろう。

なあ？」

「はい！　お行儀良くします！」

「ね？」

「ハハハ……（このお兄さん、結構怖いかも……）」

それにしても良く食べる。仲康が二人居る様な気がする。まあそれは斗詩さんの方も同じだと思うが。

「それにしても美味しいなあ……。　南皮でもこんな美味しい店なかなか無いぜ！」

その言葉を聞いて、思わず反応してしまった。

南皮。確か、袁紹の土地だったか？

改めて二人を観察する。身形が綺麗で、初対面の人間に飯を
気前良く奢る位に金を持っている。

文ちゃんも伝令、偵察する兵にしては強い。武将だ。

ここから導き出される結論は……。

「うーん……何かこの味、どこかで食べた気がするんだよ
なあ……」

「どうした仲康？」

「うーん？」

「はい大皿、追加分ですー！」

「ご飯おかわり！」

「はっ、はあい!!」

ウェイトレスは最早やけくそ気味ですらある。こんなのが
二人も相手だと大変だよな……。

仲康と同じ年位だし、少し手伝ってやろうかなー、なんて
ちよつぴりだけ思う。やらないけど。

だから食べる事から少し意識をずらしてやる事にする。

「んで、袁紹さんの所の武将が、孟徳になんの用だ？ あれ
だったら案内してやるが」

「え？ え？」

「へえ……兄ちゃんスゲエな」

「なっ、なんで解ったんですか？」

「南皮つてのと、二人の身形の礼節。 金使いの荒らさ。

そこそこの腕前。 それと最後に鎌を掛けさせて貰った」

「あっ」

まあ9割ほどの勝算が有ったけどな。

それに、ここ最近は南皮の中がゴチャゴチャしていると話題に昇った。一瞬だったけどな。

「失礼する」

突然声を掛けられた方を向くと、孟徳と妙才が居た。まあついでだ。呼んどこう。

「こつちだ」

「あら。 葵達も来ていたの。 ……そちらは？」

手を振ってこつちに呼ぶ。

本来ならぶつ飛ばされても文句を言えないが、まあそこは俺だから、で済む（笑）。

「んー。 今休憩中だろ？ 仕事の話しだ、後にしとけ」

「……」

ヒラヒラ、と振って告げると、孟徳が二人に冷たい目を向ける。

「なあ、後で良いだろ？」

「えっと、はい……」

斗詩さんは孟徳の凄まじい眼力を受けて、縮こまってしまった。お劳しい……。

「そう。 なら城に戻ってから聞くとしましょうか」

「あつ！ いらつしやいませ曹操様！ 夏侯淵様！

今日もいつもので宜しいですか」

「ええ。 お願いするわ」

「私も同じもので」

どうやら二人共よくここに来るらしい。
じゃないといつもの、なんて店側言われないだろう。
ちなみに、城へ来て欲しいと打診したらしいが、断れたんだ
と。

「だっせ（笑）」

「侮辱されているのはよく解るわ」

どうやら思わず口にしていたみたいで、孟徳が青筋を立てて
いる。

このクセ直さんといかなー（棒）。

「んで、訳は聞いた？」

「親友に呼ばれてこの街へ来たんですって」

「なーんだ、孟徳の交渉が失敗したんじゃないのかあ」

「貴方ねえ……！」

「悪かった。俺が悪かったって。 そんな怒んなよ

（笑）」

更に孟徳の米神がピクピクしている。

そして妙才は勿論、周囲の空気が凍っていく。

「おいおいおいおい。 あの兄ちゃん何者だよ……!!」

「曹操さんの……覇気が……!!」

この光景を割りと見慣れている曹操陣営でも、妙才と仲康は
ビクビクしている。

「その親友の子の名前は聞いたの？」

「……。聞いていないわ」

「そうか。ねえちよつと良い?」

「はい?」

まずは自己紹介。警備の人間に顔が利くので、もし良かったら名前―真名じゃない方―と特徴なんかを教えてくれないかなんて言うのと、

「えーつと……許緒つて言うんですけど……」

「……。そこで君の飯食つてる奴じゃあないのか?

別人?」

「にや?」

「あー……っ!!」

「あー! 流流!。どうしてたの? 遅いよお」

なーんて呑気に言う仲康。

ちよつとした小競り合いが始まるが、それよりも俺は孟徳に言う事が有る。

「……これさ? お前等のどつちかが名前聞いてたら、も

う少し早く解決したんじゃないの? なあ? そこんどこどう

なん?」

「……」

「……それは……」

「俺はね、思う訳ですよ。名前を聞いてね? 俺か警

備の三人娘の誰かに、捜しといてくれない? って。 な?」

孟徳がうぐぐつ、と唸っている。

普段ドSの人をイジるのって楽しいなあ……。やり過ぎるとブチ切れられて、後からの仕返しが怖いので、この辺りて止めておく。

ついでにケンカしてる二人を止めるとしよう。
普通にお店に迷惑だ。

「ほおれ、止めんかお前等」

「「ひゃふっ!」」

二人の首根っこを掴んで、離れた後に頭をワシヤワシヤ！
と思いつき頭を撫でてやると、あつという間に大人しくなる。
ふむ……。やはり対レンちゃんは良く利くらしい。

「ああその、なんだ。　　悪いな」

「「え?」」

「実は仲康が手紙を書いた時、側に居てな。　　俺がちゃんと確認しておくべきだったわ」

「そんな!　　それは季衣のせいだ……!」

「んじゃ俺に免じて許してやってくれ。　　な?」

にいつと笑い掛けると、渋々ながらもハイ、と頷いてくれた。

「仲康も。　　お前の手紙が適当だからこんな事になったんだぞ?」

「謝りこそすれ、攻めるのはお門違いだと思わないか?」

「うー……。　　ごめん流流……」

「あつ、ううん私こそ……。怒鳴ってごめんなさい」

二人はお互いにごめんなさいをして、仲直りした。
子供つてのは、やっぱりこうじゃないとな。

「さてと、飯は食ったし。　　そろそろ面会と行きますか」

ほれ!　　と二人に合図をすると、名乗りを上げた。

「お初お目にかかります、曹勿論殿。私は顔良と申しま
す」

「あたいは文醜！ 我が主、袁本初より言伝を預かり、南皮
の地よりやって参りました」

斗詩さんが、顔良。文ちゃんはそのまま文醜。

顔良。納得の名前だ。美少女である。

文醜。字が汚いのだろうか……？

「なあ、どう思う？」

「そんな事はないと思うが……」

「俺は一族に掛けられた呪いだと思うんだがな……」

「朝風はたまに突飛な事を言うな」

「まあな！」

「いや、別に誉めてはいないんだが……それと」

「うん？」

「あまり華琳様をからかってくれるな。心臓に悪い

……」

嫌そうな顔をしながら、先導する孟徳。

そんな孟徳を見ながら、穏やかに笑う妙才。

「たまにはアイツもからかわれる側に回るべき」

「そう言う朝風はからかわれる側に回っていない様に見える

が？」

「俺はもーいーわー。昔散々からかわれたし」

思わずげんなりしながら妙才にそんな風に返した。

うーん。レンちゃんはない。嘘泣きがない……。

ルシオラ姉さんもない。ヴァルターとかなー。昔のボクは
とっても素直でした。

「色々有ったのか」

「うん。　うへえあつて感じ」

「何をしているの貴方達。　行くわよ」

俺達が離れているのを目敏く見付けると、孟徳が注意して来た。

思わず妙才と顔を見合わせてクスリと笑って、すぐに後を追
い掛けた。

……

……

：

二人の将が持つて来たモノ。それは同盟だった。

都の董卓はやりたい放題で、大粛正も有ったとか。

それに参加するのが袁紹、袁術、公孫賛、馬騰。孟徳曰く、有名所ばかり、らしい。

俺は聞き覚えが無いけどな。

しかしこれは……少々やっかいな事態になってるんじゃないだろうか？

……主に俺のせいで。

孟徳はまず間違いなく参加する。

いずれ戦う事になるであろう者達が参加しているのだ。ならば顔位は見ておきたいと思うのが自然だし、こうして一同に会する、なんてのももう無いだろうし？

理由はどうあれ、参加するだろう。

参加の意思を表明して、将二人が帰って行った後に、孟徳に話し合つてを切り出した。

「なあ、俺つてさ一応天の遣いなんだよな？　　もう一人居

るっぽいけど」

「ええそうね」

そう。もう一人居ると噂になっているのだが、それは今話題すべきでは無いのでスルーする。

「俺にクソ似合って無いのは置いといてだな、それってマズインじゃないのか？」

「……」

そうなのだ。都に居るのは董卓。

そしてその董卓に権利を預けたのは、天子だ。

俺の事を天の遣いだと祭り上げ、都を攻めるも言う事は、現在の皇帝に対して、反逆している、と取られて逆賊だと避難される可能性も有る。

すると、突然連合軍は、悪政を敷いている董卓の排除、と言う正当性が失われてしまう。

それはマズイ。連合軍が瓦解する位ならまだ良いが、リンチに合うかもしれん。

「向こうがそれを指摘してきたらマズイぞ」

「……」

「まあ向こうの軍師がそこまで頭が回るかは別だがな。」

それでもお前は、俺を連れていくか？」

「当然でしょう。もう一人も出てくるわ。だとしたら、どちらにしても崩れるでしょう」

「そうか……。まあ、お前がそう判断するなら従うが……」

「それに、呂布を私の前に差し出してくれるのでしょうか？」

「……つぶ。そうだったな」

弱気になっていたのは俺の方、なのかな。

成るようになる、か。だけどマズイ事には変わりはない。それだけは正しく認識して貰わないと瓦解する。

それとついでに聞きたいのだが、どうやら仲康の願いが、さつきの子―典韋と言うのだが―を連れて来ても良いか、と言うモノだったのだ。

仲康とやり合っていた、と言う事は中々に腕が立つと言う事でもある。

「連合軍の集合までそんなに間は無いんだろう？」

「ええ。 数日後よ」

「なら最終調整しとくか……」

「結局どういう策を取るの？」

「別に難しいモンじゃないよ。

呂布の体力を限界まで

削って、投網掛けるだけ。

投網は曼成の特製だけだな」

特別な所は何も無い。ただ網がクソ頑丈なだけ。一応試させた。ウチの力自慢二人に。一応大丈夫だったから、多分いけるだろう。

その辺はどれだけ俺がやれるかだ。

「そう。 期待していいのね？」

「ああ。 任せておけ」

俺達は顔を見合わせてクスクスと笑う。

すると周りから冷たい目を向けられて来たので、さつきと退散した。猪武将と猫耳軍師が凄い目をしていたのだ。

集結の時は、近い……。

第11話 真のロメオ

馬に乗り、向かう先は……。

連合軍の集場所だ。遠いなー。空飛んでびゅーんって行きたいなー、なんて呟くと、

「これでも近い方よ。西方の馬騰などは、この何倍もの

距離をはるかに速く駆け抜けけると言うわ」

「知らねえよそんなの。他所は他所！　ウチはウチ！　

もう！　我が儘言わないのー！」

「我が儘言ってるのは貴方じゃない……」

誰かのお母さんの真似。でも俺はお母さん居なかったから解ないけどな！　……ここ笑う所だからねうん。

少し行くとようやく袁紹の陣地が見えた。他の旗も多く見えたきた。

遠いんだよなー。袁紹も気が利かないよなーマジで。

出迎えが顔良なのが救いだな。

しかもすぐ軍義を開くんだと。しばいたろうか本当に……。

「ひうつ」

「まあ落ち着きなさいな」

「ああ！　すまん顔良。袁紹にムカついてただけだ」

「えつと、あの……」

顔良がもたついている間にパパッと指示を出す孟徳。

夏侯姉妹と俺が付いて行く事にした。

もう一人の天の遣い。どんな人物が見極めてやろうじやないか……。

……

……

：

「おーっほっほっほっ！」

陣に着いて最初に聞こえてきたのが、そんな耳障りな声だった。

「久し振りに聞いたわね。　その耳障りな笑い声……麗羽」

「華琳さん、よく来て下さいましたわ」
「……」

「さーて……。　これで主要な諸侯は揃った様ですわね。
華琳さんがびりつけつですわよ、びりつけつ」
「……はいはい」

豪華で実用性がまるで無い鎧。
金髪の無駄に長い縦ロール。
孟徳の口の聞き方。そして夏侯姉妹がピクリとも反応して
いない所を見るに……。

「(こそこそ) おい妙才。　もしかしてアレが……?」
「(こそこそ) そうだ。　アレが袁紹だ」
「(こそこそ) 袁家オワタ」

そして天幕の中に入って、自己紹介、と言う流れになったのだが。

「あつ、あの!!」
「うん?」

桃色の髪をした妙齡の女性の隣に居た青年が、”俺に向かつ

て”話しかけた。

なんだか思わず立ち上がったらしく、

「ちよつと、ー刀……!?!」

「朝風葵さん、ですよね……!?!」

「そうだが……君は?」

隣の美女に止められているが、構わず俺に話しかけていた。
その青年は白い制服でーIS学園のモノでは無いーちようど俺と同じ年位だった。

そして、当然だが見覚えは無かった。顔にも、その制服にも。
こちらで有った事もなければ、向こうで会った事も無い。

「えつと、俺北郷ー刀です!　俺、俺……!　葵さんの
ファンで!!」

「おつ!　ようやく俺の事が解る奴が出て来たか!」

「それで、えつともし宜しければ、さつ、サインくだちやい!」

噛みよつた。うん緊張してるんだよね。俺はそんな大層な人間じゃないけどな。サイン下さいって言う人は、大抵噛んで、今の北郷君みたいに顔を真っ赤にする。

「サインするのは構わないが、生憎今は互いにサインペンもサイン色紙も無いんじゃないのか」

「あ」

サイン位どんだけでも書くよ。道具があれば。
書簡とかでも良いんだけど……。

「貴方達、何をやっていますの!　席に着きなさい!」
「すつ、すみません……」

北郷君はえんしょーに謝るんじゃないくて、俺に謝ってそそくさとさっきの位置まで戻った。

俺？　俺はえんしょーをー睨みして席に着いたよ。少し位休ませろよ、と言う意味を込めて。泣きそうになっていた。……俺そんなに目付き悪いかな

……。

俺が席に着くと、順番に自己紹介が始まった。

幽州から来た公孫賛。

平原郡から来た劉備。その軍師の諸葛亮。

涼州の馬超。なんか馬騰の名代なんだって。

河南の袁術。その軍師張勲。そして客将孫策。

孫策は俺を見て、バツが悪そうに一礼した。

気にしてないよ、と言う意味で笑っておいた。

んで孟徳。夏侯姉妹に、おまけで俺。

『……』

なんか場がぎわついている。

天の遣いが、二人。一人でもアレなのに、それが今この場に二人も居るんだ。そりゃえー？　ってなりますよねえ。

「さて、それでは……最後はこの私、袁本初ですわね！」

「それは皆知っているのだから、いいのではなくて？」

「だな。　有名人だから皆知ってるだろ」

「そつ、それはそうですけど……！」

「軍義を円滑に進める為の名乗りだろ？　　ならいらないん

じゃないのか」

「クツクツクツ」

「そこっ！ 何を笑っていますの!？」

「ああ？」

「ヒイツ!？」

えんしょーの自己紹介がスルーされたから、クスクス笑っていたら注意されたので、なんか用ですか？ と言う意味で返事をしたら怯えられてしまった。なんでかなー（棒）。

だけど直ぐ様気を取り直して、進行を始めた。

始めたのだが、えんしょーが話し始めた途端に誰かが被せて、一切口を開かせない様になっている。

思った通りだ。えんしょーはえんしょー表記のままで良い様な人物なのだ。

第一印象そのままである。

ガンガン決まっていく。いつの間にか作戦がガンガンいこうぜになっていた。

董卓は誰も知らない。

先頭はクジ引きで決めて、袁術の軍師張勳が経路を説明した。

関所の将はし水関は華雄、虎牢関は呂布と張遼らしい、この事。

そしてし水関の偵察を改めて劉備がやる事に。

あつという間に決まった。見ている分には清々しいモノだった。

はい終わり終わり、みたいな雰囲気になった所で、

「まだ！ まだ大事な議題が残っていますわ！」

「何だ？」

し水関をどうするのか。それについては公孫賛が偵察のつ

いでに落とす事になった。なんと言う無茶振り。

まあアホな挑発で乗ってしまう公孫賛も公孫賛だが。
では一体何が問題なのか？

「この連合を誰が取り纏め、仕切るかですわ！」
『……』

その一言に、全員が硬直した。

「そんなの袁紹がやるべきだろ。 なあ孟徳」
「そうね。 それで良いわ。 良いわよね麗羽」

もう面倒臭いから割り込んで決定してやった。本人も喜んでるし、良いだろ。

解散の一言も言わずに、軍義は終了した。ここから更にグダル様だったら、孟徳がやれよう、とか言うつもりだったので大助かりである。

そして天幕に戻ろうとした所で、北郷君に声を掛けられた。
どうしても俺と話し話しがしたいらしい。

孫策が袁術に呼び戻されても、良いですかと言う始末だ。

「そうだな。 俺も情報交換をしたいと思ってた所だ」
「ほっ、本当ですか!？」

パアアアアつと顔を明るくして、感激している。
その様子に思わず苦笑して、どうぞと天幕の中に入れた。

「んで、何でお前まで中に居んの？」
「あら。 いけなかったかしら？」

「いや良いけど、割り込んでくんなよ。話しを遮るのも無し」

一々孟徳の質問に付き合っていたら、時間なんてあつという間に無くなってしまふ。

不承不承、と言った様子で頷いてくれた。

「さてと。先ず朝風さん、と言うのを止めてくれるか？

同い年位だろ？」

「え？」

「え？」

思わずマジマジと北郷君を観察する。するが、やはり同い年位だ。前後2つ位は差は有るだろうが、そんなもん誤差だろう。

「えつと……え？ 同い年？ 俺と朝風さんが？」

「違うのか？ 俺は18になったばかりだが」

「18!? ええ!？」

「は？ 何どうなってるの？」

「俺が知ってる朝風さんは、28なんだけど……」

「……………」

「……………」

一体、どうなっているんだ……!？」

いや待て。俺はここがどこだが、予想を付けた筈だ……………!

つまり、世界Aが俺の元々の世界。

そして世界Aから10年後の世界Bが北郷君の世界。

これだと平行世界では無くなってしまふ……………んじゃないのか？
俺も詳しい訳じゃないからよく解らんが……。

「とにかく、俺の世界と、北郷君の世界は厳密に言えば違う世界だ」

「ええつと……」

「それでも俺は俺だ。 モンドグロッソで世界一になって、一年だよ」

「そう、なんですか」

「10年後の俺はどういう感じ？」

「モンドグロッソ三連覇してました」

スゲエな俺。適当に言った事実行してるぞ。それとも強敵が居なかったんだろうか？

「いやまあ、普通に喋ってよ」

「無理無理無理無理!! 無理ですって!! 日本人の男で

そんな事出来る奴居ませんよ!!」

「そつ、そうか」

俺何したんだろう。いや何するんだろう？ 怖い様な、楽しみな様な……。

「他には？」

「んーつと……色々有りすぎて……」

だから何をしてるんだ俺は。怖い。聞くのが怖い。

「なら私も質問して良いかしら？」

「え？ ああ、はい。 いや、えつと……」

「ふう。 良いよ。 答えてやって」

「葵に許可を出されるのは気に食わないけど、貴方にとって葵はそれだけの人間だと言う事だもね」

「それは勿論ですよ。 朝風さんは本当に、日本人の誇り

ですから」

晴れやかに笑う北郷君。確かに誉められているのは俺なのだが、俺では無い。照れるが、調子に乗るのは筋違いだ。

それはまだやっていない事なのだから……？

うん？　と言うと？　アレ？　何が引つ掛かってる

んだ……？

「私の質問は、葵は所帯を持っているか、と言う事かしら」

「はあ？　そんなの有る訳無いだろう」

馬鹿じゃないの？　と孟徳を呆れた目で見ると、うぐつ、

北郷君が息を詰まらせ、……え？　いや、え？

「あの……言いにくい、んですけど」

「構わないわ」

「……。言って、くれ」

「そのはい。　結婚、してらっしゃいますよ」

………。　けつ、こん……。　俺が？　誰と？

いや、そりゃ魅力的な人が現れたら、その、告白位はする、んだろうが……。　誰だ？　俺は一体、誰と一緒にいるんだ……!!

「誰だ。　誰と結婚するんだ!？」

「えと、はい。　セシリアさんです」

「!?　セツ、セシリア!?　そうか……。アイツと一緒にな

るのか……」

セシリアに好かれている。それ位は解る。

でも俺は、異性として意識していない。良い友人、位だ。

モンドグロッソから帰って来た時も、泣いて抱き付かれたり

もした。だが友人だ。

もしかして俺が押し切られた、のだろうか？

「知り合いなの？」

「うん。友人だよ」

「貴方、友達に手を出すのね」

「おいちよつと待て！ 俺もそうするとは限らないだろうが！」

「あら？ そうなの？」

「そうだよ。 世界Aと世界Bの俺は同じ人間だが、違う点も有る」

右手を上げる俺と、左手を上げる俺。

そうした小さな違いが、必ず生まれてくる。

「あれ？ とすると俺の国籍はどうなってるんだ？ フ

ランス？ イギリス？」

「いやそれが……」

「ん？ なに？ 遠慮しないで言って」

生唾を飲み込み、伏せていた顔をそっと上げて俺を見る。

その表情が、怒りませんか？ と言っているようで……。

一体何を言われるんだろうか？

「朝風さんの奥さんは、”一人じゃない”んです」

「……………」

二人して固まってしまった。

俺は今、何を聞いたんでせうか……。俺の奥さんが、二人？

「え？ はっ、あう？」

「……葬？」

「いやいやいやいや！　は？　待って、え？　誰？」

もう一人誰よ!？」

「？　えっと、ヴィオレッタさんですけど」

「そうか……。　コラングレインなら重婚が出来る……

！」

「はい。　そう仰られてましたよ」

俺は思わず頭を抱えていた。

「ただ金髪好きなんだよ俺B（仮）!!　確かに二人とも

タイプの違う綺麗な金髪だけでも!!

確かにコラングレインなら、法を曲げてそんな事も出来るだ

ろうけど……!!

「アアアアアアアアア」

頭を抱えて転げ回った。

もうね、何なの俺。モテ期に入って調子に乗ってたの？

ねえなんなのマジで。

「モテるのね葬」

「それはまあ、世界ーなんで」

「止めろお前等!!」

「ねえ。　貴方さつき、一人じゃない、って言ったけれど、

一体何人居るの?」

「っ!?　　っ!?　　っ!?　　っ!?」

「そうだ。北郷君は“一人じゃない”としか言っていない。二人だ、なんて言っていないのだ。」

「俺が勝手にそう思っていただけだ。いや、そう思ったかったと言うべきか。」

「えつと……」

「……名前を、上げていつてくれ。一人ずつ、順番に。敬称は略で良いから……」

「いつ、良いんですか？」

「……構わない……」

俺は胸を押さえながら、息を荒くして北郷君にそう言った。恐らく北郷君は二通りの意味でそう言ったと思うが、どちらでも良かった。

俺は聞かなければならない……。将来やらかすかもしれない事を！

……アイツ等に一々敬称つけてたら、長いから良いよ別に。

「それじゃあ……。あつ、あいうえお順に行きますね。

刀奈、簪、シャルロット、セシリア、ナターシャ、ヴィオレッタ、ラウラ、リーシャ、レン（敬称略）。以上9人……。あつ、もう一人。

メディア露出はしてないので、どんな字か解らないんですけど、かりん、つて人が」

「……………」

10人。有り得ない。有り得ないよ。え？ 何？ ど

ういう事なの？ 俺は友人全てに手を出すの？

と言うかレンちゃんは妹だよ!? ちよつと、ヤバイってマジで。

そして、かりん、か。

「かりん、なあ……。知り合いには居ないな」

「……」

「そうなんですか？」

「うん。 知らん」
「……」

孟徳がさつきから黙っているのは、多分冷たい目で見るのが忙しいからだ。

さつきから凄いい目をしている。

「はー……スツゲエなあ俺B（正式名称）。 何が有ったんだろう」

「ねえ葵。 何か忘れてるんじゃないか？」
「は？ 何が？」

……？ 別に何も忘れていない、と思うが……？

なんて顔を見ると、いよいよ孟徳の瞳が絶対零度の冷たさを帯びていく。

そんな目をされても解らんモノは解らんよ？

しばらく見つめ合うが（色っぽい事では無い）、孟徳は短く嘆息して、

「まあ良いわ。 答えはその内教えてあげる」
「はあ……？ あそう」

府抜けた感じで返事をする、ギリツと目を細め、ほっぺをつねられた。

「ふえ？ ふえ？」

「……」

「ふあの、……ふえ？」

「……………」

「もうふおふ？」

「もう！ 知らない！」

そして出ていってしまった。

何？　なのなのん？　え？　俺が悪いの？

でも孟徳だしな……。まあつねられる位どうという事は無いんだが……。痛くなかったし。

今まで直接的な行動には出なかったが、余程俺の言動が気に障ったのだろうか？

でも解らないモノは解らないしなあ……。

思わず北郷君と顔を見合わせるが、二人して首を傾げるしか無かった。

第12話 前哨戦

北郷君とまた今度会おうと約束をして天幕を後にした。

握手をしたが、よく鍛えられている。ちなみに北郷君に”アレ”の事を聞いてみたら、日本代表に一時なったらしい。

しかし本気になった簪とカナにボッコボコにされたんだと。徹底的にアンチして、簪が日本代表になったそうだ。思わず笑ってしまった俺は悪く無い。

ちなみにそれは、簪が嫁になる前の事なんだって。

それ俺Bは絡んで無いよな？ な？

剣道をやっているのは、”アレ”に憧れたからとかでは無くて本当に良かったようん。

まだむくれている孟徳を尻目に、俺も軍義に混じる。

最初の砦を攻めるのは公孫賛と劉備。

そしてその砦を守るのは華雄。荀彧の評価としては、そこまで強い相手でも無い、との事だが。

「それは呂布と比較して、じゃないだろうな？ 壁を越え

ている武人とそうでない者を一緒にしちゃダメだぞ」

「そんな事言われても知らないわよ。 アンタは武人！

私は文官よ！ 武力の事なんて知らないわよ！」

「まあなあ……そこは仕方無いよな」

そして二つ目の砦。

ここに呂布と張遼が居る。この前会った二人組だ。

ちなみにこれは最新情報らしい。斥候がさつき戻って来たばかりなんだって。

「その情報、公孫賛と劉備の所でも送ってやりなさい」

「……よろしいので？」

「公孫賛は小物だけれど、麗羽と違って借りを借りと理解出来る輩よ」

「その利子をふんだくるんですね解ります」

「……………」劉備と言うのは良く解らないけれど、公孫賛が信用する人物の様だし。戦いぶりは今回で把握出来るでしょう」

まだプリプリしてるので、変な間が有る。

さっきの連合軍義で俺が一番注目したのは、劉備の軍師である諸葛亮だ。

そう。孔明の罠で有名なあの人だ！ ニコ動とかで孔明罠ってコメが大量に流れてた時機が有ったから、調べてみたんだよ。

孔明ってのがどんな奴なのかを。

「孔明の罠には気を付けろ」

「なんだ、それは？」

「諸葛孔明ってのが仕掛ける罠がえげつないから、そんな名言が生まれたんだよ。待て、慌てるな。これは孔明の罠だ！
って」

今です、は伏兵の時に使ってたんだっけ。まあそんな事はどうでも良くて、

「貸しを作るのは公孫賛じゃなくて、劉備の方だ。特に諸葛亮な！」

「……………」

「なんだよ、まだ怒ってんの？」

「貴様っ！ 朝風！ 華琳様に何をした!？」

「なんもしてね……アレ」

え？　　かり、ん……？

「は？　　いや、え？」

「ようやく気が付いたの？」

「でも、は？　　いや、ええ！！　　だとしたら相当おかしな展開になりますの事よ！！」

そう。そうなのだ。

俺Bの嫁がかりんⅡ華琳Ⅱ曹孟徳の場合。これは相当ややこしい事になる。

……そう、か。感じていた違和感は、これだったんだ……！！

北郷君の言う事を総合すると、俺は孟徳を自分の世界に連れ帰って結婚した事になる。

つまり。つまりだ。俺は、世界Aに……いつか、帰れる、のだ。

だがそれは何時かは解らないし、未来は確定していない。俺が何かミスったりしたら帰る、と言う事が出来なくなるかもしれない。

楽観は出来ない。だけど、帰れる可能性が出て来たのだ……！！

「その、すまん。　　アレは俺が悪かった」

「……いいえ。　　貴方には私の真名を許していないのだから、失念していても無理は無いわ。　　つねってごめんなさい。

痛かったでしょう？」

「大丈夫。　　平気だよ」

しおらしく顔を俯かせて、上目使いで俺を見る孟徳は、その……凄く可愛くて……。

だから通用しないのが解つていながら、フエイトの真似で返してしまった。

有り体に言うのと、思わず照れてしまったのだ。

「……………」

何故か軍義の途中でラブコメしていると、

「軍義中、失礼しま……す？　　えと、華琳様？　　隊長？」

「っ!？」

「何？　　また麗羽が無理難題でも言い出した？」

直ぐ様気を取り直し、文謙にキリツとした顔を見せる孟徳。
俺はとっくに直つてるけどな！

「いえそうではなく……袁術殿が先行して勝手に軍を動かしたそうです」

良かった……。文謙が報告に来てくれて。

あのままだったら、絶対変な空気になったまま膠着してたよ
うん。

チラツと孟徳を見るが、やはり何時もの様にキリツとしていた。

俺は……内心ドキドキしてる。

この孟徳と、結婚？　　想像も付かない。そう言う意味で、
ドキドキしてる。

孟徳が元讓を押さえている。

孫策を助けに行きたいらしい。なんで孫策？

……そうか。客將の孫策を前面に押し立てての進軍か。

「桂花。この戦の結果も、一緒に公孫賛に送ってやりなさいやいなさい。共有して損は無い情報は遠慮なくね」

どうしようか？ 俺が行って、様子を見てみるか？

観察してみても、誰が一番の使い手なのか、それを見極めておくのも悪くは無いだろう。

さて……どうするか……？

なんて考えて居ると、さっさと伝令が行ってしまった。

ふむ……。まあ別に今行かなくても良いか。

……

……

…

砦、なんて言ったか……？ し水関、だっけ？ は随分

デカかった。

これは落とすのは長期戦になりそうだなー、なんて後ろでボケーっと見てる。

見てるだけ。いくらデカかろうとも、攻める事が出来る人数は限られている。

城じゃないんだから、余計だ。周囲は崖だし。

「終わったら起こしてくれ」

「いや、それはどうなん？」

「えー？ だってさー……籠城だろどうせ……。そんな簡単に終わるかよ……」

な簡単に終わるかよ……」

孟徳の近くに居るのは、何となく憚られたので、前線に来ている。

あくまで自軍の、だけどな。

「あれ？ 砦から兵士が出てきたの……」

「は？ んな訳……」

目を凝らすと、確かに出て来た。

何かわめき散らしているが、それまでは聞こえない。大方挑発にでも乗ったのだろう。

「クツクツクツ」

「守備隊の将ってどんだけアホやねん……」

「アツハハハハハ！ 笑かすなよ曼成……」

「綺麗な黒髪なのー」

「あ？ おお。 誰だありや」

笑いこけていたら、誰かが出て来た。どうやら一騎討ちするらしい。

なんで一騎討ちなんてするのか、俺には意味が解らん。
囲んで袋にしまえば早かろうに。

「そんな事言うのはお前くらいなモノだぞ、朝風」

「うん？ 妙才か。 何、お前も暇な口？」

「その様なモノだ。 アレは劉備の所の関羽と言うそう
だ」

おーおー。 アレが関羽かー。 三國志あんまし知らない俺でも知ってる英雄。

濡れ羽色の髪が美しい、美少女だった。 ヒゲオヤジの方も好きだけどな。

三國無双はよく五反田がやっているのを見てはいたが、○○の戦い、の内容までは覚えて無いんだよねー。

アレって一人で蹴散らしちゃうから、内容が全く解らないだ

よな。

「んで、どうしたん？」

「華琳様からの伝令だ。

し水関が破られたら直ちに進撃

を開始。

劉備達が様子見で引いた隙を突いて、一気に突破する」

ふむ……。まあアレが守備隊の隊長なら、罨は無いと見て良
さそうだな。

アレで演技なら大したモンだが……。罨だつてこんな世界
だ。そうえげつないのも無いだろう。

「そうか。

文謙、一気に駆け抜けろ。

罨は無いと

見て良い」

「はっ！」

「なんでやの？」

「アレがそんな頭を使うタイプに見えるか？ だとしたら
大した演技だよ」

「それもそうか……」

「それに、罨が仮に有ったとしても大した事無い。 そん
なモノを仕掛けるには時間が足りない」

この世界に火薬が流出してるなら話しは別だけどな。

もぬけの殻にして、敵が奥まで侵入して来た爆破。砦を犠牲
に大打撃を与える事が出来る。

それか、砦を支えるのに必要な柱だけを残して、後は全部壊
すとかな。

「？ それはどうなるのー？」

「引いた後に主要の柱を壊して、下敷きにする。

それと同時に時間稼ぎにもなるな。恐怖心を植え付ける、と
言う効果も期待出来るか」

「……隊長、ホンマにえぐいなあ……」

「罨だったら任せとけ」

GGOじゃ罨師だったからな、俺。

だんだん罨に嵌める事そのものが楽しくなってくる。

「おつ、じゃあ行きますかね。　　そういーん、突撃いいい！

全てを征服するのだ!!

AAAAA!　LaLaLaLaie

!!」

「なんやねんその雄叫びは!？」

……

……

…

砦を突発したからだろう。連合軍義が開かれた。

開かれたが、何で俺付いてきたんだろう？　　って本気で悩

んじやったようん。

えんしよーが文句を言っ来て来たのだ。

なんで進軍してるのよアンタ、と。

だから孟徳は、矛を引いた形で反撃を受けると厳しいから追撃した、と反論して現場判断で連絡がいきとどかなかったのは謝る、
と言ってのけた。

いや全然謝ってねえし、と言うのは内緒。

上から偉そうに謝罪されたら、俺ならぶっ飛ばしてるなう
ん。

「キーツ！　　上手い事言って！　　どうせし水関を一番で

抜けたかっただけなのでしょう！」

「結果的にそうなった事是否定しないわ。　　けれど、追撃

が目的だったのも確かよ」

「まっ、まあ二人共、そんなに熱くならないで。結果的に、私達も助かったわけだし」

「熱くなってるの片方だけって言うね」

劉備の後からボソツと、えんしょーに聞こえる様に言うと、俺をギロリと睨むが、逆に睨み返してやると直ぐ目を反らした。雑魚可愛い（笑）。

しかし劉備の奴……やべーな……。

声が安玖深音に超似てる。ネタで誰かの名前出すのが面倒な位だぜ……。

「どうしても言うなら、次の虎牢関攻略は私達が指揮を取っても構わないけど？」

なんて言っつて、指揮権をふんだくった。馬鹿なのも程が有るだろう……。何も考えてないで、ホイホイ同意しちゃったよ。

そして、虎牢関を守る将を捕らえる作戦なのだ。

呂布は俺が。

張遼の部隊を荀彧の策で、張遼本人は元讓が。

えらく興奮している。なんでも孟徳の信頼を受けているから、無敵なんだって。

「ふーん」

「ふーんとはなんだ!？」

「いやなんでも無いですハイ」

これ以上は絡まれるのが面倒なので、早足で立ち去った。鼻息が荒い元讓は、こっちがどんな言葉を言おうとも無意味だ。時間の

無駄である。

……

……

…

今回俺は最前線。呂布捕獲の仕事が有るからだ。
馬に乗り、既に槍を抜いている。

この前の大勢、と言うか、見せたのは文謙だけだ。……妙才
は見られた、か。

精々見惚れるが良い。鋼の聖女より受け継いだ槍の冴えを。

「見せて貰うわよ。 貴方の本気……」

「ああ。 任せろ」

孟徳に背を向けた所で、典韋に話し掛けていた。

結局余り喋る時間が無かった。帰ったら話しを聞きたいモ
ノだ（死亡フラグ）。

そして孟徳の号令を聞いていく。

鼓舞、か。成る程。理にかなっているな。確かに、負ける気
がしない。

まあ戦いのドラムとか、不思議なタンバリンとかの方が凄
いと思うけどな！

不思議なタンバリンは2個作ってしまうと、途端にヌルゲー
と化してしまう恐ろしいアイテムなのだ……！

なんて事を考えながら、敵陣に斬り込んで真っ直ぐ引き裂い
ていく。

立ちはだかる者には無数の突きを。

左右後方から群がる者には薙ぎ払いを。

体が、槍が軽い。視野も広く取れている。

今日は、中々調子は悪く無い。

まずは華雄。突出しているアホ。

アレを倒すか、窮地に追い込んでやれば残りの二人の内どちらかは躍起になって助けようとするだろう。

そこが狙いだ。そもそも今の俺はとんでもなく目立ってるし。

「死にたくなければ道を空ける!!」

それでも立ち塞がる華雄の部隊の兵士達。

肩を突き、武器を壊し、膝小僧を割り、喉を破り、心臓に突き立てる。

必ずしも殺す訳じゃない。人はそんな事しなくても、戦えなくなる。

その場その場で、常に適切な行動は変わる。

「隊長一人で行かせたらあかんでえ!! ウチらも続け!!」

『応ッ!!』

自画自賛するのは嫌なのだが、破竹の勢いで駆け抜けけると、ようやくそれなりに腕の立ちそうなのが現れた。

「調子に乗るなよ雑兵が……!!」

「ふむ。 お前が華雄か? そこそこはやる様だが……」

「？」

「抜かせ! 今からこの華雄が一撃で持って切り伏せてくれる!」

「たわけ。 敵の戦力把握もろくに出来もしないでアホな事を……馬鹿か、お前?」

「くっ、言わせておけばあ……!!　　ざりやあ!!」

馬を走らせハルバードを大きく振り回す。
横に一閃して来た。なので、

俺は態々ハルバードの先端部を狙って突きを繰り出した。

「なっ!？」

「惚けてる暇が有るのか?　　余裕だな」

ハルバードを大きく押し戻し、更に突いていく。

ガガガガガと耳障りな金属音が周囲に鳴り響く。

俺の目的は、華雄の撃破では無い。

態と大きな音を立てて、俺の居場所を知らせ、引っ張り出す
のが目的だ。

「ばっ、馬鹿な……!　　速すぎる……!!」

「どうした?　　反撃しないのか?　　欠伸が出て来るんだ

が」

少しずつ、少しずつ傷を増やし、出血させていく。

ハルバードに突きを集中させて、亀の様に縮こまらせる。そ

して体力が無くなって来た所を、遠慮無く刈り取ろうとして、

「嘗めるなあ!!」

馬を後退させながら、ハルバード振り回す。

俺の事も少し遠ざける事で槍の範囲から逃れたのだ。

恐らく勘でやっているのだろう。ヘタしたら致命傷を負い
かねない。

だがじり貧だったのも事実。あのままやっていたら、間違い

なく倒れていた。

「あつー！ やつとおつた、このど阿呆！！ とつと帰るで！！」

聞き覚えの有る関西弁が聞こえて来た。

何やら怒り心頭、と言った具合。怒り新党では無いです。

「離せ張遼！ 私はまだ戦える！！」

「ただアホ晒せば氣イ済むねん！！」

体勢を崩さなかったのは流石、と言う所か。自分の得物だけは最後まで離す事は無かった。

「うわあああ……今氣イ付いたけど華雄アンタ、ボロボロやん」

「ぐつ、つ……！」

「久し振りだな、って言ったって解らんか」

「いや、覚えとるよ。 曹操の所に居った目付き悪い兄ちゃんやろ？ その後恋（れん）、睨んどった」

「……」

恐らく呂布の真名、だと思う。

ここで張遼とやりあつても良いのだが……。

「華雄を回収に来たんだろう？ 持って帰って良いぞ」

「……なんやて？」

「背中を見せたら襲いかかると？」

まあチェス盤をひつく

り返したら俺も同じ事を考える」

張遼がちえす盤？ と呟いているのは無視する。

元讓があれだけやる気になっていた。それを横から持つてくのはいかなモノかと思う。

目の前に現れたからと言って、俺が倒さないといけない、と言う訳じゃない。

「俺の目的はあくまで呂布。 張遼、アンタはウチの猪が仕止める」

「猪……？ 姉妹のやんちやの方か」

「ハッハハハ。 それで通じんのかよ」

槍を格納（クローズ）して戦意を納めた所で、

「……霞（しあ）。 ……ねねから連絡」

「何や!? 手短になー!」

呂布が現れた。戦うべきなんだろうが、一度行けと言ってしまった。やらかした。言うんじやなかった。

そして張遼が報告を聞いていると、顔を真っ赤にして報告を持って来た者を怒鳴り散らしていた。

いや可哀想だから止めてあげて。

「……霞」

「次から次に何や!! ウチ、一人やねんぞ!!」

「全くだな」

「……………関に人」

釣られてそちらを見ると、関羽が突撃している所だった。おー。やるねー、とか思っていると、

「ちよつ、ヤバイ! ウチ等の帰る所が無くなってまうで

!!」

「……………先に行く」

「………任せた、言いたい所がやけど、兄ちゃん。　　恋来たけど、どないするん」

「いやいいや。　　行け行け」

手をヒラヒラつと振って、背中を見せる。

戦意が既に無い事を解りやすくアピールしてやった。

「ちよつ、ええんですか隊長!?!」

「良いよ。　　……ところで曼成、手に持っているのはなんだ?」

「へ?　　槍ですけど」

「……。　　後で話しが有るから、陣に戻ったら来る様に。」

”それ”も持って来いよ。　　良いな?」

「……………はい(なんやの隊長、めっさ怖いんやけど………!?)」

俺達のやり取りを聞いて、本当に戦う気が無いんだと言う事を確信した張遼は、

「すまん、恩に着る……!　　増員撤退!!　　恋、先行してく

れ!!」

「……………解った」

張遼達はさーつと退いていった。
さてと……。

「曼成、俺達の隊も撤退するぞ。　　指示を頼む」

「はい………つて、隊長はどないするんですか?」

「呂布を追い掛ける」

「………え?」

「戦わないとは言ったが、ピーピング、覗かないとは言っていない」

それだけ言って、もう一度背を翻し呂布の後を追っ手いく。一応手には剣を握っている。腰に付けてるショートソードな。

少し行くと、呂布が戦っているのが見えた。
アレは顔良と文醜か。

ただの一撃で二人を薙ぎ払った。

あの二人では荷が重い。壁を越えた武人を相手にするには、同じく越えた者か、それに近い者が三人は居ないと、とてもじゃないが厳しい。

それでも負けはしないが勝てもしないだろう。

二人を吹っ飛ばし、今度は関羽と孫策、それと仲康と同じ位の背丈の少女が向かっていく。

それでとまともに打ち合う事は出来なかった。

ふむ……。成る程、大体の実力は把握した。

これだけでも大収穫だろう。

「帰るか……。一応話しだけ聞いておいた方が良いかなー……。んー……。まいつか」

本陣に向けて馬を走らせる。

翌日、この虎牢関が全くの無人になるなど、露程と思わずに。

第13話

情報収集と都の攻略

曼成を叱りつけ、ドリルみたいなキメラランスをぶっ壊して眠りついた。

そして清々しい気分で眠っていたら叩き起こされたのだ。偵察から入って来た報告がとんでも無いモノだったのだ。

「はあ？　虎牢関が無入？　ソイツは何の冗談だ」

「麗羽が偵察を行かせて、その後私達も出したの」

「裏が取れてるのか……」

意味が解らん。将は三人共健在。砦の損壊が激しい訳でも無い。

攻略は始まったばかりなのだ。

かと言って都に立て籠りたかった、と言うのもおかしい話だ。

虎牢関が落とされた後ならまだしも、現状でそれをするのは意味不明だ。

まして都には一般人が大勢居る。

余分なケアが必要になってくる。

「……毘？　……あそこに俺が仕掛けるとしたら……」

殺人的で、凶悪なモノは幾つか思い付く。

この世界の技術力でも何とか可能な奴を。

その中でやるとしたら、中心部に見えづらい糸を仕掛け、引っ掛かったら撒いてある油に火を付ける、とかか。

あからさまなモノを少し手前に仕掛ける事で、糸に余計に気付きにくくすれば完璧だ。

しかし砦全部を燃やす程の油なんて常備してるか？　火を放たれたら自爆するぞ。

「うーん……ちよつと考えづらいな」

「では、他所から挙兵が有った、と言うのはどうでしょう」

「それならえんしよーが声掛けてるだろ。あゝの呂布と戦

うんだ。少しでも戦力が欲しいだろう。

加えていうなら、ーが声を掛けられない程弱小勢力なら将を一人とー部隊で討伐に行けば問題無い」

昨日の華雄は強かった。俺が足止めに徹したから大した反撃をしてこなかったただけだ。

「葵の言う通りね」

「やっぱ罨かなあ？」

「そうとしか思えないけど……」

軍師の荀彧がうんうん唸っている。
罨としか考えられない。……。

「どこかの馬鹿が功を焦って関を抜けてくれれば良いのです
が……」

「流石にそんな馬鹿は居ないでしょう。春蘭でもそんな
事はしないわ」

「クツクツクツ……信頼されているなあ？」

「朝風！」

「すまんすまん。このままここに居ても時間の無駄だ
ぞ。それこそ敵の思う壺、と言う奴だ。どうする？俺が

行っても良いが？」

『はあ!?!』

「ISなら例え火事になろうが、爆発が起きようが、建物が倒
壊しようが、問題無いぞ」

絶対防御を抜けるのは、本当に壁を越えている武人だけだ。それ以外で抜こうと思ったら、それはとても大変な事なのだ。

「こんな事で切り札の二枚目を切るのはアホらしいとは思いますが」

「そんなのダメに決まってるじゃない。そもそも貴方のアレは、こんな所で使うには派手過ぎるモノ」

そりやそうだ。ただでさえ目立ってたんだ。これ以上悪目立ちする必要は無いか。

一応言ってみただけ、つてのが一番に有るけど。そーゆー選択肢も有るのよー、的なね。

「華琳様ー。今連絡があつて、袁紹さんの軍が虎牢関を抜けに行つたみたいなのー」

『……………』

思わず全員固まつてしまった。

なんとと言う抜け駆け。でもまあ罨が無い、つて言う事が得られた。

……………

……

…

そのまま行軍し、都を攻める事になった。散発的に攻撃を開始しているが、どうにもこうにも上手くいかない。

それがここ数日での成果だった。

今までがトントントン拍子で来ただけに、俺はもう面倒になつて来た。

まあこれが普通だとは思うが……。結局虎牢関を捨てた理

由はサッパリ解らなかった。

張遼が部下に怒鳴っていたのが原因じゃなかろうか、と辺りは付けているがそれだけじゃ流石にヒントが無い。

呂布や張遼はおろか、華雄すら出て来なくなった。まあ次出て来たら先ず間違いなく見殺しにされるだろうが。

取り合えず俺は、呂布が出て来ない以上仕事は無い。

なので劉備軍の陣営に向かっていた。何故か？ 直接相対したあの二人に話を聞いて観たかったからだ。

「ちよつと良い？」

「え？ はあ……」

「俺さ、曹操の所の朝風ってんだけど、関羽さんと話しがしたいなー、なんて思ってたんだけど……ちよつと聞いてみてくんない？」

「え、ええ？ おい……」

二人居た見張りの両方にそんな事を言うと、二人は困った様に俺を見る。

そりゃ困るわな。俺も無茶苦茶言ってると思う。

「解りました。聞いてきます」

少しの間、二人で相談していたが、一人が走り去っていった。どうやら聞くだけ聞いてくれるらしい。いやー……助かるわー。これで無理だって言われたら孫策、ってか北郷君の所に行くしかなかったからなー。

「どうぞ。 関將軍がお会いになるそうです」

「おつ、マジか。 なんだ結構話せるじゃないか」

なんてちよつとウキウキして天幕に案内されたが、

「え？」

そこに居たのは、劉備、関羽、諸葛亮、そして関羽と一緒に居た少女、それにいつかに会った、残念そうな美人。まだチラホラ、見掛けた事の無い娘。それと公孫賛。

「ついでみたいに言うなよ!!」

「ちよ、白連ちゃん、どうしたの？」

「いや、なんか言つとかなないと、つて思つて」

「貴様……世界か!! 俺はお前だけは許さねえ!!!」

「ええ!？」

あえてカオスに乗ってみた。

ついでに世界を許さないのは本当。アイツさえしつかりしてれば、あんな事には……!!

「まあ、冗談は置いてだな。 迎えてくれてあんがと。

俺は朝風葵。 よろしく」

ニコツと笑いかける。

もつと少人数でお話かと思つてたんだけど、全員なのね。いや解らないけど。

「私が関羽だ。 話しがしたい、との事だが……」

「うんそう。 ついでに言つとくと、これはプライベートだから、孟徳の所用で来た訳じゃないぜ。 ここはハッキリさせとくな」

そもそも誰かに断つて来た訳じゃない。完全に独断である。まあこんな機会でも無いと、まともに話せ無いだろうし。

「ぶらっ？」

「んで何が聞きたいかと言うとだな、呂布だ」

「なに？」

「呂布と一戦交えてどうだった？　　つてのが聞きたいんだ

よねえ」

「ふむ……」

そこで張飛（鈴々と自己紹介された）と共に話しをしてくれた、んだが……いまいち要領を得ない。

人智を越えた強さだった、と。

速い。一撃が重い。三方から同時に掛かっても無理だった、等々。数合も合わせる事が出来なかったと。

そんなどうでも良い情報ばかりだった。

俺が聞きたいのは癖やら性格、そう言うのだったんだが……。

恐らくそう言うのを引き出す前に勝てない、と悟ってしまったのだろう。

「そっかあ……」

「どうやら役に立てなかった様だ」

「いやいやそんなこと無いさ。　　目の保養も出来たしな」

なんて言いながら、関羽に向かってニヤツと笑いかけた。黒髪のロングストレートで、俺好みのキリツとした顔。背は高めだし。そしてスタイル抜群。

「ん？　　それはどういう……」

「この御仁は、愛紗が好みだと言っているのだよ」

「まっ、そう言う解釈で良いけど……久し振り、と言っても覚えて無いかもしれないが」

関羽は、絶句して顔を真っ赤にしてしまった。何この娘可愛いんだけど……。

そして青髪の美女に向き直る。そう。この人は俺がこの世界に来て二番目に会った。

「覚えていますよ」

「知り合いなの？　星ちゃん」

「知り合いと言うには余りにも短い時間だったかな」

星、と呼ばれた女性は趙雲と名乗ってくれた。
それを皮切りに次々と自己紹介していく面々。

劉備、諸葛亮、鳳統、それと公孫賛。
これで全員の顔と名前が一致した。

「それにしても、虎牢関で華雄の軍を切り裂いて行ったのは凄まじかったですな」

「見てたのか」

「初めて会った時から只者では無い、と言う気はしていましたが……よもやあそこまで腕が立つとは思いませんでした」

「そりやどうも」

いまいちどうやって反応して良いのかが解らん。特別凄い事したって訳じゃないんだがな……。

「そっちからは何か有るか？　俺ばっか話を聞いたん

じや不公平だ」

「それでは、朝風殿の檣についてお聞きしたい」

「ちよい待ち。朝風殿、なんて止めてくれ。葵で良
いよ」

関羽にそんな風に呼ばれると、くすぐったくて仕方が無い。
頼むから呼び捨てかさん付け、或いは名前で呼んでくれ、と
言う朝風さん、で落ち着いた。良かったあマジで。

そんでランスについて、知ってる事を適当に話していく。

「こんな感じかな」

「ありがとうございます」

「しかし、こんなんで良いのか？ 例えば孟徳に何か頼み
たい事が有る、とかそう言うのでも良いのよ？ 実行出来るかどう
か別にして」

「いえ。大丈夫です。ですね、桃香様」

「うん。ありがとうございます、朝風さん」

「あそう？ なら良いんだけどね、うん」

そこで会話が途切れた。

良い機会だから、関羽をジーッと見詰める。

「あつ、あの……う？」

頬を赤く染めて、照れている様子がもの凄く可愛い。多分年
上なんだろうが……やっぱり俺年上が好きなんだろうか？

篠ノ之が似たタイプだが、とてもじゃないがそんな風には思
わない。

関羽の完勝である。

それに声も良い。黒河奈美―俺は奈美姉さんと呼んでるん
だが―にそっくりだ。

さやか姉さんとか、メタトロンとか、後は茉清さんとか。

奈美姉さんは好き。マジで。

「さてと……」

「目の保養はお済みですかな？」

「っ！　　星ッ！」

「あつ、バレた？　　関羽さんがそろそろ怒りだしそうだし、

行くわ」

「うううう……！」

「情報ありがとな、関羽さんに張飛ちゃんも」

「あんなの全然大丈夫なのだー」

「……」

ヒラヒラと手を振って、最後に関羽を見詰めるが、顔を赤くしてむくれていた。

なので小さく笑い掛けて、劉備達の本幕を後にした。

それじゃあ孫策、と言うか袁術の所に行くか。

入れてくれるかしら……まあ突撃しよう取り合えず。

……

……

：

「クッククック……愛紗よ。　　そなたの照れた顔、中々

に見物だったぞ」

「ううっ、うるさいぞ!!」

「愛紗が照れてたのだー！　　めっずらしい！」

「……鈴々……!!」

「鈴々の時だけ反応が違うのだ!？」

「待てえ!!」

張飛の悲鳴が劉備の陣に響き渡った……。

……

……

…

袁術の所でも劉備の所と似た様な事をして、中に入ろうとしたのだが……。

「申し訳ございませんが、面会は遠慮下さいい」

「え？　　なんでよ？」

態々袁術の軍師である、張勲が出てきて俺にそんな事を言っ
た。

訳を聞くと、袁術には話しを通してないのだが、余り目立つ
行為をすると睨まれるから何とか何とか。

客将だから仕方無い、のかな？

まあそんな事は建前だろうが。

結託されるのは困る、と目の前の軍師さんは判断したのだ。
何だ、どさくさに紛れ後ろから味方をぶつ殺すとも思っ
んのか……。

まあ、正しいけどさ。孟徳はともかく、俺は躊躇いませんハ
イ。

卑怯な事が、と言うか卑怯な事をして歪む相手の顔を見るの
が好き。……一番歪んでいるのはボクです。

北郷君には悪いなー、と思いながらも自陣に戻る。
すると孟徳に睨まれてしまった。

「どしたん？　　なんで進展あったかね？」

「無いわ。　　それで、貴方は何をしていたの？」

「呂布の情報集めてた。　　有益なのは皆無だったけどな

！

「威張って言うのは止めなさいな……」

呆れた様に嘆息している。溜め息吐くと皺増えるよ？
なんて言うつぶん殴られるので黙っておく。

関羽と喋って来たけど、可愛いかったー、なんて言うのも止めておいた。

頸が無くなっちゃうからな（笑）。

「やはり都は固いか」

「ええ。これでは何日掛かるか解らないわね」

「城を攻略しようと思ったら確か……んつと、三倍は兵力が必要で、それで同等だった筈。

まともに戦おうと思ったらもつと多くの兵がいるんじゃないかなったかな？」

「あら、そうなの？」

「うん。何で見たか忘れたけど、統計で出てるんだ」

そして城を攻略するのは、包囲。いわゆる兵糧攻め。

それと強攻、交渉、城壁の破壊、なんかが有る。

交渉は望めないだろう。

強攻、城壁の破壊は既に試しているだろうし……。

「こう言う時はチェス盤をひっくり返して考えるんだ」

「それはどういう意味なのですか？ 私にはいまいち良く

解らないのですが」

「そう難しく考えるな文謙。要は、お前はあの城を守る隊

長で、それを攻めてるのが俺。んで攻めてくるんだけど、何を

されたら一番嫌なのかを考えるんだ」

大抵うざい事Ⅱ戦略として強力だからな。

特に遊戯王な！ 手札捨てられるのはうざい。それを連

発されると詰む。

場のカードを手札やデッキに戻す。うざい。それを連発さ

れるとともに動けない。詰む。

墓地のカード、もしくは墓地に行くカードを全部除外される。うざい。墓地に頼るデツキなら詰む。

環境にもよるが、うざい事を連発されると詰む。

そして考えてみる。自分は城を守っている指揮官。

何が最悪なのか。

……簡単だった。超簡単だった。

師匠達が城攻めに参加する、だった。

すいませんごめんなさいもう二度としませんって言いながら土下座しちゃうレベル。

違うコレじゃない。個人の戦術は度外視しないと意味無い。とは言つてもどうしても頭にちらつく。

IS部隊が大挙して来て超火力で城ごとジエノサイド。

うーん……有りだな。と言うかもうそれで良くない？ あかんの？

うざい事……うざい事。……うーん。

兵糧攻めは人道的じゃないし、都を傷付けるのもダメ。

ならもう、対象を兵士にするか……？

兵士にやられて嫌な事。

マインドコントロール、何らかの誘惑、激しい疲弊。

この辺りか。とすると……。

「寝かせない、か」

「え？」

「都に詰めてる兵士の数の詳細は解らんが、そう多くもある

まい」

「そうね……」

「なら朝も昼も夕方も夜も、絶え間なく、攻め立て続ける」

「それは……少し難しいわね。士気を維持できなくなる

わ」

そうか、納得しかけたが、そうじゃない。

どうせ連合はアホ程いるんだ。ならば、

「連合で当番制にする。別に全員で攻める必要は無い。

あくまで寝かせないで、立て籠るのを諦めて貰うのが狙いだから
な」

「うわ、アンタエグいわね本当に。やっぱり捻くれてる

じゃない」

「うっさい。こん位しないと本当に負けるぞ」

糧食、費用、士気。それらは目減りするばかりで、決して増
えないのが常だ。

特に士気な。それこそ張三姉妹を連れて来てライブ開かせ
る、位はしないと。

「実現するかどうかは置いてき、提案だけしてみたら？

どっかの誰かが穴を指摘するか補強してくれるかするだろう」

これで行けると思うんだけどなー……。

……

……

…

全諸公を集めての軍義を開いて、策を練る。

軍師だけで無く、様々な立場から意見を取り入れるべきだ。

お決まりのえんしょーと愉快的仲間達が繰り広げるコントは無視する。

24時間を六等分し、どこが一つが必ず攻め続ける。
そしてそれを六隊用意し、埋め尽くしてやる。

「えげつないですねー……」

「誰か意見が有れば言ってくれ。　穴が有ると困る」

「大丈夫よ。　私と桂花で考えたのだから」

「お前には言ってねえよタコ助。　他は？　無いか？」

「タコ助……!？」

「アンタ華琳様に向かってなんて口を……!!」

俺達は俺達でコントをしながら、作戦を提案して、採用された。

そして直ぐ様それを実行に移したのだった。

第14話 決戦

朝も昼も夜も、貴方の隣に這い寄ります、作戦を実行して数日。

ようやく敵さんは理解し、決心してくれたらしい。
すなわち、このまま戦っていたら削り殺される事を。

「敵の反抗がいつもよりも大人しかった事から、今日明日中にも決戦を仕掛けてくると思われます」

「ならこちら、しっかりと準備を整えて」

「攻撃はこのまま続け無いと意味が無いわ。 ここで兵を退いては敵を休ませる事になるわ」

現在軍議中。何時も通りえんしよーはアホな発言をする。
もーコイツ黙ってろよ……。

「だったら、ハズレを引いたらどうなるのじゃ!」

「ハズレ……言い得て妙だな」

「そりゃ運が悪かったら、そのまま決戦に参加するか、撤退するしか無いんじゃないか?」

「そんな不名誉な事、妾は嫌なのじゃ!」

「そうですね! 今日からしばらく、貴方達だけで城攻めをなさい!」

「……」

「なんだそりゃ!」

「……………」

「葵、落ち着きなさい」

眉がピクピクし、思わずが怒気漏れ出していく。

何とか我慢していたが、孟徳の言葉が無ければブチ切れていただろう。

「それならそれで良い。 足手まといなんぞいらんからな」

「ヒイツ!?!」

「……ハア。 袁術の代わりは私がするわ」

「なら、私の代わりには……劉備さん」

「はいっ!?!」

「貴女の軍、有能な将がたあくさん居る様だから、隊を二つに分けても何とも有りませんよね?」

「え、そつ、そんな……!」

「……………」

「だから、落ち着きなさいってば」

ヤバイ。ヤバイヤバイ。怒鳴り散らしたくなって来た……

!!

青筋立っているのすら、自覚出来る程ピクピクしている。

「劉備には、私の兵を貸すわ」

「曹操さん……」

「孟徳! 俺はもう行くぞ、胸糞ワリイ」

俺は近くの木を蹴っ飛ばして、本陣に戻って行った。

……

……

…

「麗羽、この連合軍の最高戦力を余り怒らせないでくれるかしら……」

「ちよつ、木が、木が……!」

「うわー……スツゲエなあの人」

葵が蹴り飛ばした木が、音を立てて倒れた。そんなに太くは

無いとは言え、まさか木を蹴り倒すとは思わなかった。

「でも彼が最高戦力、と言うのは聞き捨てならないわね」

孫策がイタズラっぽく笑っている。しかし、その目は獰猛な光を宿していた。

だが事実である。

「ふふ。それは決戦の時に明らかになるわよ。それじゃあ、布陣を説明するわよ」

……

……

：

なんなんだあの女……。全く腹が立つ。

我が儘なのは、まあまだ良い。

しかし、配下でも無い別の誰かに迷惑を掛ける事なんて有り得ない。

決戦になったら、真っ直ぐ後ろに切り込んでやろうか。或いは呂布と一緒に、えんしょー陣を崩壊させてやろうか……。

「物騒な事を考えるのは止めなさいな」

「ふん。いつその事星閃で暴れてやろうかあのクソ女。

何時か絶対ぶっ殺してやる」

「……と言うか貴方、なんでそんなに怒っているの？ 確かに麗羽は度し難い程の愚者では有るけれど、貴方に直接火の粉が降りかかった訳では無いわ」

……確かに。言われてみればそうだ。
だけどもカツクものはムカツクのだ。

「知らん。俺が聞きたいわ」

「そう……なら良いのだけれど……足は大丈夫なの？」
「うん？ ……あー、大丈夫だ」

特に痛くは無い。と言うか、痛いのはイヤだったので気を纏わせていた。

咄嗟に出来る程度には、俺も上達していた。
まあそりやそうだ。文謙との訓練を毎日続けて来たんだ。
上達しなければ困る。

「さつきは、怒鳴って悪かったな。 関係無いのに」

「良いわよ、それ位。 貴方の珍しい姿が見られて、寧ろ良かったと思っている位よ」

「はあ？ ……なんだ、そりや……」

訳が解らん。もっと罵詈雑言を浴びせてくるかも思ったが、ってそれはあの猫だけか。

「んで、どうする？ 俺も攻撃に回るか？」

「いいえ。 貴方と真桜の部隊には待機していて貰うわ。」

呂布が出て来た時が仕事と心得なさい」

真桜って誰？ ……って聞きかけて慌てて口を閉じた。

曼成の真名だ。危ない危ない。

「ん……ならそうするわ」

「ええ頼むわ。 時期は伝令するわ」

最後の確認をする為に、孟徳の所を後にした。

……

……

…

決戦が始まって何時間経ったのか定かでは無いが、ようやく敵陣が総崩れとなった。

そしてそこで突撃の合図が送られて来た。

「さてと……行くぞ曼成。ちゃんと着いて来いよ」

「はいよ！　いくでえ皆ア!!」

『応ッ!』

「さあ、進撃だ……!!」

馬を走らせ、立ち塞がる者を排除していく。

陣形は崩れ敗走しても良いのに。それでもなお立ち塞がる。

「その心意気、これこれ天晴れ、かな」

それでも心を凍らせて、敗残兵を駆逐していく。一人残らず。確実に……!

「呂布は、どこだああ!」

……

……

…

「……」

「くっ!?　　呂布め、何と言う強さだ……!?」

「流流!　　いっちー、ちびっこ!　　もう一度仕掛けるよ

!!」

「うん!」

「おっしゃ!」

「チビにチビって言われたく無いのだ!」

「……………何度やっても、無駄」

四人が一斉に仕掛け、私も透かさず援護の弓矢を掛けるが、

続けて弾き返される。

季衣や流流は勿論、張飛、文醜のいずれも剛の者だ。

それを私も含めて五人も相手に、押し込む所か押されかねないとは……!!

「そうかあ？　背中ががら空き……！」

「……無駄」

「甘いのだ！」

「……………無駄」

背後から仕掛けた文醜をいなし、張飛が重心を崩そうとするが、目が複数個付いているのか、と問いたく様な反応をしてくる。

「……やはり関羽でも連れて来ねば、足止めすら厳しいか……!!」

思わずそんな言葉が漏れてしまう。

しかし事実そうなのだ。もう一段階上の者が居なければ……。

「恋殿！　恋殿はいずこに!!」

「……………」

軍師と思わしき少女が呂布に何事かを伝えている。

今も隙を伺っているが……そんなモノはどこにも有りはしない……!!

「なら、行く」

「はい！」

「……………」

呂布がこちらを睨みつける。
本来ならここは行かせるのだが……生憎とそう言う訳にも
いかない。

「悪いが、足止めさせて貰うぞ。 まだ行けるな、季衣、流
流！」

「はい！」

「よし……そっちの二人は？」

「まだまだ全然余裕だつて！」

「少なくともそっちの春巻き頭のチビよりかはやれるのだ」

「それは頼もしいな」

頼む……速く、速く来てくれ……朝風!!

……

……

……

「……。 なんだ？ ……？」

「隊長？ どないしはったんです？」

「いや……何でも無い」

誰かに呼ばれた様な、そんな気がした。

……何と無く、コツチに行ってみたい気がする。
なんでだろう……？

「こつちだ」

「ちよつ、隊長!？」 待ってえな！」

馬を走らせる。すると、

「クツ……！ 朝風は、まだか!？」

「呼んだ？」

「っ!？」

馬から飛び降りつつ、槍を取りだし着地と同時に振るう。

「待たせたな（スネークっぽく）」

「……。全くだ……」

呂布が、居た。

成る程……コイツはどうして、中々のプレッシャーだ……！

「ここは任せろ。お前等は行け」

「イヤイヤイヤイヤ！ 兄ちゃん一人じゃ無理だって!？」

「邪魔だから行けって言ってるんだ。良いから行け」

弾き飛ばした呂布に歩み寄る。

互いの間合いに入らない、ギリギリの位置に。

「久し振りだな」

「……………」

返事はせずに、一つ頷く。

やはりあの時俺を見ていたのは間違いでは無かったのだ。

「悪いが、お前を捕らえさせて貰うぞ」

「……………」

返事はないが、武器を構えた。

やり合ってくれるらしい。無言なのは、少しやりづらいな。

大きく一步踏み込み、突きを一発繰り出す。

ギンツと音立てて防がれる。

今のは太股を狙った。少なくとも、華雄ではバランスを崩し、次の攻撃を防ぐ事は難しくなるだろう。

「セイセイセイセイセイセイ!!」

無数の突きを繰り出し、反撃をさせない様に戦況を運んで行く。

華雄と同じく、防御に徹させ少しずつ傷を作らせていく作戦に出たのだが。

「……………」

受け、流し、躲し、見極める事で、その浅黒い肌に傷付ける事は敵わない。

小賢しい、と矛を振り回し強引にリズムを崩してくるかと思いきやそうでも無い。

恐らく、見極めている最中なのだろう。理性では無く、本能で……………!

「スツゲエ……………」

「あの兄ちゃん、凄い速さなのだ……………!」

外野が何か言っているが、既にそれも遠い。

俺の目的は、呂布の撃破では無い。

体力を削り切ったからの捕縛だ。

倒す必要は無い……………!

「……………」

サイドステップで、一瞬視界から外れる。喉を突こうとした、その一瞬。

恐らく時間にして、1／10秒。刹那のその瞬間、先読みされた……！

ブンツとうなりを上げて矛が振られる。
慌ててしゃがんで回避するが、そこに続けて縦振りが来る。
槍を斜めから当てて、そのまま時計回りに力を逃がしてやる。

ドツツツン!! と大きな音を立てて粉塵が舞い上がる。

「朝風ッ!？」

「つぶねえ……。大丈夫、平気だよ。……フウ……」

フウ……。フウ……。行け、妙才」

「……しかし……!」

「こんなこたあ言いたく無いが、今のお前に、出来る事は有るか？」

「……。すまない。季衣、流流。行くぞ」

「秋蘭様ッ!？」

妙才が行くと、二人も付いて行った。

張飛と文醜は残って居るが、まあ見物位は良いだろう。

まともに受けてたら、槍に罅が入っていた事だろう。

実力的に見て、執行者とそう変わらないだろう。単純な攻撃力、防御力、回避能力は、の話しだが。

「流石は、天下無敵の飛將軍か」

「……。何度やっても、無駄」

「そうかもしれない。だけど、そうじゃないかもしれない。
俺には有って、アンタには無いモノが有る。何か解るか？」

「……………?」

「自分よりも、遙か格上との、戦闘経験だよ」

踏み込み、槍を、矛を振るう。

呂布の動きを先読みしようとする、負ける。

何を考えているのか解らない相手に対して、それを見据えようとすると失敗する。

そこから音を立てて崩れていき、敗北する。

正直に言えば、レーヴェを相手にしているのとそう変わらない。

攻撃力、防御力、反応速度。特にこの三つは、下手をしたらレーヴェよりも上回っているかもしれん。

だが、それでも俺は多分、こう思うだろう。

今ここに立っているのが俺じゃなくて、レーヴェなら、勝ててしまうだろう、と。

呂布は本能に従い、回避し、攻撃してくる。

しかしそれでも、癖と言うのは必ず存在する。

突きを繰り返す回数は少ない、右から攻撃を仕掛けてくる事が多い、足運びは少し雑、等々。

恐らく誰かに教えを説いて貰ったのでも無ければ、鍛練もしていないのだろう。

確かに、鋭く、重いが、一撃一撃がやや雑なのだ。

「はっ、はは……。あの呂布と、まともにやり合ってらあ

……」

「ひょえー。あの兄ちゃん、とんでも無く上手いのだ

……！」

更に言えば純粹なのだろう。こっちの囀にも必ず引っ掛かってくる。

アーチャーの様に、解るか解らないか、しかし致命的なまでの隙を晒すと、そこを確実に攻撃してくる。

そして待ってました、と言わんばかりにカウンターをするのだが、バランスを崩すには至らない。

「でもよお、なんかさつきから見るとあつぶなつかしいと言うか……」

「んー……多分アレ、わざとなのだ。　慌ててる感じが全

然無いのだ」

「はあ？　じゃあ何か？　わざと隙作ってるって？」

華雄と違い、隙あらば反撃してくる呂布。

今回みたいなギリギリの、命を賭けた駆け引き。良いねえ……楽しくなってくる……!!

その時、見えた。

呂布の、決定的な隙が……!!

三段突き。一撃目で体に武器を縫い付け、二撃目で太股を狙い、最後に鳩尾を狙う。

急激に上がった速度に一瞬だけ体が付いていかず、攻撃は回避したがバランスを、ほんの少し。本当に少しだけ崩してしまった。

「シュトゥルムランツァー!!」

裂帛の気合いを込めた渾身の一撃を矛に叩き付けた。

「……………ッ?!?!?」

「……だあああああああ!!」

聖技、グラウンド・クロス。

一瞬で近付き、俺が持てる最高の技を繰り出した。

動揺している呂布の矛に、更にもう一度叩き付ける。得物の損壊でも、俺の勝ちだ……!!

しかし、得物は折れず、呂布にも大したダメージは行かなかった。

衝撃を上手く逃がされた。あのタイミングでも、敵 wasn't かった。

恐るべきは、自分の勘を信じきる、思い切りの良さだ。

全くもって大したモンだ。やはり壁を越えている者は、等しく皆が強い。強すぎる。

俺が持ち得る最高の技を繰り出し、防がれた。ならば当初の予定通りに行くしかない。

「さてと。悪いが今しばらくつき合って貰うぞ」

「……なんで？」

「何がだ？」

「……………無駄だつて解った筈」

「ああそうだな。まだまだ鍛練が足りない様だ」

互いに手は止めず、会話していく。

突き、払い、打ち込み。

受けて、流して、往なす。

「それでもそれは、お前に挑まない理由にはならない。

手を止める、理由にはならない。

お前は負けたからと言って、直ぐ様主君を裏切るのか？」

「……………」

首を横に振り、否の意思表示をする。

そう。そうなのだ。コイツが俺の知っている呂布ならば、もうとつくにこの戦場を離脱していてもおかしくない。

なのに、自陣が壊滅してなお、足止めに徹している。
恐らく、主君である董卓を逃がす為に。

「それと同じだ。」

強く無いから、強者から逃げる。

負けたから、主君を見捨てる。

違うだろ？ そうじゃない筈だ」

「……………」

コクリと、首を縦に振る。

「意地が、自尊が、誇りが有る。」

俺も、お前も。

そう

だろ」

「……………うん。 だから……………」

「そうだ。 だから俺は、お前に挑む」

「……………」 呂布奉先。 真名は、恋（れん）」

「恋殿ツ!？」

いきなり自己紹介されて、真名までは言われた。

しかし、聞いてはいたが……………レン、か。

呼びづらない……………。どうしてもレンちゃんが頭に過る。

まあレンちゃんはちゃん付けしてるから、区別は出来てるし、そもそもここには現れないだろうから、別に問題無いと言えば問題無いんだが……………。

それよりどういうつもりなんだ。

態々手を止めてまで

自己紹介とは。

「……………そっちは？」

「ん？ ……ああ。」

俺は朝風葵。

真名交換、と行

きたい所だが、生憎俺には真名、なんてモノは無くてね。 普通に
葵と呼んでくれ」

普通に名前の交換だった。
なんのつもりかし、なんて一瞬でも考えた俺がアホみたいで
ある。

「……うん。 葵は、強い」

「え？ あっ、うん。 ありがとう……？」

「でも、恋も負ける訳にはいかない……！」

「勘違いしてるな恋」

「……？」

「俺じゃあお前には勝てないよ。 何回やってもそれは変わらない」

「俺は最初から、恋。 お前の捕縛だと言っている」

俺は踊り続ける。 恋と共に。

……

……

…

「姉者！」

「おう、秋蘭か！ 見よ、もうすぐ張遼を、華琳様の御前に連れて行けそうぞぞ！」

春蘭が押していることは、秋蘭の目から見ても明かだった。
後は秋蘭が周りの兵に対処すれば良い。

「あんた、あとの位戦えそうや？」

「心配せずとも、貴様の倍は合数を重ねて見せるわ！」

「ええなあ……良すぎるわ！ 遠慮なく行くで!!」

「応ッ！ 来るなら、

「姉者ッ!!」

秋蘭の悲痛な叫びが響き渡り、次の瞬間、春蘭の左の瞳に矢が飛来し突き刺さった。

「……ぐっ……!!?」

「姉者……!!? 姉者!!」

「ちよっ、惇ちゃん!」

「ぐっ……ああああ!!?」

秋蘭は矢を放った方向を直ぐ様睨み付け、下手人を捜し出し矢を掛ける。

「くっ……ここで張遼が号令を掛ければ、こちらの中衛は崩れて去ってしまう……!!」

秋蘭は思わずそんな事を考えてしまう。
将として、正しい状況判断だった。

「……クソッ! こんな時に何を考えているのだ、私は!!」

張遼は周囲にわめき散らしている。
下手人に出て来る様に言っているが、それは叶う事は無い。

「しっかりしろ姉者! 気を確かに持て!!」

「ぐああああああ!!」

眼球ごと、矢を引き抜いたのだった……!

そして自分の身は華琳のモノで、断りも無く失う訳にはいかないと宣言し……瞳を食べた。

「姉者！　大丈夫か、姉者!？」

「大事ない。　取り乱すな、秋蘭。　私がこうして立つ限り、戦線は崩れません……!!」

「……姉者……！　　せめて、これをその目に……」

「うむ」

春蘭は左目に、蝶を象った眼帯を装着する。

何故そんなモノを持っているのかとか、なんで蝶？　とか聞いてはいけない。いけないったらいけない。

「待たせたな張遼。　　さあ、一騎討ちの続きと行こうでは

無いか」

「な……っ!？」

「ん？　　来んのなら、こっちから行くぞ?」

春蘭の闘気は、衰え、萎える所か寧ろ脹れ上がっていく。

「なんやアンタって奴は……!!　　ええなあ……最高や!!

まさかあの世に行く前に、修羅と戦えるなんざ、思うてもみんかった!!」

「御託はいらん！　　来るなら来い!!」

とある修羅には劣るが、鬼気迫っているのは、紛れも無い事実。

決着が付くのも、そう遠くは無い……!!

……

……

……

「……ふう……ふう」

「……ハア……ハア……ハア……!」

俺と呂布が戦い続けて、そろそろ何時間になるのか。 或いはそんなに時間は立っていないのか解らない。だが互いの体力は、そろそろ底に付きそうなのは間違いない。

「我慢比べで負けて堪るか……!! 帰ったら師匠にマジで殺される……!!」

「……なんで、押し切れない……?」

もうそろそろ、目が動かなくなり、足が止まって、腕が上がらなくなる。

チラリと後ろ見て、曼成を確認する。

顔が青い。大丈夫なのか? どうしたんだ一体。

ようやく。ようやく少し、そして何となくだが、読めて来た。変幻自在で、型にはまらない戦い方。

だがしかし、勝ち癖が付いている者は必ず、自信の必勝パターンが有る。そしてそれが通用しないと勘づいた時、俺の勝ちだ。攻めが単調になりやすく、尚且つ攻撃が粗くなつて体力面を余分に消耗しやすい。

この戦い。心が先に折れた方が負けとなる。

肉体の強さでは無く、いかに強靱な精神をしているか。

「我が心には、鋼が受け継がれている……!!」

不屈。それが俺の、本当に自慢出来るモノなのだから……!!

「……う、くっ……」

少しずつ。少しずつ。攻撃が粗野になってくる……。必要最小限に見切り、受けて、流していく。

「この我慢比べ、俺の勝ちだなあ恋!!」

「……………!!?」

「おっらあ!!」

ヘロヘロになって来た所申し訳を、最後の力を振り絞り、シュトゥルムランツァーで吹っ飛ばす。

「今だ曼成ツ!!」

「応さ! 全員、掛かれえええええ!!」

「……!? これは……………!!?」

「言ったる。俺の目的は恋。お前捕縛。」

撃破

する事じゃあない」

「……………くっ!!?」

「武器を取り上げろ!! このまま孟徳の前に連れて行く

!!」

『はっ!!』

「おいおいおい!! あの呂布を捕まえちまったぞ!」

「ひよえー。おっそろしいのだあ……………」

「つて言うか、なんとと言う統率の取れた動き……………!!」

「本当に凄いのだ、あの兄ちゃん」

「でも戦ったら勝てそうな気がするなー」

「えー? 鈴々はなんかまだ隠してる気がするんだけどー

……………あの兄ちゃん」

外野が核心を突いた発言をしているが、無視する。

と言うか何故解ったし。野性スゲエ。

これだからこの手のタイプは苦手なのだ。面倒臭い。

「悪いな恋。 一緒に来て貰うぞ」

呂布奉先。 真名を恋。 捕縛、完了。

第15 大切なモノ

孟徳の前に恋を引つ張って行く途中。

特に抵抗らしい抵抗もせず、恋と……ロリー名前なんだっけ？―は大人しく付いてくる。無論拘束はしているが。

「……………」

「なんだ。 まだ怒ってるのか？」

「……………別に、怒ってない」

「そうか？ なら良いが」

なんだかむすつとしてる、様な気がする。

その時、くぎゅう―、とんだか音が聞こえた。

俺か？ と思ったが別段腹は減っていない。となると、

「恋。 腹減ってるのか？」

「……………」

コクコクと二度首を縦に振った。

フム……なら先に腹拵えと行くか。 もう勝ちが決まった様な聞モンだし。

急いで面会、と言うのも必要無い。

「先に飯にするか。 そっちの……なんだっけ？」

「陳宮です！」

「あーそうそう。

陳宮な。

飯行こう。

孟徳に会

うのなんて明日でいーよ」

「い、良いのですか？」

「良いの良いの。 一仕事終えたんだし？ まったり、

ゆるーく行こう。 でえじよぶだつて。 孟徳死んだりしねーから」

「はっ、はあ……（と言うかコイツは曹操殿なんなのですか!）」

……
……
……

一夜明けて、清々しい気分が目が覚めた。

やー……しかしビビった。恋ってば仲康と同じ位食うんだもん……。やつべー。曹操軍の食料事情やつべーわー。

「さて。散歩でも行くか。二人はどーする?」

「……………」

「あの、面会は……?」

「え? そんなに会いたいのか? ……街に居ると思うから行くか」

どうせ復興の陣頭指揮を取って居るんだろう。

他人に任せておけば良い仕事までやつちゃうからな。
しかしどこに居るんだか……あり?

「おー。関羽さんじゃん。何、炊き出し?」

「朝風殿……! あっ、いえ朝風、さん。それに、呂布

……!?

「うん。昨日ゲットだぜっ!（サトシ風）してやった」

「え? げっ?」

「配るのはともかく、作るの手伝うか?」

「え? ですが……」

「んー。どー見ても人手足りて無いし?」

劉備や張飛。後何か知らんキツそう眼鏡と、ポワポワしてる女の子ーどことなく姫っぽいがワーワー言いながら何事かをやっている。

「……月（ゆえ）……詠……」

「ん？ 知り合いか？」

「……ん」

「（うおおおおいしいいいい!!） まずっ、マズイので

すうううううう?!?」

「ふーん。 挨拶しとく？」

「……………」

俯いて首を横に振った。

恋と陳宮の様子を見るに、あの二人はかなり重要な人物らしいが……。

「陳宮」

「ひやいつ?!?」

「（こそこそ） 軍師があんま顔に出すな。 モロバレだぞ」

「っ!?!」

「（こそこそ） んなこたーどうでも良いんだ。 あんまり悟

られ無い様に、な？」

「ひやい……え？ あの、え？」

ぽんぽん、と頭を撫でてやり関羽の手伝いに回る。

やー。 こんだけ材料有ると、作りがいあるわー。

「そりや!! 秘技! フライ返し!!」

『おゝ!!』

……………

……

…

「で、貴方は何をしているの？」

「は？ え？ 見て解らないの？」

料理以外の何に見

えるの？ え？ え？」

「そう言う事を言ってるんじゃないわよ、この大馬鹿!!!」
「悪かった。俺が悪かったって」

孟徳に青筋を立てて睨まれてしまった。
ヒィー恐いー(棒)。

「関羽さんが大変そうだったから手伝ってあげましたマル」
「マルって何よマルって……」

疲れた顔をして溜め息を吐いている。
俺が原因らしい。解せん。

「……心配、したんだから……」
「ちよつ、泣くなよ。俺が泣かせてるみたいになつちやうからね」

「泣いて無いわよ!!」
「はい泣いてません!」

涙目でそう怒鳴られたら、撤回するしか無いじゃないか。全く。

心配かけたのは悪いとは思う。思うが、もう少しばかり信用してくれても良いと思うんだ。

……そう簡単に、負けられるか。

「それで、なんで手伝っていたの?」
「関羽さんが大変そうだったから」
「……それが何故手伝う理由になるのかしら?」
「好きだから?」
「ぶほっ」

近くで炊き出しをしている関羽が吹いた。
盗み聞きなんかしてるからだようん。

「え？　好き？」

「うん好きだよー。　え？　なんで？」

「……………」

今度は孟徳が沈黙になってしまった。
恋の真似してるんだろうか。んな訳ねえ。

「まあ冗談は置いといて、ここに居たらお前通るかなーって」
「……そつ、そう……。　じゃあ別に、好きと言う訳では無いのね？」

「さあ？　どうだろうな」

ニヤリと笑って、関羽の所に行く。
途中で放り出す様で悪いが、中断させて貰う、と。ニヤニヤしながら。

「やはりからかっていたのですね!？」

「やー。　関羽さん可愛いから、つい」

「っ?!?!　しっ、知りません!!」

「んじゃあ悪いけど、後頼むな」

「……。　はい。　また、どこかで」

最後に関羽は、綺麗な笑顔を見せてくれた。

全く……本当に美少女つてのは得だよなー……。

「待たせた。　コツチが呂布、んでコツチが陳宮」

「……」

「こつ、こんにちはです」

「久し振りね。 単刀直入に聞くけれど、貴女達私に降る気は有るかしら？」

まあ無い、って言ったらこの場でズバー！ ギャー！
な流れになるんだけだなー。

いや嘘、この場でズバーは無いわ。流石に。

「……葵」

「あん？ どした？」

「……葵も、曹操と一緒に居るの？」

「そりゃーな。 盟友だし」

「……………。」 そう……………。 解った。 降る」

「なら良かったわ」

貴女はどうかしら？ と言うか視線を陳宮に向ける孟徳。
慌ててコクコク頷いていた。
恋がコツチに付くんだから、そりや来るわな。

「あ！ 恋やんか！」

「……霞」

「え、と言う事はなんや？ アンタもしかして、負けたん？」
「……………」

「うつそホンマに!？」

「まあ捕まえたのは確かだが、打ち負かした訳じゃ無いよ?」

「うわー…………曹操軍はどうらいモンばっかやな……………」

「……霞も、その一員？」

「せやでー。 これからも、よろしゅうな恋」

「……………」

コクコク、と首を縦に振って肯定して、

「それで、春蘭はどうしたの？」

「それが……」

「まさか……冗談、よね？」

「ご心配なく。至極元気です」

そりやそうだ。元讓が重傷、或いはもっと深い傷なら妙才がこんなにも冷静な筈が無いからな。

二言三言妙才と会話して駆け出した。

目的地は、本陣の救護所。元讓が怪我したんだと。

「会わせる顔が無い怪我？　なに、腕でも無くなつた？」

「いやそうでは無い。　と言うか、よく平然と言えるなそ

んな事……」

「だって会わせる顔が無いって言っただろ？　それは武

人として致命的な怪我を負った、と言う解釈をしたんだけど……？」

「……」

「妙才？」

「春蘭様ね、目が……」

「目かー。　目なー。」

流石に俺も目は無くなった事無

いからなー」

腕とか足とかならずバーっついていかれたけど、目は無いなー。
胴体もやった事有る。内臓はみ出そうになって、慌てて戻したっけか。

「アンタどんな人生送って来てんねんなそれ?!?」

「厳しい師匠達の鍛練？」

『何それ怖い』

俺はお前達がその台詞を言う事の方がよほど恐いがな……。

……

……

…

天幕にて集合を掛けられた。

元讓は平然としていた。あーあ。超レアな顔だったのにい。アルトが居たら喜んで写真撮ったのにー。残念、以外の言葉が出てこない。

「集まって貰ったのは、葵。 貴方の為よ」

「うえ？ 俺？」

そうよ、と大仰に頷いてみせた。

どういうつもりなんだ……？

俺には孟徳の意図がさっ

ぱり解らない。俺の為？

「虎牢関で華雄の軍を薙ぎ払ってみせた」

「いやアレは別に大した事無いからね」

「そして呂布を捕らえてみせた」

「おっ、おう……」

「だから貴方には、私の真名を、華琳と言う名を、預けましょ

う」

「あつ……」

そうか……。

ようやく俺は、孟徳に……。

「認めて、くれたんだな……」

「何を言っているの。 私は最初から認めていたわよ。

葵が意地を張っていただけよ」

「えー」

「いや、えーはこっちの台詞や!? アンタ等真名交換して
へんかったんかいな!？」

「うん」

なんだか張遼が酷く驚いた顔をしている。
そんなに変な事言ったかに。

その後は真名交換、となり、俺もこれからは真名で呼ぶ様に、
と厳命されてしまった。

孟徳、いや華琳はよく俺の事を解っている様だ。

こうして、大陸の諸公達を巻き込んだ連合軍の戦いは終わっ
た。

董卓の正体は結局判明しなかったがー俺は恋が知り合いな
あの二人のどちらっぽいと睨んでいるがーそんな事はどうでも良い
のだ。

恋、音々音(陳宮の真名)、霞の三人が仲間になった事の方が、
遥かに大切なものだから。

そして春蘭(元讓の真名)が霞を。

俺が恋を捕らえた事で、華琳の名前は更に高まるのだった。

俺達は意気揚々と、城へと帰って行った。

第16話 集いし英雄

連合軍が解散して、それなりに時間が経過しつつある。

近い将来帰れる、かもしれないので最近はそう張りきって何か手掛かりを探す、と言う事はしなくなった。

知らず知らずに有った、焦燥感、みたいなのが消えていたのがその証だろう。

孟徳に認められ、真名である華琳と呼ぶ様になってからしばらくは王朝に諸公を押さえる力が無くなっていった。

まあ俺達は盗賊団とか野盗だのを駆逐しまくってたんだが。

そんなある日。鍛練から帰って来て、近道の中庭を抜けようとしたら、なんかよー解らんデカイ……オブジェ、だろうか？ が有った。……え？ 何これ。

良く良く観察してみると、車輪が付いてる。どうやら動かしてうんたらかんたらするらしい。

流石に組み立ての途中のモノまでは解らん。

「あー！ 隊長なのー！」

「おー。 隊長やん。 ……凄い汗やな」

「隊長、鍛練お疲れ様です」

「おうてんきゅ」

ついでに真桜（曼成の真名）聞いてみる事にするか。

こんなモン作れるのは真桜位なモンだ。

華琳と呼ぶ様になってから、俺はとある一人以外は全員真名で呼ぶ様にしてる。

単純に嫌がって怒りそうなのと、仲間外れはだあれだ？ クイズでもしようかと……嘘だけど。

「このデカイのは何だ？　祭りで使う櫓？　或いは見張り台？　いや大穴で戦車（笑）も有り得るか？」

「戦車ってなんやの？」

「隊長ー！　真桜ちゃんが酷いのお！」

ちなみにコイツ等の隊長呼びの回避だが、諦めた。

割りと毎日風（文謙の真名）と訓練しているが、ちつとも馴れないのだ。ならもしやないうん。

隊長っぽい事とかしたし？　良いよう、と開き直ってやったのだ。

隊長命令と称してアゴで使っているんだが結構従順に従ってくれる。体よくパシリである。

「酷い？　ひよつとしてこの正体を教えてくれない、とか？」

「そうなのー！　」

チラツと視線を送り、そうなのか？　とアイコンタクトすると、

「ふっふー。　見て解らん？」

「どうやらさっきの予想は外れていた様だな。　とすると

……高倉か？」

「高倉？」

「ああ。　ネズミとか湿気から食料を守るんだが……」

この反応を見るに違う様だ。

確かにネズミが多いとか、ジメーつとしてるって感じでは無いな。

「なんやよー解らんけど、違うんよ」

「そうか。　　んで、正解は？」

「どうしよっかなー。　　教えたろかなー……？」

「ずっとこの調子なの！　　自分だけ知ってるなんてズルイの！！」

あー。真桜はこーゆータイプなのな。

解るわー。秘密を聞きたがる人に対して、思わせ振りに焦らす愉悦（たのしさ）。

やるのは良いけど、やられたら腹立つなやっぱ。
構ってちゃんはスルー安定っす（by ジナコさん）。

「そうか。　　なら仕方ない。　　んじゃあな」

「ああん！　　隊長のいけずう！　　そこはもうちよい食い付いてくれんと」

「いや風呂入りたいし」

そうなのだ。汗ベタで流石に気持ちわるいし、冷えてくる。
寒い。いやまだ暑いけど。

「その内解るだろ。　　放っておけ。　　沙和（文則の真名）
の反応を見て面白がつてるんだ。　　付き合うとつけ上がるぞコイツ」

「でも、気になるのー……」

そう言う態度が真桜の玩具になってるんだが……。まあ弄られたいなら好きにしろ、としか言えん。

「しかし、中庭をにこんなアホみたいにデカイモン作ると、我らが猫耳軍師がピーピーと喧しいぞ」

「誰がピーピー喧しいですって？」

後ろから冷たい声が飛んで来る。
まあ俺も解って言ってるんだか。

「さてな。俺は特定の誰か、と言ったつもりは無いが？
それとも俺が言っているのは誰か、何となく想像が付いているの
かな？」

「ふん。相変わらず陰険ねアンタ」

「たわけ。俺の通るルートに落とし穴を幾つも仕掛け
る、誰かさんと同じにするんじゃない」

火花が散る、のでは無く互いに凍える風が吹き荒ぶ。

あんなチンケな落とし穴を掘るのは、一人しかない。力が
無いから浅いのか、それとも根性が無いから浅いのか、はたまた貧し
いから（武士の情けで何がとは明言しないが）浅いのかは定かでは無
い。

しかしただ浅く穴が掘ってある位なら、俺だって一々文句を
言ったりはしない。

寧ろこの程度しか掘れないのかよだっせ、とかこれだったら
止めちまえよバーカと言う事だろう。

だかしかし、落とし穴を仕掛けた下手人は虫を入れていたの
だ。

ねえ何これ、蟲毒なの？ 　　って一人で思わずツツコミいれ
る位にはギチギチに入ってた。

隠すのが下手過ぎて、ニヤニヤしながら開けてみたら蟲ぐ
ちやーである。

「んで、これ良いの？ 　　こんなん造っちゃって」
「構わないわよ。 　　私の指示で作らせているのだから。」

華琳様から許可もいただいているわ」

「は？　華琳に？　おいおい……冗談だろう？」

「え？　なんでやの？」

心底不思議そうに首を傾げる真桜。

苟彥も俺の事を訝しげに見ているが（コイツは平常運転だった）、そこでもうやく納得した。

「あー。　コレ華琳に設計図見せて無いだろう？」

「……そう言えば……」

「だろうな」

もつともらしく頷きながら、ニヤニヤしてやる。

「何よ、ハッキリ言いなさいよ」

苟彥がキツと睨み付けてくる。

怖い。怖いから言っちゃった。

「このバーカ」

「なっ!？」

「ねえねえこれどうやって門から出すの？」

「あ」

「……………っ!?　しまっ」

「軍師なのに気付け無かった。　クックック……!!」

ねえねえ、今どんな気持ち？　今どんな気持ち？」

「つつつつつ!?」

!?!?!?!

苟彥は顔を真っ赤にして何事かを叫び回っていた。

何を言っていたのか、私にはさっぱり解りません（真顔）。

……………

……

…

一服してノンビリと軍義に出席する。

華琳が注目しているのは、えんしよーだった。

なんでも公孫賛に戦争を仕掛け、正面から打ち破ってみせた
そうだと劉備の所に逃げたんだって。

まあえんしよー軍は、連合の時から兵士の数はトップだった
からな。

將軍がアレなのと、兵の練度以外は連合軍でもトップクラス
だった。

でもまあ兵の練度ならウチも負けちゃーいない。

この前暇だったからちよつと訓練付けてやったけど、誰一人
として欠ける者は居なかった。……全員満身創痍だったけども。

俺の訓練に付いて来られるんだから、大したモンだ。しかも
全員が。

他の軍ではこうはいかない、と思う。

流石は春蘭がしごいた兵士だ、と言わざるを得ない。

しかし公孫賛……。俺が思うに逃亡先間違え過ぎだと思う。

前回の劉備は公孫賛の軍にも劣る兵数しかいなかったし、も
しえんしよーが順当に潰していくつもりなら次の標的は劉備になる。

まあ今は知らんけど。

後単純に近い、と言うのも有ったんだろうが。

だからと言ってコツチに来て、華琳は迎えるつもりは無い
だろう。……多分だけど。

とにかく、えんしよーは次に劉備を狙うだろう。

「それはどうでしょうね？」

「ん？　　と言うと？」

「麗羽は派手好きだね。　　大きな宝箱と小さな宝箱を出されて、どちらを撰ぶ？　　と言われたら即大きな方を選ぶわ」

アホだな。流石は『雄雄しく、勇ましく、華麗に前進』と素で言っただけの事は有る。

舌切り雀を知らないのかと言ってやりたい。……知らないか。アレ日本昔話だし。雀ちゃん、可哀想……。

さてきて。えんしょーはどうでるかな……？

華琳の読み通り、コツチに来るのか？　　或いは劉備の所に行くのか……。

どちらにしても、近い内にえんしょーと当たる。アレには少くない怒りが有るからなー。

「おい華琳。　　えんしょーとやり合う事になったら俺を出せよ。　　あのクソ野郎……ぶっ殺してやるからな」

「貴方、本当に麗羽が嫌いなね……」

「あの手の生まれだけで自分が偉い、凄いと思ってる勘違いのクズをヒイヒイ言わせたい」

無意味に拷問すれば良いんじゃないかな。雛見沢ばりに。

それか永遠にくすぐり続ける、とかどうよ。少なくとも拷問みたいに、非人道、と言う訳では無い。

「解ったわ。　　そうなったら存分に腕を振るって貰いま

しょう。　　桂花には悪いけど、更に仕事が増えるわ」

「御意。　　音々音を補佐に付けていただいても宜しいでしょうか」

「だ、そうだけれど音々音、良いかしら？」

「御意です！」

情報収集もやるんだね。そしてねねは荀彧の補佐か……かわいそかわいそです。

いびり倒されるのが確定した瞬間である。

なーんてふざけて、この日の軍義は終わった。終わったが、僅か数日後に事態は動いた。

……

……

…

「えんしよーが動いたって聞いたけど、それ本当なのん？」

「馬鹿は決断が早過ぎるのが厄介ね」

「誘い受けしてやろーぜ（笑）」

適当な餌で釣って、敵陣深くに切り込んだ時は既に囲まれてました作戦。エグい。

旗印は袁、文、顔。主力がほぼ揃ってる状態でしかも数は三万。

「報告によれば、敵の動きは極めて遅く、奇襲などは考えていない様子。むしろ勢力を誇示したいだけ、と言う印象を受けたそうです」

「馬鹿の麗羽らしい行動ね」

「いやいや、それは囹だよ。」

陽動で少数精鋭の暗殺部隊

がだな」

「無いな」

華琳と被った。そんな器用な真似が出来る程アレは賢しらでは無いだろう。

アレはアレと同列で良いのだ。だからアレ呼ばわりで良いのである。

ちなみに報告の有った城にはたったの七百しかないらしい。オワタ。

「七百!?! そんなもの、手も足も出んでは無いか!」

「春蘭……お前……!」

「ん? なんだ朝風」

「お前、手も足も出ない、なんて良く知ってたな……!!」

「お前は私の事をなんだと思っているのだ!」

俺と春蘭がお馬鹿コントをしている間にも、三人の話し合いは続く。

俺と春蘭は、華琳、秋蘭、荀彧の邪魔をしてはいけないのだ。どうせ役立たずなのだから。

今すぐ動かせる兵は、半日あれば二千。さらにもう半日で季衣と風達が戻って来るので二万。

親衛隊を足しても、もう五千。

この急場に動かせる兵は僅かに七千しかない事になる。

砦に居るのはたかが七百。半日＋行軍の時間も持ち堪える事なんて出来やしない。

それに万が一にも間に合ったとしても、だ。幾らなんでも四倍強はひっくり返せない。

普通なら。

春蘭を筆頭に、恋と俺の三人を前面に押し立てる、と言うのも有りだが多分誰か一人は確実に死ぬ。

普通なら。

ここで城が取られてしまう。

アレが心変わりやら不測の事態になれば話しは別だが、そんな事は都合良く起きたりはしない。

「華琳様。 まだ続きが有ります」

「華琳。 お前には切り札が有る」

「む」

そう。こんなクソツタレな状況をひっくり返せる、飛びつきの鬼札が。

「何かしら秋蘭」

「はい。 兵の増援は不要だと」

『なんだと!?!』

「馬鹿な、みすみす死ぬ気かその指揮官は!?!」

春蘭が慌ててそんな事を言っている。

違う。そうじゃない筈だ。必ず何かしらの意図が有る。

「……解ったわ。 ならば増援は送らない」

「華琳様!?!」

荀彧の両目が見開かれている。

そりやそうだ。指揮官の報告を鵜呑みにし、みすみす城をくれてやるのとそう変わらん。

「城の指揮官の名前は?」

「はい。 程昱と郭嘉の二名にございます」

「その二人には、袁紹達が立ち去った後に、こちらに来る様に伝えなさい」

増援を送る事を禁止を宣言し、軍義は解散した。

ふむ……。どういう事だ？

どこかにヒントが有ったか？　アレは派手好き、馬鹿、愚

直……。？　ここらがヒントになりそうだな……。

伸びをしながら庭をぶらつく。

考えるのは砦の指揮官の事。

何故だ？　何故こんな真似をする？

……まさか。いや、幾らなんでもそんなアホな理由じゃな

い、よな？

「糧食は後続に持たせろ！　我々が持つのは最小限で良い

！　とにかく機動力を高めろ!!」

春蘭が出撃の準備をしていた。

いやいや、態々禁止だよーって華琳言ってたんじゃん。コイ

ッ何考えてるのん？

「なあ春蘭。　お前、華琳を裏切るのか？」

「……っ！　袁紹ごときに、華琳様の領土を穢されるのを
黙ってみていられるか……!!」

「だからお前は猪だつて言うんだよど阿呆……」

「おいこら！　自分ら、何やつとんねん!!」

「ちっ……厄介なのが……!」

「霞、ここで猪を止めるのと黄金の悪魔を呼んでくるのと、
どっちが良い？」

「……悪魔てアンタ……華琳呼んで来てえな」

「ういー」

俺は駆け出す。華琳を探す為に。

「どこだーちっこい覇王ー。　　ロリロリンの百合百合んー。

ツンツンしてるはおーちゃん」
「アンタ真面目にやる気あんのか?!?!」

遠くの方から霞の怒声が聞こえてくる。

真面目？　　霞は一体俺に何を求めているのん？　　そんなの有る訳無いじゃないですかーヤダー。

「おーい。　ツンデレはおー。　　カールでクルクルはおー。
　　ドクロはおー。　　ったく。　　萌え萌え華琳ターン」

「葵。　　もしかしてそれは私の事かしら？」

「おお!!　　ここに居たか我が愛しの曹孟徳よ!!」

ヒシツと抱き締めて、青筋を立てている華琳を全力で誤魔化しにかかると。

ヤバイちよつとやり過ぎた。まさかこんな近くに居るとは思わなかった（滝汗）。

「春蘭止めてくんない？　　現在霞が奮闘中」

「！　　どこ!？」

そのままお姫様抱っこして、駆け出す。

こうした方が速いのだ。伊達に毎日走ってないぜ（キリツ）。

「ちよつ!？」

「ほれアレだ」

「っ！　　春蘭!!」

何か春蘭と霞が決闘してる。

……霞も人の事言えねー。なんで戦ってるのん？　　バト

ルジャンキーですかこの野郎。

「止めるか？」

「出来るの？」

「手段を問わないなら」

「……。 穏便な方法なら許可するわ」

華琳をそつと降ろして、右手を上に向ける。

怪訝な目に向けて来るが、構わずに銃を呼び出し発砲した。
空に向けて一発、無駄撃ちしたのだ。

「なんだ!？」

「つつう!?! 隙有りや!」

霞は発砲音を浮けて少し怯んだが、すかさず春蘭の大剣を叩き落とす事に成功した。

この勝負、霞の勝ちだ。

「今度はウチの勝ちやなあ、春蘭」

「いつ、今のは気を取られて……!」

「見苦しいわよ、春蘭」

「ウイナー霞あ!」

「え? うい、まあええわ。 イエーイ!」

「流石だぜ! 汚い! 流石霞汚い!!」

「褒めるんやったらちゃんと褒めえや!？」

なんてやってる内に、春蘭がポツポツと華琳に説明している。

そりゃあ春蘭の気持ちも解らんでも無い。アレに一時とは
言え支配されるのは可哀想だ。泣けてくる。

だが。それでも。いや、だからこそ。

そこまで思っている主の、華琳の命令にまで背くのは違うんじゃないだろうか？

考え無しに、増援を送らない人間じゃないのだ。

「これも、華琳様を思えばこそ！　華琳様の御為ならば、この首など惜しくありませんぬ!!」

えっ、えー……？　　ここで首を出してしまつたら、援軍に行けないんですがー……？

こんな事で春蘭と言う人物を失うのは、余りにもアホらしすぎる。

チラリと華琳を見て、アイコンタクトをしようとするが、

「貴女にはもう過ごし方説明しておくべきだったわね。

いいわ、出撃なさい」

疲れた様子で、と言うか溜め息を吐きながら出撃を許可した。

……やっぱりか。だとしたら軍師の狙いは……。

「華琳様！」

「おいおいおいおい！　それでええんか!？」

喜んで華琳の名を呼ぶ、春蘭と慌ててツツコミを入れる霞。俺はようやく指揮官と華琳の意図を読めた（様な気がする）ので、ツツコミを入れたりはしない。……春蘭には入れるけど。

「命令違反を許されて喜んでんじゃねえよ馬鹿蝶々眼帯」
「うぐっ!？」

「そこは申し訳無さそうにしながらも、すいませんありますが、うぐざいます、って言う場面でしょうが。　お前さんは一体全体何

を考えてるんですかー?」

「うぐぐぐつ?!?」

「そう春蘭をいじめ無いで上げて。

でもね春蘭。私

はこの兵を全員連れて行く事は許さないわ」

「は? なんやて?」

華琳が告げたのは、春蘭の部隊の最精鋭。三百以内のみなら、増援を許可するとの事。

守備兵と合わせて千になるから、これで充分でしょう?

とそう言つてのけたのだった。

尋常の戦なら、華琳と春蘭の二人に拳骨を落として、もう良い俺が行く!! とか言っている頃だろう。

「決死の覚悟で、足りない所を埋めて来なさい」

「……」

「ちよつ、華琳!? アンタ無茶苦茶やで!」

「黙りなさい。今は春蘭と話しているの。 どのなの

? 出来るの? 出来ないの?」

「「……」」

俺と春蘭は二人して沈黙する。

春蘭は覚悟を決める為に。

俺は春蘭速く行かねえかなーと、ボーッと眺めていた。

「葵も何とか言うてえな!! このままじゃ春蘭本当に死

んでまうで!」

「……」

「葵!!」

「煩いぞ霞。 ……華琳様の信任を得た以上、出来ぬ事な

どありません!! 総員騎乗!!」

「「ちよつ、春蘭!!」」

霞の必死の静止を振り切って城を出て行く春蘭。やっ
行ったかーったく。

「幾らなんでも酷すぎひん!? たかが千じや、三万相手
じゃ足しにもならんで!!」

「あーもううつせえぞ霞。 お前仕事あんだろうが。 暇
してる恋連れてさっさと行けっての」

「ちよつ、なんやのそれ!？」
「つまりだ」

そこで俺は指揮官の狙いを話してやるのだった。外れてた
ら恥ずかしいけど、華琳が春蘭を送り出した以上、これが正解だと確
信している。態々兵を三百にしたのも納得だ。

派手好きのアレは、たかが千人にも満たない砦なんぞ攻める
筈が無い。

縦しんば攻められたとしても、被害は七百で済む。

「合ってるか？」

「正解よ」

「しかし胸糞の悪い話した。

被害？

損害？

兵士

はモノじゃない。 人間だ」

「せやね……」

「ただまあ、上に立つ以上仕方無いとは思うが」

非情な判断もしなくてはならない。

解っている。だが、やりきれないのも確かだ。

「霞には恋と一緒に盗賊の討伐に出発なさい」

「りよーかいや。 ほな、行ってくるわ」

ちなみに恋は政治的はおろか、兵の調練をする事すら苦手と
している。しかも自己鍛練もやっていない。

有り体に言えば二ートだ。いやまあ、さつきみたいに戦その
モノには参加するんだけどね。

言い換えれば、戦闘にしか参戦出来ないんだが。

「華琳ちゃん。俺なんぞやる事有るか？」

「その華琳ちゃん、と言うのは止めなさい。暇なら私を

手伝いなさいな」

「さいなら」

「待ちなさい」

面倒な書簡整理から逃げようとしたら、ガシツと掴まれてし
まった。

まあ良いか。どうせ指揮官には一言言つてやりたいからな。
仕方無いから華琳の手伝いで暇潰ししよう。

「しよつ、しょうがないから、手伝つて上げてても良いよ？」

「はいはい。それで良いから、手伝つてちょうだい」

……

……

…

その日の夜遅く。そろそろ寝ようかなー、と思つた所で集合
が掛かった。

速かつたなー。どうせなら一泊位して来いよなー。眠いん
だけど……。

玉座に行くと、既に説明が始まっていた。

もう眠いし、一言言うのも止めとく。眠いし。大事な事だか
ら二回言いました。

いやもう恋なんか寝てるし。俺に寄りかかってすらいる。

おい止めろ耳をハムハムするな俺の耳は餃子じゃねえぞ舐めるのも却下だよ!!

「……おいひい」

「起きろ馬鹿ベタベタになるだろうが」

「……………おい、ひい」

「霞ああ!! 音々音えええ!!」

三人を呼びつけて引き剥がしていると、説明してる片方―眼鏡を掛けているクールビューティーが突如として鼻血を吹いた。

「恋殿、起きて下さいいいい!」

「こおら恋! どうせハムハムするんなら、もつと下にし

とき!!」

「そう言う問題じゃねえよ!! カオスか!!」

耳をハムハムされてるし、指揮官の一人は船を漕いでるし、もう片方は赤い鼻汁ブシャーしてるし。

カオスだった。CVが若本のカオスだった。デイシジアは馴れるまでちよつと大変だったようん。

「郭嘉さん、持病持ちなんですか?」

「いいえ。 稟ちゃんは曹操様の所で働くのが夢でしたから。 きつと緊張し過ぎて鼻血が出ちゃったんでしょねえ」

「おいおい……」

結局損害は地形を確認された程度で、しかもアレはさっさと引き上げたらしい。

ついで指揮官の二人、程昱と郭嘉が軍師として城に残る事になった。

別に苟彘が過労死しようが知った事では無いが、肝心な時に手が回っていなくて指示が遅れて、なんて事になったら目も当てられない。

そうなたら困るのは苟彘だけでは無い。

べつ、別に心配している訳じゃないよ？ 本当にだよ？
巡り巡って、俺が困るから言ってるんだからね!!

「無理しそうになってる苟彘のバーカ!!」

「なっ!?! なんですってえ!?!?」

「こー言う時位、静かに終らせられないの貴方達……」

こーして喧しくも夜は更けていく。

第17話 将としての覚悟

えんしよーが撤退してからそう長くない時が流れたとある日、件のえんしよーが劉備の国である徐州を越えたとの報告が入って来た。

もーそろそろ会議が終わりそうだ、つて頃に入ってきたその報告に俺はカチキレそうになった。

ようやくめんどくさいのが終わりがけたってのにクソが！

しかしその報告に対して誰も驚かなかったのは流石と言うべきだろう。

可能性がある、と読んでいだのだ。

だが何よりもムカつくのは、今まで議論していた、近日中に攻めてくるであろうえんしよーをどうするか、と言う対応策だったのだ。

こちらから先制攻撃しよう！ 言う内容だったから軌道修正する訳にもいかん。そんなんだったら白紙からやり直した方が早い。

華琳が軍師達にどうすべきかの意見を聞いたら、稟は攻めているから手薄の南革へ火事場泥棒しようぜ大作戦を提案し、荀彧はアイツ等馬鹿だから無視してやろう！ それよりこれから厄介になりそうな劉備を袋にしましょう大作戦を提案していた。

「葵はどうかしら？」

「えんしよーをブチ殺す慈悲は無い」

なんでもえんしよーはえんじゅつ（漢字忘れた）と一緒にあって劉備を袋にしているとか。

ならどっちでも良いから、取り合えず一旦背後からこつそり忍び寄って、劉備助けに来たぞー！！ と挟み撃ちにしようぜ大作戦を提案した。

この作戦の一番の問題は連携が全然取れない事である。怖い。

『……』

「なによそれ、アンタ馬鹿じゃないの？」

「馬鹿でいーよ。俺はえんしょーをブチ殺したいだけですしおすし」

「取り合えず葵は落ち着きなさいな。然るべき時まで貴方は温存よ」

「……。それなら良いけど」

華琳は一旦保留を宣言して今日の軍義を解散させた。

のはいんだが、その日の夜遅く、寝ている所を叩き起こされて全員集合を言い渡されて玉座へと向かった。

真桜はグチグチと文句を垂れ流し、風は立ったまま目を開けて寝ていて、紗和と風に至っては寝ている事を隠そうともしていなかった。イラツと来た俺は風以外の全員にそこそこの威力の拳骨を落として、風には軽くチョップを入れてやった。

寝込みを襲うのは止めてと、まだ寝言を言っていたので紗和と風の頭を掴んでゆつくりと握力を強めてやった所でようやく意識を完全に覚醒させた様だ。

「隊長、鬼やな」

「ばっかお前、コレは優しさだつて。こんな所を華琳が見たらどんな目に合う事やら……」

「それは確かに」

「そこ！ うるさいわよ！」

相変わらず猫耳軍師はキーキーとうるさい。ヒステリックはみつともないから止めとけ、と言おうとした所で華琳が夏侯姉妹を伴って入って来た。

ちなみに恋はさつき気配を消して俺に近付き、背後から抱き付いて来た。また耳をハムハムされる前に瞬時に抜け出し、起きろ！とチョップを叩き込んだ。

「全員揃った様ね。急に集まって貰ったのは他でも無いわ。秋蘭」

返事を秋蘭が説明してくれた。

早馬で徐州から国境を越える許可を受けに来たマヌケが居ると。華琳が入れと促すと、そこには……。

「あつ、関羽さんだ。チーッス」

そこに居たのはマヌケなんてとんでも無い！ 肝が座った黒髪超絶美人だった。

誰だ！ マヌケとか言った奴は！ 出てこい、俺がぶつ殺してやる！（憤慨）

「……」

「葵、貴方緊張感と言うモノは無いの？」

「無いなー。そんなモンするだけ無駄だし」

困った顔をする関羽さんマジ可愛い。普段の凛々しい関羽さんも良いけど。

と言うかアレです。師匠と一緒に居ると、なんかスゲー偉い人とかにもバンバン皮肉言ったりして俺が無駄にソワソワしたりしたけど、全くの無意味なんだなー、と気付いてから俺は緊張しなくなつた。

華琳が溜め息を吐いて、関羽さんに自己紹介をする様に促した。

関羽さんが自己紹介して、改めてなんの為に来たのか華琳が訪ねると、

「……。私は曹操殿の領地の通行許可を求めて参りました」

と堂々と関羽さんは発言した。

……ちよつと待つて欲しい。それはアレじゃないかな？ M P K
だよな？ モンスタートレインだよな？

「うわー……。劉備質悪ッ！ それともこれを提案したのは、
やっぱ諸葛亮なのかしらん」

「うん？ どういう事だ？」

「アレだよ、W袁から逃げるからここ通してね！ ついでにW袁を
擦り付けさせてね!! って事」

『?!?』

「ほれ見た事かー！ アホたれ！ 今日のアレ保留なんて悠長な事
言つてっからこうなんだよー！」

「それを今言つた所で仕方ないでしょう」

「そうだけどー！ そうなんだけどー！」

えんしよーだけなら、寧ろ俺に任せて先に行け!! と言えるんだけ
ど、えんじゅつまで居るとなると話しは別である。こーとーの虎とか
マジで怖いっすわー。キバ隊出して来るんじゃないの？

「なんと無謀な……」

「え？ それはどーゆー意味ですかね」

「その様な状況で華琳様が許可を出すとは思えません。 その位軍
師なら読めていると思います」

「それな」

「まして我々は劉備殿の国と同盟を結んでいる訳でも無いですし」

「そういう事よ葵。 それに関羽が納得出来て居ないみたいだし、
そんな相手には返事をする気にもなれないわ」

そう言つて答えをギリギリまで出し渋つてW袁が追い付くのを
待つて3：1でボコるんですね解ります。

と思つていたんだが、

「だからこれからその返答をしに劉備の元へ向かおうと思うのだけれど……誰か付いて来てくれるからし？」

とそう宣ったのだった。

ちよつと待つて欲しい。これから劉備の所は向かう？ 誰が？

「私と葵と、あと誰かね」

「あつ、俺は確定なんですネ」

「当然じゃない。 文句有るの？」

「当然じゃない！ 眠いんで帰つて良いですかね？」

真顔でそう言うのと、華琳は眉をピクリと動かしながらもダメよ、と言つて恋に連れて来る様に命令したのだった。

……

……

…

「もー逃げないからさ、離してくんない？」

「……ホント？」

「ホントホント。 オデウソツカナイ」

「そう言つて脱兎の如く走つた回数が幾つか、ひよつとして貴方は忘れているのかしら？」

「二回目ぐらいかな？」

「八回目よ！ いい加減になさい！」

「や、もうここまで来たら諦める。 普通に歩かせてくり」

「……」

華琳がジト―つとした目を向けてくるが、嘆息して恋に縄を解く様に指示してくれた。

流石に縄で縛られる修業はそんなにしてこなかったし、恋の結びが雑、そしてそれ故に力任せてに結ばれているから痛いなんの……。 って言うか恋は足速すぎじゃないですかね。

しかし結局全員付いてきてるな。華琳ちゃんは人気者の様です。準備なんて何時もより早かった気がする。……俺はちよつと、フワフワしてたから。

「感謝いたします、曹操殿」

そろそろ陣が見えてくるか、と言った所で関羽さんが唐突に感謝の言葉を述べた。述べたが、

「やー……それにはまだ早いんじゃない？」

「そうね。無事に事が済んでから聞く事にしましょう」

劉備の陣は国境のギリツギリに張っていた。なんでそんな所を攻めるんだ！

「関羽、貴女の主の所へ案内してちょうだい。何人か葵と一緒に付いて来て」

「だからなんで俺は確定なんですかね」

俺の眩きが華麗にスルーされた。

と言うか荀彧がヒステリックに諫言したせいで掻き消された。おい、リレミトとルーラ使わせろよ。

と言うかこのままノコノコと劉備の元へ向かうには流石にリスキー過ぎる。

「孟徳、それはもしもの時は使え、と言う事か？」

華琳は俺の言葉にピクリと眉を上げるが、特に何も言わずに頷いた。

星閃の事を知っている秋蘭と荀彧はそれを聞いて黙っている事にした様だ。

「それにしてもリスク、危険が大きいな。武官が五人居ても逃がせるかどうか解らんぞ」

「構わないわ。霸王たらんとしている私が、劉備だけをこの場に呼びつけるなんてする訳ないでしょう」

大袈裟に肩をすくませてリアクションを取る事にした。

別になんでも良いけどな。華琳の事を守りきれば良いだけの話だし、この状況で罫をしかける程、劉備達もマヌケでは無いと思うし。俺の他に華琳と同行するのは華琳の忠犬とそのお供、その親友に、忠犬のライバルに鼻血の合計五人だ。

陣に入ると直ぐ様劉備が声を掛けてきた。

あの時はお世話になりました、と言っているが一体なんの事ですか？ と誰かに聞こうとして……諦めた。

春蘭が覚えていられるとは到底思えないからだ。

そして華琳は、

「貴女の胆力は大したものだわ。いいでしょう、通行を許可しましょう」

—

とアツサリと許可を出したのだった。

当然その為の街道はコチラが指定するし、米の一粒でも強奪したら殺す宣言はする。

それを聞いて劉備は無邪気に喜んでいる。

春蘭は驚き、稟は単純に疑問を抱いている様だが……甘い。甘いなあ……。

この華琳の底意地の悪さ、と言うか図々しいさがまだ理解出来て居

ないと見える。

華琳はそんな甘くて優しい女では無い。身内じゃないし。

「んで、孟徳の出す条件は？」

「そうね……通行料は関羽でいいわ」

「……………え？」

「何を不思議そうな顔をしているの。関所を通るのだから通行料を払う。当然じゃない」

「そらそうだな」

劉備はそれに対して動揺するが、華琳はメリットを提示する。

全軍が生き延びられて、追撃に来るW袁を防ぐと言った。よつし任せる慈悲は無い。

「曹操さん、ありがとうございます」

「でもごめんなさい」

「あら」

「おろ？」

「愛紗ちゃんは私の大事な妹です。鈴々ちゃんも朱里ちゃんも、他の皆も誰一人欠けさせない為の作戦なんです。

だから、愛紗ちゃんが居なくなるんじゃない、意味が無いんです。こんな所まで来て貰ったのに……本当にごめんなさい」

そう言つて劉備は深く頭を下げた。

……ん？ コイツは一体何を言っているんだ？ すまん誰か、誰でも良い。今のを翻訳してくれる猛者は居ないか？

チラリの華琳を見ると、華琳も俺を見ていた。

アイコンタクトで俺が発言する、と意志表示をして劉備へ向き直つた。

「ふーん？ で、どうすんの？」

「他の経路を調べてみます」

「そんな有るんだったらとつくに提示してるだろ。それともんなモンを見逃す程、お前んトコの軍師は無能なのか？」

「ッ！ それは……」

「それとも、この場で曹孟徳を討ち取るか？ そしてこのまま乗っ取る？ そうなった場合は全力で暴れるのでよろしく」

「そんな事しません!!」

「ならどーするんだよ？」

「……」

劉備はギリツと唇を噛み俯いてしまう。

その直ぐ側で控えている諸葛亮も同じだ。

「朝風殿！ それ以上は、

「代案も出せない馬鹿タレは黙ってろ。俺は今、劉備と喋ってた」

「そもそも作戦じゃねーだろ、コレ。通行料を払う気は無い、けど後ろの厄介なのから逃げたい、都合よく大国が有るから抜けさせて貰おう、なんざ」

「……」

「妹？ 大切な人？ 誰も欠けさせない？ ご高説どーも。でもさ、お前勘違いしてね？」

「……え？」

「いやそんなん、上に立つ者なら誰もが毎日毎日考える事だろ。馬鹿なの？ 死ぬの？ けどな、それでも犠牲と言うのは無くない」

「んな事考えてるのはお前だけじゃねーんだぞ、劉備。それでも、

お前が主なら決断しなくてはならない」

「さあ今すぐ決めろよ、劉備。」

全軍をズタボロにしつつ後続と戦うか。

一人の将を持つて後顧の憂いを完全に断つか。

この場で我々に戦いを挑み壊滅するか。

三つに一つだぞ」

慣れない山道、そして連戦につぐ連戦で疲弊した体に上がらない土気、こんなんで山登りなんかした日にはそろーズタボロにもなる。

「……」

「黙りか？ 黙ってたってしやーねえぞ、決めるのはお前しかいねえんだから」

「……い」

「時間かけ過ぎると、折角必死こいて逃げて稼いだ時間が無駄になるぞ」

「……さい」

「将を置いて行くなら行くで、こつちも準備せにやならん。早くして貰えませんかねえ」

「うるさい!!」

キツと顔を上げてヒステリックに怒鳴ったのは劉備だ。

冷静さを欠いた指揮官ほど厄介な者は無い。

「貴方に、貴方に私の何が!!」

「それ以上囀るな、劉備」

ピシヤリと言葉を叩きつけたのは、強烈な覇気を纏っている華琳その人である。

劉備は冷水を浴びせられたかのように静まりかえる。

「これ以上は時間の無駄だわ。面倒だから通りなさいな」

「……え？」

「貴女の底は知れた。つまらないわね、貴女」

氷の様に冷たい瞳を劉備に向けて、つまらない、と両断した。その後霞と稟を案内へと付けさせた。

「貴女達、南方を統一させるのでしょうか？ 通行料としてその内貴女の国を奪いに行くわ。待っていないさな、劉備」

そう言つて華琳は背を向け、劉備の陣から去ろうとするので俺達もそれに続いたのだった。

「大した悪役だったわね葵」

「え？」

『え？』

「いや、え？ 俺はただ劉備がどーすんの気になったから追求しただけよ？ 悪役とか、そんなじゃねえですよ？」

プイッとソップを向くと、それよりも、と何故か一字一句をクツキリハッキリ発音していく。眉間にも皺が寄つていき不機嫌な表情をする。

「貴方、なんで真名で呼ばないの？」

「うん？ そんなん決まってるじゃん」

「華琳の真名は華琳が許した相手だけの場で呼ぶモノ、だろ？」

「……あ……」

「そんだけの話し。俺が真名で呼ばなかったのは関羽さんや劉備達が居たから。ただそんだけ。」

大切なモノなんだろう？」

「ええ……そうね。その通りだわ、葵」

不機嫌な表情を引っ込めて納得した顔して笑顔に向けてくる華琳は、年相応の、ただの少女にしか見えなかった。

そんな華琳を見て、俺は……とても可愛いと思った。

第18 話 袁家の終焉

華琳達と皆が居る場所へと戻ると、そこには荀彧と風の二人しか居なかった。

華琳から事の顛末を粗方聞き終えて、風は霞と稟に護衛の兵士を差し向けた。

一方荀彧は既に他の将を、W袁を迎撃する為に配置を完了させていた。俺以外の全員を分けて合流するように促した。俺はどうするんですかね？

「同じ事を何度も言わせないで。 貴方は私と一緒に居るのよ」

「いやだって、俺えんしょーぶち殺したいですし」

「あの麗羽がこんな夜中に出てくる訳無いでしょう。 文醜と顔良だけよ」

その時伝令が入った。秋蘭からだ。えんしょーの追撃軍が引き返したとの事。ちなみにこの報告は三度目である。

風が質問したら、なんでも昔ちよつと有ったらしい。そーいや昔えんしょーのトコに居たって言ってた様な気がする。と言うか質問しておとさながら寝るの如何がモノなんですかね、風さんやい。

そして荀彧は次は突撃してくると予想し、伝令を春蘭へと向けた。即ち、敵を見付けしだい思いつきり撃ち込んで混乱させよ、と。

その目論見は見事に的中し、あつという間に敵を追い返してしまつたのだった。

……嫌だが、マジで苦痛だが、荀彧の評価ー非力で貧しくも（武士の情けで明言は避ける）頭が切れるがヒステリックな猫耳軍師ーを上法修正しなくてはならなかった。ム力つく。

………

……

…

えんしよーが不様にも逃げ去ってから幾ばくかの刻が流れた。

劉備達は無事（チツ）に領内を抜けた。案内役で有った霞と稟もつい先日帰ってきた。そして直ぐに本格的にW袁と構える計画が進められていた。

良かったね、この前のそんなに無駄になんなくて。

「敵軍が集結してる？ どこで、と言うかなんで？」

「そんなモノは私にも解らんさ。場所は官渡だがな」

流石は魏で一番のクールビューティ事秋蘭。淀みなくスラスラと答えてくれた。

「兵力は単純に倍になりますけど、指揮系統が整っていないと、ただ混乱させるだけになりますねー」

「上手く連携が取れなかった場合、互いの足を引っ張り有って寧ろ不利になるわ」

「だよなー。なんかお得になった感じがする」

「そうね。二面作戦を取らなくて良くなった分、こちらにとって楽になったかしら」

風がメリットとデメリットを発言し、それに対して荀彧が補足を入れた。や、俺もそれ位は解ってますの事ですよ？ まあ俺の為に補足したんじゃないんだろうけどな！

しかし当初、秋蘭の報国の前は二面作戦を取るかもしれない、となっていたがこうなれば話は別だ。

どちらに入ろうか迷っていたが、これならえんしよーと当たらないかもしれない、と言う心配はなくなる。

季衣が解っていないらしく、何故か……な　ぜ　か　春蘭に質問していた。

まあ確かに秋蘭も荀彧も華琳の近くに座っているから季衣の近くには居ない。武官は武官で固まって座っている。

「うむ。二面作戦を取らなくて良くなった分、こちらにとって楽になったと言う事だ！」

と堂々と華琳の言葉をそのままそっくり季衣へと繰り返した。

この時一瞬、本当に一瞬―多分5フレームくらい―ニヤリと口元を歪めたのだった。

「どう楽になったんです？」

「そつ、それは……朝風、任せた！」

「やだぷー」

「#」

ブチリと春蘭の額辺りからそんな音が聞こえてきて、真桜と霞はブハツと吹き出していた。

俺の直接的過ぎる挑発に華琳は顔をしかめていた。怒りでは無く笑いを堪える為に。

「なつ、なつ、なつ、なんだその言い草はー!!!」

「そうゆうーのは季衣の上司である春蘭が答える事だろ。聞かれたのはお前だぞ。ボク悪くないぷー」

「#####」

春蘭山は晴れのち曇りからの大噴火の予告を出してくれた。ちなみに噴火五秒前くらいである。

「にっ、兄ちゃんにも聞きたいかもー!」

「そつ、そうですね! 兄様、聞かせてください!」

空気を讀んだ下の娘達が慌てて声を掛けてくる。む。気を遣わせたい訳じゃなかったが、これは良くなつたな。反省反省。うーむ……そうだな！ 次はこの二人が居ないトコでやらないとな！

ちなみに流琉は恋との戦いから俺の事を兄様と呼んでくれている。季衣の兄様なんだから、私にとつても兄様なんです、と言っていた。この辺りは田舎の娘だなー、と感じた。

「そうかそうか。 なら説明してやろうなあ。 そもそも二面作戦、つてどういう意味か解るか？」

「え？ ……えつと……う？」

「二面作戦つてのは、つまり華琳の全軍を二つに分けて、同時期に違う場所で戦わなきゃいけないんだ。

季衣の中で最も解りやすく言うなら、同じ時間に、二件の盗賊を退治してくれ、つて依頼が来た時だな。

これだったら季衣と流琉は別々に向かわなきゃならないだろう？」

「うん、確かに」

「けど今回はそれをやなくて良くなつたのよ。 こっちとしては軍を二つに割るなんて面倒で危険な事をしなきゃいけなかった。そうじゃないと負けるからな。

でも相手はその優位を捨ててまで合流する事を選んだ。

季衣は流琉と一緒に戦ったら誰にも負けない気がしないか？」

「うん！ するする！」

「けどな、お前と仲悪いの……誰か居たつけ？」

例えようとして詰まってしまった。

この天真爛漫にして笑顔が可愛い季衣が、いやけど嫌いな奴くらい居るか。ちつとも検討が付かないけど。

「えっと、劉備さんの所の、張飛さんとは仲悪かったですね」

「……」

「ふーん？ まあ良いじゃね、その内敵になるんだろうし。 まっ、

とにかく張飛と一緒に戦ったら負けそうな気がしねーか？」

「する！ すっごいする！ あのチビツ子のせいで負けるよ！」

「いやそこまでは言っていないが。つまりそういう事だ」

解りやすかったか？ と二人に聞くとはーい！ と仲良く返事をしてくれた。うん、解ってくれたなら良かった。

春蘭に向けてどや顔するとぐぬぬと唸っている。

と言うか何？ 同類だと思われていたんだろうか？ それとも咄嗟に振ったのか？ よく解らん。

はい、注目！ と華琳はパンパンと二度手を叩いた。

兵を集結させて戦えるなら負ける要素は無い、と華琳は断言した。警戒すべきは孫策の一派だけだとも。

合流して戦うと言っても、全軍を統合して指揮権を一つに纏める訳では無い。そんな事がW袁のどちらかに出来るならもつと手強い相手足り得ただろう。

と言う訳で、孫策が居るえんじゅつの主力には春蘭と季衣、流流を当てていた。しかも華琳は第二陣の全権を春蘭に預けていた。

華琳ちゃんの大冒険である。スゲエなコイツ。幾らあの時の借りを返させる為とは言え、もし俺が同じ立場だとしてもそんな勇氣は無い。

「袁紹に対する第一陣は霞が務めなさい」

「……は？（威圧）」

「補佐で欲しい子は居る？」

「はあ？（威圧）」

「えっ、えっ……風達三人がええ、かなあ……？（ちよっ、葵めっちゃ怖いんやけど……）」

「はあああ？（威圧）」

「うるさいわよ、葵」

「お前、は？ はあ？ はあああ？（威圧）」

「貴方は私の部下じゃないのよ？ 軍を任せられる訳ないじゃない」

「あ、そういやそうだったな」

「葵はその、なんや？ 最前線で特攻するんか？」

「たりめーだろ！ 一人で陣を食い破って喉元に槍を突き立ててやる」

「（うわー……なんちゅう寧猛な笑顔やねん……もう葵と恋の二人だけでええんやないかな？）」

その後霞は荀彧に呼び止められていた。なんでも秘密兵器の講義を受けて貰うとか何とか。真桜も居るからちようど良い……？ なんじゃそら。

しかし追従するように華琳が宥めているのだから驚きである。……あー。あれか、秘密兵器と真桜で解った。あれだろ？ この前作ってた門から出せないマヌケ兵器。

完成したのか、あれ。

火薬が無い以上、作製出来る兵器、しかも真桜の自信作、となると……。

「うわー……貧乏くじ引いたあ……」

「この兵器、使い方次第では敵を完全に制圧出来る筈だ」

「え？ なんやの葵、アンタこれ秘密兵器が何か知ってんの？」

「……隊長なんで知ってんねん」

「いや、予測を立てただけだ。敵に大きな混乱を与え、計算が正しければ指揮官すら狙い撃ちに出来る、だろう？」

「せやからなんで知ってんねんな!!」

「だから知らんと言つとるだろうが。予測と鎌掛けに引つ掛かったお前がマヌケなんだよ」

と真桜を弄って遊んでいると、いつの間にか華琳が編成を済ませて

締めにかかっていた。相変わらず口上がカッコイイ奴だな本当。

……

…

一度方針が決まっちゃった後は早かった。

部隊の準備が纏めて出来た分、かかった時間は驚く程早かったのだ。

俺は霞の部隊も同じ様に鎧を装備して、一般兵に紛れ込んでいる。武装は勿論違うが。

決戦の場所に辿り着いた所で見たモノは辺りを埋め尽くす様な兵士。そして巨大な櫓の列だ。

アレは厄介だ。陣形を読まれ、矢を撃ってくるだろう。

流石にヴァリスタは無いだろうからそこまで距離は無いだろうが、撃ち下ろしの分、人力でも飛距離と威力はやはり高くなる。

しかし投石機がいきなりカウンターとして役立つとは……華琳はやはり運が良い。

まあもし無くても、星閃には幾つか手榴弾が積んで有るから蹴っ飛ばしてあの程度の櫓、当たったら使用不可能になるだろう。

建てたのは良いが、攻撃を受けない事を前提に作って有るんじゃないだろうか？　つまりリカバリーが出来ないのである。紙装甲なんじゃ無かるうか。いや木製なんだけどね。

「あの、朝風様」

「いや、俺そんな名前じゃ無いですし」

「いや、あの……」

「攻撃の合図が出たら俺が突っ込むからな。安心して付いてこい。な？」

兵士さんと話していると、櫓に乗ったえんしょーが出てきた。頑

張ったなあ……あれ動かすのに相当な力が必要だぞ。

設計とかももの凄い苦勞したに違いない。真桜みたいな天才がそう何人も居てたまるかつての。

そして華琳とえんしよで舌戦が始まる。

これ、結構重要な事なんだとか何とか。士氣に大きく関わるそう
だ。

まあ相手にやり込められたら不安になるのも解らんでも無いが。

結果だけ言うなら華琳の完勝だ。

なんと言うか、子供の口喧嘩並みにシヨボかった。シヨボかったが、コレは華琳が悪い訳じゃない。

きっとアレぐらいストレートに言わないと理解出来ないのだ。えんしよーが。

しかしこの前追い掛けて来たとき、千ちよいしか居なかったんですよー、と言うと言葉を失っていた。仕方ないね。

そして投石機が櫓を次々と破壊していった。

おー。やるなあ。今んとこ全弾命中してるぞ。

さて、華琳が帰って来たし……号令が有るんだろう。

勿論俺はそんなモノ聞かないが。

「んじやちよつと行つてくるわあ」

「へ？ あ、朝風様……？」

ドンツと思いつき踏み込み、爆発的に加速して前進する。

敵軍は投石機によって混乱の真っ直中にある。これを更に乱してやり士氣を思いつき下げてやる!!

突き、薙ぎ、殴り、蹴る。

敵陣を真っ直ぐ切り裂いていく。

「今死ね、直ぐ死ね、骨まで碎けろオ!!」

「止めろ止めろ!! 何をしている、相手は一人で、しかも雑兵だぞ!!」

「見た目で判断するとは、愚かな」

騒いでいる指揮官を見付けて、アイアンクロー（顎を掬い上げる様に）を決めて宙吊りにし、そのまま地面に叩き付ける。その衝撃でクモの巣の様に亀裂が走る。追撃しようと持ち上げると既に意識が無かった。

「行くぞ、人手裏剣!!」

『うおっ!?!』

次の軍団にぶん投げた所で霞の軍が追いついてきた。遅れずに付いてこい!! と号令を掛けたら応ッ!! と力強い返事が返ってくる。

策など不要!! ただ力で振じ伏せるのみ!!

「そうはさせつかよ!!」

「む? ……（誰だっけ? 字が汚ない事しか覚えてない。 顔良は覚えてるんだけどな……名前の通り可愛いし）」

「行くぜ、オラアアアア!!」

構えた大剣を振るが、大振り過ぎる。

続けて薙ぎ払い、切り上げと大剣を振るうが俺には掠りもしない。と言うかアレだな、それくらいもつと速くーそれも片手でーないと俺は捉えきれない。

「嘘、だろ……!?!」

「遅い。 シュトゥルムランツァー」

三太刀目を回避したと同時に踏み込み、胸当てを強く突いた。大きく吹っ飛ばされた字が汚ない娘はそのまま立ち上がって来なかった。たったの一撃で気絶したのだ。

弱い。弱過ぎる。いや、俺が強くなつたのだろうか？ お互い気が向けば恋と模擬戦をしているから……。お互いに危ないので武器は木製である。それでも当たり処が悪ければ死ぬ。

何故木製なのかと言うと、恋が嫌がるから。コレに尽きる。

そのまま浮き足だつたえんしょー軍を薙ぎ払い、大将の元へと向かう。

「見付けたぞオ……袁紹オオオオオオ!!!」

「ヒイツ!? なつ、貴方は!?!」

「れつ、麗羽なら差し出す! だつ、だから見逃してたも!!」

「さつ、流石です美羽様! その外道っぷりに感服しました!」

「ちよつ、美羽さん、何を

「うるさい黙れ」

『はい』

「俺の目的は袁紹。 お前だ。 俺はお前をぶち殺しに来たんだよ」

ニヤツと口角を上げると、三人がヒイイイ!? と悲鳴を上げる。よつぽど怖い顔してんのかね? それとも殺気を感じ取れているのだろうか。

周囲から感じる気配は敵ばかり。どうやら一人で先走り過ぎたらしい。まあ今更だけどな!

「まつ、待ってください! お金なら有りますわ、だから命だけでも……!」

「そんなんお前ぶつ殺してから奪えばええやん」
「!?」

「小便はすませたか？ 神様にお祈りは？ 遺言は残したかな？」
「あつ、うう……ヒア……」

袁招は涙を流しながら、ペタンと尻餅をついて俺を見上げている。
一歩近付いて、槍を振り上げる。

「やめ、助け……お願い……じま^ず……」
「……。では、死ね」

無慈悲に槍を降り下ろし……袁紹の前髪がはらはらと落ちた。
そして袁紹は股をグツシヨリと濡らして、失神した。口からあわ吹
いてる……。

元から殺すつもりなんて無かったのだ。怒りはそんなに長く持続
しない方だし。

ただえんしょーはぶつ殺す発言してた方が面白いかなー、と思つて
ただけだ。

突撃したのは、自分の実力を試したかったってのが大きい。

これで多対一でも充分にやりあえる事が解った。ただそれだけの
事。

「はえ？ 麗羽は殺さないのかえ……？」

「なんだ、殺して欲しかったのか？ この醜態を見られただけでも
自殺モンだとは思うが」

「たつ、確かに……」

「お前達の混合軍は壊滅状態だ。再起は最早不可能だろう」

「ウグツ」

「だから見逃してやる。さっさと失せろ」

「い、良いのかえ？」

「ガキを殺す趣味は無い。死にたいと言うなら構わないが」

「いや、いやいや、逃げさせて貰うのじゃ!! 七乃!!」

「はい、お嬢様」

袁術とお付きの軍師を何故逃がしたのか？ そんなの決まってる。俺が殺さなくても、背中からやられるのが目に見えているからに他ならない。

華琳が春蘭に全権を預けたのは借りを返す機会を与えたのだろう。そして孫策は千載一遇のこのチャンス逃がす様なマヌケでは無い筈だ。

ここで俺が殺るのは簡単だが、味方だと思っていた者から背後から刺されるロリを想像すると……愉悦……！

「さてどうするかな……この汚いの……」

「朝風様！ 朝風様はいずこに!!」

「おう、ここだあ」

丁度良い、コイツに運ばせよう。流石に触りたくないからな。黙つてれば可愛いとは言えな。

それに利用価値が無い訳では無いのだ。

コイツ、血^ぐだけは^ぐ優秀らしいし。

こうして華琳は袁紹の治めていた河北四州を丸ごと手に入れ、袁家は全て滅びたのだった。

第19話 戦利品

「それで？ あんなモノ持ってきて一体どうすると言うのかしら？」

「え？ なんかに有るだろ？ 華琳なら利用方法思い付くかなーって思っただけど？」

「いらないわよ、あんな金食い虫……」

「いやいや、別に今すぐじゃなくても、ねえ？」

俺達が今二人で話してるのは、俺が捕まえて来た袁紹の処遇に関してである。

解りやすく挑発しても乗ってきやしない。……そんなに嫌なのか……。

俺だって近い内になんとかしよーぜ！ と言っている訳じゃない。そんなの誰がどう考えたって無理難題だからだ。そうじゃなくさ。

「お前が天下を取った後とかなら使えるんじゃないの？」

「……。それはアレを嫁に出すと言っているの？」

「そうそう。血、だけ、は良いから、失礼には当たらないよね！」

「まあ……そうね……血、だけ、は良いものね」

「貴方達いい加減になさい!!」

ちなみに今玉座には俺と華琳、それと袁紹の三人だけだ。

さつきから本人そっちのけで色々議論しているのである。流石に敗戦の将を華琳の自室に入れる訳にはいかないし、俺が入ったなどどこぞの猫耳軍師の耳にはいったらどう予想しても面倒な未来しか思い浮かばない。

「さつきからアレとかそれとか、金食い虫とか、小皺が目立ってきた

オバハンとか好き放題！」

「オバハンとか言ってなくね？」

「そうね。麗羽は少しアレだから……」

「なんと言うか、馬鹿とかアホとか、色々と罵る言葉は有るけど、正直袁紹さんには全部が当てはまらないよねえ」

「解れば良いのです、解れば」

俺の言葉に満更でも無さそうに笑みを浮かべるえんしよ……。……
一体何がどうしてそうなった……？

「(……今の葵の言葉を誉め言葉と取るのね……)」

「そもそも私は私の認めた殿方の元にしか嫁ぎませんわ!! ……

まあ、その点貴方なら、その……」

「まあ無いなら無いで処刑ですかねえ」

「え」

「そうねえ……それしか無いかもしれないわねえ」

「え、ええ？　ちよつ、しよ、処刑……？」

華琳にウインクすると同時にわざとらしく処刑を提案する。

直ぐ様華琳が乗って来てくれるのは流石と言う他ない。

うっわー……華琳ちゃんでは良い笑顔ですねえ……愉悦ってるわあ。今度俺と華琳の二人で秘密倶楽部、愉悦部でも作ろうかな……。

「あら、何を驚いているのかしら？　敗戦の将なんだから当然じゃない。

貴方は金食い虫で、その上無知蒙昧の世間知らず。武が殊更優れている訳でも無し。貴方の袁家として血統は買っているけれど、貴女はそれすら嫌だと言ったわ。ならもう処刑しか無いわ。ねえ葵？」

「おつ、お待ちになって華琳さん！」

「あら、何かしら？」

「私、別に嫁入りが嫌だと言ったのではありませんわ！」

「あら、そうだったかしら？　でも似た様なもののように」

「私の認めた殿方なら、すぐそこに居ますわ！」

おっと……。おいおいえんしょー。幾ら華琳がチンチクリンの矮躯でアンタと比べてペタンコだったとしても、それはあんまりじゃないのかしらん？

華琳ちゃんは立派女の子ですよ！　プンプン！　……くくく。

「不思議ね……。今葵が考えている事が手に取る様に解るわ……。何故かしら」

「一体なんのことやら」

「……普段はもつと上手く口笛を吹いているじゃない。しかも口笛を吹いたら誤魔化せると思っているの？」

ちやつ、ちやうねん！　これはのび太君方式やねん！　って言っても華琳にはなんのこっちゃ解らないと思うので話しを本筋へ戻す。

「今この場に男は俺しか居ない訳だが、俺に嫁ぐって事？」

「……そう、なりますわね……」

顔を赤くして、モジモジとする袁紹。

その美しい翡翠の瞳一杯に涙を浮かべ、やけに艶っぽい表情で俺を熱烈に見ている。

え、これひよつとしてアピールしてるの？　死にたくないから必死でアピールしてるんですかね？

「あらあら、必死ね麗羽？　でもダメよ」

「葵は私のなんだから。　誰にも渡さないわ。　まして貴女になん

て、ね」

クスクスと笑いながら袁紹に絶望の一言を浴びせて止めを刺した。きつと袁紹のその顔が見たくて言ったんだろうが……。

……。その、それってアレですかね？　ずつと私の側に居ない訳と許さないんだから、宣言……とか？

「フッフ……愉しいわねえ……ねえ葵。……葵……？」

「や、その……あーつと……」

「？　……。……!?（↑何故葵が赤くなつて言葉を濁しているのか不思議に思い、自分の言葉を思い返して徐々に赤くなる華琳様）」

「（あれ、私空気ですの?）」

「その、なんだ、ツンデレ乙!!」

「何故か解らないけれどその言葉にはそこはかと無い怒りを感じるわね」

「どーする、コイツ。取り合えず監禁しとく?」

「そうねえ……でもただ飯食らいを置いておく様な様なら余裕は無いわ」

「ちよつ、私の一世一代の告白をそんな流す様に!」

「いやだつて、ねえ?」

「そうね」

「なんですの!」

俺はうるさい奴が嫌いだ。

だがそれ以上に嫌いなのが、馬鹿な奴だ。

頭が良いのか悪いとか、勉強が出来る出来ないじゃない。知識が無いとか話しが合わない奴とかでもない。

たまに居ない?　話していてマジでコイツ馬鹿じゃねえの?　つて奴。

常識を知らない、言葉の使い方がおかしい等など上げればキリが無

い。

袁紹はコレに当たる。

なんだ、雄々しく華麗に前進つて。戦を馬鹿にしているのか。

「と言う訳で袁紹。お前を嫁にする位ならまだ甘ちゃん劉備の方がマシ。まあオマケの方がメイン、目的と言う不思議な状況になるが」

オマケとはつまり劉備の家臣こと関羽さんの事である。もし、万が一にもそんな事が起きれば、多分奥さんの方じゃなくて間違いなく関羽さんに手を出すと思う。デートとか行きたいよね、うん。

「それは言えるわね。劉備はつまらない娘でだけけど、その配下は優秀なもの」

取り合えず麗羽の処遇は私が考えておくから、貴方は下がりなさい、と疲れた顔をしながら華琳はそう言ったので任せるわあ、と言って俺は玉座を後にした。

ふむ……これは華琳に負担を掛けているだけだったか？ だとしたら失敗したな……。あのまま放逐するべきだったかな……。？

既に両陣営はほぼ壊滅状態（ただし孫策軍は除く）だった。俺が袁術に言った様に再起はもはや不可能だと思われる程に。

ならばあそこで気絶だけさせて放っておくのも手だったかもしれない。

しかし今みたいに手元に置いておけば、万が一、億が一、兆が一袁紹の力がアレば事態が流れる。そんな時が来る、かもしれない。

もしそうなれば、放逐していたらそんな袁紹を頼る、なんて選択肢はきつと想像も出来なかっただろう。……今持って袁紹に頼らねけ

ればいけない事態は思い付かないが。

まあどうしても要らなくなったら名前を奪って野に放つか、それこそ公開処刑でもすれば良い。……んな事したら風評被害パネエか。

この世界、名前と言うのはとても大切なモノだ。

真名に限らず、である。

故にこの世界で名前を失うと言う事は、極悪人くらいにしか適用されないのだ。しかし袁紹はA級戦犯なので適用出来るのである。

まあそれは置いて、今回活躍した投石機。それを作った真桜の元へと足を向ける。

うむ、ご苦勞であつたな。大義である。

「うわー……そないな棒読みで誉められたん初めてやわあ……しかも大活躍やつたんは隊長の方やろ、どっちかつちゅーと」

「二人でえんしょー捕まえちゃったからな、俺」

「なに言うтонねん、こんのどアホ！」

スパーんと後頭部を思いつきりはたかれた。うおおい、ハリセンなんてどつから持つて来たんだ霞テメエ。良い音じゃねえかクソが。

まあ気配には気が付いていましたかね！

「……良い音したねえ……今」

「おお、良いぞ霞！ もっとやれ！」

「春蘭は黙つとき!! 葵、アンタなあ……なんで突つ込んだんねん!? 援護に回るのもしんどいねんぞ!!」

「悪かったって。俺が悪かった。安心しろって、もうあんな真似しねえから」

「つたく……。 あんなのはな、春蘭とか季衣だけでええつちゅうねん」

「ボクに飛び火した!?!」

「そーガミガミ言うなよ霞。 禿げるぞ」
「禿げてたまるかつ!!」

霞が怒ったー! と茶化しながら広間から逃げ出した。
またんかいコラア!! と言って追い掛けて来てくれるノリの良い
霞が大好きです。

I M 6 二人の小さな妹分と大きな妹分

俺が呑気に鼻歌を謳いながら厨房に籠って鍋を振っていると、突如爆発音の様な大きな音がした。

ふむ……華琳がノコノコ出掛けているのに刺客やら奇襲は無いとは思うんだが……はてさて。

「……」

「……（じー）」

俺の前には料理の完成を心待ちにしている恋が居るのである。

俺の料理を食べてから城の備蓄が急激に減っているのは間違いない。コイツどんだけ作ってもおかわりを要求するのだ。止めてよね。ボクは料理人じゃないんだよ？

「恋、ちよつと見てこい」

「……やだ」

「見に行つて帰つて来たら料理出来てるぞ」

「冷める」

「冷めねえよ」

恋はテコでも動く気配がしない。もう……。ちよつと気になつてきたし、休憩がてら散歩と行こう。

「……どこ行くの？」

「おいちゃんは疲れたよ」

「……（くいくい）（ぐきゆるー）」

袖を引っ張つて引き留めつつ腹を鳴らすと言う事をやってくる恋。いや別に器用でも何でも無いんですがね。

「大人しく外に食べに行くか、一緒に付いてくるか、どっちかの二択だ」

「……。………………。行く」

「そうかい」

葛藤の末に空腹は我慢するらしい。どんだけ俺の飯食いたいんだ。音がした方、庭へと着くとそこは見るも無惨な事になっていた。地面は穴ボコだらけ、植木はバツサリと切られている。俺は華琳の指示の元綺麗に整えているのを知っている。

と言うか将の間では常識とも言える。そらそーだ。華琳がお茶する為に綺麗にしてるんだし。

「あーあー。俺しーらね」

「……コレ、季衣と流琉……」

「だろうな。春蘭でも有り得るけど、流石に忘れてねえだろうか
らな」

気配も割りと近くに感じる。早速向かってみよう。

うん、二人して雄叫び上げながら武器振ってたわ。腕上げたね！
とか言ってる場合じゃないんですがそれは。

季衣は思いつきり獲物を振り回して鉄球を流琉に向ける。

流琉は流琉で巨大ヨーヨーを斜めに傾けて衝撃を上手に外へと受け流している。

おいこつち来るぞマジかそれ。

「ふん!!」

瞬時に練気をして全身に気を巡らせつつ、拳を鉄球の中心へと向けて打ち抜いた。

ちょうどそれが二人の中間を通り、ゆつくりギギギと錆びた音でも立てるかの様にゆつくりコツチを振り向く。

「怒られる覚悟は出来たか、うん？」

「（ぐ）、（ぐ）めんなさーいー!!」

一先ず二人共に軽く拳骨を落とす。怒るのは俺の役割では無い。しかし言っておかなければならない事が幾つかある。

先ず武器を振るうんだから演習場に行く事。何故ならそういう決まりだからだ。

そして決まり事が有ると言う事は当然理由が有る。

今ここに居たのが俺だったから大丈夫だったけど、軍師の三人娘や文官。それに丸腰の華琳だった場合大怪我じゃ済まない事になる。

引いてはコイツ等二人の首が飛ぶ（物理）。

「事の重大さがお解り？」

「はい……」

「んでな」

この荒れ放題の庭である。

直してやりたいのは山々だが、流石に無理が有る。大人しく華琳のお叱りを受けて罰金を支払うしかあるまい。

「そんな事も有ろうかと！」

「華琳に許して貰えるの良いな？　華琳こえーぞー」

「無視せんというや隊長」

「なんだ、今忙しいんだが」

「そんな事も有ろうかと！」

「……葵、ごはん」

「はいはい、もうちよと待ってねえ」

「……隊長、うち泣きそうやわ……」

「んだようっせえなあもう……んで、なによ」

「じゃじゃーん！」

そんな掛け声と共に真桜が取り出したのは手のひらに乗る様な大きさの小さな箱だった。

満を持して取り出したモノにしては……。これでどうするんだろうか？

真ん中に赤いボタンが付けられているが……。やはりコレは自爆スイッチなんだろうか？

何て言うか、科学者なんて言う生物はロマンを追い求めるモノなのだ。そしてそのロマンは時に常人には計り知れない。

「隊長が押す？」

「……。ふんっ!! ……うつし、行くぞ！」

「え、なんで今気合い入れたん？」

「せえやあああああ!!」

再び練気を行い、今度は全身に纏って爆発に備える。

まだ火薬が出回っていない以上、真桜が独自のアレンジを加えて爆発力を増やしているとは考えにくい。もし仮に箱一杯に火薬が敷かれていたとしても、もの大きさから考えて大した火力にはならないだろう。多分。それでも痛いもんは痛いから硬気功を練ったのだ。

そして恐怖で振るえそうになる指を抑え込む様に大声を上げて、裂帛の気合いを込めて、鉄先輩の様にスイツチを押す。

タチタイピングにどんな漢字使ってたっけ？

………

……

……

何も起こらない。

真桜がなんやの？　と言う顔をしている位なにも起こらない。え、じゃなんだったですかね、この思わせ振りの箱は。

「いや、隊長なんでそんな気合い入れてんねん。意味解らへんて」
「いや、てつきり自爆スイッチか何かかと」

つて自爆スイッチならこの箱は爆発しないじゃないですかーや
だー。良かったー。そういーん、対爆ぼうぎょー!! とか叫ばなく
て。

ほっと一息ついていると、遠くの方から声が聞こえてくる。
せいや！　せいや！　せいや！　せいや！

……え？　　せい、え？

どこからともなく聞こえてくるのは野太い声の輪唱。

せいや！　　と言いつつ現れたのな屈強な兵士集団。……せまい。
暑苦しい。

「ぜんたーい、止まれ！」

「せいやーーー!!!」

「……」

「園丁✕無双のみなさーん！　よろしくお願いしまーす!!」

「せいやーーーっ!!!」

季衣と流琉が指揮を取り、園丁✕無双と言うマッチョ共はせいや！
と言いつつ勢いよく庭園の修復をしていく。

俺と恋は二人して目を点にしてその仕事っぷり見ていた。すげえ
な、折れた木まで何とか出来るのか。

あー、成る程、確かににそれならよーーく観察しんと解らんわな。

「はー……大したもんだなー」

「ここまで仕上げるのに苦労したでえ」

「だろうなあ」

もはや庭園には何の痕跡も残っていないかった。いや、正確には見付
けられそうにない。

いや、だからと言ってここで暴れて良い理由にはならないんですが
ね。

でもまあ、華琳には怒られないだろうな。

「流琉ー、おなかすいたー」

「そうね、そろそろお昼にしましょつか」

「やったー!」

「……葵」

「わあってるよ。ん、怪我してんな、ちよい見せてみ」

「えー? こんな怪我の内に入んないよ?」

「そーゆー訳にはいかん。俺みたいになったら大変だぞ」

周囲を見渡すと真桜の薬箱が置いてあった。

箱にこんな事もあるうかと! とデカデカとマヌケな事を書くの
は真桜くらいしか居ない。

おいこら恋、止めろぶら下がんな邪魔だ。せめて背中に乗ってる。

薬箱を開けて中を改める。……ラベルくらい貼っとけよ、と思わず
呟いてしまう俺は悪く無いだろう。

いや、これか。瓶の下に紙が入っていた。

蓋を開けて薬を人差し指で取る。季衣に目え瞑ってるよ、と言うが
まだ不満タラタラである。

どうやらコイツは昼飯を食いたくないらしい。

「兄ちゃんに塗って欲しいなあ!」

「そうか? なら塗ってやろうな」

「……うう……兄ちゃんの意地悪う……いちち、染みるう……」

俺が意地悪とか、マジで今更何言ってるんですかねレベル。華琳をからかうのなんて俺くらいなモンだ。

薬が染みるくらいなんだ。気合いで我慢しろっての。

「戦いで痛いのと、傷薬が痛いのは別なんだもん……」

「一緒だなモン。戦闘中は興奮してて訳解んなくなってるだけだ。ついでに言うのと辛いのも同じだぞ」

「ほえ？」

「えっ、そうなんですか？」

「おうよ。かつらい食べ物とか肌の弱い部分に野菜の汁が当たると爛れるからな」

「へー……そうなんだあ」

「二つ賢くなったな、季衣」

「うん！」

「ほい終わり。話してる内に終わってるだろ」

本当なら絆創膏でも貼るんだが、無いもんな。

ん、流琉も怪我してんな。ほっぺたに。

無言で薬を指に取りつつ、流琉を手招きする。？を浮かべつつも寄ってくる流琉にべったりと薬を塗り付けてやる。

「……」

「……」

なんだか段々とうっすらだが頬を赤くしていく流琉。どうしたんだ。熱でも有るのか。

「……その……」

「うん？ どした」

「……照れますね」

「え……あー、うんそうな。 照れるな」

そうか。だから頬を赤くしていたのか。

……照れるか？ ……流琉の顔を正面から見てるからそう感じるんだろうか？

「ほい終わり。 飯行くか」

「はーい！」

「……待ちくたびれた」

「はいはい」

少しは季衣と流琉に兄っぽい所を見せられただろうか？ だと良
いんだけどな。

「よおーし、お兄ちゃん頑張っちゃうぞー！」

「わーい！」

「良いんですか？」

「手伝えよー？」

「はい、勿論です兄様！」

うむ。順調に仲良くなれている様だ。さて、俺は飯作んないといけ
ないから後頼むな真桜。

I M 7 張三姉妹

何時だったか、張三姉妹の面倒を見てやった事が有った。アレからちよくちよく、仕方なく、ほんつとーに仕方なく色々と手を貸してやった。これも仕事なのだ。季衣と流琉にお願いされたから仕方なくやってるとかそんな訳ないのである。

そんな張三姉妹だが、今日はその舞台と事務室が準備出来たためその案内をしている。

直接作った訳じゃないが、立地やら折衝などをしたのが俺だった為、案内に適任とも言える。

真ん中の妹（名前なんだっけ）には苦手意識を持たれている様だがそんな事は知った事じゃない。

「ねえねえ、まだ着かないのお？」

「もうちょいだ。黙って着いてこい」

「アンタねえ……その言葉づかいなんとかなんないわけ？」

「孟徳は文句言ってこないのにお前には配慮しろと？」

お前が

我慢しろ真ん中」

「真ん中？」

「お前が真ん中の妹だから真ん中」

「なっ！ 私には地和って言う可愛い名前が有るのよ！ 名前で

呼びなさいよね!!」

「ちーほー？ ほーってどんな字だよ。方？」

姉さん達と同じよ！ とプリプリ怒っているが、そもそも上も下をしら、いや覚えていない。

そう言ったら改めて自己紹介された。一番上が天和。なんか脚払みたいな名前だな。

一番下は人和。二番なんじゃダメなんですかって言いそうだ。いや言わないか。

天地人か。やべえな両親のネーミングセンス神懸ってるよマジで。

そして案内したのは街外れに有る小さな見せ物舞台と脇にある事務職である。

天和はいやだと文句を言つて、挙げ句跳んだり跳ねたりしたいところきやがった。

地和はこんな舞台じゃないとハッキリ断言する程である。

「あたし達三人を舐めてる訳!? こんな所で歌わせ様なんて……!! 所詮あんたの期待度もその程度つて事ね!」

「……何を勘違いしている?」

「はあ? なにがよ!」

「故意で無かつたとは言え反乱を起こした。反乱軍の、しかも敗戦の将がそんな事を言える立場だとても?」

「……う、ぐううう」

「最近孟徳の統治が上手くいっているおかげで、民が多くなっている。 そうなれば必然的に場所は無くなる。 必ず必要で無いものにそんな大きな場所は割けない。 少し考えれば解るだろうが」

「……」

「朝風さんの言う通りよ地和姉さん。 それに、そもそも私達が稼いで大きくすれば良いだけの事。 朝風さんにはお礼を言つても不満をぶつける相手じゃないわ」

「……そう、ね……。 ごめんなさい」

地和は素直に頭を下げた。

解ってくれるなら俺も何も言わない。 人和が言わなければ俺が同じ事を言っていただろう。

そちらで稼いで大きくするのは全然構わない。 華琳としてはその才を腐らせる事をしたく無かつただけの筈だ。

然るべき税金を納めて、反乱を煽動する様な事さえしなければ華琳も文句は言わないだろう。

「けど、こんな所にみんな来てくれるのかな……?」

「そこはお前等の腕の見せどころだろう。頑張れよ」

「朝風さんにも手伝って欲しいのだけれど……」

「俺か? 今日はもうやる事無いから別に構わないが……」

「じゃあこれ、はい」

「あん?」

人和が俺に差し出したのは瓦版の請求書だった。

……これ幾つか桁間違えてないですかね。

情報戦するのは構わないが、もう少しやり方が有るだろう。

「これはあれか? 俺が孟徳にお小遣いを貰えと?」

「そうなるわね」

「ふむ。まあそれは良いんだがな、お前等この量三人、俺入れても四人だが、こんな少人数で配るつもりか? この軍馬100頭に相当する様な値段の瓦版を」

「勿論」

俺は思わず深く、重い溜め息を吐いてしまった。正直人和はもう少し賢いと思っていたのだが……。

「恐らくお前は、俺が人を使うのを期待しているんだとは思うが、もつと良いやり方が有るだろうが」

「……。……? ……ごめんなさい、解らないわ」

俺はニヤツと笑って、まあ楽しみに開演まで待ってろ、と言って華琳の元へと向かうのだった。

……

……

…

華琳にお願いに行ってなんとか（今度お願いを聞くはめになった。

怖い）請求書を通す事に成功した。まあダメとは言わないだろう。アレは日頃のお返しに貸しを無理矢理作つたに過ぎない。

今日は非番だった筈、と言う記憶を頼りに季衣と流琉、それと恋に声を掛けて手伝って貰う事にした。まあ恋はいつでも非番なんですが!!

恋には別枠で家族（動物達）にもお願いしてみた。報酬は模擬戦と料理を要求された。

そんなんだったらいつでもやりますよー！　こんな量の瓦版配るより遥かにマシですしおすし。

三人は早速事情を説明した。

この三人が協力してくれるなら、人も沢山来てくれるだろう。

なにセアニマル、チャイルド、ビューティーが揃っている宣伝なのだ。受け取った方が勝手に勘違いしてくれるなら儲けモノだ。

ちなみに動物達は両脇にベルトみたいなのを着ける事で任務を完遂するらしい。すげえな、なんて芸達者なんだ。

「ねえ兄ちゃん、コレなんて読むの？」

「うん？」

季衣が指差した所には役満姉妹と書かれていた。

やくまんしまい……。うーん……。まあ確かに役満だけどき……。

でもこれじゃあ詰まんないよな。

「コレはな、宇宙創造姉妹（ビッグバンシスターズ）って読むんだ」

「びつくばん？　しすたーず？」

「うむ。この世界が出来たのは凄い爆発が起こったからだと言われている。

あいつらは名前に、天地人が入ってるだろ？　だからビッグバン。シスターズは姉妹の複数系だな。貴方達とかの達と同じ意味になる」

「なっ、なんだか凄そうです」

「おう、かつこいいだら（適当）」

それじゃあ皆、頼んだぞ!! と告げると元気よく返事してくれた。
勿論恋は頷くだけである。

……。今気付いた、なんか俺今日めっちゃ損してね? あれ、だよな? 損してますよね? あれー? ……まあたまには良いか。良いな。

………

……

…

配り終えたのは夕焼けが沈み始めた頃合いだった。黄昏である。黄昏よりも昏いかもしれない。竜破斬うてないけどなー! ……テンションがおかしいな。このままだと乱入するまでである。ねえよ。

なんとかかんとかの書を使ったかあそこまで人が集まったんだと思っただが……どうやらそれは俺の勘違いだったらしい。

華琳は本当によく見て、見抜いている。

やはり偶像（アイドル）と言うのは熱狂するモノの様だ。

俺はアイドルはどっちかと言うも（オブラートに包んで言うと）苦手な方だ。アイマスとかなんとかBとかよー解らん。

でもラブライブは面白かったです（小学生並みの感想）。

ライブが終わった様なので、狭苦しい事務所へと向かう。

「ご苦労さん。ほれ、飲み物だ」

ほどよく冷えた水（キンキンだと逆に喉が渴く）を配って、燭台を置き火を灯す。

コレは猫耳軍師の私室から以前仕返しにパクツ、もとい無期限で借りたモノだ。

嫌がらせに借りただけなので死んでいたから、持って来てやったのだ。ついでに軽く摘まめるモノも。

「ん、美味しい!」

「そうかい。 そらどーも」

「? どういう意味よ?」

「どーゆーもこーゆーもねえけど」

「ホント、美味しいです。 ……まさか朝風さんが……?」

「ついでだ、ついで。 妹分達が手伝ってくれたんだよ。 その礼んときに余分に作ったんだよ」

「葵ってば、お料理も上手なんだあ! 凄い凄い!」

「大したモンじゃないさ。 これなら孟徳にも良い報告が出来そうだ」

「でしょでしょ? 少しは見直した?」

「いやそれは無い」

「なんでよ!?!」

「なんでと言われてもな……こればかりは仕方ないだろ」

ラブライブが特別なだけで有って、きっと俺はこれからもアイドルを好きになることは無いだろう。 何故かは解らない。 明確な理由なんてない。

だけでもあ、好き嫌いなんてそんなモンじゃないのかなー、と俺は思っている。 ただ、

「俺はアイドルは苦手だが、お前達の事は嫌いじゃない」

「……なによ、それ」

「うつせえよ。 疲れて寝る前に、掃除だけしとけ」

「えー!?! 葵帰っちゃうの!?!」

「帰るさ。 なあに言ってんのおたく」

「手伝っていきないよね!」

「俺はこれから孟徳に報告しなきゃならんの。 待たせてるのよ」

「ダメよ姉さん。 朝風さんを困らせたら」

そうやって人和が諫めてくれるが、掃除したくないだけである。
むしろ華琳なんて待たせるだけ待たしてやきもきさせてやろうか
と思っているぐらいだ。

「さてと、俺はもう行くわ。 その内で良いから、孟徳にも招待状を
出しとけよ」

「解ってるわ。 それは必ず」

「まあ人和が居るから平気だとは思うが、一応な。 んじやな」

「今日はありがとうございました。 また、お願いしても良いです
か？」

「あ？ あー……まあ、暇な時ならな」

「素直じゃないわねえ」

「うつせえよ。 おやすみ！」

事務所の扉をわざと大きな音を立てて閉めてやる。 これは一種の
アピールだ。 本気で怒っている訳じゃない。

しっかし地和の奴は……ったく。 アルトみたいな事言いやがつて
よ。 ……久し振りに、声くらい聞きたいが……無理だろうなあ……。
なんとなく空を見上げながら、俺は城へ帰る事にした。

I M 8 熱狂

日課の鍛練を終えて部屋へと向かっていたら、広間から声が聞こえてきた。

なんだなんだ、と思い覗いてみると全員が何やら難しい顔をしている。皆大好き萌え萌え華琳タソ（最近は察知能力が上がってきたのか、目の前で考えただけでも睨まれる）が居ないから会議って訳では無さそうだが……？

「朝風！ ちょうど良い所に！」

「あん？ なにさね」

「うむ、これなのだが……」

難しい顔をした秋蘭が差し出したのは一枚の手紙だった。これがなんだと言うんだろうか？

差し出したと言う事は読めと言う事なのだろう。早速中身を見てみる。

へそ曲がり軍師がニヤニヤしながらこつちを見ている。無視しているが。

なんだ？ 俺だって伊達に暇をもて余して居る訳じゃない。

この世界の文字なんぞとづくに読み書きできる。

「……？」

文字そのものがおかしい訳では無いが、文法が滅茶苦茶だ。こんなモノ誰がまともに読めると言うのか。

なるほど、嫌味軍師は読めるモノなら読んでみる！ と言う事でニヤニヤしていたのか。うわー。マジかコイツ。質悪。

しかし……なんだこれは？ 手紙の体は成しているが、習い初めの者が書いた練習様じゃないだろうか？

しかしどこかで見た事有るような、無い様な……？

「なんぞこれ」

「朝風でも無理か……。なんでも地和語とか言うらしくてな……」

「ちつ。馬鹿が……。直せと言ったのに……。道理で見た事有ると思ったぞ。これは誰宛だ？」

「華琳様だ。先程使いの者が来てな」

だいたい、何が地和語だ。そんな事言うなら一から新しい体系を確立させてから言えっての。ただデタラメに並べてるだけじゃないか。そもそも手紙が華琳宛と言う事は、これは公式にビッグバンシスターズ（これに正式決定した時は俺が一番笑った）が出した事になる。それをこんな訳の解らない文法で書かれても困る。

何か重要な事が、万が一書かれていたとしても誰も理解出来なくてはなんの意味も無い。

これは拳骨と厳重注意のコンボだな。と言うか人和に公的書類は全部、必ずお前が書け!! と厳命しておいた筈なのだ。

姉は役に立たないんだからな!! と念を押しておいてこれである。お説教しかない。

「せめて通訳くらい寄越せってんだ、あのアホ。……おつ、ちょうど良い所に」

季衣と流琉が歩いてきたので手招きして呼ぶ。

早速この手紙を翻訳して貰う事にした。コイツ等は何かと張三姉妹の舞台を見に行ってるからな。きつと読めるだろう。

……出だしから頭が悪そうだった。いやまあ、地和は賢い方では無いが幾らなんでもコレは酷い。公式に出すモノじゃない。

これはコンボ延長かな? とか思っていると、季衣が続きを読んでくれた。

要するに今度やるライブの招待だ。

スゲエなイツら。もう華琳招待するのかよ。って言うか華琳アイツ等に真名許してたのか。

ぎやらくていかとはなんだとか、特等席は10倍値段がするとか言っているが、俺は別の事を考えていた。

すなわちこのイベントをどうやって回避するかである。

考えても見て欲しい。

別に好きでもなんでも無いモノを長時間目の前で見せ続けられる辛さを。

途中退席しようモノなら非難の嵐になることは間違いない。そんな事になったら鬱陶しい事この上無い。

俺は徐々に気配を周囲に同化させて広間を立ち去ろうとした。

「葵はどこに行く気かしら？」

「(!? しつ、しもたー！ 広間の方にばかり注視し過ぎたー!?）ちよつ、ちよつとそこまで」

「後になさい。それで、アレは何を騒いでいるの？」

「……それがな……」

地和語とか言う意味の解らない未知の言語で書かれた興行の招待状が届いた事を報告した。

騒がしいのはその謎の言語を解読出来たのが季衣の流琉の二人でそれではしゃいでいる、と。

「そう言えば彼女達の舞台は一度も行ったことが無かったわね。貴方から見えてどうだったの？」

「俺はアイドル、ああ言う手合いは得意じゃない。まあ盛り上がってはいたな」

「そう……」

「華琳様だ！ 華琳様、ボク達一回見て来たんですよ!? すっごい楽しかったです！」

華琳は何やら難しい顔で考え込んでいる。……。これ、あかんやつかもしれん……（察し）。

「折角の招待なのだし、行かせて貰おうかしら」

「そうかそうか華琳が視察に行くのかだったらボクは必要ないです

ね（真顔）」

「当然、貴方も一緒に行くのよ」

「だがことわ

「二個貸しが有ったわよね？ それを返してちょうだい」

「アッハイ」

華琳はそれはそれはとても

良い笑顔で俺に笑いかけたのだった。

……

……

…

ライブ会場はまだライブが始まってもないのに盛り上がっている。

すげえ大規模だ。華琳が驚きつつも感心している。楽しみしてくれているのは大変結構なんです、ボクチン人混みに、人に酔って来ました。帰って良いですか？（汗）

なんて今更言える筈も無いのだが。

ボケーっとしていたらステージに一人の男が上がってきた。ちょび髭がダンディ（笑）なおっさんである。

ペコリと一礼して、

「ほわああああ!!!」

と叫んだ。そして周囲もまた同じ様にほわああああ!!! と叫んだ。
ほわっ! ほおおっ、 ほあああっ!

とおっさんが返したら(?) 周囲も同じ様に返した。なにこれもう
やだお家帰りたい(泣き)。

「ほわー」

「ほわー」

おい止めろ騒ぐなチビツ子二人。お兄さん頭痛が痛くなってきた
よ(錯乱)。

当然の様にチビツ子以外の全員が啞然としてドン引きしている。
もしかして日本の声優とかのライブもこんな感じなのかしら?
行ったこと無いけど行かなくて正解かもしれないねうん。

三姉妹が出てきたらまたしても大合唱である。

「もう帰りませんか(提案)」

「招かれたのだから、勝手に帰る訳には行かないでしょう……!」

決意が固くて悲壮ですよ!? 辛い事は無理しなくても良いんだよ
……? これはお仕事じゃなくて娯楽なんだからね? だから帰ろ
う。 なっ? ほら、盛況ぶりはもう確認出来た訳ですし。

と言えたら簡単なんだが、言った所でコイツがそうでしょうか、
とはとても思えない。

もうこなれば嫌でも付き合うしかない。帰りたいけども。

「……これが、舞台……」

「おいおい、大丈夫か？ 顔悪いぞ」

「私の顔は完璧だわ。 悪いのは顔色よ。 けれど、そうね……少し、怖い、かしら……」

俺の小粋なジョークにクスリと笑いながら訂正してきた華琳。少し怖いと言いつつ、何かひんやりした細くて柔らかいモノが俺の手に絡んできた。

なんだ？ と思つてチラツと目を向けると華琳が手を繋いでいたのだった。

……しゃーねえなあ。俺だつて頭痛が痛いんだぜ？ ったくよお。

「怖いのは解らんでもない。 俺なんて帰りたくて仕方ないし」

優しく、しかし力強く握り返してやる。

女の子の指、つか体つてのはどうしてどこもかしこもやつこいのか……。華琳が華奢だから、つてのも有るだろうが。

「……葵……」

「けどな、だからって良い物を良いって言えないのは間違つてる。俺だつて帰りたいよ。 けど、元氣は貰えるよな」

「……ええ。 そうね。 素晴らしいわ。 それに、元氣を貰える」
「だろ？ その内城に呼んで”兵士の為に”ミニライブ、この小規模版やらせよう。 な？」

「ふふふ……。 そうね、それも良いかもしれないわ」

そう言つて華琳は小さく笑つた。

……やっぱりコイツは、いつもの凜した表情も良いけど、笑顔が良いよな。 なによりも、その……可愛いし、な。

「華琳様もやりましょうよー！ 兄ちゃんも！」

「ええ……っ!? ……私もやるの?」

「俺頭痛が痛いから無理（錯乱）」

「楽しいですよ。 ほわー!」

うん。 流琉のほわー！ は可愛いんだけどね？ ほら、周りが怖いじゃん？

「ねえ、葵。 やった方が良いのかしら……?」

「何事も経験だ、とは言うがそれを決めるのはお前自身だ。 それに、やらない事もまた経験で、きつとそれにも価値が有るんじゃないのか?」

「……そう。 なら、私がやったらやる?」

「えー!? そう来るんですかアナタ!?」

「ほ、ほわー。 さつ、葵、アナタも」

「お前棒読みじゃねえか!」

「私がやるって言ったら、やるって言ったわよね？ 貴方程の人物が裏切るのかしら?」

なんか話し大きくなつてませんかね!? しかも俺やるって言っていないし！ アータが先走ったんですよね!? 約束もしてねえし！

おい待てやチビツ子二人。 なんだよその冷たい目は!?

「やるよ。 やりやー良いんだろうが!」

「ほらーっ！ そこ、盛上がってないよー！ もつと気合い入れていこうよ!!」

は？ うわっ地和の奴、こっち指差しやがった。 最悪だアイツ……！

「いつくよー!」 ちゃんと答えてねえー！ そのの皆、地和達の歌、

楽しんでるー!?」

「ほわああああああああああ!!!」

「兄ちゃんすげえ!」

「兄様こんなに声出せるんですか!」

「ほらちっちゃーい! もっと盛り上がらないと次の曲歌えないよー!!」

「デメエ……(＃) おら、お前等も声出せや! クールな秋蘭と軟弱もやしな軍師はともかく、武官の眼帯さんは声出るだろうが!」 後華琳! お前もだよ!」

「なんですって!」

「華琳様にそんな事させられるか!」

「俺一人じゃ無理があるだろ!」

「二人じゃ全然足りないよー!」

……アイツ俺等で遊んでやがる。あれ? ちよつと殺気が……。

「ほわー!」

「ほ、ほわー!」

「盛り上がってない」

「コイツら、特等席に居るのに」

「盛り上がってないなんて」

会場のあっちこちから妬み、嫉みの視線を向けられる。

俺の殺気だけじゃなくて、そこら中から向けられている。最早怨念、執念に近いのが本当に気持ち悪い。

「……しゃあねえなあ……これ、あんま使いたくなかったんだけど……」

「……葵……? ちよつと貴方、何をする気……!」

「ーコオオオツー!!」

瞬時に、しかし大きく力を溜めて、

「ほわあああああああああああああああああああああ
ああああああああ
!!!」

最早手負いの獣が上げる咆哮レベルの奇声を上げてみせた。

戦場の雄叫び（ウォークライ）を応用したモノで、力を内に向けるのではなく声に乗せて放出したのだ。

会場は俺の声でビリビリと揺れた。チビツ子二人は俺のあまりの声量に目をまわしている。

華琳は思わず耳を塞いでいた。

「盛上ってるよな？　なあ？」

『アッハイ』

そんなこんなでライブは終了した。

俺はテントに突撃し、先ずは地和に拳骨を一発落とした。

正式な文章は書くなど言った筈だが？　と。ついでに人和にも同じ様に一発落とした。

次にいくらライブ、興業で高揚していたとは言え悪ふざけが過ぎる！

と地和にかなり強めに拳骨を落とした。

地和よりかは弱い、止めなかったお前等も同罪と残りの二人にも落とした。

「うう……頭が……」

「なんで私まで……」

「もう一発いつとくか、天和？」

「止めなかった私達が悪かったです！」

「よろしい。　取り合えず地和は華琳に一言謝っておくこと」

「うつ……はーい……」

余程俺が恐ろしいのかビクビクしながらテントを後にした。

俺も俺でまだ人和に話しがあるのだ。今宵はまだ、長くなりそうである。

I M 9 甲斐性無し

最近春蘭がおかしい。

この前バツタリ街で遭遇して（他にも妹とチビツ子二人も居たが）、暇だし案内でもしてやろうか？ とたまに、たまあぁにしか出ない俺の親切を噛みまくって拒絶した。

いやこれは別にいつもの事なんだが、その晩そろそろ寝るかと思つて横になろうとした時部屋がノックされた。

どうぞと声を掛けてもノックされ続けたので、イラツとしなが開けてやると春蘭が何やら白いプルプルとしたモノを乗せた器を持って部屋にズカズカと入って来て、これを食べ!! と命令された。

はあ？ と怪訝な顔をしながら、白くてプルプルしたモノを見つめた。杏仁豆腐だった。

なんでも春蘭が直々に作ってくれたとか。

まあ作ってくれたのなら食べるよ？ 戦いとか戦争しか出来ない（断言）人がつくった物でも食べるよ？ 毒、つか感想は正直に伝えるけど。

美味かった。普通に美味かった。でもこれは春蘭が作った杏仁豆腐じゃないな、と食べてすぐに解った。

解ったが、それを馬鹿正直に伝えるのも憚られる。何せ美味いぞ、と伝えた春蘭の顔は嬉しそうな笑顔だったからだ。

本当は有り得ないモノが出来たが、教えるのと同時進行で秋蘭が作っていたモノとすり替えたのだろう。

これが真相だと思う。だってこの杏仁豆腐、前華琳と一緒にご馳走になった時と同じ味でかつその時と同じ舌触りがする気がする。

「ご馳走さん、と言ってちよつと秋蘭のそこ行ってくるわ、と言うと満足そうに春蘭は帰って行った。

……やっぱ演技には見えない、よな……？ あれが演技なら大したもんだが、戦いとか戦争しか出来ない（再び断言）人なんだからそれは無いな、うん。

ちなみに、確認は取れた。秋蘭と流琉は寝込んでいた事を追記する。

とか先日思っていた。

するとどうだ？ 今日酔っ払って抱き付いてきた。

コイツ最近どうしたんだ!?

「あさかせえ……すまなかった……」

「は？ なんだこの状況は……!? 秋蘭先生、説明を」

「何故先生かは知らんが」

「なぜしゅーらんに聞くのだ!？」

「何故って……お前今自分が何してるか、うおっ!? 馬鹿、噛むな！
こら舐めるな！」

酔っ払いは本当に面倒だな……！ ……自分の事は棚に上げるけどな！ 良いんだよ、自分から飲んでないから！

「なんなんだコイツは……！
俺は相手が女で、しかも泥酔していようとお構い無く殴れる男なんだぞ！」

「何を宣言しているんだ朝風……」

「なでなでしる」

「は？」

「なでなでしる!!」

「おっ、そうだな」

取り合えずレンちゃん、妹分にする様に、いやどつちのれんにも同じ様にするんだけど、とにかく同じ様に頭を優しく撫でてやった。するとうみゆう、と鳴きながら大人しくなった。……あー、面倒くせえ……。

「んで？」

「ああもう……姉者は可愛いなあ……」

「……んで……!? (#)」

「ああ、すまん。姉者が可愛くてつい、な」

コイツ等二人して酔っ払いやがって……終いにやあ放り出すぞ (#)。

眠たいのです。こっちでは夜にやるは事無いし、油勿体ないから早寝早起きがスツカリ身に付いているのだ。

「実はな……」

秋蘭の言葉を要約するところだ。

先日の杏仁豆腐を入れ換えたのがバレたらしい。なんでも俺が帰った後に秋蘭達の元に来て寝込んでいたのを発見し直ぐ様医者連れに走ったそうだ。

俺？ 俺は本人達の意味を尊重しただけに過ぎない。

まあそれはともかく、当然春蘭も医者に原因を聞いたそうだ。つまりそういう事だ。

んでその後春蘭は秋蘭と流琉に涙ながらにに謝ったそうだ。

その時二人が機転を利かせて居なかったら、それを食ったのは俺で、そいつを春蘭はいたく気にしていたそうだ。

……うーん……。気にかけてくれるのは良いんだが、多分俺が食べた方が被害は無かっただろう。

そりや春蘭には散々文句は言うだろうが、完食しただろうし俺なら毒に耐えきっただろう。

こう見えても俺はなんでもかんでも食べてきた男だからな。師匠に見ず知らずの森に放り込まれるとかたまーに有ったしな。

そんなときに魚を捕まえて食べたりしてた。(近未来19話参照)

とにかく、それで酔った勢いで俺に謝って来た。

謝ったのは一回だけだし、その後ナデナデを強要されたんだが、これは謝罪になっているんですかねえ？

「そうか。解った、もう良いぞ。そもそも気にしてないし」

「……」

「だからもう出てけ。俺はもう寝るんだ」

「ふかー!」

「なんだよ、威嚇すんなよ」

「いや、朝風その言葉はどうかと……」

「うっせえよ知るか! 謝りたいってのは結局テメエの自己満足だろうが。謝って、俺がもう良いよって言ってるんだからもーいーがろうが!」

「いや、そう言う事ではなく」

「オラ眼帯虎猫、放り出すぞ!」

「あしやかぜは!」

「あん?」

「あしやかぜは……わらしのこと、きらいなのか……?」

なんて上目使いをしながらシットリと濡れた瞳を向けて来た。その様は艶やかで……まるで誘うかの様な妖しく光っていて、

「ふんっ!」

「わだ!」

「姉者! 朝風、おまつ、何を!」

「喧しい」

春蘭ごときに誘惑されてホイホイの誘いに乗る俺じゃあない。

こんだけ酔っ払っていたらどうせ覚えていやしないだろう、と言う事で眉間にチョップを叩き込んでやったのだ。有言実行だぜ！（ゲス顔）

「姉を連れて帰れ。 幾ら秋蘭と言えども、この状況では冷たくするぞ俺は」

「解った解った。 ……全く、なんて甲斐性の無い男なんだ……」

「当たり前だろ、そんなの……」

「……なに？」

「俺はいつか、しかし必ず、ここから去る。 それはもう決めている事だ。 甲斐性なんて、ある訳無いだろ」

「……そう、だったな……。 すまん」

「良いから、もう行け。 俺は寝る」

「ん……」

おやすみ、と互いに挨拶を交わして秋蘭は春蘭をおんぶして帰って行った。

まったく、春蘭の事は好きに決まってるだろ。 じゃなきやとつくに追い出してるっつの。

なのに誘う様真似しやがって……。 まあ、そもそも異性として見てないんですがね！

そもそも俺は複数を相手にする様な度量は……はて、複数……？ それは一体誰の事を考えたんだ？

姉妹だから秋蘭か？ いやそれは無い。

なら、それは……ずっと気になってる、アイツ、なんだろうか……？

……なんて、な。 んな事ある訳が無い。 どうやら寝ぼけているら

しい。さつさと寝よう。明日も早いからな……。

I M 10 華琳と言う一人の少女

ブラブラと散歩をしていて、なんとなく甘味を買って（この前秋蘭からお小遣いを少し貰った。　なんでだろうなあ？　不思議だなあ）一口。美味かった。ひびきさに美味しい饅頭に当たった。

饅頭って露店で簡単に出来るから皆出してる。そしてその分当たりハズレが多い。

まあ恋や季衣、流琉の三人の誰かと一緒にハズレが無いんだが。ちなみに毎回誰ぞかんその奢りだ。お金貰ってないから仕方ないね！

美味かったから何となく二つ買った。これまたなんとく華琳と一緒に食べようも思ったからだ。他意は無い。

城に戻って真っ先に遭遇したのは、恋と音々音だった。ネネは恋にしがみついていたが。

ちようど良い。恋、は当てにならないが、ネネなら華琳が何処に居るか知ってるだろ。多分執務室だとは思うけど。

「……美味しそうな匂い」

「第一声がそれかい。　そこはおかえりとか、もうちよいなんか有るだろう……」

「おかえり、なさい。　良い、匂いする」

「そうね、良い匂いするね！　これは華琳ちゃんへのお土産だから、恋ちゃんには無いよ！」

「……」

そうあからさまにガツカリされてもな……。　今度は余分に一つ買っとくよ。

そう言っているとパアアアと顔明るくして、絶対だと念を押された。

「ネネ、華琳がどこに居るか知ってる？」

「うーん……今日は見ていないのです」

「あん？ 執務室行つてないん？」

「はいです。今日は華琳様は一日お休みですから」

「は？ ……あー。なんかそんな様な事聞いたな……。そう

か、今日だったか。ふむ、調度いいな」

「え？ それ、華琳様へのお土産なんですよ？ 知っていて買ってきた訳ではないのですか？」

「知らん。いや、覚えてなかった。ただ今日は気が向いたから買ってきただけだ」

ネネが俯いて小さく溜め息を吐いて、華琳様も大変なのです、と小さく呟いた。

それはどーゆー意味なんですかね音々音さん？（真顔）

「取り合えずどこに居るかは知らんと」

「はい。すいません、お力になれず」

「いや、聞いた方が早いかなーって思っただけだから、謝んなくてもいいよ」

律儀に頭を下げるネネをポンポンとして、んじやなと別れたを告げた。

そんなすまなそうにしくても良いんだけどな。寧ろこつちがなんか悪い事してる気分になるわ。

知らないなら歩けば良いだけだし、秋蘭なら多分知ってるだろ。それに、いざとなれば人探しの必殺技も有るしな！ ……いや、周囲を更地にするとかじゃーないけどな。

またブラブラと歩くと、猫耳軍師を見付けた。
触らぬ猫耳に祟りなし。無視無視。

「ちよつとアンタ」

「♪（↑無駄に上手い口笛）」

「（＃）ちよつとアンタ！ 無視してんじやないわ、行くなつて言つてんでしょ朝風!!」

「（チツ名前呼ぶなよな） なんだよ」

「穀潰しのろくでなしのアンタ、こんな所でブラブラとしているの」

「お前なあ……」

「あら、事実でしょ」

「さいなら」

「待ちなさいって言ってるでしょ!」

「うぜえなお前……。用が有るならさつきと言えよ鬱陶しい」

「ふん。 どうせアンタ暇なんでしょう？ ちよつと手伝いなさい」

「いつ、やつ、だつ！（超良い笑顔）」

「（＃＃＃） ちよつとは貢献しなさいよね!!」

「俺は今行かんならん所が有るんだ。 んじゃ」

「あつ、ちよつと！ なによ、もう!!」

後ろから待ちなさいって言ってるでしょ!! と声が聞こえてくるが、なんで呼吸をする様に毒吐いてくる奴と一緒に居なきゃならんだ。 そんなキチガイなDMはアレだけで充分だ。

と言うかお互いの精神衛生上良くないだろう。 何を考えて居るんだ、あの豆粒ドチビは。 一瞬何処に居るか解らなくなるから、一緒に居ると困るだよなあ……。 声はすれど、姿は見えず（大笑）。

「秋蘭チツース」

「ち？ なんだ朝風、その珍妙な挨拶は」

「細けえこたあ良いんだよ。 華琳何処に居るか知らね？」

「華琳様なら今日は一日」

「休みなんでしょ？ これ、お土産買ってきたから。 一緒に食べようと思って」

「ほう……？ お前にしては殊勝な心掛けだな」

「だろー？ たまたま、たーまたま！ 気が向いたからな」

「（皮肉が通じていないのか、通じた上で開き直って居るのか……どちから解らんな朝風は……）」

「んで？」

「華琳様なら……」

あんがと、とお礼を言っただけで貰った所を目指す。

その先には目当ての人物が寝ていた。華琳だ。

木陰にハンモックの様に吊るしている。優雅な過ごし方だな、おい。

「ん？」

遠目で見ていた分には、胸は規則正しく上下していた。呼吸に合わせていたのだ。

所がその規則が乱れた。俺が近付いてからだ。しかし呼吸はそのまままだ。

「（華琳の奴、起きたのか？ しかし……なんで目を閉じたままなのか……。狸寝入り？ 俺が近付いたから？ ……クフツ）」

悪い笑顔を浮かべている事を自覚しつつ近付いていく。

「よく寝てるな……まつ、そりやそうか。普段激務だもんな。なー華琳ー」

「……」

ニタアと口角が上がったのが解った。

コイツ、狸寝入りしてやがる……！！

労ってやったら呼吸が少し乱れた。

「お前さあ、もうちょい氣い抜いても良いんじゃないの？ 早死にするぜ」

「……」

「それとも、お前の家臣にはんな弱い所なんて見せなく無いってか？ 解らんでも無いが、一人だけ例外が居るんじゃないの？」

「……（なにを……う）」

「まっ、良いけどさ。 しかし……笑顔も可愛いけど、寝顔も可愛いなコイツ。 思わずイタズラしたくなるくらいには」

「……（はあ？ ……はあ!）」

「（……）。 まだ狸寝入りを続けるのか……俺を信頼している？

それとも、そんな度胸が無いって……いや、んな訳ねえな。 俺結構クソ度胸見せてるわ」

ちよいと頬が赤くなっている。

照れているのか、怒っているのか、或いは暑いのか。 木陰でもちよつと暑いからな、今の季節は。

「ちよつと待ってろよお華琳。 今扇ぐモン持つてくらあな。 感謝しろよー？ 俺がこんな事するなんて、師匠以外には有り得ねえからなあ」

「センセイ……？ それが、葵がどうしても帰りたい、理由なの……

？ それは男の人？ それとも……？ つ！ 帰って来た」

「どうだ、華琳？ 涼しいか？」

顔の火照りが少し治まってきた。

パタパタと顔を中心に扇いでやると、少しだけだが嬉しそうに小さく笑っている。 ああ、やっぱり。

「やっぱりお前は、笑顔が一番似合っているよ……」

「っ!？」

「(む、いつかみたいに口に出てたか……。しかし、動揺しすぎだろ。狸寝入りしてるの忘れてるんじゃないの?)」

しかしこうやって眺めていると改めて思う。

華琳は華奢だ。霸王として振る舞うには小柄過ぎる。だがその風格は本物だ。

もう少し成長した華琳も見てみたい気もするが、華琳はこのままの華琳でも良いのかもしれない。

それに。そんな未来、有り得ない。

いや北郷君に別の世界線の話しは聞いてはいた。しかし、あれは一体どういう事なんだろう？

「まっ、考えても仕方ない、か」

「(……?)」

華琳の狸寝入りを観察するのも飽きてきた。……もう少し華琳をからかってみるか……。

「しかし、華琳は本当に可愛いな……。天使の寝顔って言うのは華琳みたいなのを言うのかねえ」

「(……っ!？ ちょっ、)」

「……ヤバイ、我慢出来なくなってきた……。少しなら、良いよないわよ!？」

「(何を我慢しているの!? 少しなら良いって、何が!? 全然良くないわよ!?)」

「華琳……。ごめん、華琳。卑怯だと罵ってくれて構わない。それでも、俺は……」

「(何を、何をする気なのよ……。!? 変な事したら、ただじゃおかないんだから!!)」

華琳の顔が赤くなっていつて、しかも寝ているのに呼吸が荒くなっている。

俺はそつと華琳に覆い被さつて、顔を近付けていく。そして……そして、

耳にフーツと息を吹き掛けてやった。

「ヒヤアアアアアアアアアア?!!?!?」

「……くふつくくく……ぶはっ、くくく……!」

息を拭いた途端に華琳は目を見開いた。その瞬間に合わせて俺は飛び退いた。

霸王が上げるにしてはとても可愛いらしい悲鳴を上げた。俺はなんとか大笑いするのを堪えてみせた。おなかいたい。

「あつ、葵イイ!!」

「なんでございましょうか華琳様」

「あな、貴方! 何をしてるの!?!」

「なにを? まあ強いて言うなら、狸寝入りして俺の事を観察していた趣味の悪い友人を起こしただけかな?」

「っ!?!」

「気付いてないとても?」

「つつっ!! このっ!」

「でもまあ」

「……なによ」

林檎みたいに顔を真っ赤にさせて、潤んだ瞳で俺を上目使いで睨み付ける華琳。

……全く。本当に美人、いや美少女つてのは得だよなあ……。怒ってる顔も可愛いんだもんなあ……。ったく。

「さつき言った言葉、そのどれにも嘘偽りは無いぞ」

「っ!! 馬鹿!」

真っ直ぐ華琳を見詰めて大真面目にそんな事を言うと、華琳は俺を罵倒して背を向けて歩いて行ってしまった。

「ちよい待て! 待てったら華琳! お前に用が有ってだな」

「……なによ。 つまらない事だったら斬るわよ」

おい待て。 お前その鎌今どこから出したのん? え? 何異次元?
異次元なの? 師匠みたいに空間を歪ませてるの?

「美味しい饅頭を見付けたから一緒に食おうかと思ってな。 ほらお茶も有るんだ。一緒に食おう。 な?」

「……まあ、良いけれど」

怒っていたのが馬鹿らしい、と言わんばかりに鎌を仕舞ってーおいだからどこやったー椅子へと腰掛けた。

お茶はさつき扇を取って来た時、ついでに拝借しといた。

お昼の一時を華琳と楽しく過ごした、そんな日だった。

第20話 覇王の意地

「なにやっとなねん!!」

「せやかて、これだけは譲られへん!」

中庭を抜けようと歩いていくと、何故か真桜と霞が言い争っていた。

……うわ、なんか面倒臭そうな予感……。無視無視。

隣をスタスタと通り抜けようとした所で、

「葵! ええ所に来た!」

「悪い今ちよつと忙しい」

「これ、見てみ!」

俺の腕を取りつつ、強引に俺の目の前に偃月刀をグイグイ差し出してきた。

なんだようぜえな。そもそもお前出撃しんならんだろうが。油売ってる場合じゃねえだろ。

さっさと済ませようと思い、霞の言う通り観察してみる。柄と刃の材質が変わっている。これなら頑丈に、そして切れ味も上がっているだろう。多分切れ味ゲージ白ぐらいだ。

後は龍の角が一本増えている。ふむ、強そうだな(適當)。

ひよい、と霞から偃月刀をうば、もとい貸して貰い振ってみる事に。以前に比べて気持ち、重たい様な気もするが寧ろ使いやすくなっている。

「相変わらず隊長はなんでも器用によう振るなあ」

「せやな。本職はあのクソデカイ槍やのにな」

「そうか? こんなの武芸をそこそこ身に付けてれば誰だって出来

るだろう。　んで、霞は何が不満な訳？　真桜が作ったにしては業物だと思っけど」

「ウチにしてはどうゆう事やの隊長!？」

「この前の投石機は確かに凄かったよ？　でもな、それ以前のお前発明品を思い返すと……なあ？」

「そんななんでもええわ！　これやこれ！」

「うん、角が一本増えてるな。　で？」

「こんなんあかんわ！　せつかく関羽の偃月刀と同じ拵えにしとつたんやで！　台無しやないか!!」

知らんがな。　しかしそう言われて改めて思い返すと確かに同じ拵えだった様な気がする。

なんだ、霞って関羽の事好きだったのか。　にしてはあの時えらく静かじゃなかった？　もうちよつと絡んでも良かったと思うんだが……まあ良いか。

「それなら最初からこうこう言う風だから、外見変えたら駄目だって言つとかないと。　それは幾らなんでも我が儘だろ霞」

「せやかて……せやかて！」

「まあどつちにしろ変えるんやけどな！」

「「なんでやねん!？」」

思わず霞と二人で突っ込んでしまった。

ちよつと待って、それはなに、なんか拘りがあるのん？

「中身を強うしたんやから、それに合わせて外見も変えんと強う見えへんやん！」

「む。　それは真桜の言葉にも一理有るな」

「有んの!？」

「有るな」

例えばセイバーオルタは最初かつちり鎧を着込んでいるのだが、最終進化させるとミニスカのドレスになっちゃうからな。

何事にも例外と言うのは有るモノだ。

「まあ諦める事だな。　どーしても嫌だと言うなら、自分で直せ。真桜の事だ、角を戻したら牙が増えてた、なんて事になりかねん」
「隊長なんで解ったん!?　……ハッ!　もしかして隊長……!?　あかん、あかんでそんなん!!」

「……(う、ウゼエ……)　おい霞、稟が探してたぞ。　早く行つてやれ」

「そんなん後でええ!!　はよ直し!!」

俺は霞をド突いた。

最近喧嘩が多い。まあ喧嘩と言うと大袈裟か。軽い言い合いだ。それも仕方ないのかも知れない。こうも連日出動が続けばストレスも溜まる。俺も最近是不本意ながら書類仕事をやらされている。やらされている、である。

華琳の考えは読めている。殆どが遠征に行つて出払つて居る。今城に居る将は真桜と、またしても不本意ながら俺だけである。

スケジュールを確認した時にピンと来た。釣りたいのは劉備。南方を征した情報は既に入っている。

来そうな方向に当たりを付けて、適当に幾つかの罾を仕掛けておいた。まあ友軍が来る前に城攻めは始まるだろう。

霞と稟の二人を見送ってから数日後。　気晴らしに城から抜けだし、サボつともい散歩に繰り出していた。

その時に丁度報告を受けたので、お土産を貰つておっとり刀で華琳の下へ向かう。とうとう来たのだ。劉備が。

玉座に着くと、華琳が素足になっており、主大好き軍師が跪いていた。

変態軍師は華琳の名前を囁く様に呼びながら、素足に口付けて、舌を出し舐めていた。

……。華琳の性癖は理解している。つもり。だった。まさか玉座でこうも堂々と行為を行われているとは思わなかったが。変態かよ

「華琳、報告だ。 お客さんだぜ」

「早かったわね」

「ひいう!? 朝風!？」

「俺の事は空気のように無視しろ。 直ぐに出ていく」

南西の国境が抜けられた。読み通り劉備だ。

既に真桜と風が軍の準備を始めており、各地へと派遣している将へ帰還命令の伝令を出した。

「んじゃ、俺も準備に入る」

「ええ、よろしくね」

変態軍師が喋ったら殺す!! と言わんばかりに睨み付けてくるが、はつと鼻で笑っておいた。子猫が睨み付ける程度でひるむ俺ではない。

報告をすませ、準備を始める。まあ俺の準備なんて大した事無いんだが。

その後出城に全ての戦力を集めている。

しかしまさか……。華琳が野戦をするとは思わなかった。理由なんて解りきっているんだが。

それで負けたらエライ目に合うから普通は選ばない。だからこそ勝つたならば周辺諸国にも大きく牽制出来るだろう。

それはわからないでも無いんだが……。些か以上に無謀に過ぎる。

「それでも無いわ。 春蘭達は明日にも帰って来るし、なにより貴

方が居るじゃないの」

「と言うと？」

城壁で二人して敵軍を眺めながらそんな事言う。

華琳は楽しそうにしながら、上目遣いで俺を見詰めてくる。

「貴方はあの呂布を生け捕りにしてみせたのよ？ その強さを天下に知らしめた」

「まあ、そうだな。 だが高が一人だ。 数の暴力には勝てんし、勝つたらいけない。 しかしそいつをひっくり返すもんが有る。 状況が状況だ。 切り札は、切れ」

「……。 時が来たら、ね」

「なら良いが」

切り札の使い方は二つ有る。

どうしようも無い鬼札ジョーカーが有るとハツタリをかまして物事を有利に進ませる方法。

そしてもう一つ。 しかるべきタイミングを見計らい切札ジョーカーを惜しみ無く切る方法だ。

「前線は俺とお前、二人でやるつもりか？」

「そのつもりだけれど」

「それなら却下だな。 お前の事は俺が直ぐ傍で護る。 代わりに

兵を全てだせ」

「……。 解ってはいたけれど大胆ね、貴方」

瞬時に顔を真っ赤にさせて華琳は俺を睨みつけた。

ちよつと待つて欲しい。 なんて俺は今凄い目つきで睨まれてるんだ？ え？ なんかおかしい事言ったか俺。

どこまで本気は知らないが、天下に知らしめた武である俺が華琳総大将を護るとなれば士気も高くなるだろうし、俺が全力で闘うとなると余分

なのが居るのは邪魔にしかない。ならば前線に出してしまった方が良く。そう考えたのだが……。はて、何故俺は華琳に睨まれているのか……？

「なんでいつも鋭いのに、たまに鈍くなるのかしら葵は」

「はあ？ 俺は純粋に有利に進めようと提案をだな……。あつ。いや待て、その捕らえ方おかしい！」

「朝風!! アンタこんな所で遊んでるんじゃないわよ！ 華琳様は忙しいんだから！」

「……。つち。つせえのが来たな。とにかく、忘れるなよ華琳、俺はお前の傍で闘うからな」

俺は変態軍師から逃げる為に城壁から飛び降りたのだった。

……

……

…

華琳が劉備との舌戦を終えて戻ってきた。えらく上機嫌だった。あの訳の解らん事言う奴をフルボッコにして来たんだろう。

華琳と真つ正面から舌戦をして勝てる奴なんてそうはいないだろう。舌戦とは則ち頭の回転力の勝負を意味するのだから。

華琳が檄を飛ばす。相変わらずよくもまあスラスラとそんな言葉が出るなど感心してしまう。俺にはあんな台詞は考えられない。

真つ正面から戦が始まった。兵数差は約5倍。これで勝てたら奇跡だ。

奇跡の男、ゼロならばあるいはやってのけるのかもしれないがこの戦場にはナイトメアフレームは存在しない。有るのは最新にして最強のISがー機のみ。

まあ勝っちゃうだろう。なにせ相手からダメージを受けないのだから。

戦が始まる。槍を握る手に自然と力が籠る。ここは最前線にして最終防衛ラインだ。ここをぬかれ、そして少しでも華琳の手を煩わせたのならそれは敗北となる。

華琳の指示が少しでも遅れが出れば、それは致命的な隙になりかねない。

華琳は矢継ぎ早に指示を飛ばす。しかしながら、いや当然の事ながら敵の兵士の数が違い過ぎる。

前線を突破し幾人か押し寄せてくる。

「任せろ華琳。お前は、俺が必ず護る。安心して指示を出せ」
「ええ。頼りにしてるわよ、葵」

一足で詰め寄り、槍を閃かせる。

兵士達は目をみひらき、抵抗する事なく動けなくなる。

殺さない。足を突いて膝小僧を割るだけに止めてある。激痛のあまり絶叫するが死にはしない。

屍ならば無視するしかないだろうが、負傷兵なら話しは別だ。

大きくバックステップして華琳の元へと戻る。

戦の勝ち負けは兵の士気や総大将の有無、空き巣に狙われる、陣形が崩壊するだけでは無い。

兵糧の有無が大きく関わってくる。そして負傷兵は救出した後も食わせなければならぬ。

劉備が争いの無い、平和な世界を望むと言うのなら、負傷兵を切り捨てる様な真似は出来ない。絶対に。だからこそ、俺の仕掛けた罠は生きてくる。

戦場のあちこちから――当然劉備側からだ――悲鳴が聞こえてくる。俺の仕掛けた罠にひっかかってくれた様だ。

事前に一定のラインを越えるまでは動くな、と華琳を通して命令させといたのが成功の秘訣である。

なんて事は無い。小さな落とし穴を幾つも仕掛けたただけだ。穴計

は5 m前後、深さは500 m程しかない。まあ穴の底には砕けた刀剣の類が入っているのだが。そのまま無造作に入れた所で意味は薄い、小さめの麻袋一杯に詰め込みそれを底に敷き詰めた。踏めばどうなるかなど考えなくとも解るだろう。

「罨を仕掛けたとは聞いていたけれど、なにをしたのよ……？」

「なに、大した事は無い。武器入りの落とし穴さね」

これで士気が下がれば儲けもんだが、そう上手い事はいかんだろう。時間が無かったからそんなに数は仕掛けていないのだ。

……

……

…

一体どれほど闘っただろうか？ 俺が負傷兵を作り出した数は千や二千では効かないとは思うが……さてどうしたものか……。

「ここに居ましたか。 朝風殿」

「関羽か……。俺アンタの事好きなんだけど……でもまあ、しょうがない。 戦場で出会った以上、しょうがないよな。 けどな」

「……？ なんですか」

「その山、持って帰るってんなら、見逃してやるよ」

「私も、舐められたものですね」

関羽は油断なく偃月刀を構える。だが、

「そいつ等が全員生きているとしても、か？」

俺は無情にもそう告げたのだった。

「なっ!？」

「見捨てるのか？ お前達の為に戦った者を。 誰一人として失いたく無いというのがお前の総大将の方針だろう？ それを無視すると？ それはいけないな。 そら、助けてやれ」

ニヤニヤと、意識して意地の悪い笑顔を浮かべて関羽を挑発する。彼女は正義感の強い人物だ。これで彼女の隊だけでも負傷兵を引き連れ撤退するのなら儲けもの。そのまま向かってくると言うのなら……恋の様に捕縛するだけである。さぞかし頭に血が登っている事だろう。そんな相手を組む伏せるのはじつに容易い事だ。

「……っ！ ……つく!! ……。 貴方の、言う通りです。 そもそも、今の頭に血が登った状態で貴方と闘うのは死に行く様なもの。 今は有りがたく兵を引かせていただきます」

「そうなれば儲けもの、とは思っていたが……てつきり向かってくるもんだと思ったよ」

「ご冗談を。 義妹から貴方の武勇は聞き及んでいます」

関羽はクルリと振り返り負傷兵を連れて帰る用に指示を出し撤退した。空間に、時間に、空白が生まれたのだ。

「今の内に撤退するぞ華琳」

「!? 嫌よ!! あの娘のような甘い考えに膝を折るだなんて、冗談じゃ無いわ!! この私の、誇りが許さないわ!!」

「知るかそんなもん。 だいたい、送られてくる兵も居ないのに戦えないだろうが」

「!?」

「あのなあ華琳。 そもそもだ。 なんて勝つてに負けた気になつてんだ。 なに？ お前の心は死んだの？」

「……なに、を……」

「死んだら負けだ。 死んでないなら、負けじゃない。 勝手に負けん。 俺はそんなつもり一欠けらもねえからな」

「……葵」

「さっさと抵抗命令だせ。撤退つてのが気にいらねえんだつたら
転進でも良いよ」

「……馬鹿ね、貴方」

「折角関羽は退いてくれたんだ。時機を見逃さない用にしないと、な」

「ええ、そうね」

華琳が撤退命令を出してくれた。良かった……正直ちよつと疲れてきてたんだ。うん、ちよつとだけどな!! ちよつとだけ疲れたただけだ!!

戦は籠城戦へと以降する。春蘭達が到着するまで、後一日。

第21話 鬼神

兵を全て城に入れるまで俺は一人で前線を支えてみせた。
突き、払い、薙ぎ、穿つ。

全く、趙雲のあの神速とも呼べる用兵はどうかならんのか。あつという間に追いつかれたぞ。お陰で俺がしんがりを勤めなければならなくなつた。きつと後で華琳にどやされるんだろうが……まあ仕方ない。

趙雲は隊を三隊に小分けにして次々と襲い掛からせた。まあ雑兵にやられる程弱くは無いから一息で片付けたのだが。

趙雲本人は一向にに一騎打ちを仕掛けて来なかった。関羽に忠告されているのか、或は自分が闘うから手を出すと言われていたのか……まあ俺にはどうでも良い事なんだが。

苟に目配せして城門を閉じさせる。よし、これで全員の撤退が完了したんだな。

「なっ!? ……朝風殿が、見捨てられた……? 馬鹿な……?」

「いや、別に見捨てられた訳じゃないさ。なあに見てろつて」

クルリと趙雲達に背を向けて、猛然と城に向かって駆け出す。即座に気を両足に集中させる。

跳躍。城壁を壁蹴りで一気に駆け上がる。まあ今の俺ならこれ位なんて事は無い。

「流石に、少し疲れた。俺はちよびつと休憩するぞ華琳」

「全く……とんでも無いわね貴方。少しだけよ」

「ああ……助かる……よ」

その場から少し離れた所で腰を下ろし目をつむる。少しだけ眠ろう。

……

……

…

「鬼神やな鬼神。　なんやねんあの暴れっぷりは……。　しかも城壁を跳ね回って駆け上がるとか……。　どないなっとなねん」

「……朝風って、あんなにデタラメだったの？」

「なんや桂花、今更何言っとなねん。　あの呂布[〃]を捕まえとるんやで？」

「それを聞いた時は、お兄さんはどんな筋骨隆々なのか想像してましたねえ」

真桜はあえて恋と真名では呼ばなかった。　そうするれば葵の爲した事を強調出来ると思ったからだ。

風は誰に言うでもなく呟いていた。

「私も葵の戦闘を目の当たりにしてなかったけど……。　正直ここまでは思わなかったわね」

「ウチは何回か隊長にくつつい見てるから解るんやけど、恋とやりあった時はもっと凄かったんやで大将」

真桜は先ほどまで別の作戦行動中だったが、葵と華琳の守護っぷりと粘りで既に完了させていたのだった。

丸太の引き上げ装置と、緊急時と言う事で葵は簡易爆弾を渡していた。　それを使っていない用水路に仕掛けていたのだ。

「……そう。　本当に、葵には助けられてばかりね……。　私は」

「良いんじや無いですか？」

「……風……。？」

「お兄さんは嫌な事は嫌とハッキリ言う人ですし。　それに傍で護ると言われたのですよね？」

『！？』

「なんでそれを貴女が知っているの!？」

「まあまあ、そんなことどうでも良いじゃないですか。甘えておけば良いんですよお兄さんには。なんだかんだ言っても、最後には絶対に華琳様を助けてくれますから」

風はそう言つて葵を見た。険しい顔で眠っている。それを見た華琳はどうしようもなく……一つの感情に支配されかけた。

抱きしめて、少しでも癒して、その寝顔を安らかにしたい、と。

「……そうね。そうかも、しれないわね」

「いいえ。かも、じゃないです。絶対ですよ華琳様。お兄さんは、華琳様を見限つて、どこかに行つたりなんかしません。絶対に」

風は知らない。葵の故郷が遠い、永遠の彼方にしか存在しない事を。華琳の陣営でその事知っているのは華琳と最も忠義に厚い姉妹の三人だけのである。……最も、姉の方は覚えていないだろうから実質二人なのだが。

いつか葵は居なくなる。それは解っている。それなら、それまでの間だけ盛大に迷惑をかけても良いのだろうか？

それとも、必ず居なくなるのが解っているのだから、なるべく関係を築かない方は良いのだろうか？ この思いは、永遠に自分の胸にしまい込む、或は消し去ってしまった方が良いのだろうか？

今更そんな事は、出来はしないと解っている。

けれども、だけど……。

華琳は頭の中がグシャグシャになりそうだった。いや、もう半分なっているのだろう。戦の最中に。

「伝令ッ!! 常用の用水路が外からせき止められた模様です」
「っ!! ……。井戸は？」

華琳はすぐさま頭を切り替え確認を取った。
飲み水の確保は完了済みである。
続けて指示を出した頃に葵は目を覚ました。

「……。いつの間にこんなになるまでやつつけたんだ華琳」
「あら、もう起きたの？ もう少し休んでいても良かったのに。
それより、なんの話かしら？」

「さつき最後にチラツと見た時比べて明らかに敵の数が少ないじゃないか。これ、前に都落としを画策した時に使った戦法だろう」

「……しまった。やられたわね」

「どうした華琳。らしく無いじゃ無いか。いつものクレバーな、ズル賢い華琳ちゃんはどこへやら」

「ちゃん付けは止めなさい」

「そうそう、それぞれ。……？」

葵は怪訝な顔をして、城壁から身を乗り出して出来る限り前方に近付き睨みつけた。

……見えん、と眩き下がった瞬間矢が掠めたがまるで気にしていない。そのままライフルを取り出してスコープを覗き込んだ。

「……。ふふ。良かったな華琳」

「？ なにがよ」

「諦めなくてだよ。あそこで徹底抗戦を意地でも続けていたらそこで終わっていた。来たぞ、味方が」

『!?!』

旗印は夏侯、楽、許、呂、紺碧の張。敵の増援ではなく、全て味方である。

「……さてもうひと暴れと行きますか。 挟撃だ」

「……。 お願いしても、良い、かしら……？」

「ふあっ!? ……」

「な、なによそのおかしな声は!?」

「……。 いや、何でもない。 任された」

葵はいつもの様にニイ、と笑うのではなくただ穏やかに微笑むのだった。

それを見た華琳は……安堵したのだった。

……

……

…

華琳にお願いをされた。ならばそれを無碍には出来ない。今まで命令されていたただけだったが……お願いされるなんて思ってもみなかった。

なんでだろうな。こう……叶えてやりたい、と思うなにかがあった。上目遣いで言われたからだろうか？

しかしいやに増援のタイミングが早い。ひよつとして変な期待を与えない様に遅めに伝えてあったのだろうか？ まあ解らんでもないが……にしてはなんであそこで華琳の駄々っ子が発動したのか……。 良く解らん。この時間帯に間に合うと解っているなら潔く撤退しても良さそうなモンだが……？

いや、待てよ。ひよつとして華琳の予想よりも早いのか？ だとしたら早くて速い、とすると置いてけぼりの兵士も出てくる可能性が有るな。とすと士気、はともかく兵数は少ないかもしれないな。

単純な挟撃では効果が薄いか……？ となると……。

タイミングが重要だな。さっきの感覚から言えばスタミナが持つ限り雑兵には苦戦を強いられる事はなさそうだ。無論慢心、油断は大敵であるが将クラスでなければ何人居ようが相手にはなるまい。

援軍が接敵するタイミングを見計らえ……。

後ろでなにやら喚いているが無視しろ。集中だ。集中……集中……。

……ここだ!!

俺は敵軍の真っ只中に向かって弾丸の様に空かた強襲（アサルト）を仕掛けた!!

ズドンッ!! と轟音を立てて敵陣の中心に槍を突き立てての着地に成功した。

着地の瞬間に気を放出し、雑兵を纏めて吹っ飛ばしたからからか俺を中心に陣は円形に穴が空いた。

「……そろそろ。 本気の全力全開でいかせて貰う、ぜえ……!!」

練り上げるは麒麟功。力と敏捷が大きく増す練気だ。特に殲滅戦に向いていると言える。

「貴様達が挑むのは鋼の聖女が一番弟子だ。 さあ、死力を尽くせ。さもなくば、ここで碎け散るのみ。」

いざ参る……!!!

……

……

：

気が付いたら。周囲には誰も居ない。怪我人も居ない。ただ血が池の様になっていただけだ。

気を、失っていた……のだろうか……？ きつとそうだ。体が凄く重い。槍は血に塗れている。俺の服は汚れているが、傷は無い。全て返り血だ。

「葵ッ！」

背中に誰かが抱き着いた。力一杯俺を抱きしめている。そんなにしたら痛いってばさ。

「無茶して……本当に、もう……！ やることなすこと、無茶苦茶なのよ貴方は……」

「そう、か……？ こんな、なんて事は無い……さ。それより、戦いは終わったのか……？」

「ええ。貴方が大暴れしてくれたお陰でね。春蘭達が背後を付いてくれたから大慌て。そのまま劉備軍は崩壊。将は一人も討てなかったけど、まあそれは良しとするわ」

「……そうか。今日は、久々に疲れた……。帰って寝るわ」

「ええ、ええ……。今はゆっくり休んで……」

俺の意識はまた落ちていった。